昭和30年9月17日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第3203号　昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第3巻第15号　昭和33年12月1日発行（毎月1回1日発行）

裏窓

奴隷と圧制・特集

12月号

裏窓 奴隷と圧制・特集号 12

昭和30年9月17日日本国有鉄道特別扱承認雑誌第3203号　昭和31年2月3日第3種郵便物認可・裏窓第3巻第15号　昭和33年12月1日発行（毎月1回1日発行）

定価　120円

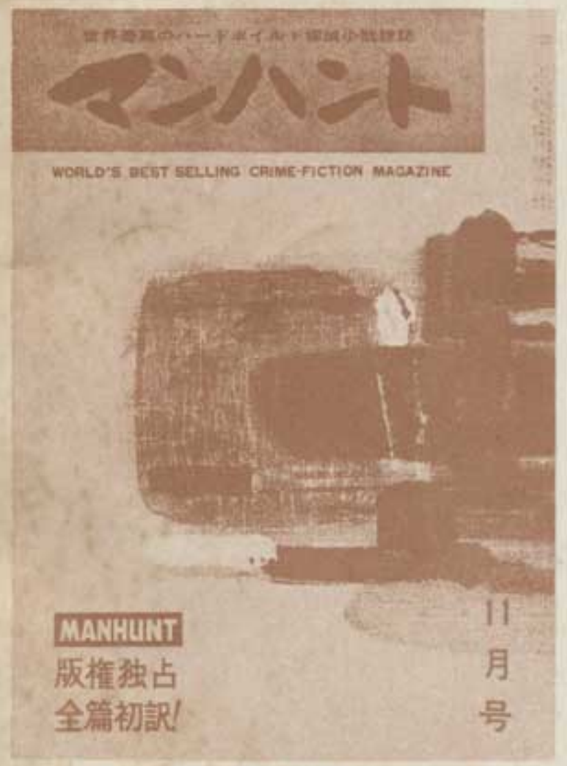
IBM 1807

好評！絶讃!! 11月号発売中!!

タフ・ガイの強烈な行動力と妖艶な火花を散らすアクション・ドラマ!!

チャイナ・タウンで逢った女　E・ハンター
あいつだけの罪じゃない　R・マクドナルド
生きているのがぼくだ！　C・ミルトン
おっさんの為に祈れ　N・アルグレン
あたしに委せて——　E・S・ガードナー
乳房と腕っぷし　H・ケーン
男ごろしの魅惑　S・フリードマン
欲望の対象　P・G・スウォープ
眠られぬ夜　G・ブルワー
男のルール　R・ターナー

定価100円
送料　8円



マンハント・スクエア
青江耿介

スクリーンつまみ食い
永久蘭太郎

ベラボウにもうかる法
川崎はじめ

翻訳スタッフ
〈50音順〉

一紀泰弘忠一治明一郎
淡路瑛由利昌
稲葉野　賀　官耕三諭三
宇荻久今中原山若　田　下　山

MANHUNT
JAPANESE EDITION　NOVEMBER, 1958

耽奇小説

12月号
11月初旬発売

セックスをえぐり、スピードを追う、異色ミステリイの決定版!!

☆恐怖・吸血鬼特集☆

金の血にのせた心臓……竜胆寺雄
血は渦をまいて……狩久
アッチラ大王の吸血鬼……葉田光
吸血妖女……飯田豊吉

毎号好評!!早速書店へご予約を

読切・連載

おれの死骸を越えて行け（ダイナマイトだ近よるな・二話）杉本駿
乳房に痣を（戦下脱げば百万円・二話）春島雄
さだんま、ぷんだりいか（河太郎の恋・二話）岡田鯱彦

後家猫ナナ…深尾登美子
食肉花…朝山蜻一
黄金狂女館…豊田一狼

もうしないから、ごめんなさい…日下田喜子

ドマン通り殺人事件　耶止説夫
男性党奇聞　矢野徹

この他、傑作・大作多数満載!!

定価120円　送料12円

東京都中野区江古田1の2302（振替・東京10756）株式会社久保書店

隠密覚書 第二十一話 髑髏提灯

島本春雄・作
石塚芳幸・画

大江戸の女達を恐怖のどん底に陥し込んだ奇怪な集団!!　髑髏を描いた提灯を振りかざす黒覆面の謎!!

本文二七八頁を御覧下さい

色絵物語頁 緋縮緬草紙 画と文 中島喜美 (27)
ある青春 耳無草…… 笹本透 (251)
幕末異聞 悲願八丁堀…… 橋爪彦七 (92)
★若い過去を秘めて異国の出世街道をひた走る若い与力に、探索の眼はきびしく光った。苦悩の色目に燃き運命の子の前！
ロスアンゼルスの裏窓 奇妙な自殺者たち 神戸裕一 (104)
情艶三の丸 伽羅肌ごよみ…… 岩堀光 (134)
あるホモの記 白い炎…… 河野春雄 (147)
外誌紹介 外国雑誌に現われた女奴隷 峠浩介 (163)
異色官能復讐小説 処女の代償 蝦蟇家一美 (36)
あぶちっくみすてりい 壺地獄…… 川口直樹 (120)
★舞台の美女をつけ狙うボヘミアンタイの男！彼女は手狂乱の身をみずからこの夢のような炎に焼りとられた！
よろめきの秘戯 泡（あわ）…… 松井籟子 (178)
★濃ならぬ思いを断てと内弁慶の男に狂おしいまでたかる胸の炎！泡にまれた官権の権勢もよろめく女心の戯れか
あぶちっくすりらあ 黄色い毒蛾…… 溝呂木寂子 (214)
★デスマスクの女の美しい体臭は紙た男の官能にまつわる。フロアに縋り崩れる裏色の女にまたしても生臭い女の体臭！
時代巷談 穴倉菩薩…… 円城寺達 (258)
★薄暗い穴倉に閉閉された若い女の肌はゆらめく灯に仄白く、針に刺たる嘘きを放棄するばかり。やがて迫る毒手は？
少年と菩薩 化身歓喜女仏…… 梅田楠雄 (270)
★少年あまが指先に探り当てた若き女仏はあたかも血の通う生きた肌のぬくもりさえ備えて御利益を垂れ給うのだ！
隠密覚書第二十一話 髑髏提灯 島本春雄 (278)

裏窓・十二月号・目次
○表紙……秋吉繭 ○目次カット……幸田稔
○目次裏口絵……石塚芳幸 ○トビラカット……江村良
巻頭絵物語 グラビア 裸女島綺談 文・夏本圭之助 画・山田彬弘 (11)
若いヌード……藤沢修 (19)
煩悩奴隷宮 小田桐爽 (50)
売春奴隷街 飯田豊吉 (76)
鰯（ひょう）雨 衿垢残 (110)
象牙の王座 橘新太郎 (171)
虜囚美人伝 葉田光 (188)
舵子島 柾木新 (202)
奴隷船事件 檀達二 (226)
女奴隷の宝石 藤見郁 (238)
縄と禅 奈落の檻……志摩不二 (62)
★眼若を吸き集めるガニ股男が、「抱きつての花好な優の真の役にまわった！縛られた娘は舞台を忘れて悲鳴をあげたが
不気味な手帖 その箱をあけるな……佐々木力 (154)
★人間は奇妙な興味を秘めているものです。こっそり落しておいて人に拾わせるその箱にあなたは一体何を入れましたか？

圧制と奴隷・特集

★本文 七六 頁を御覧下さい

売春奴隷街

飯田豊吉・作
秋吉巒・画

シンガポールの暗黒街に呑み込まれた美女を尋ねて死地に入る男！黄色い皮膚の女隷たちの悲惨な運命!!

裸女島綺談

①早く逃げろ！

作・夏本圭之助
画・山田彬弘

うねり、くねる豊満な白い女体。ベールのサロンで腰を蔽っているだけで、毬をのんだような二つの乳房や腰のくびれの神秘なカーブが、クローズアップされる。黒眼がちの、長い睫毛を持つ双眸。可愛い小鼻。濡れた紅唇。やがて、女はやるせなさそうに、豪華なWベッドで転々とする。そこへ、音もなく覆面の男がヌッと出現。女の驚きの眼とニタッと笑った男の眼がからむ。男は女に近づくと貴重な宝物を賞でるように、女の乳房をゆさゆさとゆすった……。

いよいよ、裸女と怪漢のあやしい構図（コンポジション）が、天然色で展開されようとした時、パシッ、と停電。映写機は回転を止めた。暗黒の中で、ふーッと歓喜の長嘆息が洩れたが、

「贅沢だ！　早く逃げろッ」誰かが叫んだ。

② 地下道

暗黒（くらやみ）の中で、観客たちが右往左往する。体と体がぶつかり合う。きゃあーッ、という女の悲鳴も混る。誰もが一刻も早く、戸外へ出ようとあせるが、万一の用意に、逃亡口として決められた地下道は一つ。人間一人ずつしか通れない。

「あわてないで、まだ大丈夫ですから。お一人ずつ、列をつくって、地下道へ降りて下さい」

主催者の言葉に、観客たちは、幾分冷静になると、一人ずつ、主催者の先導で地下道へ降りていった。

黒井麻理は、混乱の最中に、連れの江口健吉とはぐれてしまい、手さぐりで、地下道へ降りたが、不意に横側からぐいッと引張られた。

③ とかげの刺青

「あッ……」

麻理が声を挙げる前に、鼻腔にキーンと麻酔がにおった。そのまゝ、彼女は意識を失った。……何時間たったか。麻理は眩ゆい光を

感じて眼を開けた。光の束が視野を焼いて、眼が馴れるまで何も見えなかった。が、その光に馴れた時、麻理の眼が驚きで吊り上った。

なんという光景だろう。広々としたドーム天井の部屋だ。その中に二十人近くの若い女がいた。誰も彼も一糸纒わぬ裸身。しかも、足首に重い鉄鎖がからんでいる。どの女も呆うけたように、言葉もなく、屈んだり、横臥したり、中には、足首の鉄鎖をジャラつかせてゆっくり歩いている。それは、あたかも、裸女の館といった光景だった。麻理は、やがて、自分自身もいつしか、全裸に剝がれ、足首に鉄鎖がからんでいるのを知った。

「あんた新顔ね」

不意に横から女の声がした。二十二、三の豊満なはちきれんばかりの裸体である。麻理は、女の乳房の上に、妙な刺青を見た。ちょうど乳首の上に、とかげが一匹ずつだ。

「まあ！」

麻理は思わず叫んだ

「あ、この刺青……あんたもすぐ彫られるわよ。でも、あんたどうして誘拐されて来たの？」

麻理が話そうとした時、二人の三角頭巾の男が、麻理の両腕を取って引起した。

「来い！」

「ど、どうするのよ、あたしを」

④ 秘密映画会

一方、麻理とはぐれた江口健吉は、混乱の中から戸外へ逃れたもの、、麻理がいないので、愕然とした。そもそも、健吉が麻理と一緒に秘密映画会にいたのは、そんな趣味があってのことではない。横浜海岸通りを歩いていると、若い派手な恰好をした男がそっと歩み寄ると、一枚のビラを出したのだ。

「旦那、今夜はお連れさんとお楽しみなんでしょう。それなら、刺激剤のつもりで御覧になりませんか。天然色の新ネガなんですぜ」

「秘密映画なのかい」

「へへへッ。雨の降った古ネガと違って、アメちゃんの新着フイルム。これを観て、おとまりと行きゃあ、情熱のほどは保証しまさあ」

健吉はふと好奇心にかられた。

「あたし見たいわ。まだ、そんなの一度も見

⑤ グラマー誘拐

江口健吉はもう一度、秘密映画会場になっていた地下の入口を探したが、全くわからなかった。ビル街はひっそりして、警官の姿もない。ビルの側をうろついていると、四、五人、男の影が見えた。それは、どうやら、秘密映画会から逃げ出して来た連中らしい。

不思議なことに、健吉と同様に、彼等も連れの女とはぐれてしまっていた。

「どうも、あの警察沙汰は変ですな。こりゃあ、計画的な誘拐じゃあないですか」

「きっとそうですよ。アベックばかりを客にえらんだのは、連れの女を誘拐するためだったんだ」

「しかし、警察へ訴えるのは、自分たちの恥を晒すようなもんですからね」

「といって、放って置けない事件ですよ。とにかく、彼女たちを救い出さにゃあ」

たことないもの」

少し、みだらな眼で、麻理が云った。

「話せるお嬢さんだね。じゃあ御案内しましょう」健吉は男に案内されて、ひっそりしたあるビルの地下室へ降りていったのだった。

⑥ 手術台の裸女

健吉の提案で、警察には届けないで、調べることに決まった。連れの女を誘拐された男は健吉共で六人だ。会社員、技術者、外交員などだったが、画家という芸術商売は健吉だけだった。しかも、健吉が不審に思ったのは、誘拐された女が、一様に、肉体派の美人揃いであるということだった。もちろん、麻理は裸体モデルとしてひっぱり凧の均斉の取れた肉体の持主である。どうやら、敵は、女のその方を選んでいたらしい。

健吉たちが、誘拐の手掛りに懸命になっている頃、麻理はじめ五人の女の運命は、刻々と迫っていた。

……三角頭巾の男に引き立てられて麻理が来た部屋は、恰も病院の手術台のようで、中央に大理石の手術台のようなものがあり、その上に、一人の若い女が横たえられていた。しかも、その両乳の上にあのとかげの刺青!!

⑦ 虜の女

乳房の上の刺青は、今彫りあがったばかりのように生々しい。手術台の上の女が引きおろされた。男は四人、みんな三角頭巾で、吊り上った眼穴の中の眼だけが、ギョロリと光っている。一人の男が、麻理の方へ指を出した。麻理は抵抗した。が、強引に、手術台の上に仰のけに横たえられた。手首、足首に、鉄の輪がはまり、身動きできない。やがてひんやりした刺青針の触感が、膨らんだ乳房の上で動いた。キリッと痛む。麻理はあのいまわしいやもりを思い出して、激しく身をゆすった。

「騒いでも駄目だよ。このいもりの刺青を彫られたら、もう、ここからは出られない。ここは、この島で、一生、男の楽しみものになって暮すのだ」「島？」そうだ。ここは伊豆沖の島で、戦争中日本軍の地下基地になっていたところだ。誰も救いには来やしない」「で、あたしをどうしようっての？」それは今にわかるさ」男は重々しく答えた。

⑧ 妖しい舞踏

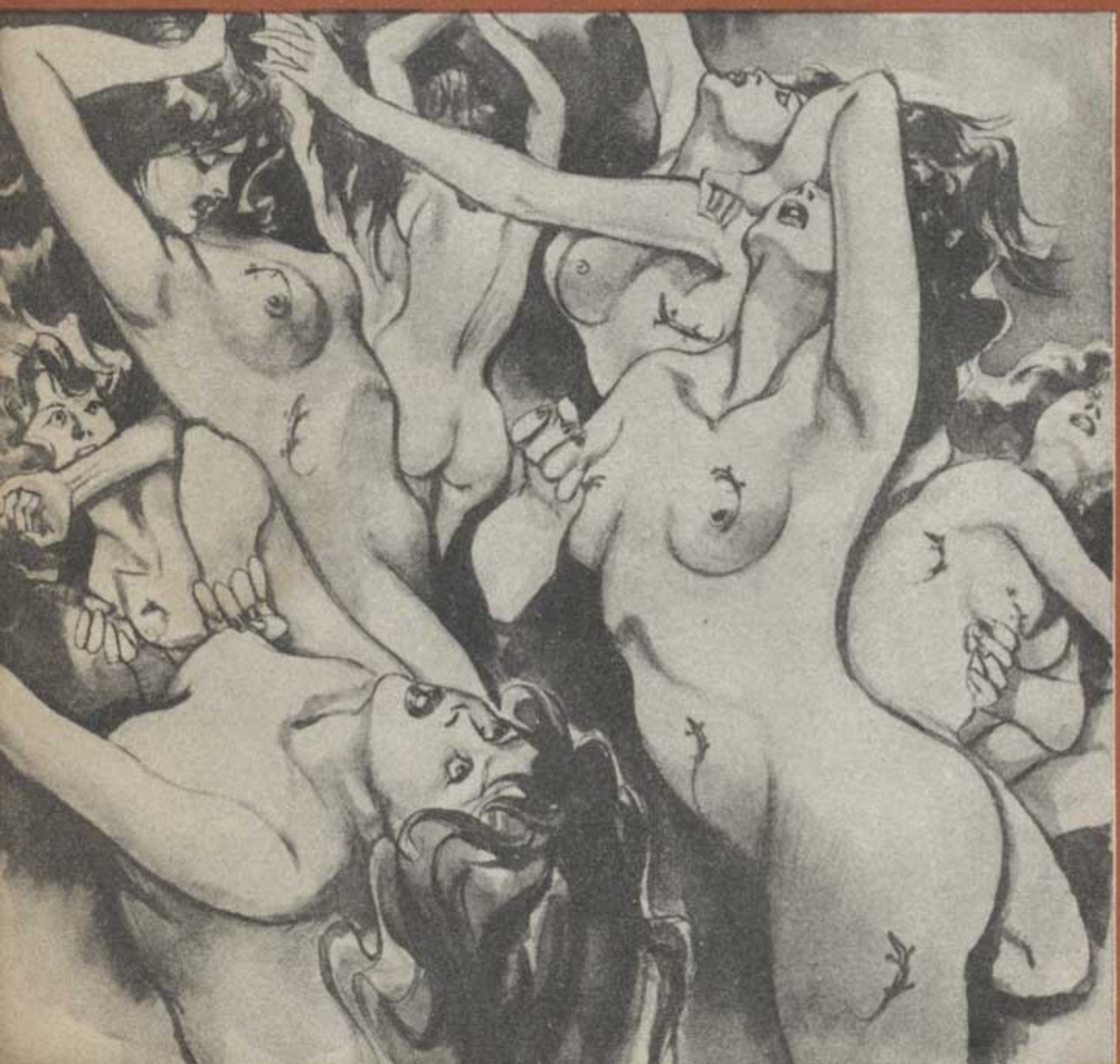
手術台から麻理が解放されたとき、彼女は、白い乳房の膨らみの上に、青いとかげが二匹とまっているのを見た。やがて、麻理はもといたあの広い部屋に帰された。

一瞬、部屋の光が消され、それにかわって真ッ赤な照明が、部屋を毒々しく色どった。その赤い光の中で、大勢の裸女たちが、何かに

⑨ 狂った声

このとかげと裸女の舞踏を見ている一群の男たち。ちょうど、部屋の中央に観客席が設けてあって、そこに、あの三角頭巾の男たち数人が、酒盃をあおりながら、見下していたのである。「もっと喚け、もっと踊れ、ワッハハハッ」男が大声で笑う。それは狂った声だった。なんのために、こんな愚かな遊戯をするのか……。

おびえるように、身もだえし、喚き、転倒しはじめた。麻理は何が起ったのか、とっさにはわからなかったが、ぐちゃり、と腰に吸いついたものを見て、「あッ」と叫んでしまった。一匹の青とかげ。それも尾をぴくぴくさせて動いている。やがて、一匹が二匹になり、三匹になり、あらゆる肌にまといついた。裸女ととかげのあやしい舞踏だった。



⑩ 救出者

その時である。観客席で騒動が持ち上ったのだ。仲間同志が乱闘をはじめ、一人の男が、真ツさかさまに、とかげと裸女のひしめいている上へ墜落した。

「ギャアーツ」断末魔の悲鳴。そして、明るい光芒に戻った。

「皆さん、もう心配ありません。みなさんを助けに来ました」

三角頭巾の男が大声で云った。麻理は健吉の声だと知った。瞬間気がゆるんで気絶した。

⑪ 裸女島

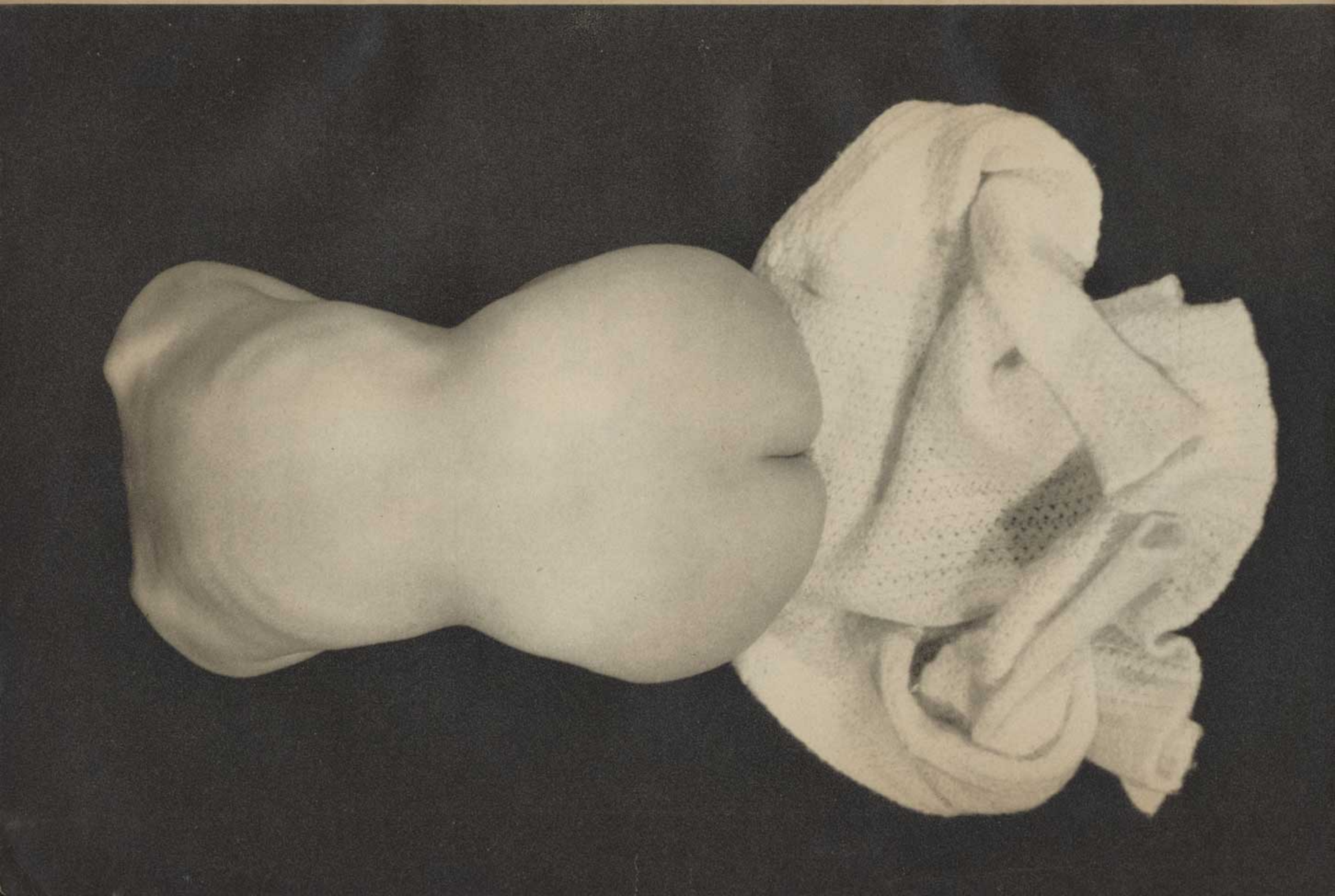
墜死男の三角頭巾の中の顔。戦後行方不明を伝えられたライ患者で百万長者の大亀源三だった。彼は行方不明を口実に、その無人島を買い取り、元地下基地で、変態趣味を存分に満足させて暮していたのだ。女は大半誘拐された者だったが、秘密映画を口実に、健吉たちの連れを誘拐したことが運のつき。健吉たちの努力で、彼の裸女島があばき出され、ひそかに忍びこんだ健吉たち六人の男によって、変態王は墜死してしまったのである。

「ねえ、これからもう、変な見世物に興味持たないわ。あたしが興味もったばっかりに」

麻理は健吉に泣きじゃくって云った。

若いヌード

カメラ　藤澤　修



紙草細縮絲窓裏絵物語

中島哀美 文と画

①旗本屋敷の奥庭は、夜中になるとまるで山奥に入ったような静けさだ。

その奥庭のあずまやの中で、二つの黒い影がヒシと抱きあっていた。

「さ、おそくなって人に気どられてはまずい早くゆかれるがよい」

男の腕に抱きすくめられていた女は、無言でコックリとうなずくと、静かに男の体から離れた。

「源三郎さま……明晩もお待ちしております わ」

甘えるような女の声が、去って行く男の後姿にささやかれた。へんじの代りに、こちらを向いた男の白い顔が、大きくうなずくとそのまま暗い奥庭に消えてしまった。

残された女は、まだ興奮のさめきらぬ面持で足もとに気を配りながら、二歩、三歩……あずまやを離れた。

その時である。

いきなり強い力で後から抱きすくめられた

②「あっ！」

悲鳴をあげると必死で身もがきをしたが、びくともしない。

ずるずると、またあずまやの中へ引きずりもどされた。

「あ、あなたは、どなたです？」

「静かにしねえ、逢引きの現場を見たんだ。大きな声を立ててみねえ……お前さんたちの不義がバレるだけだ。いかに当家のお嬢さんでも、不義はお家の御法度ぐらいのことァ御承知でしょうなあ」

「あッ、お前は……」

「中間の友三でさあ、お前さんたちの逢引きは、前々から知っていたんだ。養女のお前さんが、隣家の源三郎と乳繰りあっているのを、ここの殿様が知ったら、お手討もんだ」

「そ、それは……」

③友三は、女をあずまやの腰かけの上にねじり倒すと、いきなり両手を着物の襟口にかけて、左右に押しひろげた。夜目にも白く、むっちりと盛り上った双つの柔肉が浮かび上った。

「へへッ、どうしたい。声を出してみねえよ……ヘン、出せねえだろう。さまァ見やがれ」

主に対する言葉などみじんもなくなった友三は、勝誇ったように、ふだつの盛りあがりを撫ぜまわす。「あッ、いや……いや……」女は心死にもがきはじめたが、たまりかねて「だれかッ！」と絶叫をあげたので、友三の大きな掌に、その口をふさがれてしまった。

女は、苦しそうにうめいて、大きくそり返ったが、やがて腰かけの上へぐったりと気を失った。

その、とり乱した女の姿を、しばらくじッと見詰めていた友三は、やおら抱きあげると暗闇の立木の間をスタスタと立去って行った。そのとたん、あずまやの屋根の上に、ぴったりと吸いつくようにしていた黒影が、音もなくふわりと地上に飛びおりた。

「けッ、汚ねえまねをしやがる」

つぶやいて、二人の後を追う。木立の間を音もなく通りぬける奴だ。

納屋の節穴から、ほのかな灯りがもれている。黒い影は、吸われるように、その納屋へ……そして節穴へ近づいていった。

襟蝙蝠が一本、床の上に置かれてある……。

④息を吹きかえした女は、この屋敷の養女で千鳥という娘だ。

武家島田の髪がくずれて、下ぶくれの美しい顔が、恐怖のために蒼白くおののいている。

両手は、納屋の柱にしっかりと縛りつけられて、乱れた裾前が、床の上に花のようにひろがっているのだ。

その前に、大あぐらをかいて煙管をくわえている三十五六の人相の悪い中間体の男が友三である。

「おい、千鳥さん、ここなら少しぐらい声をたてても誰も来やしねえから安心しな」

と、太々しい笑い方をした。

「どうせこちとら一年半期の折助稼業だ。わずかな給金で忠義だてをするような料見は、爪のアカほども持っちゃいねえや。お前さん達の逢引を知ってから、俺はお前さんの体を狙っていたのよ。ヘッ、お旗本のお嬢さんの体を自由に出来るなんて、俺にもいい目が出て来たもんだ。少々手荒いかもしれねえが、ほつぼつ料理させてもらうぜ……」

⑤柱の縄をほどくと、千鳥の体を吊りあげ気味にして縛りなおした。

緞子の帯に手がかかると、器用な手つきで、するッと解いた。解いたその帯を納屋の隅に投げる。

しごきと下紐がつぎつぎに解かれて着物の前がはだけると、友三は後に廻ってすっぽりと脱がせてしまった。派手な長襦袢の色が、千鳥をなまめかしく見せる。口惜しさと恥かしさに身もだえする肢体が、友三にはたまらない魅力なのだ。

長襦袢の前が割れて、緋縮緬の蹴出しと一緒に真っ白な腿が現われると、友三は眼を光らせて、ごくんと生唾をのみこんだ。伊達巻に手がかかったとき、千鳥は、

「あッ、ゆるして……」

とうめいたが、伊達巻はスルスルと千鳥の足もとにとぐろを巻くように落ちた。

伊達巻を奪われては、もうどうすることも出来ない千鳥である。

いま、長襦袢の前が、ハラリと開いて……千鳥は、身も世もあらぬ思いであった。

⑥長襦袢がはがされて、磨きあげたような、みごとな白い胸に柔かな双つの盛りあがりが蠟燭の灯りに大きく息づいている。

「へへッ、こいつア眼がくらみそうだぜ……」友三は、ゆっくり楽しむように床に坐った。

彼は千鳥を自由にして、この屋敷を出奔するだけでなく、あわよくば行きがけの駄賃にこの娘を使って一仕事してやれ——という計算を始めから立てていた。

金を握ってから、ゆっくり娘を楽しもうと言う腹だ。

どうせ弱身につけこまれたこの娘は嫌とは言うまい。色と慾との二筋道をかけた友三は苦しそうにもがき続けている千鳥のそばへ寄って行った。

「おい千鳥さん。ものは相談だが、お前さんに頼みてえことがあるんだ。この際ウンと承知してもらいてえ。なあに、大したことじゃねえがね」

「わたしに……」

「そうなんだ。ほかじゃねえが、土蔵の鍵を今夜一晩貸してもらいてえのさ。ウンといってくれりゃ、今夜のことも内密にして、このままお前さんを放してやるが……」

「で、でも……あたし……」

「おい、強情をはらず、うんといいねえ」「土蔵の鍵など何処にあるか知りませぬ」

「けっ。てめえシラを切る気かい。そんならこっちにも考えがあらア……」

友三は、いきなり千鳥の腰にぴったりとついた緋縮緬の紐に手をかけて、力まかせにぐいっと引っぱった。

⑦「あッ！　かんにんして……」

「嫌だと言やァ、お前さんの体を自由にして、明日の朝は屋敷中の人に素裸の体をさらしものにするだけよ。短気な殿様と、人一倍嫉妬深い奥方だ、どんな事になるかお前さんも見当がつくだろう。おれは、金さえ手に入れば用のねえ体だ。今夜中にズラかるから、ウンと言ったほうが、お前さんのためじゃねえかい」

と、言いながらも友三の手は、そろそろと紐を解きはじめた。

「——ま……まって……」「承知か？」「……」

「いやかウッか、どっちだ？　早くしねえとこの紐が解けたが最後だぜ」「ああ……」

千鳥は苦しそうに、がっくりと首をおとした。その白いうなじのあたりを、友三のギラギラ光る眼が、ナメるように見つめている。（——ふふふ、どうせ落ちる女だ……）

（金と、この女を手に入れて、思うぞんぶん楽しんでやるんだ。……）

友三の手が、蛇のようにのびる……。

⑧「……そうと話がわかれば、一刻も早い方がいい」次三が後手に縛った荒縄を解くと、千鳥は崩れるように床の上に倒れた。

「ぐずぐずしねえで、さっさと着物を着ちまえよ。だが長襦袢と帯だけは鍵を持って来るまで俺が預っておくぜ」

身仕舞を終った千鳥をせき立てるようにして、納屋の戸を開ける。黒い影は、いつの間にか姿を消していた。

千鳥は力なく母屋の方に歩いてゆく……。

⑨絹行灯の下で打伏して泣いていた千鳥は、やがて起き上ると静かに机の前に坐った。巻紙をとりあげて、おえつを噛み殺しながら書き続けていく……。

遺書だ。

それを机上に置き、両膝をしごきで縛って懐剣をとりあげた。

自害する肢と見える。

——と、人の気配に振り返ると、手拭いを盗人かぶりにした男が立っていた。

「お嬢さん。はやまっちゃいけねえ」

冷たい声で言って近づいて来た。

「だ、だれです？」

⑩　叫びはしたが、両膝をしごきで縛ってしまったので、自由がきかない……。

「しッ！　静かにしておくんなせい。あっしは、庭のあずまやからずっとお嬢さんのそばにいたんだ。だから何もかも知っていて、そして助けにやって来たんですぜ。あんな友三野郎みたいな奴のために死んじゃつまらねえ」

千鳥はそれを聞くと、源三郎との甘いささやきも、友三に責められていたところも、この男に見られていたのか思うと、はずかしさに紅をはいたように頬をそめた。

「――あ、あなたさまは？」矢張り気になる男の正体である。

「まア、名乗るような人間でもござんせんが、今夜のことは、あっしにまかせておくんなせえ。盗みはすれど、非道なことは大嫌えな性分だ。お嬢さんに傷のつくようなことはさせませんから御安心なすって……」

千鳥の耳もとで、何事かささやくと、この男はまるで消えるように立去った。

見ると、男の去ったあとの畳の上に、土蔵の鍵が置いてある。千鳥は、自分の運命を決めるようなこの鍵を放心したように眺めていた……。

友三が待っている。

この鍵を友三の手に渡せば、土蔵の金が奪われて、大変なことになるのであろう。

しかし、渡さなければ、生き恥をさらす結果となるのだ。今の影男は、あっしにまかせろと言ったけれど、ほんとうに大丈夫なのだろうか？　千鳥の心が乱れる。

⑪（――もしかしたら、あの人は源三郎さまではないかしら……？）

絶対絶命の立場に追いこまれた乙女心は、つい、恋しい人の力を思ってしまう。

（でも……まさか。顔は手拭いでわからなかったけれど、声は源三郎さまの声でなかった。し、源三郎さまなら、なにも姿をかえて……あんなことを……）

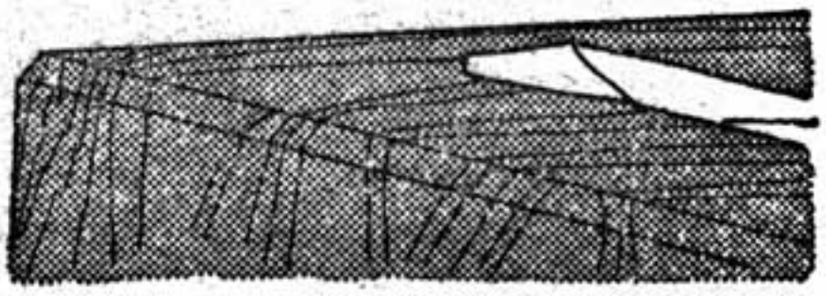
やっぱり今の男は、未知の男……変幻自在の怪盗なのであろう。

――ぐずぐず出来ない。

千鳥は思いきって土蔵の鍵をとりあげた。

もうこうなれば、あの影男を信じて、友三の手に鍵を渡すほか方法がなかった。

千鳥は、そっと部屋をすべり出たのだ。



⑫「へッ、これが土蔵の鍵で……ありがてえ……すまねえが土蔵まで一緒について来ておくんなせえ」

「えッ？」

「驚くこたァねえや。こちとら一人で土蔵の中に入ってる時に盗っ人呼ばわりされちゃ、虻蜂とらずだ」

千鳥は、危険を感じたが、神に祈ってついて行くことにした。

（こんな男に見こまれた私が悪いのだ……自業自得……）

友三のいうまま土蔵の中へ千鳥が入る。

⑬「あっ！」

千鳥は不意に、友三に足をすくわれて土蔵の板敷の上に倒された。友三は予定の行動に移ったのだ。仕事はすんだし、あとは千鳥の体を楽しんでズラかる腹である。

「さっきとっくりと拝ませてもらったお前さんの絖肌を、ここで存分楽しませてもらうぜ……へへへ、俺が女の扱いにどんな名人かてえことを、とっくり知らせてやる」

獣慾に燃えあがった友三の荒い息吹きが、千鳥の顔に迫って来た。――が、千鳥は声をあげることすら出来なかった。旗本の娘……という、手に届かない階級の女を、今こそ自由にすることが出来る。……その征服慾が、友三の全身をかりたてて、この男はもう夢中であった。

⑭「――う、う、ううう……」

低い呻き声がしたと思うと、友三の力が急に弱まって、ずるずると引きはなされて行くのに気づくと、千鳥は取り乱した姿のまま、いそいで起き上った。

さっきの影男が、悶絶した友三のかたわらに立っている。

（――助かった……）

と思うと、きゅうに、あられもない自分の姿がはずかしく、あわてて裾前をつくろった。

「お嬢さん。これを持って早く部屋へお帰りなせえやし」

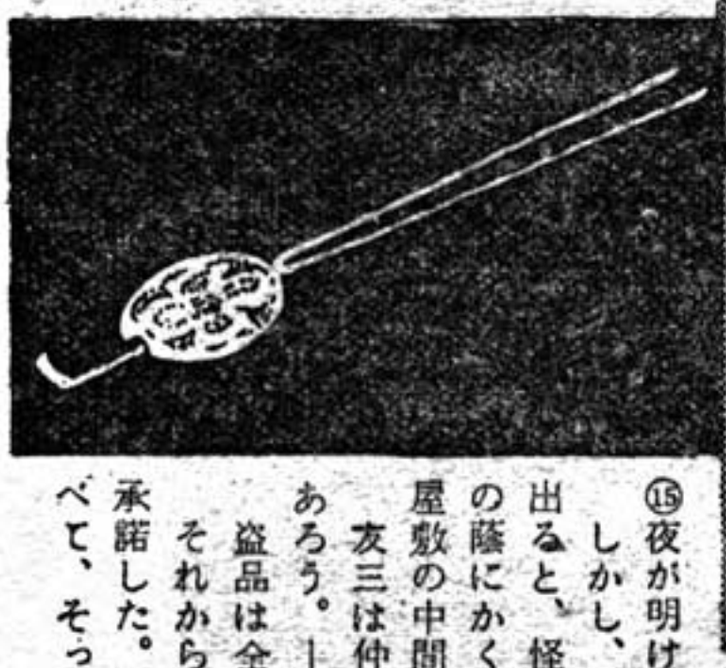
千鳥の眼の前に差し出されたのは、あの長襦袢と簪であった。

「――この野郎は、あっしが始末しやすから、ご安心なせえ」

と、言うが早いか、この男のどこにこんな力があるかと思うように、軽々と友三をかつぐと土蔵から去って行く……。

千鳥は、夢を見ているような気持で、ぼんやりと自分の部屋に引揚げた。

しばらくして、勝屋敷が騒がしくなったようである。



⑮夜が明けると、土蔵の扉が開いているので屋敷中が大騒ぎになった。

しかし、統いて隣屋敷から、昨夜、源三郎の部屋の外で物音がしたので、源三郎が庭へ出ると、怪しい人影が見え、抜く手も見せず斬りつけると、ばったり人影は倒れたが、その蔭にかくれていた男は、あっと言うまに姿を消し、調べてみると、斬り殺した男は、お屋敷の中間友三であった……と申し伝えにやって来た。

友三は仲間と共謀して主家の土蔵を荒し、その上隣家に忍びこもうとして斬られたのであろう。――と、いうことでこの一件は落着した。

盗品は全部戻ったし、源三郎が思人扱いにされたのはいうまでもないだろう。

それから間もなく、隣屋敷から千鳥を源三郎の嫁にと懇望されたとき、養父母は喜んで承諾した。――花嫁衣裳をまとった千鳥は、幻のようにあの男の姿を思い浮べて、そっと手を合せ嬉し涙にむせぶのだった。

（終）

裏

窓

奴隷と圧政特集号

十二月号

第三巻・第十五号

異色サスペンス

処女の代償

拠点消ゆ

蝦蟇家一美
堂昌一・画

N市に古くから勢力を張っている銭万組の幹部、司三郎が、新開地の新興歓楽街で他殺され、その刀創のある惨屍体が、新開地のはずれを流れる溝臭い放水路に浮んで、——三月、事件は迷宮入りとなって、犯人の捜査は渋滞していた。

市民の関心もその事件から遠のいた形で、新聞も、それについては全く鳴りをひそめ、当局の遅鈍さに噛みつくことも忘れてしまったのであった。

いわばこの殺人事件は、迷宮事件として葬られ

司三郎が死んで、R区と呼ばれる新開地の歓楽街の裏の支配権は、戦後に抬頭した三国人の崔起東を親分とする紅陽会に移った。これはひとりでに崖の手に転げ込んだ工合だった。そういう体裁に見えた。

古いやくざ一家の、銭万組は、その組織はてんでんばらばらとなり、あっさり崩れてしまったのであった。

だから、司三郎の葬式も、わびしい光景だった。彼が把握していたR区の商人たちからの花輪も、ほんの二つ三つ通りを飾っただけで、折からの雨を冒して来る会葬者の数も数えるほどの疎らさだった。遠路駈けつけて来た、四国の伊集院一家の義理固い参席が、わずかに眼をひいただけだった。親分同志、血杯を分け合った義兄弟の仲である。——その午後になって雨はますます烈しくなった。白い瀑布を立てながら、寺院の門前に黒塗りのリンカーンの高級車が停まると、一家の眼という眼が、ふいに烈しい色を帯びた。

崔起東はたった一人で、紋服姿に珠数を持ち、殊勝な足どりで本堂へ上ると葬壇へぬかずいてしずかに合掌していた。

その姿を、老齢の銭万親分は乾いたうつろ

な眼で眺め、警戒のため臨席していた刑事は腰を落すと、崔起東は金歯の入った歯を一杯見せて、むせるように笑いほうけた。その隣一瞬痙攣的な憤怒を面に刷いたが、崔の顔がりで、配下の加納連四郎が寺院へ向って構えこちらを向く頃には胸に媚びた笑顔を用意していた機関銃を畳みながら、ほっとしていた。ていた。……

リンカーンのゆったりした柔かいシートに「親分。銭万組もザマああありませんね」

月光に映える肌からは仄かに湯気が立った。清らかな裸身に、裏切られた思いが一そう掻き立てられて彼は……

と。——

すり寄る乳房

その日からもう三月たって、司の事件が人の口の端にのぼらなくなってしまった頃——

加納連四郎は、夥しいネオンの光芒が、ほんのり夜空を染めているR区のバア街へ足を入れた。卵色の背広の衿元に光る、紅陽会幹部の金バッジを見るまでもなく、艶歌師や花売少女、表に佇む女給、バアテンダーたちが、愛想笑いをこぼして会釈を送る。

連四郎の方も愛想がよかった。いわゆる、肩で風切るという風な角張った様子はなく、物腰がひどく柔かい。

バア街はかなりの入りで賑わっていた。

「忙しそうだね」

〝ゆうぎり〟と青いネオン文字が夜を縫っている、一軒の扉を押して入ると、カウンターの端の止り木に坐って、なかにいるマダムとバアテンダーへ等分に笑顔を振り向けながら、彼はいった。

「ええ。おかげさまで」

マダムは夜会巻にした髪へそっと手をやりながら、彼の前に来た。客と物云うたび、髪の根に手を触れるのが、この中年女のくせのようだった。ちょっとした色気の匂うしぐさだ。

「ハイボール」

マダムのつけたマッチの火を受けて、連四郎は云った。「はい」と若いバアテンダーが答えると、手はもう敏速に動いていた。次々と註文が来るのだ。止り木は空いているが、奥のボックスは全部埋って、賑わっている。

「おかげさまよ、ほんとうに。まえよりもずっと……」

「うむ」

連四郎は合槌をうった。

紅陽会の支配下になって、R区一帯から所属を持たぬ浮浪的な愚連隊の徒輩が、一掃されていた。加納たち金バッジの圧力の前に、雲散霧消したのだ。司も手を焼いた、警察もてこずる無軌道な群れを、崔は一日にして駆逐したのだ。愚連隊や不良の姿が消えたR区には、客足がとみに多くなった。市民の慰安がここへ向けられるようになったのである。この善良な階級の層は、ぼう大だった。

R区が肥ることは、崔起東の財力が肥ることだった。餌は肥らせろ、その崔の利巧な方策に、今さらながら連四郎は感服した。

連四郎がこうしてここへ足を入れるのも、秩序を保つための、監視の役目を伴なっていた。

グラスを一息に乾して、格好だけ財布をさぐる真似をすると、マダムが手を振った。

「冗談じゃありませんわ」

「そうかね」

止り木を降りた。

「じゃ」

ドアの方へ行きかける背中へ、ふいにしなだれかかられて、

「おい。なにをする……」

連四郎は振返って云った。

「……酔ってやがる。離せ」

「いや。離さない」

今度は胸へ倒れて来た。裸の腕が連四郎の腰を巻いた。

「……離さないっ」

女給だったが、初めて見る顔だった。二重瞼の眼が、酔いに潤んで、媚びを含んで連四郎の顔を見上げた。が、その媚びがどこか未熟で、よく見ると全体に幼い感じが漂っていた。なにか、柄にもなく酔っぱらった少女に絡まれたような、奇妙な気持を連四郎は覚えた。

「おい」

と、連四郎はおとなしい声になった。

「さ……」

腕をもぎ放そうとすると、いっそうすり寄って来た。胸のふくらみが連四郎の胸にぬくみを伴って触感された。意外に豊かな柔かい隆起だった。連四郎は裸の二の腕に加えた力をゆるめた。彼は秘密に触感をたのしんだ。マダムが飛びだして来て引き離すまで、彼は女給の眼に眼を合わせながら、じっとしたまま相手の胸の鼓動の起伏を厚い胸に受止めていた。マダムから叱責されると、若い女給はやや抵抗してしぶしぶ躰を離した。泳ぐようにカウンターへ行って、バアテンダーに、

「お……おひやっ」

そこへ行くと、照明が明るかったなり、その裳の色が眼もさめるような美しい緋色で、腰から下がふんわりと盛り上って拡がり、その裾の先が羽根のように軽く床に触れている。剝きだしの裸の肩が、光を浴びて白くぬめらかに映え、ほっそりとした肉づきだった。

「すみません」

ドアを押して、連四郎を送りだしながらマダムが詫びた。

「あとで叱っておきますから」

如才のない口だと、連四郎は苦笑いした。

あの女給は上玉だ。叱って怒らして、よそへ鞍替えされたら損……そこは百も心得てるくせに……。が、本気にとった顔で、

「いや。酔ってるんだ。いいじゃないか」

笑って打消した。

路地から路地、軒並にバアが林立し、多彩なネオンのきらめきが眼にまぶしい。どの窓からも酔歌が洩れている。賑やかだった。

が、そのざわめきのなかから、ふと太鼓の音を聞きつけると、連四郎は舌打ちしてその方角へ踵を向けて行った。太鼓の音は移動しつつ彼が今歩いて来た反対の方角で、響いている。彼は路地を逆戻りした。太鼓の音は連続打ちで、ちょうど彼の前まで戻って、そこで太鼓の音をつかまえた。

獅子舞は四人で、なかから出て出るなり、鼻先に立ちはだかっている連四郎を見て、たじろいだように太鼓の撫を緩漫にして、すっかりやめた。獅子頭をかぶっていたのがそれを取って、精悍な顔をあらわした。額が汗で濡れていた。ドアが開いて、もう一人出て来た。が、これは女給だった。緋色のドレスを着ている。さっきの女だ。まだ酔っているようにふらふら躰が揺れていた。

「なにしてるの」

そう云うと、くっくっくっと勝手に笑いだした。その正体のないしぐさが、妙に愛らしかった。連四郎の眼に微笑がちらと浮いた。

「稼ぎを置いて消えろ。この縄張りはてめえらの出入りはおことわりだ」

「崔さんに話がつけてある」

精悍な顔つきのが口を開いた。

「つけちゃいねえ」

「いや。つけてるぜ」

「おい。俺を誰と思っての云草だ。ふざけるな。とぼけやがって。……ここを預ってるのはこの俺だ。だまされねえぞ」

「そうかい」

と、横から小柄なのが云うと、飛鳥のように胸元に飛び込んで来た。素早い背負投げの業を辛うじてはずして、飛び退ると、連四郎の眼からは闘志が火を噴いた。

「うぬら！」

くるかっ、とは胸のなかで、右手が上着の内ポケットに滑ってドスの柄を握った。四人は無言だった。円陣を作ってその包囲の輪をじりじりとせばめて来た。生捕ろうとするような形勢であり、気迫だった。背負投げを試みた小柄な男は、足払いに出る様子を見せた

なにか異様だった。ただの喧嘩とは様子が違っていた。周囲に悟られまいとして、四人、声を殺し、必死な気勢で迫って来る。目的が生捕ることにあるようだった。これは計画的だ！　釣られた！　と察すると同時に、相手が何者であるかを連四郎は察していた。なぜ遮二無二捕えようとするか、その目的もとっさに閃めくように了解された。

そうか。「ふふっ」と連四郎は笑った。

「四国の匂いがするぜ」
「えれえ」
と、一人が思わず感嘆した。
「土佐の高知の……はりまや――」
歌の文句が口を衝いて、
連四郎の躰は円陣の一角へ猛然と猪突していた。一人の太腿を抉った瞬間、自分の肩先にも火のような痛みを覚えた。路面へ、さあっと、血が飛散した。雨のような音だった。また、ひとしきりさあっと路面に降った。
連四郎の体がよろめいた。
「く、くそっ」
まなじりが裂けんばかりに瞋んだ。
「司の兄貴をやったのは誰だ！」
精悍な顔に殺気を帯びて詰め寄って来た。
連四郎の顔に歪んだ笑いが走った。来たな……と、その笑いだった。
俺を生捕って拉致して犯人の名を吐かせようと云うのか。
「こしゃくな」
連四郎はかすれた声で云って、ぐいと踏み込むような疲労を覚えた。それから崩れ込んでほやけた。

叩いて

かぐわしいい匂いが、鼻をくすぐるようだった。薬の匂いのなかから、その匂いがぷうんと強く訴えて来る。連四郎は、最初に嗅覚が眼醒めた。芳烈な匂いがぷ……と、その笑いだった。
俺を生捕って拉致して犯人の名を吐かせよ
「……おい」
と、連四郎は寄りそっている女に云った。眼が笑っている。
「よせよ」
「あいつらはどうした。伊集院一家のやつら？」
「そんなこと、どうでも……」
夜会巻の髪がほどけて、長々と背中へ流れているのをさっとひと振りして、マダムはまた顔を伏せて来た。
「てめえ。本気か」
唇が離れると、連四郎は熱い声になって、体を起しかけて、
「い、いけねえ」
肩が疼いた。繃帯されたそこから薬の匂いが漂っている。マダムは胸をはだけた。窓の白いカーテン越しに差込んでいる朝陽に、双つの乳房が白く輝やいた。連四郎は仰向けに寝たまま指を伸ばした。と、乳房は退った。
「ふふふ」
「こいつ」
連四郎が再び起上ろうと努めると、臀部が

ぐっと腹を押しつけて来て、「む」連四郎はうめいた。マダムは浴衣の腰紐を解いた。膚が覗いた。下は素肌のようだった。浴衣を脱ぎ捨てるとやはり全裸であった。匂うように白く眩しかった。

肩口の傷からどくどくと血が噴きだすのを構わず、連四郎は起上った。

「いや。いや」

畳の上に横ざまに這って、形のよい脚が揃って「く」の字を描いている。

「いや、いや、いやよ」

「なにをいまさら」

連四郎は苦痛に喘ぎながら、ぴしゃりと叩いた。

「叩いて……」

「なに?」

「叩いてもっと。ねえ、もっと……」

こいつは変な病気を持ってやがる、と連四郎は思った。

「さあ」

と、マダムはうつ伏せに這った。

「どんなに、ひどく叩いてもいいわ」

「ふん」

連四郎は興ざめていた。全裸の女体を前に据えて、彼は服をつけだした。傷は痛んだが、こうして起上ってみればなんとか歩けそうだった。

「あばよ」

「ひどい……」

マダムは顔を蔽っていた。耳朶が桜色に燃えるような色だった。

階下へ降りたところで、連四郎は美少女の顔とぶつかった。美少女は階段を登りかけた脚を素直に引いて連四郎を先に通した。連四郎の上着ににじんでいる血の色に眼をみはったが、連四郎はその白んだ顔の美しさに思わず打たれていた。

「名前は?」

「よう子……」

「ようは、どう書く」

「葉」

美少女は微かに笑った。「ああ」と連四郎は声を挙げた。その表情から記憶が甦った。

「思い出したぜ」

「ごめんなさい、ゆうべは。……酔って」

昨夜の顔とは人が違って見えた。化粧を落した素顔があまりに清楚なためだったろうか。青いドーランにぼかされた夜の顔の面影が、掃かれたように消えて初しい美しさに輝いていた。明るい、初

連四郎は、この美少女の昨夜の酔態を想起した。胸にしなだれて、乳房を柔かく押しつけた感触。また、伊集院の身内たちと対峙した瞬間、ドアを開けてふらふら出て来てくっくっと笑いほうけた正体もない姿……。

いたずら気分が連四郎の胸に湧いた。マダムから挑発された情念の余火も手伝った。紺色の内から盛り上っているシャツブラウスのホックへ、彼は指をかけた。一つをはずし、二つをはずした。

葉子は硬直したように立ったまま、さからわなかった。唇を半開きに開いて、大きな息をついていた。眼をひたと連四郎の眼にあてていた。青みを帯びて、その青みがひどく澄んだ美しい眼だった。胸がはだけられると、その眼はふいに閉じられた。連四郎は背中へ指をまわして白いナイロン製のブラジャアをはずした。

ぶるんと震えるように、形のよい豊かな、白い雪のような、乳房が剝きだされた。

「どうだ……」

美少女は無言だった。ただひしと眼をつぶって、大きく息を吐いていた。こりこりとした乳首だった。雪原に紅い実が二つこぼれているような新鮮さだった。

「もうやめて……」

やがて、葉子は云っていた。

「マダムが呼んでいます」

二階で彼女を呼ぶ、マダムのヒステリックな声が聞えていた。その声に、連四郎は内心首をすくめながら、葉子を抱き寄せると頬ずりしながら薄い肉づきの耳へ熱い息とともに押し込んでいた。

「明日…午後…事務所へ来い。紅陽会の」

うなずいたのが、気配でわかった。

疑問

連四郎は舌なめずりするような気持で、外へ出ていた。馬鹿についてるぜ。マダムが妙な態度で挑んで来たのも、考えてみると意外なことだった。手出しはしなかったにしろ、中年女の一糸まとわぬ素っ裸をとくと眺めたのは、眼の保養だった。それから……と、連四郎は今別れたばかりの葉子の白い上半身を頭に描いて喉を鳴らした。どっちも拾いものだが、後者には存分興味がある。

傷をかばってそろそろと路地を歩いて行く連四郎の肩に、陽があたっている。朝だと思っていたが、もう昼の陽の色だった。

表通りへ出ると、タクシーを拾って崖の事務所へ走らせた。

「どうしたんだ」

事務所の前でタクシーを降りると、どこかへ出かけるらしい崖起東と、鉢合わせにばったり出会った。

「へえ」

連四郎は恥じ入るように頭を下げて、昨夜の顛末を告げだした。

「待て」

と、崖はさえぎった。

「人眼につく。なかに入れ」

小ビルの構えの、紅陽会事務所は、殷賑地帯にあった。鋪道は織るような人波である。

「なに」

事務所の豪華な会長室で連四郎の報告を聞き終ると、崖は回転椅子の上で巨体を揺すった。笑ったのである。が、すぐに笑いを納めると、

「伊集院が、ね」

「まちがいありません。たしかに」

と、連四郎は念を押した。

「ふむ」

崖はまた笑いの皺を頬に寄せたが、

「追っぱらえ。海の向うへ」

と、はじめて怒気をあらわした。

治療費だと云って、崖は一万円束を三つ、テーブルに積んだ。

「温泉にでも行って来い」

「へっ」

連四郎は両手をついた。

「始末はつけておく。心配するな。サツでもブン屋でも手がだせねえこの俺に、仕返ししようとは料簡が太え」

連四郎が室を去りかけると、崖の声が追いかけた。

「聞き忘れたが、おめえが意識を失って、助けたのは誰だ？」

「〝ゆうぎり〟のマダムで……」

「じゃ、おめえたちの喧嘩をはなから見ていたわけか。おい、なんだ、気がきかねえ阿魔だな。見てるまにここへ電話で知らせる才覚がつかねえのか。知らして来りゃ、身内がすっ飛んでいったのによっ」

「いえ」

と、連四郎は手を振った。

「あいにく、誰も見てませんので。助けてくれたのは、もう気を失ったあとからでして。——気がついたら、そのバアの二階に寝ている始末で」

頭をかきながら、腹の上に跨がっていた中年女の濡れた唇の触感が、ふと唇に甦えるようだった。

「おい、それじゃあ、おめえが気を失ったのを見ていたやつは誰もいなかったのか？」

「へえ」

「おかしいぜ」

崖は灰皿の縁に煙草を揉み消した。

「そうじゃねえか？」

そうだ！　連四郎の体が瞬間こわばった。やつらは声を殺し合って、俺を、誰にも悟られず生捕ろうとしたのだ！　俺が気絶して倒れてしまったのは、そのやつらにとって一番好都合なことではないか。あの獅子舞の装束をすっぽりかぶせて、左右から腕をとって連れて行けば人眼に触れることもない――。

「やつらはどうして連れて行かなかったんだおめえを!?」

「――」

連四郎の表情は戸惑いを浮べていた。

「変だな」

崖も、戸惑うような浮かぬ表情だった。

「まあ、いいやな」

やがてそう云って、連四郎へ、行けと、手を振って促した。

温泉へ

温泉にでも行って来い、と云われたのが思いつきになったようだった。連四郎は葉子を温泉へ誘う気になった。病院へ行って、崖の鼻薬のきいた医者から秘密に手当を受けて、出血のわりに傷があさかったのも、連四郎の気を軽くした。ふくらんだふところも愉快だった。病院を出ると、日没後の透明な水色の夕空に、早くも星座がピカピカ光りながらせりあがっていた。

彼はふいに、温泉行を今日今から実行したい気持になった。それは彼にはめずらしく衝

動的な気分だった。昼間弄んだ新鮮な乳房の映像が連四郎の瞼の裏にちらちらした。

電話をかけるとマダムが出た。

「今夜は蒸しますわね、きっと」

そんなことを云った。なるほど、秋口にしては馬鹿に暑い日だった。淀みない調子でそんな挨拶をするマダムが、今朝の態度と考え合わすと連四郎には噴飯物だった。連四郎は介抱の礼を云った。ついでに——

「ちょっと聞くが、倒れている俺に一番早く気がついたのは誰なんだ？」

「え？」

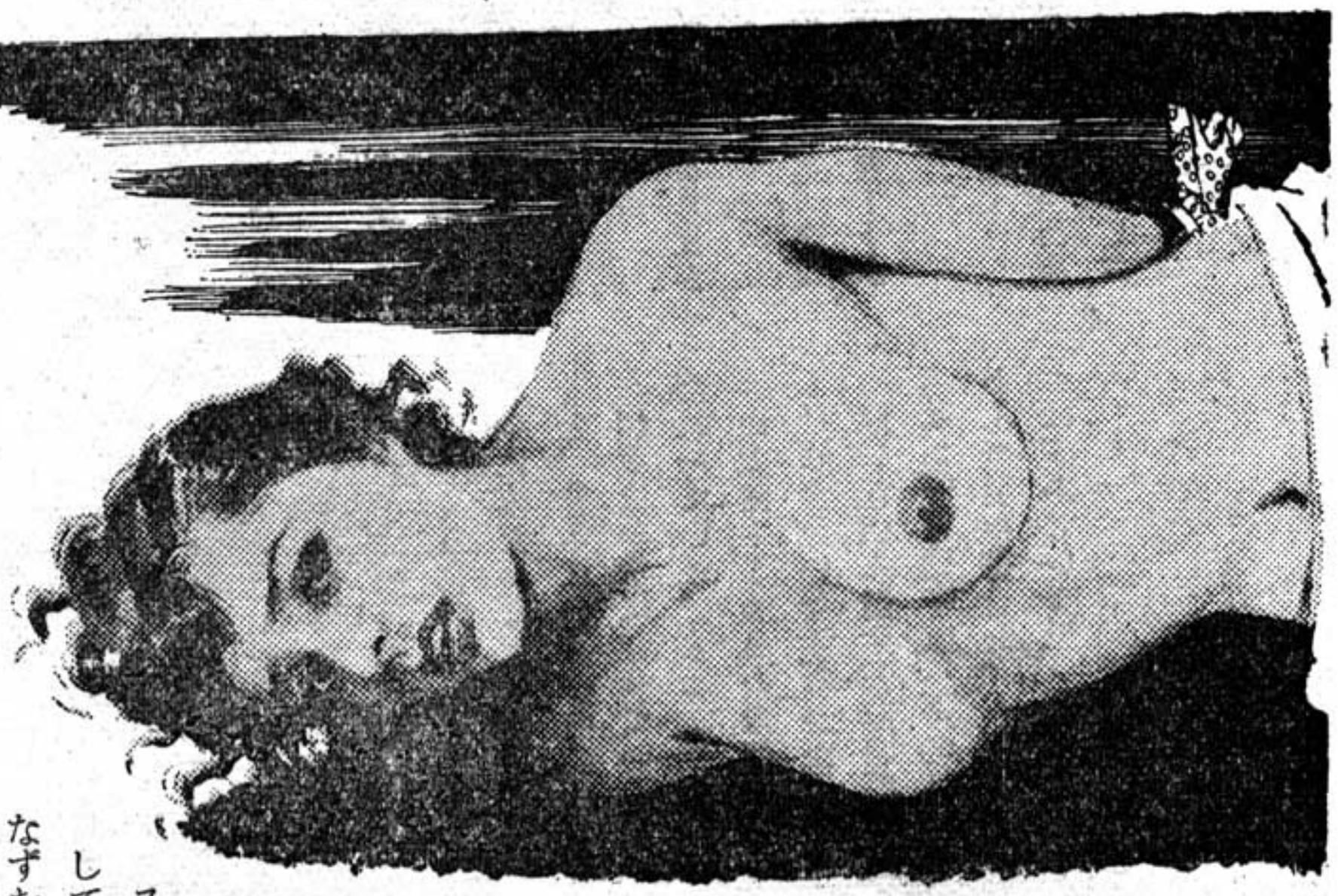
と問い返したが、すぐ、

「あ。あれ葉子よ。酔っぱらってたけれどさすがに気がついたのでしょう」

そうか、と連四郎は思った。あいつがいたんだ、くっくっくっと笑った様子や、ふらふら揺れていた酔態が再び思い出された。

「その葉子を呼んでくれ」

と、連四郎は云った。相手は投げだすように受話器を置いたようで、ガーンという音響が鼓膜に響いた。連四郎は笑いを噛みしめた。代って甘い声が線を流れて来た。



連四郎は強制した。やくざの威圧だった。

「行くわ」

と、相手は全く素直に応じた。

一時間後二人はN市の本駅N駅からロマンスカーに乗車していた。暮れなずむ淡い色の海岸線を、螢光燈の色の明るいディーゼル列車は快速度で走った。

葉子は紺色のバーバリーコートを着て、女学生めいていた。

「暑くないか」

と、連四郎は云った。それが最初に云った言葉だった。そしてそれだけだった。車中、二人とも無言に過した。葉子は窓外のほのかに明るい海へ瞳を凝らしていた。海に残る微光も素早く闇に吸われて行っていた。

終着駅のR温泉に降りたときは、その山間の細長い谷町に、月の光が白々と冴えていた。家々の灯は遥かな高さから、細く一筋に、密集したり離れたりしながらしだいに下って来て、きらめいていた。静かなしっとりとした温泉町の情緒が、漂っていた。

連四郎ははじめて見る町だった。が、ずっと昔、こんな家々の灯のつらなりを眺めたような記憶がした。小さい頃は、毒だみ草売りの父親に手を引かれて方々を流浪していたので、あるいはこの町も通ったのかも知れなかった。淡い感傷みたいな翳が、ちらと連四郎の胸底を掠めた。

処女散華

南明館という旅館に二人ははいった。駅前から案内して来た番頭は、玄関で威勢のいい声を張りあげていた。

「お二人さん御案内い」
「離れがありますかしら?」
と、ずっと黙っていた葉子が口を開いた。小声の問い方だった。
「はい」
と、年とった女中が答えて、
「御新婚さんで……」
微笑した。葉子の愛らしさに惹かれたようだった。
離れに渡る廊下は古風な様式の橋になっていた。そこを渡ると、下の泉水で鯉の群がさわいだ。広い築庭には月光が美しく映え、その光りが砕けている泉水池の縁は、胡蝶花の植込が埋めていた。
灯を消すと、部屋のなかにさらっと月光がさし込んだ。葉子は着替えをした。
荒い棒縞の浴衣をそっとかける肩を、連四郎は後から抱いた。葉子の足首へスカートが滑り落ちた。
「おめえが好きだよ」
可愛い形をしている耳朶を吸って、連四郎は云った。云う間に手がじわじわと乳房をさぐっていた。
「汗臭くない? お風呂にはいらしてよ」
「いいさ」
連四郎は隣間の襖を開けた。そこにはもう床が敷かれて、二つ並んだ枕元には水差が置かれてあった。羽根布団が裾の方に二つ折りに重ねてある。窓のカーテンに月光が溜まって、雪明りのような明るさだ。
浴衣は剝ぎとられて部屋の隅に投げられた。ナイロンシュミーズが体から離されると黒いパンティー一枚の姿になって、葉子は両手でしっかり顔を蔽った。
連四郎は煙草に火をつけた。ゆっくり御馳走にあずかろうという寸法だった。
ゆっくり御馳走にあずかろうとしていた。浴衣を脱ぐと、背中に弁天小町の刺青が躍りだした。
煙草は半分になっている。が、連四郎はまだ眺めていた。すんなりと伸びた脚……しまった太腿……まるい臀部……みごとな乳房……。飽きない美観だった。
煙草を揉み消すと連四郎は指をかけた。
「ああ」と葉子は小声で叫んで、掛布団をつかんで引き寄せた。
「はずかしいか」
「――」
「どけろ」
連四郎は強引に引き剝いだ。掛布団は遠く へ抛られて、床の上では素っ裸の肉体が烈しく羞恥に震えた。
浴衣を着るとき、葉子がよろりとよろめいたので、
「だいじょうぶか」
と、連四郎は肩を支えた。
「……はい」
うなずいて、ちらっと笑った眼になった。
逆に連四郎の肩を押すようにして部屋を出た橋を渡ると、また鯉が跳ねた。
家族湯は人工の岩風呂だった。山を形どった花崗岩に小規模な滝瀬が仕掛けられ、熱い湯が瀑布となってどうどうと湯槽に落ちていた。流し場も岩床だった。
「後悔しねえかい」
連四郎は背後へ云った。
葉子は黙って連四郎の背中を流した。
「おめえが処女だったとは……」
まさか思っていなかったのだ。連四郎は意外だった。
「え。この俺が好きなのか?」
どこか本気な響があった。
「え?」
と促した。
「はい」

「――よし。もういい。こんどは俺が流してやる。さ、前にまわれ」

さあ来いと手を引っぱった。よろよろともつれるように白い臀部が前に来て、急いでしゃがんだ。

愛撫するように連四郎はタオルでシャボンの泡を塗り込めた。葉子は全身白い泡立ちで埋った。タオルでなく手が摩擦していた。これは愛撫だった。

俺に処女を捧げるとは、可愛い女だ……

連四郎には再び情慾の火が点っていた。彼は嗄やいた。葉子は赧くなってうなずくと、

「そのかわり――」

「そのかわり？」

「教えてよ」

「なにを!?」

声が高くなった。

「銭万組の司三郎を殺した人を――」

葉子は体をねじ向けて、正面から連四郎の眼をひたと見据えた。

「ねっ！」

強い、必死な声音だった。顔に、必死な願いの色があった。白く冴えていた。「おめえ……」と云いかけて、連四郎はごくりと唾をのんだ。喉仏が大きく動いた。

「……おめえは誰だ」

「司三郎の妹です。お願いです！　誰が殺したか教えてくださいっ」

「――それで俺に……」

「そうです。そのため操を……」

葉子は立上って、乳房を差出すように握った。

「どんなことでもします。この体はあなたのものです。――そのかわり、おめえのこの体を引っぱたくんだ……誰が、兄を殺したか――」

「どうするの……」

「縛って、そうよ。俺にはひょんな病気があるんだぜ。くふふ……」

観念したように手がまわされた。その細い手首を緊縛すると、あとの一本で足首を縛った。

床の上の花の裸身は、ぶざまな、痛々しく哀れな恰好に変った。

ひややかに、連四郎は眺めた。冷たい怒りの色が、切れの長い鋭い双眸ににじんでいた。色仕掛けとは知らず、処女の体に手放しにうぬぼれ喜んだ自分の甘さへの、怒りもあった。が、裏切られたような怒りの気持が強い。俺は利用されたのだ！

それは最初から計画的だったのだ。

――昨夜、バーでいきなりしなだれて来て

と、肩を抱いて唇を盗んだ。

「さきにしてもらう」

「いいわ。いけれど約束するわね」

「する」

連四郎は二本の浴衣の腰紐を手にとると、背中をこづいて、葉子をうつ伏せに寝かした。

「うしろに手をまわせ」

「どうするの……」

「縛って、そうよ。俺にはひょんな病気があるんだぜ。くふふ……」

観念したように手がまわされた。その細い手首を緊縛すると、あとの一本で足首を縛った。

床の上の花の裸身は、ぶざまな、痛々しく哀れな恰好に変った。

ひややかに、連四郎は眺めた。冷たい怒りの色が、切れの長い鋭い双眸ににじんでいた。色仕掛けとは知らず、処女の体に手放しにうぬぼれ喜んだ自分の甘さへの、怒りもあった。が、裏切られたような怒りの気持が強い。俺は利用されたのだ！

それは最初から計画的だったのだ。

――昨夜、バーでいきなりしなだれて来て

犯人を教えて

泡だらけの体を、葉子はそのまま浴槽のなかへ躍らすと、濡れたままの浴衣をまとって連四郎の先に立って離れに戻っていた。――

月光に映える全裸の肌からは、仄かに湯気が立ちシャボンの匂いが匂った。

「どんなことでもすると云ったな」

「は……はい。だから――」

「わかってる」

乳房を押しつけて来たのも、擬態だったのに違いない。朝、唯々として乳房をゆだねたのも……。

すべて色仕掛けに誘う手段だったのだ。

と、突然連四郎の眉がぴくりと上った。あの、昼間、崔が指摘したことの疑問が、急に氷解されたのだ。

伊集院の身内が、路地に昏倒した自分を、むざむざ見逃したのは、誰か制止した者がいたからだ。他人ではない、仲間の制止者があったのだ。だから、やつらは素直に引揚げて行ったのだ！

司の妹が止めればな！——と、

——ううっと、ふいに連四郎はうめいた。風呂に入って温まったのが悪かったのか、肩の傷が烈しく疼いて来た。繃帯に血が滲み出していた。

「——おめえは……」

声が喘いだ。……疼く。

「なぜ昨日の晩、伊集院のやつらが俺を連れて行こうとするのを制めたんだ。え」

続けて吐いた。

「俺がどんなに痛められても、殺されたって も、白状しねえ男だと……」

「——わかっていたのです」

うつ伏せに這ったまま、葉子は云った。

「どれだけのやくざか、わかっていました。兄と暮していてやくざを見る眼を持ちました……」

「ちげえねえ。色仕掛でも仲間は売らねえ……」

連四郎はゆっくり立上ると、衣桁に掛けたズボンからバンドを抜いて手に提げた。

「私は操を捨ててお願いしたのですっ。どうか、ね、教えて……。ねっ、教えて。貴方が喋ったなんて、けして云わないわ。誓います殺した男に復讐すればいいのです」

「あんたと私はもう他人じゃないのよ。私はもうあんたのものだわ。ねえ。だからこんな恰好だってしてるじゃないの。叩くのが面白いのだったら、叩いて頂戴」

必死な嘆願だった。惜しげもなく美しい肉体を曝して、すべてを賭けた執念の願いだった。一途な執念が、羞恥心さえ奪ったようだった。

「さあ。そのバンドでどこでも撲って頂戴。さあ、どこでも……」

「——葉子」

愛しい！　と想う感情が連四郎の胸に嵐のように襲って来た。ごうとなるその慕情の音を連四郎は自分の胸底にはっきり聞いた。彼はくらくらとする眩惑を覚えた。不思議な、暖かい感情だった。

この女に惚れていたのか！

「云えない。俺は云えない」

「云ってっ！」

「……云えぬ」

連四郎はよろめく足どりで衣桁へ寄ると、服を着だした。

わっ！　という号泣が挙った。白い芋虫は全身をのたうたせて泣いていた。

連四郎は、その姿を放心したような、冷やかさのある眼で眺めていた。やがて、手首と足首から紐を解き放った。力弱くぴしゃりと張って、

「俺は帰る」

襖を開けた。半身を入れて、

「警察も手がでねえ相手だ。あきらめな」

「あきらめねえ！」

「なにっ！」

声の方角へ、連四郎はきっと眦を上げた。

「誰だっ」

「俺たちだ」

その声が庭から立つと一緒に、廊下と窓からいっせいに男たちが闖入して来た。

「さわぐな」

昨夜の背の高い精悍な顔が、連四郎の胸へコルトの拳銃を突きつけた。

「葉子さん、あんたの方法も失敗でしたね。こんどはあっしたちにまかせなな」

ちらっと連四郎は葉子を見た。葉子は掛布団で裸身を蔽って、坐っていた。顔を伏せて肩が震えて泣いていた。——

連四郎はじーんと胸が熱くなった——と、その瞬間、コルトの台尻で殴られて昏倒した。連四郎は担がれて外へ連れだされ、旅館の付近に停まっていた車の中へ押し込まれた。

R区の外れを流れる黒く濁った放水路に、加納連四郎の体が死体になって浮んだのは、それから四日あとだった。口中へ銃弾が打ち込まれてあり、全身に打撲傷の紫斑があった。犯人は不明だった。司三郎を殺した犯人が混沌として不明のように。

市民の不安は高まり、一種の憤りを伴って与論がしだいに湧上って来ていた。沈黙を守っていた地方新聞が、敢然として紅陽会を叩いた。

面目を賭けて、当局は崔起東の強力尨大な暗黒組織へ肉迫して行った。——

海底のハレム

水中に髪をなびかせて踊り続ける裸女群の怪！

橘 新太郎

その潜水夫は、潜水帽の中で、何度もまばたきをくりかえしてみた。やはりある。確かに見える。体じゅうの筋肉という筋肉がこわばって、心臓だけがやけに飛びはねる。いくら力を入れても、手も足も動かない。頭の中で、自分の脈搏が大砲みたいに鳴りひびいた。

何百人、いや何千人かもしれない。みんな若い女のようだ。むろん人魚でもない。海底からそそり立つ巨大な岩の周りで、数えきれない若い女が、ゆらゆらと体をゆすっていた。どれもこれも、一糸もまとわぬまる裸で——。

潮の流れに押しやられるのか、それとも無意識のうちにひきつけられるのか、つ奇妙な女の群に近づいていった。まるで、海底に花が咲き乱れているようだった。一斉に腰をくねらせ、足を振り、そのたびに長い髪の毛が柔かい花片のように拡がった。手が潜水夫のものとはテンポがすっかり違っていた女たちの間を縫ってをさしまねく。全てがとてもゆるやかな動きで、地上の鱗が光った。

別世界——そんな言葉が潜水夫の脳裡に一瞬ひらめいた。裸女の群にあやうくまきこまれそうになって、潜水夫は前身の力をふりしぼって合図の網をひっぱった。ゆっくりと引きあげられていく。足下にだんだん遠ざかっていく不思議な女たちに、潜水夫の視線はいつまでも吸いつけられていた。突然の闖入者には全く無関心に、女たちは海底の踊りを続けている。やがて、見えなくなった。

船にあがると、潜水具をとるのももどかしく、潜水夫はいま見た海底の光景を話し出した。が、誰一人として信用しない。いくら迷信深い水夫たちが聞き手としても、潜水夫の話はいささかけたはずれだった。

彼の見たものは何だったか？ 以下本誌次号を御期待ください！

次号予告

入鹿と女奴隷

煩悩

奴隷宮

せり落された女は奴隷として後宮に飼われるのだ。黒髪をつかまれ引きずられて女はあえいだ

小田桐爽灘 五郎・画

奴隷の市

草も、木も、大地をも焼きつくさんばかりに、熾烈な太陽が照りつけていた。

馬の市も、牛の市も、活気を失い、物売りの商人たちも木の蔭に寝そべって、だるそうに雑談を交わしている。

日が傾き、涼風の立つのを待つ以外に仕方がないという、真夏の市場だった。

そんな中で唯一つ、例外の場所があった。群衆のどよめき。人いきれ。甲高い商人の掛け声。渦を巻くような興奮——。

奴隷の市が立っているのである。

筋骨隆々として見るからに力の強そうな大男の奴隷商人が、赤銅色の半裸体から汗を飛ばしながら、しきりにどなっている。

「さあ、次は今日一番の買い物じゃ！」

足の下の大きな板台を鞭で烈しく三回ほど叩くと、それが合図とみえて、助手の一人が傍の大木の幹に括りつけられている奴隷達の中から、一人の若い女奴隷を曳き出し、板台の上へ追い上げた。

見物人達の間から歓声が上った。

奴隷商人は満足そうにうなずき、一際高く声を張り上げた。

「どうじゃい、皆の衆、これなるたおやめを

どう値踏みなさるおつもりじゃ！」

女奴隷は美しかった。

長い振分髪に垂領（たれくび）式の胸の開いた白色の衣裳を身に纏っている。のびのびとした四肢は見事に均斉がとれ、肉づきに無駄がなく、肌の色は小麦色だが弾力に溢れて健康そうだった。豊かな胸の隆起。腰の曲線。すべてが円熟した肉体を物語っていた。

ただ、奇異なのは、その女体に必要以上と思えるほどのきびしさで縄が掛けられていることだった。

後ろ手に縛られた両手は、高々と吊り上げられ、ほとんど肩に接するばかりの形で固定され、手首からは血さえにじみ出ている。

逞しい胸やくびれた腰へ走る縄は蛇のように女体を締めつけ、無残であった。

そして、女奴隷の物腰や表情の中に、こうした境遇に落ちた者に通有の、諦め、馴れ、媚びなどが見えず、叶わぬまでも反抗しようという動きがあるのも不思議だった。

容貌には、ただの女奴隷とは違う気高さが漂っており、黒く美しい瞳は、屈辱と憤りに燃えている。

「さあ、どうじゃ、皆の衆、見ているばかりが能ではあるまい。……とは申せ、この妙なる肉塊（ししむら）に見とれぬ奴は、木仏金仏石仏のほかにはあるまいて。無理もないわい。ようし、とっくりと眺めなされや。その上で相応の値をつけて欲しいものじゃ。よわいは十九じゃや首筋へべっとりとはりつき、凄艶だった。

名は奈津女と申す。なつめじゃ。働かせてよく、歌わせてよく、閨の伽にはなおよしじゃ」

と声がかかった。

奴隷商人は、問題にならぬ、とばかりに、

「阿呆を申すでない。稲四百束とは、この地方の法の定めで、婢一口四百束とか申すそうな。だが、そんな定め通りでこれほどの女が手に入ろうものなら、このわしの方から百人が千人でも買うてみせるわい」

首を大きく振りながら、周囲を見回した。

一人の若者が、銭の入った袋をかざして、

「銭五千斤ではどうじゃな？」

と叫んだ。台上の男はしばし考えてみる。

稲に換算してみなければ、物の値がわからないからである。やがて、

「銭五千斤とは稲五百束じゃな。おぬし、遠国から嫁探しにおじゃったか」

と、嘲笑を唇の端に浮かべた。

圧制と奴隷・特集

どう値踏みなさるおつもりじゃ！」

女奴隷は美しかった。

長い振分髪に垂領（たれくび）式の胸の開いた白色の衣裳を身に纏っている。のびのびとした四肢は見事に均斉がとれ、肉づきに無駄がなく、肌の色は小麦色だが弾力に溢れて健康そうだった。豊かな胸の隆起。腰の曲線。すべてが円熟した肉体を物語っていた。

ただ、奇異なのは、その女体に必要以上と思えるほどのきびしさで縄が掛けられていることだった。

後ろ手に縛られた両手は、高々と吊り上げられ、ほとんど肩に接するばかりの形で固定され、手首からは血さえにじみ出ている。

逞しい胸やくびれた腰へ走る縄は蛇のように女体を締めつけ、無残であった。

そして、女奴隷の物腰や表情の中に、こうした境遇に落ちた者に通有の、諦め、馴れ、媚びなどが見えず、叶わぬまでも反抗しようという動きがあるのも不思議だった。

容貌には、ただの女奴隷とは違う気高さが漂っており、黒く美しい瞳は、屈辱と憤りに燃えている。

「さあ、どうじゃ、皆の衆、見ているばかりが能ではあるまい。……とは申せ、この妙なる肉塊（ししむら）に見とれぬ奴は、木仏金仏石仏のほかにはあるまいて。無理もないわい。ようし、とっくりと眺めなされや。その上で相応の値をつけて欲しいものじゃ。よわいは十九じゃや首筋へべっとりとはりつき、凄艶だった。

名は奈津女と申す。なつめじゃ。働かせてよく、歌わせてよく、閨の伽にはなおよしじゃ」

と声がかかった。

奴隷商人は、問題にならぬ、とばかりに、

「阿呆を申すでない。稲四百束とは、この地方の法の定めで、婢一口四百束とか申すそうな。だが、そんな定め通りでこれほどの女が手に入ろうものなら、このわしの方から百人が千人でも買うてみせるわい」

首を大きく振りながら、周囲を見回した。

一人の若者が、銭の入った袋をかざして、

「銭五千斤ではどうじゃな？」

と叫んだ。台上の男はしばし考えてみる。

稲に換算してみなければ、物の値がわからないからである。やがて、

「銭五千斤とは稲五百束じゃな。おぬし、遠国から嫁探しにおじゃったか」

と、嘲笑を唇の端に浮かべた。

「愚か、愚か。そのようなはしたの銭で、天にも昇る心地を何として得られようぞ。早々と故郷へ帰ったが身のためじゃ」

軽くいなされて、若者は顔を赤らめたが、

「まさかその女、片輪ではあるまいの。腕は動くのか？　責め挫いたのとは違うか」

と照れながら云い返した。

「何の。立派に二本、この通りじゃ」

男は女奴隷を後ろ向きにさせ、手首を鞭の先で叩いた。女の指が苦しそうに屈伸する。

「こうして縛っておかぬと、山猫のように爪を立てるからじゃ」

と云った。

「飼い馴らせば、いくさの役にも立ちそうじゃの。妻にすれば尻に敷かれるか……」

誰かが云うと、爆笑が起った。

「ああ、丈なすこの黒髪を見よや。かぐわしきこの香り――」

男は奈津女の長い垂髪を両手にすくい上げその中に顔を埋めてみせ、大げさな身ぶりで一そうの演出効果を狙うのだった。

「ああ、酔うた酔うた。香りに酔うて、快いこと夢の如しじゃ。さあ、皆の衆、この女を買うた後は、憂さばらしの酒さえ無用ぞ！」

奈津女は眉をひそめ、唇を噛みしめて辱しめに耐えようとしていた。

「銅三百五十斤にてはどうじゃ！」

「どうして、どうして」

「布百端にて買おうぞ！」

「なかなか」

「稲千束！　どうじゃ？」

「まだまだ」

「銀五両と酒六十石！」

「何の何の」

次々と声が掛けられ、次第に値がせり上る。

競り合い

見物は熱狂し、市場は喧噪に包まれた。

その時、周囲を圧するような重みのある声で、とびはなれた高値をつけた者がある。

「稲三千束で買おうぞ」

声の主は、七、八人の従者を伴った人品卑しらざる中年の男である。つわもの姿の堂々たる風采が人眼をひいた。

武勇の誉も高い豪族、佐伯子麿であった。

台上の男は手を鳴らし、見物にどなった。

「三千束、よき値じゃ。どうじゃ皆の衆、三千束にて落してよいか？」

ところが、奈津女はまだその値では落ちなかった。

「いやいや、三千三百束出そうぞ！」

と云う者が現われたのである。

これも大勢の従者を連れた、立派な恰幅の男だった。美髯を蓄え、鷲のような鋭い眼をしたその男を、朝廷第一の勢力者、今を時めく大臣蘇我入鹿、と知る者は、この市場にはいないようだった。

だが、佐伯子麿はもとより気づいている。

「入鹿めが！」

と舌打ちして、無雑作に値を増した。

「三千五百！」

入鹿も負けてはいない。

「ならば三千八百束じゃ」

喜んだのは奴隷商人である。まさかこうまではね上るとは思っていなかった。彼は、入鹿と子麿が反目し合う仲だなどとは、無論知らない。

「おうおう、それじゃ、それじゃ。それなればこそ、ここな女の真の値打というものじゃ。どなたかは知らぬが、千万金を積んでも損の行く買物ではない。さあ、この玉のような肌は、磨けば光を増すばかりじゃ。いずれの手により磨かるることになるかのう」

縄尻を持つ手で腕組みをし、眼を細めた。

「稲四千束！」

子鷹は汗を拭きながら、叩きつけるように叫ぶ。もはや法外な値であった。

「稲五千束なら文句はあるまいぞ」

入鹿は悠然と云い渡した。財力においては、どんな豪族も蘇我氏の敵ではない。

佐伯子鷹は無念そうに沈黙した。奈津女を征服したいという強い欲望を抱いたのは確かだったが、蘇我入鹿が現われてからは意地が加わった。しかし、所詮は対抗し得ぬ相手だったことを思い知らされるのみであった。

「稲五千束。よいかな？　声はもうないか？　落してよろしいのじゃな」

奈津女はようやく怖れを抱いた、驚のような眼をした、底知れぬ財を持つらしい男に買われたのだ。どのように扱われるのだろう？　と戦慄を禁じ得なかった。

稲五千束の値打を、この身からどういう形で引き出されるのだろうか？　と思う。

父母や姉妹と共に何不自由ない明暮れを送っていたものを、突然、人買いに拐われ、すべての自由を奪われ、長い苦しい旅をして来たが、その間、憤りと反抗と、苦痛を耐える努力が続いたため、かえって恐怖を覚えなかった奈津女であった。

だが、品物のように売り渡されてみて、初めて怖さが身に迫った。理非は論じても通らない。主人という持主の支配下に入ってしまったのである。奴隷商人は主人ではなかった。誘拐犯罪者としての弱みがあったのである。

折檻など受けたことのなかった身に、ひしひしと縄を掛けられ、猿ぐつわを嵌められて船底に括りつけられ、幾日も陽の目を見なかったこともある。犯跡をくらますため、船で運び去るのが彼等の常套手段なのである。

しかし、それ以上の狼藉には及ばなかった。だが、今日からは違う——。

小突かれて台から降りる時、奈津女は思わず泪をこぼした。

曳き責め

時は皇極天皇三年の夏（西暦六四四年）すなわち大化の改新の一年前であり、日本に公年号がなかったころのことである。

土地と奴隷とが財力を表徴し、各地の諸豪族が自家の勢力拡大のために、土地と奴隷の獲得に狂奔している時代であった。

第三十四代舒明天皇が薨ぜられた後、その皇后の宝皇女が皇極天皇として即位した。

天皇が女帝であったので、蘇我氏の宮中における勢力は絶頂に達し、蝦夷、入鹿の父子は傍若無人の威勢をふるった。

専横の振舞は、ついに臣下たる分をもわきまえぬようになり、諸所の民を徴発して、彼等父子の死後の墓を造り、これを「大陵」「小陵」と呼ばしめたりした。

その翌年の秋には、入鹿は、聖徳太子の子の山背大兄王を斑鳩宮に襲撃し、王とその一族を亡ぼす、という暴虐ぶりを示した。

果然、人々の間に蘇我氏を憎む声が高まりついに、これを倒そうという計画が生じてきた。

その巨頭は中臣鎌足であり、有力な同志として山田石川麿、佐伯子麿、稚犬養網田等が結束した。

蘇我父子は、鎌足が名門であり、人望も高いのを惧れて、自分達の勢力下に引き入れようとし、皇極天皇三年の正月、鎌足を神祇伯に任じようとした。しかし、鎌足は蘇我氏の恩を受けるのを好まず、固く辞退し、病と称して三島（摂津国島上郡）に籠り、着々と計画を練った。

一方、入鹿は、甘橿の岡に城のような屋敷を造り始めていた。

深い堀、厚い柵、門の傍には兵庫まで設置する建築である。

奈津女が曳かれて行く先も、その屋敷、谷宮門であった。

入鹿が自分の身を高値に評してくれたことについて、奈津女は一種の期待を持ってみた。もしかしたら酷い取扱いを受けることなどないのかも知れぬ、と思い、強いて心を安らかに持とうとした。自分の美に対する評価ならば、と思った。

だが、それがいかにはかない考えだったかをたちまち奈津女は知らされた。

入鹿は、奈津女の縄を解こうともしなかった。それだけではない。彼は奴隷商人から別な縄を受取り、奈津女の首を括って曳き立てたのである。牛馬の扱いと変るところがなかった。いや、牛や馬なら四肢を縛って走らすことはない。

佐伯子麿の視線を意識して、入鹿は得意そうに美しい奴隷をいじめてみせた。

馬に鞭を当てると、奈津女はたちまち転倒し、もがきながら引きずられた。

全身が砂埃にまみれ、咽喉の笛が異様な音をたてた。

死ぬ、殺される——。

奈津女は苦痛の中で観念した。

だが、入鹿は虐待の呼吸をよく心得ていた。女の苦痛が絶頂に達した、と見て縄をゆるめ、馬を停めた。

奈津女は不自由な身を夢中で操作し、必死の思いで起き、辛うじて立ち上る。

「見よ、見よ、あの振舞いのおもしろさはどうじゃ」

馬上の入鹿は、眼を輝やかせ、不思議な笑いを浮かべて、従者達を振返った。

奈津女が、うなだれて歩み寄ると、入鹿は再び馬を駆った。哀れな奴隷は他愛なく足をとられ、転んでしまう。

咽喉の縄が締まり、意識が薄れかかった時またもや縄がゆるめられた。

苦痛のため思考が混濁し、視覚の焦点も合わなかったが、入鹿が故意に縄尻を離したのを奈津女は認めた。

縄は長々と路上に伸びている。その少し先で入鹿は馬を停めていた。

どうすれば主人の気に召すだろう？　と、奈津女は考えた。すでに逃げる気はなかった。

やっとの思いで起き上った奈津女は、縄尻を始めた。

生駒地方の野は、もうもうたる砂塵を上げた。

そして、入鹿の馬に近づき、膝まづいて、顔を仰向け、縄を捧げる姿勢をとった。

御主人を悦ばせるのが奴隷の勤め、と人買いから仕込まれた記憶が、そうさせたのだ。

入鹿は、睨み据えるように奈津女を見下ろした。

奈津女は思わず眼を閉じてしまった。

自分ながら思いもよらぬ屈辱的な動作だった。反抗や、誇りや、自由を取戻す希望は、一体どこへ行ったのだろう、と思う。

手足に縄を掛けられても、心までは縛れまいに——と思っていたさっきまでの自分は、どこへ消えてしまったのか？

そういう想念が湧くと、口惜しさが炎となって燃え上り、女の心が哭いた。

縄が手繰り寄せられ、奈津女は中腰となった。入鹿の手が伸び、首の縄がはずされた。

ハッと眼を開き、奈津女は入鹿を見た。

入鹿は女の黒髪を荒々しく掴み、馬上へ引き上げた。

手綱と女の縄目とを一緒に握った入鹿は、左手で烈しく鞭をくれ、狂ったように早馳けを始めた。

生駒地方の野は、もうもうたる砂塵を上げた。

甘樫の岡

甘樫の岡の入鹿の邸宅は、まだ完成していなかったが、兵庫にも、跳ね橋にも、武装した兵士の部署を守る姿が見られた。

入鹿の一行が到着すると、いち早く跳ね橋が堀へ下ろされた。

門を入ると、屈強な男奴隷たちが、監督者の鞭の下で働いていた。

石が運ばれ、巨木が削られ、土が捏ねられ火が焚かれ、怒号と叫喚が入り乱れて、戦場のような様相を呈していた。

入鹿はこの邸宅を、谷宮門と呼ばせ、わが子を王子と称していた。

入鹿は工事の状況を眼の隅に入れながら、奥まった一廓へと馬を進めた。

すでに普請ができ、人の住んでいる建物が立ち並んでいる。

男や、女や、帰化人や兵士達が地にひれ伏して入鹿を迎えた。

奥庭の一隅に、巨大な穴のような窪地があり、その中に特殊な一棟が建っていた。

屋根のある檻、と云えば早い。

頑丈な木組の格子が四方にある、そこは奴隷小屋であった。

入鹿が馬を停めると、下から鞭を手にした兵が二人馳け登って来て、うやうやしく一礼し、奈津女の縄尻を取った。馬の背から引きずり下ろすと、

「一責めしたゆえ、穢ないぞ。洗わねばならぬ」

と入鹿が云った。

奈津女は小突かれて階段を下りた。

小屋は、女奴隷の牢であり、作業場を兼ねていた。多数の女達が押し込められており、一斉に奈津女へ視線を向けた。兵が戸を開き声を掛けた。

「矢佐可、出ろ！」

やさか、と呼ばれたのは、装えば美貌かも知れぬが、眼に底意地の悪そうな光がある三十前後のやせぎすな女で、女奴隷の長(おさ)を命ぜられている古参の者だった。

矢佐可は馴れた手つきで、奈津女の縄を解いた。両手首に条痕が刻まれ、血が乾いてい

た。何日ぶりで得た自由か、奈津女自身にもはやわからなかった。縄が全部取り除かれても、まだ腕は動きを回復していない。

ただ、血液だけが、正常な循環を取戻そうとして、体の中を走り始めた。

それはしばらくの間、新しい責苦となって奈津女を襲った。縄や鞭より苦しい、と奈津女は感じた。耐える、という意志が何の効果も持たない道を、生理が辿っているのである。

奈津女は眉をひそめ、寒肌を立てて、低く呻いた——。

矢佐可の手が帯を解き捨てた。奈津女は狼狽した。しかし、辛うじて胸を抑えた腕は、何の力も持たず、矢佐可の手は適確に奈津女の衣類を剝いた。

情容赦もなく、一糸まとわぬ身にされ、奈津女は悲痛な声を上げて、かがみ込んだ。

顔と腕の先だけがやや浅黒いのは日焼けのためらしい。着物に隠されていた部分の肌は雪をあざむく白さで、清らかだった。

ピシリ！　鞭が女の腰とすれすれに地面を叩いた。羞恥の許される場所ではなかった。

奈津女は腕を捻じ上げられ、小さな水溜りの前へ立たされた。水は白く濁っている。

「入って、清めるがよい」

矢佐可に突き飛ばされ、奈津女は水中へ落ちた。

首まで浸って、身をすくめたのは、女の本能だった。監視の兵は露骨な視線で見下ろしていた。

彼等の頭上で、蹄の音が遠ざかった。奈津女の裸身を見とどけた入鹿が、馬で去ったのである。

桎梏

牢の中の女達は、五、六十人もいた。老いた女もいずれも若く美しい奴隷だった。

醜い女を奴隷とするのは、蘇我入鹿の威勢にかかわることであった。上質の女達が集められたのである。

ただ、その女達の持つ若さや美しさは、絶望の壁に遮られて生気を失っている。

米を搗く女、酒を造る女、布帛を織る女、衣服を縫う女等、すべてが仕事を与えられ、重苦しく働き続けていた。

ただ一人の例外は長の矢佐可で、これは鞭を使うのが仕事の監督者である。

手を休め、汗を拭く女の背中には苛酷な鞭が鳴った。

そして、手足の自由を許されている女は、まだしあわせな部類とみえ、中には労働に従事していながら、首枷や足枷を科せられたままの女奴隷もいた。どういう理由による懲罰だろうか。

それらの様子を恐ろしげに眺める奈津女へ矢佐可が冷やかに声をかけた。

「女、名は何と云いやる？」

「……奈津女」

「なつめ、か。手を背に廻しやれ」

木製の頑丈な手枷、足枷、首枷を、矢佐可は用意していた。

奈津女は、拐われて以来、いつしか桎梏を身に施されることに哀しい馴れを知る女となっていた。抵抗を試みても、結局はかえって酷く拘束されてしまうだけだということも、承知していた。

だが、進んでそれを受ける心は、まだ持たない。反射的に身を固くし、首を振った。

「なぜ、縛しめられねばなりませぬのか。抗らいはせぬものを……」

矢佐可は皮肉に笑った。

「抗わぬものならば手を廻しやれ。新しく購われた者への掟じゃ。人の心を挫き、畜生のならわしを持たせるための掟じゃ。それとも欲しいか？」

矢佐可は鞭をかざし、奈津女の首筋を、ヒタヒタと軽く叩き、嬲った。

奈津女は唇を噛み、うつむく。

突然、傍で悲鳴が起った。

眼を上げた奈津女は、米を搗いていた一人の女奴隷が矢佐可に髪を掴まれ、床へ引据えられるのを見た。

女奴隷は足枷を受けていた者だった。女は抵抗を示さず、恐ろしそうに身を顫わせながら手を合わせ、無言で矢佐可に哀願した。

だが、矢佐可は猫のような眼で鋭く奈津女を睨んでいるのである。

一瞬の後、矢佐可は鞭を使い始めた。

足枷の女の、背へ、腰へ、烈しい打擲が降り注いだ。女は四肢を蜘蛛のように縮め、泣き叫んだ——

やがて、折檻の手を止めた矢佐可は、再び奈津女を睨んだ。

足枷の女も、恨みのこもった眼で喘ぎながら奈津女を睨んでいる女が身代りに責められたのであることを、奈津女は悟った。

再び鞭が鳴ろうとした時、奈津女は眼を閉じ、我が手を背後に廻してしまった。

なぜかは知らぬが自分のために他の女が打たれている不合理を、見てはいられなかった。

不気味な音がして、手枷を嵌められる。

続いて足枷が掛けられた。

奈津女は、うなだれた。無念であった。肩のあたりが小刻みに顫えている。

罪人でもなく、身を売った女でもないのにこのような扱いを受ける運命が、今さらながら呪わしかった。

奈津女にとって、手枷足枷ははじめてだった。縄のように強靱な束縛はないが、この戒具は心までも縛られるような冷たさがあった。

さらに、首枷が科せられた。

虐げられる女の、ただ一つの小さな逃げ道である、うなだれる、という自由さえ奈津女には、もう許されなかった。

「女、眼を閉じてはならぬ！」

矢佐可は、奈津女の髪を掴み、叱咤した。

「む、無慈悲な！」

奈津女は、呻くように云った。

「無慈悲とな。何が無慈悲ぞ。働かせもせず鞭も加えぬに。入鹿様のお目に止った身を果報と思うがよい。今宵はお召出しがあろうほどに、神妙に勤めるがよいぞえ」

「お召出し？」

「入鹿様は荒御魂（あらみたま）を持ったお方じゃ。抗えば生膚断（いけはだだち）の責めにも掛けられよう。存分にお情を受けるがよいわ」

矢佐可の眼には奇妙な笑いがあった。嘲りと嫉妬が入り混っているようであった。

奇妙な踊り

夜に入って、奈津女はようやく首枷と足枷をはずされた。手枷だけはそのままに、小屋から曳き出され、兵に護られて入鹿の居室へ送られた。

入鹿は酒盛りの最中だった。

着飾った女達が、全身に媚びを表わして、舞ったり歌ったりしていた。

「おお、女、待ちかねていたぞ」

入鹿は盃を持った手でさし招き、

「皆の者、女達も聞け。これは奈津女と申す入鹿の新しい女じゃ。いかなる女か、今宵は試す。見物せい」

と云った。歌う者も、踊る者も、動きを止め、奈津女を見守った。

「まず、飲んでみよ」

女の一人が、大盃に酒を満たし、奈津女に近寄る。

「……飲めませぬ」

「なぜじゃ？　なぜ飲まぬ！」

入鹿の語尾が鋭くなった。部屋の中は、水を打ったように静まり返った。男も女も、恐ろしげに下を向いてしまった。彼等は入鹿を極度に畏怖していた。いつ、どんな理由で怒り狂うかわからない、苛酷で非道な主人である。しかも今宵は酔っている——。

だが、酔った入鹿は気紛れだった。

彼は、不意に笑い声を立てた。

「……そうか。手を縛られた身では飲めぬと云うか。よいわ。入鹿が手を貸して飲まそうぞ」

入鹿は乱れた歩みで奈津女に近づき、背後から首に腕を巻いて、抱きすくめた。

すかさず盃が手渡される。

盃は、奈津女の唇を押し開け、歯をこじ開けた。否応なしに、酒が咽喉へ流れ込み、奈津女は烈しくむせた。

「おお、飲め飲め！　それ、飲むのじゃ」

いささかの容赦もなく、次から次へと盃が取り換えられた。

奈津女は苦しさのあまり、身悶えし、顔を背けようとしたが、入鹿以外の手が何本かそむけようとしたが、入鹿以外の手が何本かに固定された。奈津女の顔を抑えた者は、数人の女達であった。

手枷の先の、白魚のような十指が虚空を掻きむしり、しきりと悶えた——。

酒責めからやっと解放されると、奈津女はグッタリと床に崩れ伏し、吐く息だけが荒かった。胸のふくらみが、波を打っている。

奈津女の苦痛は、次第に痺れるような錯乱へ変り、夢幻の世界がひらけ、全身の感覚がのたうった。耳へ喧騒な音曲が飛び込み、際限もなく反響した——。

眼を開くと、女達の足が輪を描いて行き交っていた。再び踊りが始まっていたのである。

舞う女達の間から、鷲のような眼が、一直線に注がれていた。その眼の男が、手を鳴らし、何かを命じた。

「あの女を踊らせてみよ。足が乱るる時は助けを貸し、踊り続けよ。乱れ踊りもおもしろかろうぞ……」

と、入鹿は云ったのである。

女達が奈津女に群がった。銘々の手が酔った身を引き起す。

奈津女は夢中で歩いた。この場から逃れようとする意識だけが残っていた。

だが、足元は雲を踏むように覚束なく、二三歩も進むと、たちまち斜めにのめった。

転倒せぬうちに、一人の女が髪を掴んだ。別な女が手枷を掴む。そのまま、踊りが始められた。奈津女の体は、振り廻され、小突かれ、引き戻され、足をすくわれ、散々に嬲られるのだった。

踊りの輪が廻るにつれて、奈津女の体は新しい責め手にゆだねられる。

気息えんえんとなって弄ばれる奈津は入鹿の狙い通りに、奇妙な踊りの動きを示すのだった。

入鹿は満足した。

「おもしろやな、おもしろや」

と手を叩いて笑う。

しかし、それは女達の嫉妬を誘うことだった。

踊り、とは、男取りの意味から出た言葉である。見る男を挑発し、歓心を呼び起す女の舞い、という由来が、これほど適確に当て嵌まる場所はなかった。

入鹿の関心の中に住めない女は、その後宮から追い落され、元の奴隷小屋へ戻されて、

苛酷な労働につかねばならぬ。

新しい女奴隷が、入鹿の興味を惹き寄せることは、女達にとっては不快なできごとであった。奈津女の身に加える女達の嬲りは、憎悪が手伝って必要以上のものとなった。

奈津女は動きながら、しばしばうめき声を発した。入鹿の視線から隠れた角度へくると女達は素早く奈津女を虐めた。

爪を立てる女、足を踏みにじる女、髪を掻きむしる女、指を折り曲げようとする女など狐のように狡く、鬼のように酷い苛責を加えるのであった——。

腰のあたりをしたたか蹴られて、奈津女は倒れた。

地底へ引き込まれるような感覚が起り、奈津女は失神した。

入鹿の怒声を聞いたような気がしたが、判然とはしなかった——。

うつろな女

縛しめを解いて下さい！　わたしは何の罪咎もない女です。手首が痛いのです。血が、血が流れて、いまに手首から腐り始めるに違いありません。なぜこんなに責められねばならないのです？　もう許して下さい！　どうか縛しめを解いて下さい……

そんな意味の哀願を、くり返して訴えているようだった。

鷲のような眼が、十にも二十にも数を増して重なり、拡大され、視界を掩った。

その眼が、いつか雲と化し、烈しい風が吹いて……嵐であった。稲妻が光り、雷鳴が轟く。奈津女は逃れようとしたが、全く動けな

い。ガンジガラメに縛られた身を横たえている。雷鳴が奈津女の体の中を走った。夢中で絶叫をした。だが、生命はあった。

それに、身を横たえているのは地上ではないようだった。揺れる。大きく揺れ、上昇し次には下降した。嵐の、これは海だろうか？

縛しめを解いて下さい！　縛しめを！

首を左右に振り、眼を開くと、驚のような眼光が鋭く見下ろしていた。

「気がついたな。酔いは、まだ醒めぬか？」

と入鹿が声をかけた。

奈津女は周囲を見まわした。

ここは屋根の下、そして衾の中であった。身には一糸もまとっていない。

奈津女は、ハッと身を硬直させた。手が動く。縛しめは受けていなかった。

胸をおおい、必死に起き上ろうとしたが、入鹿の力は強い。入鹿は、改めて奈津女を組み敷いた。

「女、入鹿の命が終る日は、小陵へ供をさせようぞ。とこしえに離れることはならぬ」

喰い入るように凝視して、つぶやいた。

「あ、お許しを！」

奈津女は羞恥に身をすくめ、顔をそむけた。

「何を許せと申すのか。……かわいや。もはや矢佐可の所へ戻らずともよい。炊女（たくめ）にもすまい。入鹿が愛妻（はづま）にしようぞ」

入鹿の顔が近づき、口唇が奈津女の耳を吸った。

「どうか、お許しを！　あ！」

「なぜ、顫い、おののくのか？」

入鹿は、不審そうな表情になった。とって奈津女は、やっと探し求め得た女であった。どの女よりも美しい、と思う。他の女は、もはや不要だ、と信じた。奈津女に較べれば雲と塁のように見えた。

奈津女は絶望的な悲鳴を上げた。

入鹿はふと微かな笑いを頬に浮かべた。奈津女の哀願の真意が奈辺にあるかを悟ったのである。

「愚かな。……奈津女は、もはや入鹿のものとなったではないか。いとしいぞ」

奈津女は愕然とした。ガックリと全身の力が抜けた。眼を閉じる——。

奈津女の心身は虚ろとなっていた。

「……入鹿は、やがて日位（ひつぎのくらい）を手中にするべき男ぞ。四海一の男ぞ」

うわごとのようにささやくのだった。

奈津女の眼には、露のような泪があった。

入鹿は、快い疲労にうつらうつらとしはじめた。女が静かに立ち上ったのも気にしなかった。しかし、剣を抜く音を聞いて、ガバとはね起きた。反射的に身構えたが、音は刺客のそれではなかった。

入鹿の剣を抜いた奈津女が、わが乳房へ刃を立てようとしていたのである。

入鹿は飛鳥のようにとんだ。

女の白い裸身を羽掻い締めにし、剣をもぎ取った。

「何をするのか！」

「死なせて！」

「愚かな女よ！　入鹿の心に偽わりはないものを！」

入鹿はあり合せの紐で奈津女を後ろ手に括ろうとした。昨日の、数々の虐待を悔いたばかりなのに、またしても自由を奪わねばならぬのが皮肉であった。

入鹿は、うまく縛れなかった。不器用な手つきで無駄な力を用い、汗をかいた。

解かれては一大事と思い、念入りに足首まで縛った時には、白々と朝の光が忍び寄っていた。入鹿は肩で吐息をつき、

「例え、陽が生駒山の西から昇ろうとも、入鹿のまことは変らぬに、なぜ悲しむ？」

と云った。惚れた弱身、と云えるにしてもあまりに柔軟な口説であった。

自分の言葉にわれながら驚く入鹿だったが、もはや威信も虚飾も投げ捨てた、一人の愛の奴隷と変るところがなかった。

そうだ、綿襖を欲めねばなるまい、と考えたが、入鹿の配慮はすでに遅かった。

糸のような赤いものが、奈津女の紅唇の端から走って落ちた。舌を噛んだのである。

「……奈津女、奈津女！」

信じがたい面持ちで、入鹿は女の裸身を掻き抱き、烈しくゆすった。

ガクリ！　と首がたれ、白い括られた、人魚に似た裸形は、もはやむくろであった。

入鹿は、初めて愛した女の黒髪を、痴呆のようにまさぐり続けた……。

その後の入鹿は、日ましに暴虐さを加え、父の蝦夷でさえそれを制止しようとするほどになった。

朝廷では専横の振舞を露骨に示し、屋敷では訳もなく奴隷の命を絶ったりもした。

奴隷小屋から女奴隷が八人逃亡した時などは、発見捕縛を厳命し、巨額の賞を定めて、ついに八人とも捕えたが、長の矢佐可を加えた九人の女を、全裸にして鎖で縛り、肩の骨が見えるまで鞭打った後に、焼き殺してしまった。

翌年の六月十三日、入鹿は大極殿において中臣鎌足とその同志のために誅せられた。

鎌足の計りごとにより、剣を解いた入鹿は中大兄皇子、鎌足、山田石川麿、稚犬養網田、佐伯子麿らの手により、無刀のまま斬り殺されたのである。

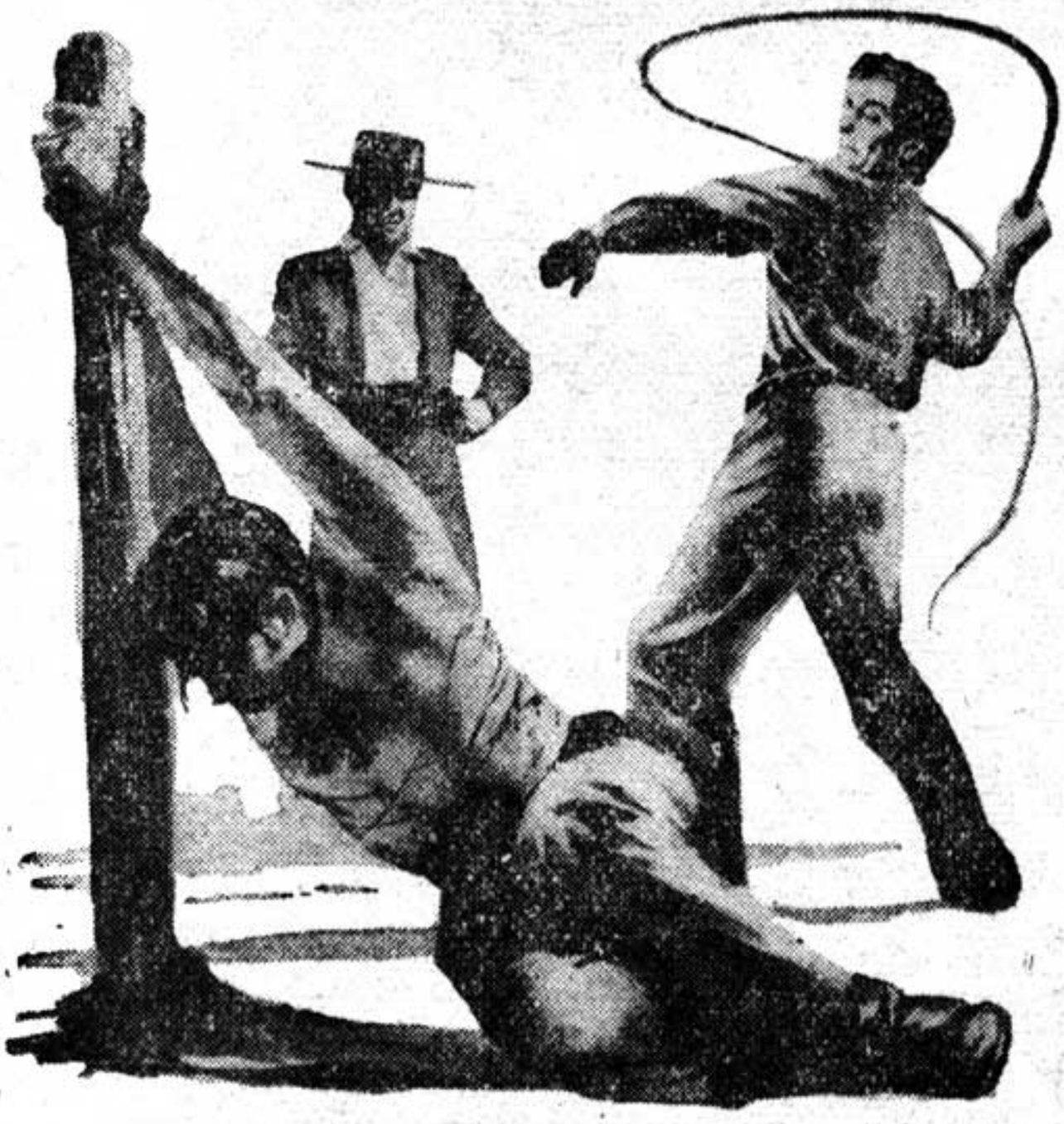
断末魔の際に入鹿が口にしたのは、奈津女の名であった。

佐伯子麿は、入鹿を足蹴にし、とどめを刺した。

入鹿の屍骸は、雨降りそそぐ庭に投げ出され、席で掩われた——。

鞭はうなる

たくましい背中に鞭はうなりを生じて飛んだ！　蛇のようにしなやかで強靱な武器を、男は握り直しては手ごたえのある犠牲に襲いかかるのだ！



★縄と褌★

奈落の檻

ガニ股男が責め役に回った舞台で、彼女の紅唇からは思わずほんものの悲鳴が洩れた！

志摩不二
カット・明石三平

一

座長が連れて来た十九か二十の。ケバケバしい人絹の着物をつけ、長い漆黒の髪をそのまま後に垂らした娘を見て、私は、

（この娘ならいける！）と瞬間に思った。

田村泰次郎氏の「肉体の門」に煽られ、サッパリの青息吐息をしていた頃である。

浅草の小さな劇場の、小さな劇団だから、座長の大友千太郎と作者兼演出家の私の二人で、何から何まで切り廻さなければならない。

そのくせ入りが悪ければ企画と脚本が悪いからだと、みんな責任は私にかぶさってしまうのだ。

私は長襦袢のような着物を着たこの八代さぎりを見つめているうちに、二、三日前何気なく雑誌で見た伊藤晴雨画伯の縛り責めの絵とこの娘の姿がダブった。顔も似ていたのかも知れない。

（よし！　むこうが裸で踊るのなら、こっちはうんと着物を着せて縛ってやろう！）

私は私のアイデアに、一も二もなくこの娘の入団を承知した。

「この娘は、女房の遠縁の者でナ、今までFDTに三年ばかりいたんだが、先輩の踊り子と喧嘩して……」

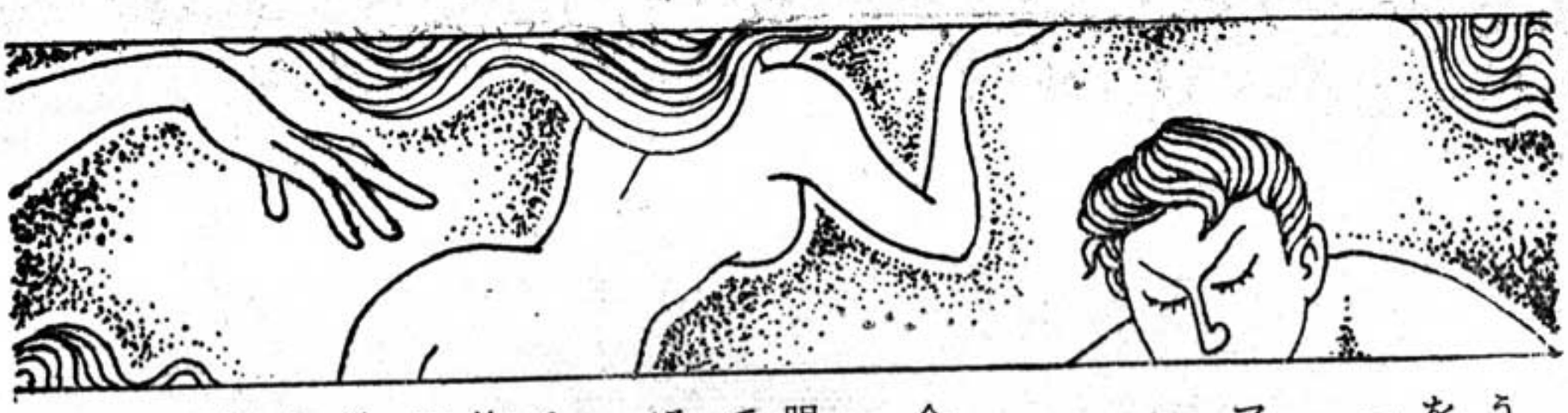
と云っている座長の言葉を聞き流しながら、机の引出しから薬の小箱を取り、ポケットに入れると、

「では君、明日からの稽古に出てくれ給え」

娘に云って便所に飛び込んだ。座長が驚いたように

あとから追って来て、扉の外から、
「せんせいよ。やはり明日から稽古に入るンかい？」
「ああ、やるよ。みんなにそう云っといてくれよ」
「脚本がなかろうが？」
「今夜作っておくよ」
座長の足音が遠去かっていく。大げさな身振りで呆れている座長の顔が見えるようだ。
私は笑いながら、右上膊を口にくわえた手拭いで緊めると、二ccのネオアゴを静脈の中に流し込んだ。
座員のだれかれがポンを打っているが、私は監督の立場上、他人には見せなかった。注射液も公園の者の手を経ず、小学二年になる私の娘自身に××人の親しくしている者の家から買って来て貰っている。第一安かったし、ひとに知られる心配もないからだった。
それを三回繰り返し計六ccを打ち終ると、何気ない風で外へ出た。とたんに、
「キャーッ！」
私の部屋から、さっきの娘らしい声がした。
（あっ！　又のやつ、やったなッ！）
案の定、又一がさぎりに張りいそいで行ってみると、娘の裾を捲り上げたのに違飛ばされたところだった。娘の裾をしっかり押え、キリキリと眉をいない。
さぎりは両手で裾をしっかり押え、キリキリと眉を上げて又一を睨みつけている。その又一は床に尻もちをついたまま、にやりにやり笑っていた。赭顔の頬に

くっきりと娘の掌の跡がついている。
悲鳴を聞いて座長も飛んで来た。このありさまに仰天した大友はさぎりの肩をつかむと、
「さアちゃん、こ、この人はな、ここの館主の北子社長さんのひとり息子さんで、北子又一さんという人だで……」
「だって、だって、この人急にわたしの裾をまくって……」
泣き声で云うのを、私に抱き起されて立上った又一が、
「いいんだよ。いいんだ。俺、社長の息子だってて、この役者兼照明係り兼雑役だからな。撲ったって、いいんだよ」
本人が慰め役に回ったのだから、世話はない。さぎりはポカンとするし、私や座長は笑い出してしまった。
私が八代さぎりの座員証明証を書いていると、横からのぞき込んでいた又一が、耳元に口を寄せてそっと云った。
「せんせい、あの娘を縛る役は俺にやらせてくれよナ」
「えっ？」
「だってよオ、せんせい今度の脚本はあの娘のために書くンだろう？　だったら、きっと頼むよナ……」



私はゾッとし、彼の顔を見返そうとした時には、もうヒョコヒョコと扉の外に出ていた。その又一の後姿を見送っていたさぎりが驚いたように云った。

「まァ、あの人、すごい蟹股！」

そう、北子興業社長の息子北子又一の別名を「ガニマタ」と云うのだった。

二

人間と云うものは、私の知る限り精神的肉体的に完全というものはあり得ないと思う。

容貌において美人と云える女を観察しても、髪、眉眼、鼻、唇にどこかバランスのとれないところがあって、それがその容貌の魅力になっているものなのである。アンバランスの美、とでも云うのだろう。

そのよい例がこのガニマタこと、北子又一の顔である。だれもこの顔を見て美男子だと云う者はいない。彼が怒っても笑っても、みんな笑ってしまう。だれもが彼を三枚目の顔にしている。しかしよく見てみると彼の髪は真黒で濃く、広い額で、眉は太く、ほどよく上に尾を引いている。二重瞼の澄んだ大きな眼、鼻は高く小鼻はガッシリとして唇は真一文字に結ばれ上下とも厚くできている。そして、輪郭は男性的な直線できりっと形よくまとめられている。

一つ一つを見るとこれほど完全な男性としての顔の造作はないのだ。それが一つにまとまると、なぜかおかしくなってしまうのである。

しかしその立派な顔を乗せている体は、少し小さい。だが五尺はちゃんとある。男五尺と昔から云われているのだから、恥かしいことはないのだが、敗戦後の若い者があまり大きくなりすぎたので、彼が小粒に見えすぎてしまうだけの話である。

さて、問題のガニマタだが、これだとて極端なだけで、外足は立派な男の歩き方である。

女性的な容貌で、華奢な体つきの私などから見たらどのくらい、いい男かわかりゃァしない。

外形の北子又一はざっとこんな男であるが、今度は精神的に見てみよう。この方は現在のところあまり感心しない。前述した通り、突然異性の裾を捲り上げたり、だれかれなしにアイラヴユーを乱発し、ラヴレターをつきつける。

それから云い落してならないのは、彼の性癖たる肌着フェティシズムである。これもだれかれの差別なしに女の肌についていたものなら、かたっぱしからかっ払ってしまう。

北子社長が恐縮しながら（こいつ、どうしてもここで働きたいと云って聞かんのだ。月給はこちらで出しても かまわんから、使ってやってくれんか）と頼んで来たので、冗談半分に座員にしてしまった翌る日から女の子のブラジャア、シュミーズ、ブルマース、パン

ティーなどが、瀕々となくなりだした。それも御ていねいにその品物の代金の倍位の札がきっと置かれてあるのである。

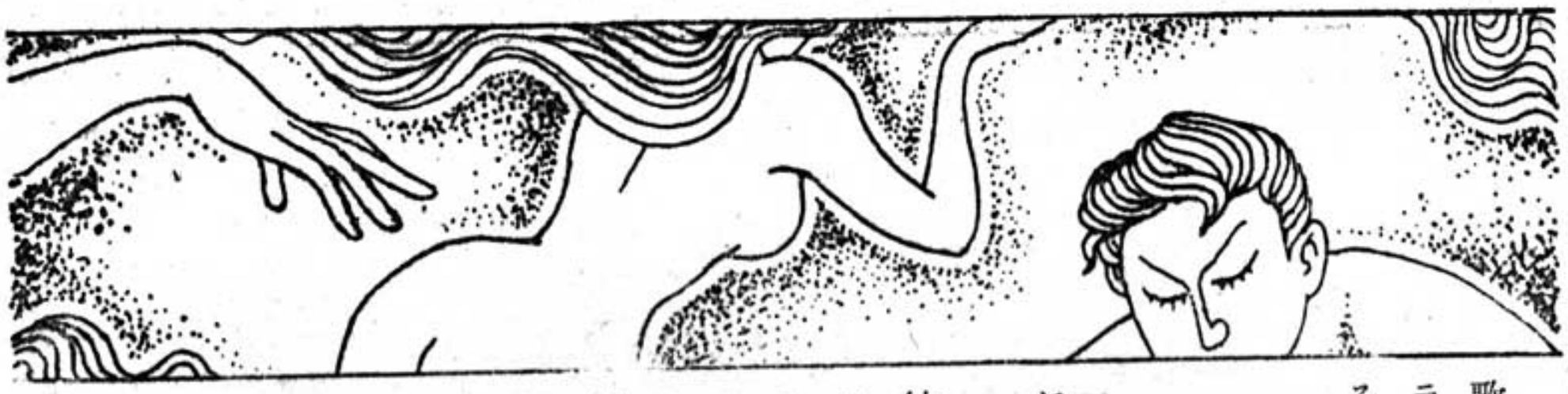
はじめは大騒ぎをしたが、結局犯人が彼だと割れてしまうと、だれも笑って済ますようになってしまった。なかには自分の身につけていたものが、彼にどんなふうにされているのか考えて、気味悪がる女の子もいたが、そういうのは自分で気をつける程度だった。

一方、小銭の欲しい子などは汚れて古くなったのなんかを一まとめにして、わざと盗まれるようにして金に替え、チャッカリしているのもある。

だから彼がいくら金持ちの社長の一人息子であっても、ラヴレターを貰い、アイラヴユーを云われ、プロポーズされてもOKする女の子は一人もなかったのである。

私はさっき、現在のところあまり感心しない。と彼のことを書いたが。それは、私は一概に彼の知能を軽蔑していないからである。白痴では決してない。むしろ正常である。あまり正常なるが故に、彼の顔の如く異常に見られてしまうのであると私は思っている。その正常さが次第に壊れてくれば、彼は平凡な人々に近くなってくると考えられるからである。

私は、その夜セッセと脚本を書いた。もちろん、主役は新入りの八代さぎりにしたが、座長の大友千太郎やその妻君の大友しのぶも主役にした。



乱暴な話ではない。外題は「色くらべ鏡山」と云う歌舞伎の「鏡山旧錦絵（きょうのにしきえ）」をもとにしたエロとアチャラカものであった、座長を岩藤に、しのぶを尾上に、そしてさぎりをお初にしたのである。

三

脚本を書いている間、私は一回逢ったきりの八代さぎりの体を虐めに虐め抜いた。

長い黒髪はヅラを使わず、そのまま髷に結わせ。元結に、弱い紙紐を使わせ、すぐ乱れるようにする。責められると二筋三筋白い陶器のような頬に垂れ、蕾のような唇に噛まれる。

ぐるぐる巻きにされた八千代さぎりは、苦しさに（うう！）とかすかに唸って、弾力ある体をうごめかす。それを梁に掛けた縄尻できりきり吊す。乳をよけて胸に廻した縄に力がかかり、まだ固いであろうあの豊満な乳房は一層衣類の上からも盛り上って見え、喘ぐ息でせわしく身もだえるであろう。

ここで女の裾が都合よく飜ってくれれば演出効果満点であるが、それは運にまかすほかはない。岩藤が草履で尾上を打つところは、やはり、折れ弓でも使わした方がよいだろう。

吊されて、ぐっとせり出た臀部を叩く。

「ひーっ！」お初が悲鳴を挙げる。髪は乱れてうねり、緊めに緊められた女の体がくるくると宙に回る。目に涙をためて、

「せんせい！　ひどい！」

可愛い唇が怨めしく呟やく。

私は陶然として、紙の上でさぎりを責め抜いていく。

「せんせ！　ひどい！」

ぎくっとして私は顔をあげた。

「何だ？　君か？」

大友しのぶが、私の好む藤紫の模様の着物を着て横坐りしている。四畳半一間のアパート暮し、子供は深い眠りに落ちているが、大きな声は出せない。ベニヤ板で仕切った隣室の住人にも気がねがいる。

私は用紙を丸め万年筆を袂に入れると、闇の道を、しのぶと共に高橋のドヤ街に向っていった。

住吉町から水天宮に向う電車通りのちょうど中間あたり、南側に位置する高橋三丁目から二丁目の一角辺が名の知れた宿町である。一泊五十円のドヤから、せいぜい三百円どまりの家。また日銭で室代を払えば何ケ月何年いてもよいアパート式のものなど、ざっと二百軒あまりが並んでいる。

この町に秋、立ち入れば、秋刀魚がにおい、冬ならばミカンの皮の、夏の初めは汗と小便の臭いが強くする。

ここには昼があって夜がない。夜があって昼がな

い。白昼死んだように寝ていて、夜になると稼ぎにゆく老人もあれば、十五六の小娘もいる。亭主が朝出かけ夕方帰れば、女房と娘が起きて出かけていく。その家族六人がそれで結構三畳暮しをしていて間に合うのである。

私としのぶはのれんのない屋台に立って酒とおでんを注文した。それを喰べて飲んでいるまに、屋台の親爺は外へ出ていった。これから私としのぶが演じる芝居（？）の客寄せに行ったのである。この儲けは、親爺と私たちで切半する。せいぜい五六百円どまりだがドヤ代と、この飲み代がロハになる。

私たちは客が多ければ多いほど興奮し収入が増加する。三十分もすると親爺がニコニコと千円近くの金を集めて帰って来た。

「せんせい、今夜は客が多いぜ」

私はしのぶをうながして、そこから十軒ばかり離れた一泊三百円の家に入った。三畳と四畳半の二間の部屋で、三畳が舞台、四畳半の方が観客席になる。親爺と宿のお神が花模様のきざな夜具布団をのべ、天井から滑車を吊して縄を通し、準備をする間にしのぶはハンドバッグから化粧道具を出してメーキャップをする。

寥せた蒼白い顔が、みるみる生き生きとして、歳より七八才若返っていく。どう見ても二十四五にしか見えない。

アップにしていた髪からピンを抜くと、バラリと背から腰まで垂れた。その髪にヘヤーオイルをたっぷりとつけさせる。これだとポマードなどと違ってベトつかずサラリとしているので、乱れ髪の効果が出る。それに髪は濡れて艶を増し、香油の香りが観る者の心を一層刺激するのである。

気候もよいせいか、三十人近くの者が四畳半にギッシリ入った。廊下にうずくまっている者もあった。女も四五人いる。これはサディストの女たちで、同性が虐められ弄られるのをわがことのように思い、快感を覚える者たちであった。

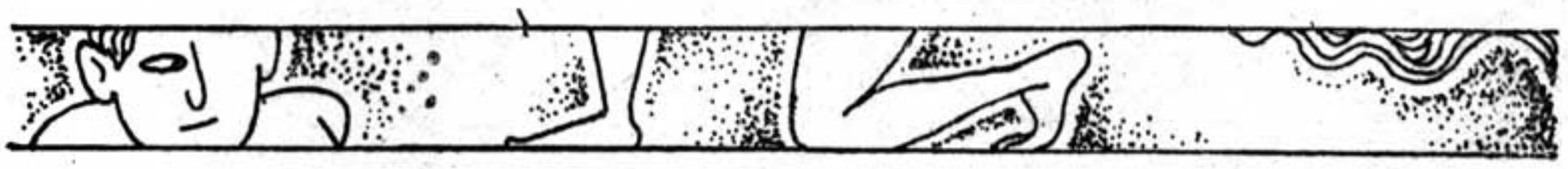
若い男たちはいない。四十すぎの中年から六十すぎの者まで、それぞれ立膝をしあぐらをかいて、間の襖が開くのを待っている。半身が動いているのを見つけて私は傍に寄った。

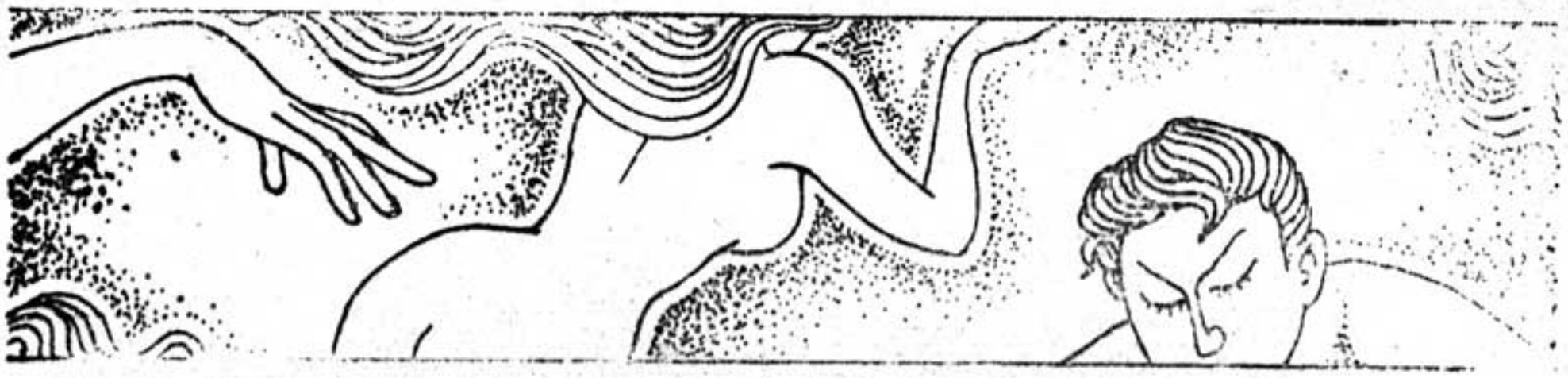
「おっさん、五本ばかり分けてくれないか」

言葉なくうなずいてその男は、モゾモゾと軍隊服の胸ポケットから薄紙に包んだアンプルを出した。注射器も貸してくれた。それには薄く血が滲んでいる。私は湯呑みに水を入れて筒を洗った。五本全部を私の体内に注ぎ込んだ。針は切れなく痛かった……。

四

乾燥室の風洞から出てくるような匂いが、胃から突





き上げて来て、徹夜で重くるしかった頭をはっきりさせてくれる。その反面肉体的な疲労が腰に降りて、立つのが憶却になった。口をつぼめて断続的な吐息に喘ぎながら、私は立膝した足を両腕に抱え、今夜のもよおしもののストーリーを話す。

「鏡山のうちの責め場かい？　そりゃァええ……」

と六十すぎのカマキリみたいな爺さんが云った。なかには道楽がすぎて、このドヤ街に住み込んだのなんかがいて、なかなか話甲斐ややり甲斐があった。ここで話したり聞いたりすることが、そのまま浅草の劇場に役に立った。五十位の婆さんが横から口を出した。

「しのぶちゃんは何をやるんだい？」

「尾上だよ」

「それじゃわたしが岩藤をやってやろう」

「ンだ。ンだ。おしげにゃ岩藤がぴったりだ。何年となく嫁いびりをやってきたンだから」

「うるせえ、いじめたくっていじめたンじゃァないよ。女の美しさってものはネ、泣いて涙をこぼし、縛られてくねくね尻を動かすところにあるンだ。そんなのを見ちゃァ、女のあたしだって堪らなくなるンだから、おめえたち男だったら、ダラダラヨダレを流すンだろうさ。息子だってそのたンびに嫁に抱きついて前よりまして可愛がっていたさ」

「その挙句、いびり殺しちゃったってわけか！」

婆さんはその男につかみかかっていった。私は婆さんをうしろから抱きとめて、

「おいおい相手が違うよ。お婆さんは岩藤だ。しのぶちゃんの尾上の方を頼むよ」

「へっへっへ。そうだったねえ――」

乱れた芒のような髪を、唾をつけた指で撫でつけ、シャナリシャナリと三畳の方に入っていった。つづいて私が入ると、すっかり仕度のできたしのぶが、

「せんせ、ひどい。あたしに尾上をやらすからは、さぎりにお初をやらせるつもりなんでしょ？」

「ああ、あの娘にそれをやらそうと、今度の脚本を書いたんだよ」

「すると……、せんせ、今度はあの娘を縛って虐めたくなったのネ」

「虐めるなんて、そんな……」

「そうよそうよ、きっとそうよ。もうあたしなんか興味がなくなったんでしょう」

かがむとシクシク泣き出した。その通りなので私も言葉の接ぎ穂がなく、黙ってしまったが、やがて、

「そう云ったって、あの娘がそれを喜ぶかどうかはわからないじゃないか！」

「うそ！　うそ！　せんせはひと目であの娘がこういうこと好きだってこと見抜いているわ。そう、その通りよ。あの娘あたしの姉の子ですから、あたしよく知っています……」

「ふーん！　君の姪なのか？」

私は憮然として呟やいたが、内心ゾクゾクする喜びに馳られた。しのぶは上背もあり細面の美人で、肌も病的なまでに白く和服がよく似合ったが、何分にも肉づきがなかった。骨張っていて胸も薄く、臀部に丸味がないから裸にするとヤスオ・クニヨシの絵を連想する。

しかし彼女は幼い時からサーカスの一座に入り曲技をやっていたので、関節が非常に柔軟であった。吊し責めにしても、手首両足首を一しょに縛って吊しても堪えられる肉体に鍛えられていた。

私が二年ほど前、北子社長から常打ちにする劇団を探してきてくれと頼まれた時、今の大友千太郎一座を見つけて連れて来たのも、ただこの大友しのぶがいたからだった。彼らの名が新聞雑誌に載るようになると千太郎は生来の美貌に物を云わせ次々と女をつくった。

——女房はすでに女ではない——とはだれかの言葉である。女房と別れ子供と二人暮ししている私と、しのぶがくっついたのは、自然なりゆきだった。

一盗、二婢、三妾、四妻、これは色事のおもしろさの順序である。私はその一番よい盗みをしたのだが、千太郎にとっては、一番おもしろくない四妻を私に盗られたのだから、二人のことがわかっても何も云わなかった。

そのまま今日に至ったのである。が、そのためせっかくの一盗の興味のなくなった私は、いつしかこの情事をこのドヤ街に持ち込んで、このようなありさまにしてしまったのだ——。そしてこの興行は私を嗜虐の喜びに陶酔させ、しのぶには本来の被虐の快味を呼び覚まさせたのである。正直、この興行を始めてから彼女の演技は見違えるほどうまくなった。

私は彼女の体にある可愛いポイントに唇をつけた。襟を拡げると肩のつけ根にある小豆大の黒子である。私はしのぶの体のうちでこれが一番可愛かった。ビクッと体を痙攣させて彼女は泣き止んだ。そして気弱く笑うと、

「みなさん待っているから始めましょう」

と立上った。間の襖が開けられた。

「ええ、ここな不届き者！　殿の云いつけじゃ、きっと折檻してくれるぞえ——」

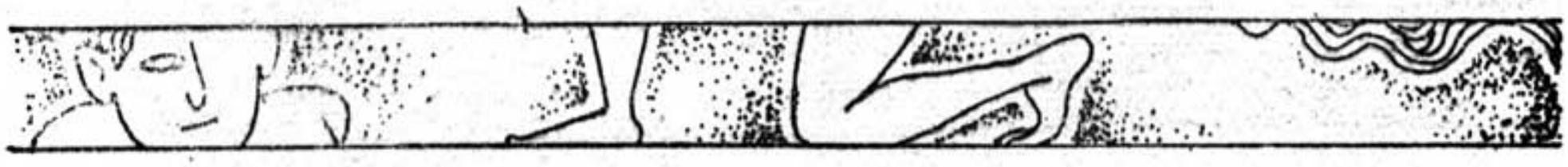
「よォよォ、クソ婆ァ、うめえぞォ——」

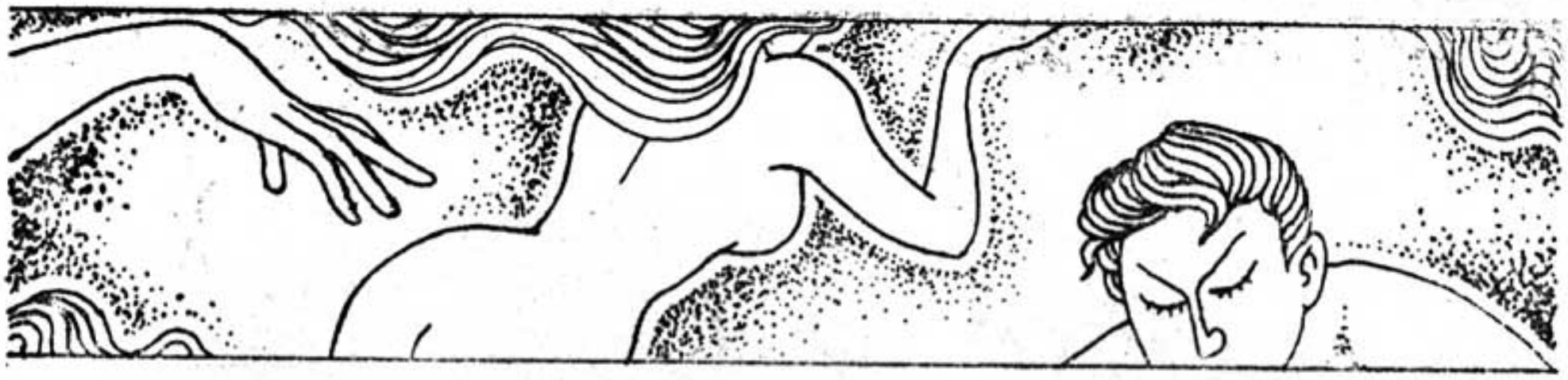
「うるせえ！　黙って見ていろい！」

どなり返したおしげ婆さんは縄を取ると口にくわえ、しのぶの黒髪を片手掴みにねじ上げ巧みに片方の手でその細い軀をキリキリ巻き上げていった。なるほど手馴れている。乳の上に掛からないように、後手をくくり、また前に回す。

「あれ、岩藤さま、お許しを！」

「いいや、ならぬぞえ！　この美しい顔、この柔らかい手で盗みを働いたのかや」





得手勝手にやり取りしながらも、しのぶの曲線のない体を緊めつけ、結構、乳房、腰などの美しさを現わしていく。

「うーむ、巧い！」

感心してみていると婆さんは、

「こりゃ下郎、ここな女郎を思いのままに打てやい、叩けやい！」

と私をどなりつけた。私はびっくりして、

「へ、へい、岩藤さま。あ、あの叩くお道具は？」

「うむ、そうじゃのう――」

ぐるりと見回し、ニコヨンの吉っあんのズボンに手をかけると、

「これ抜けやい」

皮バンドを取り上げて私につきつけた。私はバンドを掴むと、うなだれて坐るしのぶに、

「ビシッビシッ」

鞭を当てた。緊められた女体から電流のような肉の喘ぎが手に伝わって来る。ポン中で軋んでいた私の腰がぴんと伸びた。

「ビシッビシッ」

「ヒーッ、ヒーッ！」

鞭の音、女の悲鳴が交錯するなかで、歯を剝き涎れを流し、目玉を飛び出させて見つめる者たちの生唾を飲む音、呼吸のはずみが高くなっていく。

おしげが縄尻を滑車に通して、おでん屋の親爺の助けを借り、しのぶの体を吊り出した。

カラカラ回る鉄の音に、しのぶの体がずるずると畳の上から宙に浮き始めた。

「ひえーっ！」

咽喉からほとばしる悲鳴と苦痛に満ちた顔にくらべて、そのしのぶの目はなんと観喜にもだえた輝きを帯びていることだろう――。

私は宙吊りになったしのぶを叩く。赤い蹴出しが飜り、白いふくらはぎがチラチラと、廻り燈籠のようにくるくる廻る女体からのぞくのであった。

「ええい、手ぬるい、おらに貸せ！」

横から鞭を取り上げたおしげ婆さんが、私に代ってしのぶを叩く。女の汗と男の熱気がこの部屋に充満し女たちは身もだえ、男たちは異様な声を挙げてうめくのだった。

ここにいる者たちは、死後、天国や極楽にゆくのを願う者はないであろう。

地獄を志願し、彼らはそこに歓喜を快楽を求めるだろう――。

五

「おはよう」「おはよう」

正午から一時までに集ってくる芝居者たちのあいさつである。

ポケットにクスリの箱を押し込みながら便所から出て来た私を待ちかねたように、八代さぎりが寄って来た。

「せんせい、さぎり困っちゃったんです」

昨日の礼も何もない。突然そう云って私に一通の封書を突きつけた。赤字のついている速達便である。

「どうしたんだね？」

「きのうの人が今朝うちに送って来たんです」

「ああ又一君！」

もうこれで聞かないでもわかっている。

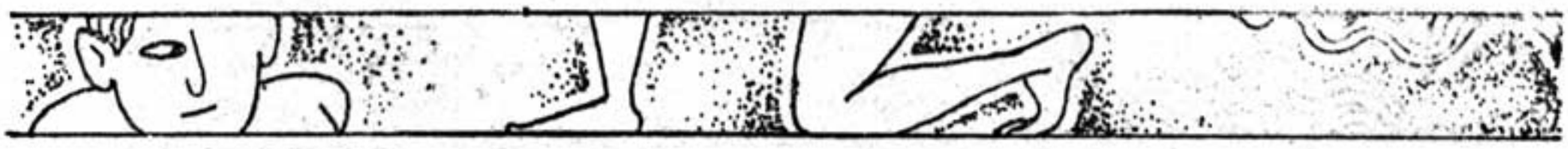
未婚の女の子と見れば片っ端しから、求愛するんだから、気にしなさんな、と云うと、キョトンとしていたが、

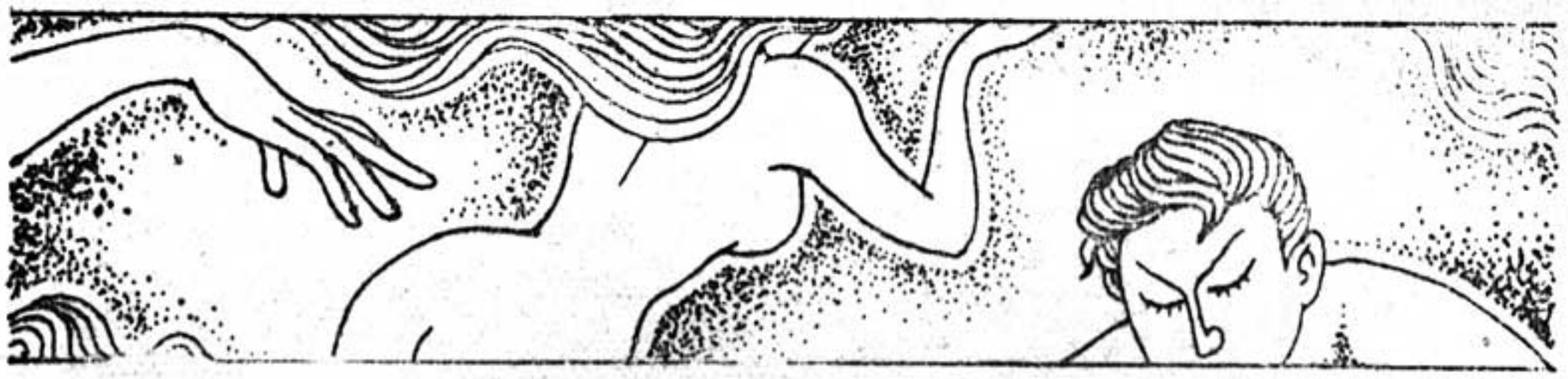
「そうですか――」

と落胆したように去っていった。一目で惚れられてラヴレターを貰い、娘らしくやはりそこは嬉しかったのだろうが、そうとわかれば相当自尊心がきずつけられたのだろう。

一時から二時半ごろまで、今の演し物の開幕まで、次回の稽古をする。三本立てで、初めは軽いエロチック・コント。二幕目が軽いお涙物の現代物か、やくざ物。その間に幹部級の新作舞踊というものが入り、ストリップのダンスを見せる。三本目が、エロ・グロの本番で、これでその時の興行の入りがきまる。

それが鏡山だから、男たちがブウブウ云った。しか





し凄い責め場が売り物だと云うと、一様にゴクリと唾を飲んで沈黙してしまった。

「八代さぎり」を抜擢した、と発表すると、さぎりの入団さえ知らない者があらかただったから大騒ぎになった。

しかし社長に代るワンマンの私の言うことだし、それに座長夫婦の姪だしするので玉か石かわからぬながら結局はみんな承知した。立派な劇団や映画会社ならともかく、ここには嫉妬や羨望などに馳られて意地悪などする人間はいない。みんな無知に近い善意な人間ばかりである。

一日目は脚本読み、二、三日は立稽古、四、五日が本稽古、そして初日を開ける。それも毎日、一二時間だけであるから凄い話である。八代さぎりの素質がなかなかよく、相当に使えるとわかって私もホッとした。

その五日の間、私は新聞社や芸能雑誌社に手を回し間に合うだけ「八代さぎり」の名を売って貰い、社長から金を出させて劇場の前に大きなさぎりの写真絵看板を出し、前景気を煽った。どれもこれも縛りのものばかりである。一方、タダフダを千枚ばかり作らせ、ドヤ街の者たちに配った。サクラにしたこの連中は初日から客に混って景気をつけてくれた。

初日——。

さすがに八代さぎりは蒼い顔をして興奮している。

「せんせい、責め場で気絶しちゃうことないでしょうか？」

「そこまでいきやァ、かえって効果百パーセントだね」

「いじわる——」

無邪気な媚びを見せて肩を押してくるのを抱きかかえ、唇を吸うと、胸をはずませてじっとしていた。顔を離すと、

「気絶しないための気付け薬だよ」

と私は云った。

鏡山の幕が開いて舞台を見た私は、

「あっ！」と云った。ガニの又一が腰元に化けて並んでいるのだ。芝居につれて立っては転び、坐ってはハナクソをほったりして、間合よく客を笑わせているのはよいが、私は次第に背筋が寒くなって来た。彼があの日、

「せんせい、あの娘を縛る役は俺にやらせてくれよナ」と云ったのをすっかり忘れていたからである。

「又の奴、舞台を壊さなきゃァいいが——」

私はいても立ってもいられなかった。

初めしのぶの尾上が剣沢弾正の前で、岩藤になった千太郎から草履で、さんざんに髪を打擲される。ここもオーバーにして女同士の物凄いサディズムを発揮させた。そして尾上を牢に入れて弾正が責め折檻、もちろんこんなのは本筋ではない。しかしこの浅草の客を

満足させるには充分だった。しのぶは充分に年増の魅力を発揮して、もだえ苦しみ、責め場の美しさを見せてくれた。

次の場面で屋上の文箱を持ったお初のさぎりが悪人一味に襲われ、闇の夜の常夜灯が一つある淋しい道で縛られ吊られる。

ああ、なんとその中の覆面の一人がガニ又だった。ガニ又はその時、覆面の首領になったのが、

「やい縄をかせい！」

「やいまだいま！」

とどなると、

「へーい、ただいま！」

答えて下手からずるずると引っ張って来たのが、夜目にも白い褌だった。

「ありゃァ――」

首領が脚本にないせりふを出すと、

「縄がみつからないので、おいら、じゃない拙者のので間に合わせようでは、ござらぬか」

シャアシャアと云って、お初のさぎりを縛り上げ、松の枝から吊り下げた。さぎりはその覆面の男が求愛して来た又一と知ると、肘鉄くらわした敵討ちをされるのだと思ったらしい。

真剣な悲鳴を挙げ、自前の髪で結った髷を振り乱して身もだえた。

「あれェー、許して許して……」

後手にくくられ宙に浮いた彼女の体を、ガニ又は折れ弓で、容赦なく叩いた。

「ヒィーッ！　ヒィーッ！」

豊満な女体は鞭のもとにピリピリ震え、乳房は喘ぎ丸い臀は前後に弾んだ。

私は固唾を飲んで見守った。監督の立場も忘れて酔い痴れた。

まさに予想以上の迫力が表現された。

黒髪が乱れて場内一ぱいに芳香を漂よわせ、豊満な娘の体臭と汗と涙が入り混ってむせ返るようだった。

晴雨画伯描くところの責め絵の活人画である。

観客はもう弥次一つ飛ばさなかった。新人女優八代さぎりの魅力を百パーセント見せつけられ、ガニの又一のふるう鞭をわが身に感じてぶるぶると体を打ち震わせているのだった。

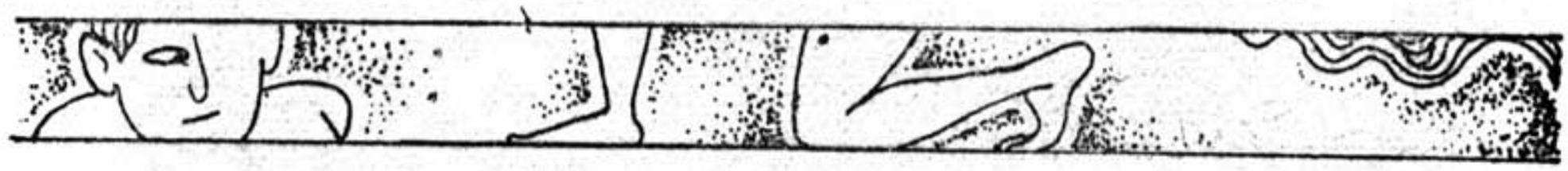
そのあと二枚目役の庵崎求女（いおざきもとめ）が馳けつけ覆面を追い払い、お初を助け降ろした時、完全にさぎりは気を失っていた。

私はぼんやりと、幕のあと担ぎ込まれて来たさぎりを見つめていた。

「せんせいよ。このあとどうなるんで？」

千太郎座長が黒の襠（うちかけ）の岩藤のまま私に云ったが、私はまだ興奮の冷めやらぬ顔を拭きながら、それに答えた。

「このままゆこう――」



六

当った。大当りになった。十日、二十日と鰻上りに客足がふえ、一ヵ月たっても客足が落ちなかった。大入り袋が北子社長自らの手で毎日渡され、その間八代さぎりと北子又一はすっかり大スターになってしまった。さぎりはよくがんばった。初めのうちは座長夫婦と私で、慰め励ましおどして勤めさせたのだが、そのうちにすっかり馴れてしまった。新聞社雑誌などのインタヴューに、私や、さぎり又一の三人はてんてこ舞いをさせられ、閑が少しもなくなった。

次の演し物も当分このような物でいけばよいので、千秋楽の日になるとみんなようやくホッとした。

その夜社長が向島の料亭へ座員一同を連れてゆき、大入り慰労会をしてくれた。

あくる日私は二日酔いのままで劇場入りしたのだがとたんに酔いが吹っ飛んでしまった。

座員たちもそうだったろう。

八代さぎりとガニの又一が腕を組んでさっそうと劇場入りして来たのである。

「お、おいおい……」

「ど、どうしたんだい？」

「さぎりちゃん、お、おめえさん……」

満足に口のきける者は一人もいない。女の子たちは片隅にみんなひと固まりになって身を寄せ合い、目をまん丸くして、この二人を見つめていた。

若さと清純さと、そして一躍芸能界に彗星の如く喧伝されて将来を約束された美貌女優八代さぎりと、北子興業社長の御曹子の組合せは、一般的に見たらそれは似合いかも知れない。祝福もされるだろう——。

だが、その二人をよく識る劇場内の私たちにしてみたら、いくら現実のことを目の当りに見ても半信半疑から抜け切れなかった。

私なんかもっともそれがひどかった。しばらく口もきけずポカンとして、二人を見ているだけだった。第一にさぎりは又一のガニ股を軽蔑の目で見ていた。第二に誰れ彼れの差別なく求愛する彼を馬鹿にしていた。彼女自身その手ではなはだしい悔辱を受けている。第三、彼女は彼の容貌を決して美男子に見ていない。三枚目として感じていたはずだ。第四、最も彼の欠点としての肌着フェティシズムを彼女がすでに知っていたことだ。わずか一ヵ月の間に、彼女はブラジャー、シュミーズ、パンテイーなど十枚近く盗まれている。その度ごとに私は彼女から抗議を申し込まれたものだ。

それなのに、二人は私の前に来てペコンと頭をさげると、

「せんせい、すみません。二人は結婚します」

とは、何たることであろう。

「おれたち結婚しても役者は止めません」

「このお詫びに一そうあたしたち、劇団のために一生懸命働かせていただきます」

ええ！　勝手にしろッ！

私は一ぺんに今朝打った十本ばかりのクスリが切れてしまったのを意識した。

その夜、ともかくも私が主体となって開幕後の楽屋で、この二人の婚約祝宴を座員一同出席でしてやった。

散会後、二人は私にその礼を云いに来た。

私は酔った勢いで二人にからみ、鬱憤を晴らそうと、

「さぎりちゃん、こんなガニ股の男のどこがいいんだ？」

と聞いた。さぎりはポつと顔を赧らめてモジモジしているだけである。

「やい、ガニ、二人はいつできたんだ？」

「ゆんべです――」

「なにイ？　ゆうべ、昨晩か？」

「うん、ゆんべおれさぎりちゃんの家へ忍び込んだらちゃんおれが緊めている褌を見て好きんなったと云ったんだよ」

「褌を見てえ？」

「はい、そうなんです。変な話ですけど、この人、あたし非常にだらしのない人だと今まで思っていたのですけど、下着も肌着もきれいに洗ったサッパリしたのを着ているのを見て、あたしこういう人ならと一ぺんに気が変っちゃったのです。決して身分や財産を考えてじゃァないんです。それはわかってください、せんせい」

「うん、わかる――」私は唸るように肯定した。

「しかし、それと一しょにSとMの立場から求め合ったと云うことも僕には考えられるンだけどねえ」

二人は手を握り合ったまま、うつむいてコクリとうなずいた。私は微笑ましい気になって来た。そして心から二人に云ってきかせた。

「SもMも決して恥かしいことではない。人間の本能の発露だからね。しかし二人ともまだ若いンだ。充分軀に気をつけて愉しみ愛し合うンだね」

「せんせい、ありがとう――」

殊勝な態度で二人は楽屋から出てゆこうとしたが、又一だけひょいと戻って、

「せんせい、おれ考えたけど、まだ一つだけ知らないことがあるんだ。教えてくれよ」

「なんだね？」

「おれがサディシストで、さぎりちゃんがマゾシストだろう？」

「そうだね」

「するとだね、そのサディシストとマゾシストが責め合うのを、やらせたり、他人に見せたりして自分が愉しんでいるせんせいみたいのを、フロイド博士はなんと名づけているんだい？」

★歓楽と背徳の街に売られた肉の奴隷達！　血に染む大粒サファイアの謎は？

暗黒のシンガポール　売春奴隷街

血まみれのイヤリング

飯田豊吉
秋吉巒・画

ぼんやりと眼がひらく。まぶたが重い。眼の裏に、汚れた毒血が、たっぷりと溜っているようだ。

頭のシンが、ずきんずきんと痛む。

二日酔いである。臭い安酒をガブ飲みにした天罰。自業自得だ。

仕方がない。

おれは骸骨のようなベッドから起きあがると、部屋の隅までよろけて歩き、水道の蛇口から、思いきり水を飲んだ。

「うめえ！」

思わず声にでる。

ところで、いま何時だろう。おれはベッドに戻り、枕もとのサイド・テーブルにのせた腕時計をのぞいた。

十一時十分前——と、時計のそば

に、見馴れないものが置いてあるのに気がついた。イヤリング一つ。片っぽだけである。おれは、そいつをつまみあげた。親指の頭ほどもある大粒の青い石がはまっている。

（サファイヤだ……）

しかも、そのイヤリングには、ドス黒い血が、べっとりとついている。

（血まみれサファイヤ……だが、こんな高価なイヤリングが、しかも片っぽだけ、どうしておれの枕もとに？……）

ゆうべは深酒で、すっかり酔いつぶれてしまったが、なんの事件もおこさなかった筈である。

おれはまた、頭が痛くなった。頭を叩いてゆうべの記憶をたどった。

その時、階下で、スン親爺のダミ声が、おれを呼んだ。

「柳さん、電話だよ――」

おれのところに電話なんて、まったく珍らしい。

おれは暗い、せまい木の階段の途中から、危く落ちかけた。くそ！　しぶとい二日酔いめ！

おれはスン親爺の店の三階――いや、屋根裏の部屋の居候だ。

スン親爺は、この酒場の主であるが、また、このシンガポールの街はずれ、ケッペル海岸裏通りの淫売酒場だ。

おれの屋根裏部屋の小さな隙間窓からは、海をはさんで対岸のブラニ島が見え、錫の製煉工場の煙突が見える。

おれの職業は――つまり、スン親爺の店の用心棒というところだ。

「お早よう、柳さん。電話は女だぜ」

スン親爺が、黒豚のような顔で、ニヤリと笑った。

おれは受話器をとったが、その前にスン親爺にきいた。

「大至急、私の家に来て頂きたいの。あなたのお力を私に貸して下さい」

女は焦っている様子だ。

「あんた、でも、どうしておれの名前を知ってるんだい？」

おれだって、いつも誰かに狙われている身体だ。うかうかと女の誘いにのれるもんか。

「――腕っぷしの強い、シナとヒリッピンの混血児、ラリー・柳。あなたって、ある社会では、かなり有名ですわ――実は、私の娘が昨夜誰かに誘拐されたんです。娘はサファイヤのイヤリングをつけていました。濃い青色の大粒の石が入ったイヤリングです……」

サファイヤのイヤリングときいて、おれはドキリとしたが、次をうながした。

「――で、おれに何をしろっていうんだい」

「娘を探して、とり返して欲しいのです。お礼は五千ドル――」

女の声は真剣だ。おれは少し興味をそそられた。

「あ、ラリーさん。私、黄淑英といいます。実は、あなたにお願いしたいことがあるの。ぜひ、きいて下さい」

「黄淑英さん？……」

知らない名だ。

「お礼に五千ドル！」

おれは、うなった。大金である。

「すぐ私の家へ来て下さい。くわしいことはその時に――」

その五千ドルで、おれの決心はきまった。

おれは、心配げにおれの顔を見つめる、スン親爺にウィンクしながら、景気よく返事した。

「承知したよ、奥さん。あんたの住所を教えな」

誘拐犯人

三十分後――おれはシンガポールの市内から、二キロほど離れた郊外にある、黄淑英の邸を訪ねていた。

白いペンキ塗りの柵に囲まれた英国風の、まず、中流以上の構えだ。

「よく来てくれましたね。ラリー・柳さん……」

淑英の身体から、海狸香の強烈な匂いが発散している。三十を三つ四つ越した年頃か。黄色いシナ服に、ぴっちりと身を包んだ濃艶な年増である。

おれは、めまいがしそうになった。

「ほんとに五千ドルくれるんですかい？」

おれは、まずそれをきいた。五千ドルあれば、いい女が抱ける。うまい酒が飲める。

スン親爺からあてがわれる腐った女と、火のつきそうな臭い酒から、当分は逃れることができるというわけだ。

「ええ。――娘のバーバラを助けて下さればね……」

「バーバラ？」

おれはきき返した。淑英は明らかに中国人だ。その娘の名がバーバラ？

おれはその時、やっと、この女の素性を思いあたった。この中国女は、マレーではベスト・ファイブのゴム園経営者、英国人のジョゼフ・デンディコのメカケなのだ。

デンディコという英国人が、マレーに現われたのは十年前だ。マレーに来て一、二年のうちに、どういうわけか、大きなゴム園の経営者におさまっていた。

連れてきた女房に死に別れてからは、おもてむきはヤモメ暮しをしているが、裏へまわれば情婦の三、四人は囲っているという噂である。

淑英も、その一人に違いない。バーバラというのは、デンディコの一人娘で、たいへんな不良と聞いている。

だから、淑英とは実の親子ではないはずだ。

「――ええ。あなたもご存じかも知れませんが、バーバラは私がデンディコから預っている大事な娘です。バーバラが誘拐されたなんてことを主人に知られたら、私はどんな目にあうか……」

淑英の大きな愁いがちの瞳に、涙がうかんだ。

「せっかくの旦那を、しくじったら一大事というわけだな」

おれは無遠慮にきいてやった。

「……」

淑英は、素直にうなずいた。おれはこのお メカケさんに、単純に同情した。

「――で、誘拐した奴の心当りは？」

「わかりません。でも、バーバラを人質にして、主人から金をゆすり取ろうというのではないでしょうか。とすると……」

「うむ。……大体の見当はつくね。ケッペル街の裏通りあたりに巣喰っているヤクザどもさ。バーバラさんの特長は？」

「色がぬけるほど白く、金髪で、大きな二重

瞼です。十八才の美しい娘です。鼻のわきに小さなホクロがあります。それから、よく目立つ、親指の頭ほどもある大きなサファイヤのイヤリングをつけていました……」

「大きな、親指の頭ほどのサファイヤのついたイヤリング……」

十中の八、九は、今朝おれの枕もとにあったヤツだ。……しかし、おれはわざとそのことは黙っていた。

「これは、内金です……」

淑英は、おれに百ドルくれた。

「承知したよ、マダム。ところであんた、なぜ、このことを警察に届けないで、おれみたいな者に頼むんだね？」

「それはその……あなたのような方のほうがこういう事件には、お顔が広いだろうと思いまして……」

「毒をもって、毒にあたらせようってわけかい。こいつァいいや。ハハハ……」

おれは金をポケットにしまいながら、苦笑した。

（――さて、ところで、バーバラのイヤリングが、なぜ、おれの部屋にあったのか？）

ところが、淑英の邸を出たおれの背中に、早くも拳銃の先が、ピタリと押しつけられたのには、さすがのラリー・柳さんも、ちっとばかり、おどろいたね。

「手をあげな、ラリー。いま、この邸の中で何を話していたね？」

背中に一人。左右に二人。ぴったりと寄りそった。

おれは黙ってホールド・アップするより仕方がない。

「ふン。さすがのラリーも、まるで猫みたいに静かだね」

アメリカ映画によくでてくる、ジャック・パランスみたいな悪党ヅラをした英国人が、うすら笑いをうかべながら、おれの身体検査をした。くそ！　不良白人のくそ蠅共め！

おれの内ポケットのコルトは、パランス君のポケットに、むざむざと引越しだ。

「云っておくがな。デンディコの娘のことで妙な手だしをしやがると、命はねえぜ」

スクリーンそっくりの顔をして、パランス君は凄んだ。

「わかったよ」

おれは、おとなしくうなずいた。

三人は、おれを突き離すと、道路に置いてある自動車に乗りこもうとした。

おれは、帽子の下に隠しておいた小型拳銃ワルサーを、ゆっくりと抜きだして、銃口を三人の背中にむけた。

「待ちなよ、にいさんが手をあげる番だ」

三人は、ぎくりとして振り返り、アッと口をあけると、手をあげた。

「ピストルはな、なにも内ポケットと限っちゃいねえ。今度から帽子の中も気をつけなよ」

おれは三人の背広から、おれの分もあわせて、四挺の拳銃を取りあげた。
「にいさんがた、どこの身内だい？　教えてくれよ」
この問いに、素直に答えてくれる奴らでないことは、よくわかっている。
おれは三人の中で、兄貴分と睨んだパランス君の片耳を、ワルサーの弾丸で、遠慮なく吹きとばした。
「げえっ」
あとの二人も、青くなってふるえた。
「云います、云います。――黒蘭会の者で、へい……」
耳から流れでる血をおさえながら、パランス君が云った。
黒蘭会――やっぱり、そうか。イギリスの有力者デンディコの娘を誘拐するなんて、大それたマネをする奴らのうしろには、シンガポール一のヤクザの組織がついていたのだ。
「てめえら。なんで、おれを狙った？」
「この邸に出入りする怪しい奴が居たら、脅かしておけと、命令されているんで……」
「黒蘭会のボス、玄林白の命令か？」
「へえ。ま、そんなところで……」
その時、道路のむこうから、警察のパトロ

ール・カーが通りかかった。

（まずい！）

おれは、なにげなく、三人から離れた。

売春窟の女

その夜、おれはケッペル街の裏通り、あくどいネオンがきらめく路次から路次を渡り歩いていた。

マドロス相手のバー、キャバレー、売春、賭博場はもとより、阿片も吸わせる魔窟である。

まぶたを青く塗り、唇を赤くつきだした半裸の女が、世界各国から集ってくる荒くれ男を呼びこむ。嬌声、紫煙、脂粉、ビールの泡やウイスキーの匂い。ジャズがが鳴りたて、こっちでは喧嘩、嵐のように喧騒が渦巻く一劇である。

女の波をくぐりぬけたおれは、めざすバー〝ラッチャ〟のドアを押した。おれのカンにくるいがなければ、ここが黒蘭会の巣窟だ。バーを抜けて地下の階段へ、勝手知ったという顔でおりていく。

おりきったところにドアがあって、そこに寄りかかって煙草を吸っているのが、案の定昼間のバランス君だ。可哀想に、片耳をすっとばされて、顎から頭へぐるぐる巻きのホウタイをしている。

「やァ、昼間はすまなかったな。でも、そうやって立っているところをみると、傷はたいしたことはなさそうだね」

声をかけると、奴は泡を喰って姿をかくした。

ドアをあける。中は、むっとするほどのナマあたたかい、汚れた空気だ。

安タバコの煙りが、もうもうと電燈のまわりにおおいかぶさり、その下に、酔い痴れた白人、黒人、黄色人、混血児、国籍不明の男女、抱きあい、つかみあい、入り混っての乱痴気騒ぎである。

わめき、笑い、どなりながら、ヒッチャ・クッチャ・ダンスに狂いまわっている。

この騒ぎの渦へ一歩踏みこんだおれは、もううおれでなくなっていた。酒と女に溺れているキチガイの集団に取り巻かれ、たちまちそのひとかけらにされてしまった。

目的をもっての潜入には、うってつけだ。

おれは酔いどれ共の間をすりぬけて、奥の部屋のドアをあける。とたんに鼻をかすめた不快な匂いに、おれは胸がムカつき、吐き気をもよおした。野放図な生活をしているおれだが、こいつだけは、まだやっていない。

両側には長方形の広間があって、そこには二、三十の薄汚ないベッドが並んでいる。

そのどれにも、半裸の男女がゴロゴロと横たわっていた。

黄色い歯をムキだして、うっとりと眼をつぶっている男。褐色のヨダレを顔半面に滴らして眠っている中年の女。青ぶくれにふくれた若い女が、乳房をブルブルとふるわしながら、妖しい境地をさまよっている。

枕もとの小皿には、黒茶色にドロリと固まった液体が、不気味な煙りをたちのぼらせている。

いわずと知れた阿片だ。阿片の吸引窟だ。おれは顔をしかめながら、麻薬の部屋を通りぬけ、更に奥の部屋のドアをあけた。

想像どおり、そこにもこの世の地獄図が展開していた。

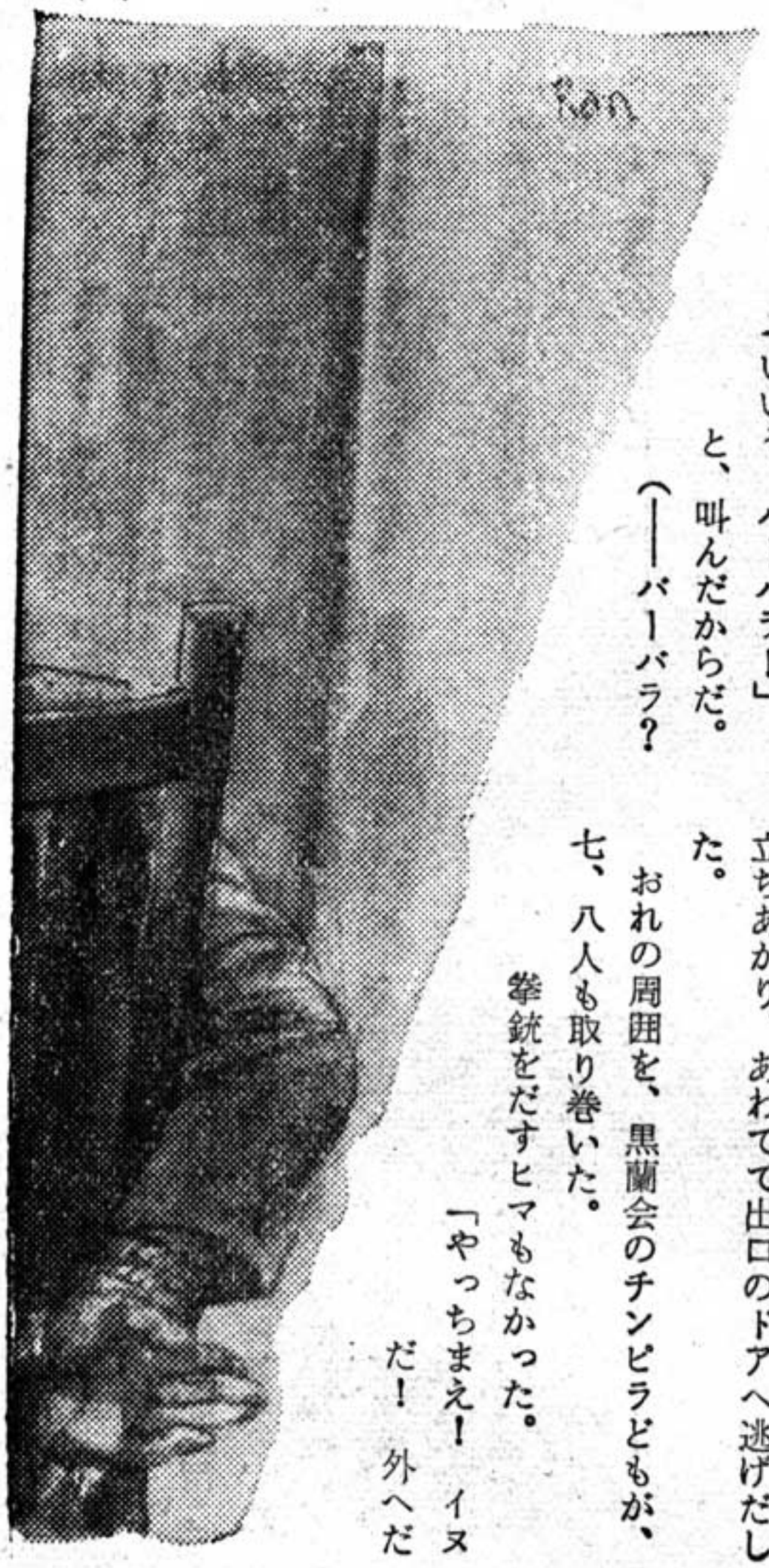
女の部屋、売春窟である。

ここにも、通路をはさんだ両側の広間に、ただカーテンに仕切られただけの小部屋が、ずらりと並び、そのベッドの上では、客と女のさまざまの痴戯が演じられていた。恥を忘れた、あさましい姿態が、ぎっしりと詰めこ

まれているのだ。
「いらっしゃい。私、今夜ヒマなの。お客になってよ。サービスするわ」
おれのそばに、一人の女が寄ってきた。たどたどしい英語だ。中国人でもない。マレー人でもない。インドシナあたりとも違う。なつかしい体臭が、その女にあった。
「お前は？」
おれの表情を察して、女は愛嬌笑いをみせて云った。
「日本人よ。日本ムスメよ」
「日本人！」
「そうよ。この部屋に居るのは、全部日本の女よ。可愛がってやってね」
白粉やけした女の表情に、ふとあどけない微笑がうかんだ。
「いつ、こっちへ来たんだ」
「私のお客になってくれれば、日本のおもしろいお話、たくさんしてあげるわ」
「よし！」
おれは、さっき淑英からもらったばかりの百ドルを、その日本ムスメの手に渡した。
「サンキュー。あんた、親切そうな人ね。あたい達はね、今年の春、アメリカ人にだまされて、ヨコハマから船に乗ったの。汚ない小さな貨物船よ。つらい旅だったわ。まるで、話にきいていた昔の奴隷船と同じよ。逃げ出そうとした娘も、ひどい仕置きにあうの。縛られて起重機に吊され、鞭で打たれたり、水をかけられたり、地獄の苦しみだったわ。あたい達は、沖縄のダンス・ホールで働く筈だったの。それが、沖縄を過ぎ、香港を過ぎ、とうとうこんなとこ ろまで連れてこられて、この有様よ……」
女の眼から、商売用の媚が消えていた。
「お前の名は？」
「サクラっていうの。よろしくね」
「そんな名じゃない。ほんとうの名だ」
「親がつけてくれた名は雪枝よ。柳村雪枝っていうの……」
「柳村雪枝……生れたのは、何県だい？」
「あんた、日本知ってるの？」
「うむ。昔、ちょっと住んだことがある」
「あら、なつかしいわね。あたいはね、茨城県の藤岡っていう小さな町で生れたのよ」
「藤岡――」
「知ってるの？」
「いや……」
おれは、その女の顔をじっと見つめた。
それから、赤いドレスの袖をまくった。
「なにするのさ」
その女の肩には、針で縫った五センチばかりの傷痕があった。

色情狂の娘

おれは、あやうく、この魔窟に忍びこんだ目的を忘れるところだった。
おれは、ラリー・柳に戻った。すがりつく雪枝をベッドに寝かせて、おれは更に秘密の奥室へと潜入した。
（あっ！……）
さすがのおれも、その光景には眼をみはって立ちすくんだ。
そこには、ひどく刺激的なショウが展開されているのだ。
全裸の白人娘がピンクのスポットを浴びて、くねくねと踊っている。
十人ほどの男の眼が、妖しく光ってそれを追っている。ライトに照らされた真ッ白な肌が、淫猥なポーズでかがみ、伸び、手足をくねらす。熱っぽい男の視線に、妖艶な媚をふりまきながら、腰をふり、乳房をゆすって踊りまくる。



何という妖しい肉体だ。濡れた唇で親しげな微笑を送り、キスを投げる。

部屋の隅に、ジー、ジーという音がして、カメラがまわっている。このショウは、どうやら、エロ・フィルムの製作も兼ねているらしい。

だが、おれがおどろいたのは、その白人の踊り子が、金髪だったからだ。色がぬけるほど白かったからだ。大きな魅惑的な二重瞼だったからだ。このまま、ホリウッドへもっていっても恥しくない美貌。そして、熱狂した観客の一人が、

「いいぞ、バーバラー」

と、叫んだからだ。

（――バーバラ？　誘拐された娘？……）

誘拐されたバーバラが、楽しげにエロ・ショウを演じている？……そんなバカな！

だが、おれは、もう一つ、デンディコの娘であるという証拠。鼻のわきの小さなホクロを確かめようとして、思わず二、三歩前にすすみでた。

この時のおれに、隙があった。

「怪しい奴が忍びこんでいるぞ！」

背後で誰かが叫んだ。

（しまった！）

サツの手入れと間違えた客は、いっせいに立ちあがり、あわてて出口のドアへ逃げだした。

おれの周囲を、黒蘭会のチンピラどもが、七、八人も取り巻いた。

拳銃をだすヒマもなかった。

「やっちまえ！　イヌだ！　外へだすな！」

前後左右から、奴らはバラバラと躍りかかってきた。

おれは電球を叩きこわした。まっくらになった。すかさず敵の一人がスポットでおれを照らす。

乱闘。われながら、よく闘った。おれは、五人を叩き伏せた。三人を投げとばした。しかし、奴らの数はふえるばかりだった。

おれは疲れた。

一人の男が、うしろから、おれの頭に頭丈な木の椅子をふりおろした。おれは避けるのが面倒くさかった。椅子は玩具のようにこわれ、おれも気を失った。

気がつくと、おれは暗い小部屋に転がされていた。後手に縛られている。

腕や足のふしぶしが痛い。頭からは血が流れているようだ。派手に格闘したもんだ。

だが、少し眠ったせいか、疲れがとれた。

おれは耳を澄ました。海が近いせいか、天井の小さな通風孔から、波の音が聞える。

ここは物置部屋らしい。ガラクタが積んである。

おれは、雪枝のことを思いだし、ひどく気

になった。

ドアがあいて、一人の女が入ってきた。

「あんた、勇敢ね。こんな怖しいところへ、一人でくるなんて」

さっきの踊り子だ。素肌にガウンをひっかけている。娘は、おれのそばにかがみこんで顔を寄せた。白粉くさい。娘の鼻のわきに、小さなホクロがあった。やっぱり、バーバラだ。大ゴム園の経営者、ジョセフ・デンディコの娘、バーバラに違いない。

「バーバラ。君が、どうしてこんな所に！」

おれは不自由な身体を、娘にむけた。

「あら、おどろいた。私の名前をどうして知っているの？」

「淑英に頼まれて、君を探しているんだ。君のパパだって、君が誘拐されたことを知れば心配するぜ」

「誘拐？　淑英が私を探しているって？　ハハハ……そんなことないわよ」

「え！　どうしてだ？」

「それより、私、あんたが気に入ったの。さっきの格闘凄かったわ。あんた、八人も投げとばしたわよ。あれ、ジュウドウね。たくましい胸毛。ふとい腕。バネみたいに強い腰。いつも濡れているような黒い瞳。ステキ！

私、あんたと寝たいわ！」

バーバラは、おれに身体をすり寄せる。その淫らな青い眼。媚びた姿態。瞳の底にチラうごく好色の光りは、普通ではない。明らかに、異常だ。

（くそ！　この娘は、色キチガイなんだ！）

おれは気味が悪くなって後ずさりした。

だが、今はこの娘を利用しなければならない。

「バーバラ。おれも君が好きだ。雪のように白い肌。盛りあがった乳房。くびれた胴。長い脚。とても十八才とは思えない。だが、こう縛られていちゃ、君を抱けないね。それにおれは、こんな暗い、湿っぽい部屋で君を抱くのはいやだ。やっぱり、やわらかいベッドの、白いシーツの上で愛したいよ」

われながら、そっとするほどの猫撫で声をだした。

「いいわ。私がその縄解いてあげるわ。そのかわり、私のいうことをきくのよ」

バーバラの赤い唇が、おれの顔じゅうに、ピチャピチャと鳴った。

（助けてくれェ！　ウス馬鹿の、色キチガイめ！……）

おれは胸の中で悲鳴をあげた。

だがおれは、この魔窟から、ともかく逃げだすチャンスをつかんだ。それどころか、バーバラを見つけだすことにだって成功したわけだ。ああ、五千ドル！……

バーバラの秘密

バーバラの手びきで、うまく秘密の階段から脱けだし、十分後には、おれは車の中におさまっていた。

バーバラの運転で、車は夜の海岸通りを突っ走っている。

（ウス馬鹿だが、運転は確かだ）

彼女は、ハナ唄をうたいながら、ハンドルを握っている。いま気がついたが、少し酒も飲んでいるようだ。

と——うしろに車の音が聞え、ふり返るまでもなく、おれは黒蘭会のヤクザどもに追われていることを知った。

おれがバーバラを連れて逃げだしたことに気がついて、追いかけてきたのだ。

「バーバラ。奴らが追跡してくるぜ」

おれは娘にささやいた。

「うるさいチンピラ達ね。パパに云いつけてやるから……」

パパに云いつけるだと？……おれはその言葉の意味を尋ねようとしたが、その余裕はなかった。追跡してくる車の窓から、ピストルの弾丸が、この車のタイヤを狙って、バンバン鳴りはじめたのだ。

「バーバラ。スピードをあげろ！」

「オーケー」

彼女は陽気だ。なにかの遊戯と間違えている。

五分後。おれたちは、どうやら敵をひきはなして、或るホテルにたどりついた。

そのホテルの、あまり上等でない二階の部屋に通されると、バーバラは飢えたようにおれの首ッ玉にかじりついた。

「まァ少し落着けよ。まだ完全に奴らから逃げきったというわけじゃないんだぜ。寝るのはもう少し様子を見てからだ」

おれもこの色キチガイには、少々ヘキエキした。ベッドに腰もおろさないうちから、ベタベタとまといつくのだ。

おれは、いきなりバーバラの両手をうしろにねじりあげて、パジャマの紐で一つに縛りあげた。ついでに足も縛って、ベッドの上にころがした。

「なにするの！　こんなに縛ってさ！」

バーバラは、わめいてあばれた。手に負えない。おれは部屋の中にある紐を総動員し、カーテンのロープまでひきちぎって、バーバラの大きな身体を、がんじがらめにベッドにくくりつけた。

これで、やっとおとなしくなった。

「どうして、こんなに縛りつけるのよ。私はあんたを助けた恩人よ！」

バーバラは、口惜しげに叫んだ。

「きたいことがあるんだ。おれの聞くことに、素直に答えてくれたら、すぐに紐を解いて、可愛がってやる」

おれは、やさしい声で云った。

「なによ。きたいことって」

「君は、いつからあのガイと組んでいるんだ？」

「半年前からよ」

「ゆうべ、あそこに誘拐されたんじゃないんだな」

「誘拐？　なんのこと？　私、好きでショウをやってるのよ。私のヌードをみて、ヨダレを垂らす男どもの顔を眺めるのは、とても楽しいことだわ」

「君は、バーバラじゃないのか？　大ゴム園の経営者、大金持のデンディコの一人娘じゃないのか！」

「バーバラよ。デンディコは私のパパよ。でも、私のパパは、あなたみたいに私の自由を束縛しないわ」

娘はケロリとして答えた。本当にウス馬鹿なのか。それとも、手に負えない不良少女なのか。おれのほうがホンロウされているのかも知れない。

（――だが、淑英は、なんのためにおれにウソをついたのだ。誘拐どころか、この色キチガイは、好きであの魔窟に居るんだ。淑英はどうしておれを？……それから、あのイヤリングは？……）

おれはバーバラの腕をつかんでゆすった。

「サファイヤのイヤリング？　持ってたわ。いのか」

「サファイヤのイヤリングは、君のものでないことは、きわめてまずいことらしい。

おれはライターをだし、火をつけた。

それを、バーバラの白い顎に近づけた。

「色キチガイのお嬢さん。お前のパパは、ゴム園のほかに、なにを経営してるんだ。早く云わねえと、このライターの火が、お前の顎を焼くぜ。顎を焼かれたヌード・ダンサーなんて、あんまり魅力がなさそうだな」

「ふうむ……。それからもう一つ。さっき君は車の中で〝うるさいチンピラたち、パパにいいつけてやるから〟と云ったな。あれはどういう意味だ」

「それは云えないわ。大事なことだわ。――それより、早く紐を解いてよ。肌に喰いこんで、息もできないほど苦しいわ」

「云え。君のパパと黒蘭会と、どういう関係があるんだ！」

「……」

バーバラは口をつぐんだ。固く口止めされているのだ。

おれは焦った。窓のカーテンの隙間から、下の街路を見おろすと、不穏な黒影が右に左にうごめいている。黒蘭会のヤクザどもが、このホテルをカンづいて、じりじりと包囲している気配だ。

奴らにとって、バーバラをおれに盗まれることは、きわめてまずいことらしい。

おれはライターをだし、火をつけた。

それを、バーバラの白い顎に近づけた。

「色キチガイのお嬢さん。お前のパパは、ゴム園のほかに、なにを経営してるんだ。早く云わねえと、このライターの火が、お前の顎を焼くぜ。顎を焼かれたヌード・ダンサーなんて、あんまり魅力がなさそうだな」

バーバラの青い瞳が、恐怖に大きくみひらいた。

しかし、強情に押し黙ったままだ。おしゃべりのウス馬鹿娘が、黙否権を使うほどの大事だ。

おれはライターの炎を、その顎の下へ持っていった。

「ひいッ！　熱ウ！」

娘は、すさまじい悲鳴をあげた。

おれはその小さな炎を、次に娘の白い耳に寄せた。耳のそばの髪の毛が、チリチリと燃えた。いやな匂いがした。

「ご自慢の金髪を、一本残らず焼いてやろうか」

おれは執拗に火を押しつけた。

「ひいッ！　云うわ！　云うわよ！」

「早く云え！」

「パパは、黒蘭会のボスよ」

「黒蘭会のボスは、シナ人の玄林白ときいているが……」

「玄の上がパパよ。玄はパパに使われている男よ。パパが一番のボスよ」

「富豪の英国神士が、ヤクザの親分だったのか。くそ！」

「私だって本当はパパの云いつけで、あそこで踊ってるのよ。私の踊りをみるには、たかいお金がいるのよ。ずいぶんパパを儲けさせてやったわ。親孝行な娘でしょ」

「たいした野郎だ！」

「パパはお金儲けが上手よ。お金のことなら何でもするわ」

「日本の女を多勢仕入れて、売春させているのもデンディコだな！」

「あの女たちは、パパが日本から買った奴隷よ。あの女奴隷たちに客をとらせるのが、一番儲かるってパパが云うわ。この頃、ゴム園はとても景気が悪いの。でも、黄色い人間の売り買いで、だいぶ持ちなおしたらしいわ」

「くそ！」おれはバーバラの横っつらを、思いっきりひっぱたいた。

おれは警察に電話した。

すぐ大騒ぎがはじまるから、早くこのホテルにくるように云った。

バーバラがおれのそばに居るので、むやみにピストルの弾丸をくらわなかったのが、お

れの幸いだった。
デンディコの子分たちと大乱闘の真最中に警官隊が馳けつけた。
ヤクザどもと一緒におれも逮捕された。

おさらばラリー

黒蘭会の組織の全貌が、明るみにでた。
ボスはやはりデンディコであった。
彼のゴム園が二年ほど前からひどい不況に経営が困難になった。そこで暗黒街の権利を手中にして、麻薬、賭博、売春の荒稼ぎをはじめた。
日本の女を大量に買いこみ、性の奴隷として酷使することが、彼の利益の大半を占めていた。
デンディコは逮捕され、やがて重刑に処せられるだろう。
日本の女たちは、本国へ送還されることになった。うれしいことだ。
おれの罪は、女の顎と耳に放火をしたことだけである。
事件の日から半月後、取り調べが終って、やっと警察の門をでたおれは、その足ですぐ淑英の邸に行った。
今度の事件で、淑英も参考人として警察へひっぱられたが、彼女は二、三日で家に帰された。淑英には、なんの罪もない。
「――おれを血まみれのイヤリングで釣って電話をかけ、この邸へ呼び寄せたあげくに、黒蘭会の巣窟へむかわせた。その理由をききに来たんだ」
おれは、まだ黒い血がこびりついている片っぽのイヤリングを掌にのせて、淑英に云った。
「ごめんなさい。でも、そのおかげで、デン

ディコの悪事をあばいたあなたは、警察で立派な表彰状と賞金をもらったわ」

淑英は、大きな黒い瞳をうるませて微笑した。

「あんたからも五千ドルもらうぜ。バーバラを確かに見つけだしたんだからな」

「あげますとも。このサファイヤのイヤリングも、両方そろえて贈呈しますわ。私の父の仇を討ってくれたおれいに……」

「あんたの、親父さんの仇？……」

「十年前、私の父は半島の南部で大きなゴム園を経営していたんです。ところが、或る日突然流れこんできたイギリス人にだまされて父はゴム園を奪われ、私はそいつに身体を奪われ……」

「わかった。そのイギリス人がデンディコというわけだな。やれやれ……。スン親爺とあんたの関係は？」

「そうです。それから私は、彼のために自殺した父の復讐を誓って、屈従の日を生きてきました。幾度か政庁に訴えましたが、イギリスの官憲は、しょせんイギリス人の味方でした。私の訴えはとりいれられず、口惜しい月日を送りました……」

暗黒街におけるデンディコの悪事の秘密をやっと最近になってつかんだ淑英は、おれを使って一騒動企んだわけだ。おれは淑英の期待どおりにデンディコ一味をひっかきまわして警察へ送りこんだという次第。

「なぜ、おれを選んだんだい？」

おれは、少々ムカッ腹をたてて云った。

「スン親爺が、いつもあなたの噂をしていました」

「スン親爺が？」

おれはあっけにとられた。

「あなたは、もと日本軍の憲兵少尉。戦争が終っても、戦犯になるのがシャクで日本へ帰らない。華北の混血児に化けて、スン親爺の用心棒になっているが、正義感の強い、熱血のお人ときいて、いつかお力にすがろうと心にかけていたのです」

「熱血の人――つまり、オッチョコチョイというわけだな。やれやれ……。スン親爺とあんたの関係は？」

「昔、父のゴム園に居た雇人です。父からうけた恩を忘れずに、いつも私の力になってくれました……」

「それじゃ、この血まみれのイヤリングを、おれの枕もとにのせておいたのは、スン親爺だな。豚か鶏の血をもっともらしく塗りつけやがって！　くそ！　あのトボケ親爺め！」

おれは淑英と顔を見あわせ、大声で笑った。

それから十日後――

おれは、おれの妹と共に、ケッペル新港から、日本の神戸行きの白い船にのっていた。

おれの妹――あの、デンディコの売春窟にいた柳村雪枝だ。おれは、この妹のために、ラリー・柳とおさらばして、一度は捨てた日本に帰る決心をしたのだ。

妹のことは、なにも書くまい。書きたくない。

おれは、この妹の兄としてこれからを生きる。可哀想な妹の、地獄の記憶を、必ず忘れさせてやる。勇気をつけてやる。

波止場では、淑英とスン親爺が、手をふって見送っている。

おれのポケットには、淑英からもらった五千ドルと、サファイヤのイヤリングが入っている。

さようなら淑英！　さようならスン親爺！

手をふり続ける二人の姿が、波止場の端に次第に小さくなっていた。

その時、ふいに、おれの胸に、東洋人に対する白人の横暴な支配を憎む気持が、なぜか激しく甦ったのである。

本誌新年号は御要望にこたえ

裏窓忠臣蔵

特集

をお贈りいたします!!

泰平の夢破る元禄の壮挙をがらりと角度を変えて神ならぬ身の義士達の
心・愛欲・殉虐の葛藤にせめぐ姿を裏窓から描き出した力作揃いです!
愛執に殉じて悔いなき影の女、義央をあえて死に追った内部の動き、天野屋利兵衛が男でなかったら? 松平登之介の絵図面を巡る暗闘等々、秘められた物語を掘り起し創造した妖しい忠臣蔵は必ず御満足をいただける本誌独自の大特集です!
ぜひ御一読ください!

島本春雄　円城寺達
飯田豊吉　都築道夫
小田桐爽　葉田光
黒木忍　矢桐重八
岩堀光　中林節三

◆次号裏窓忠臣蔵を御期待下さい!!

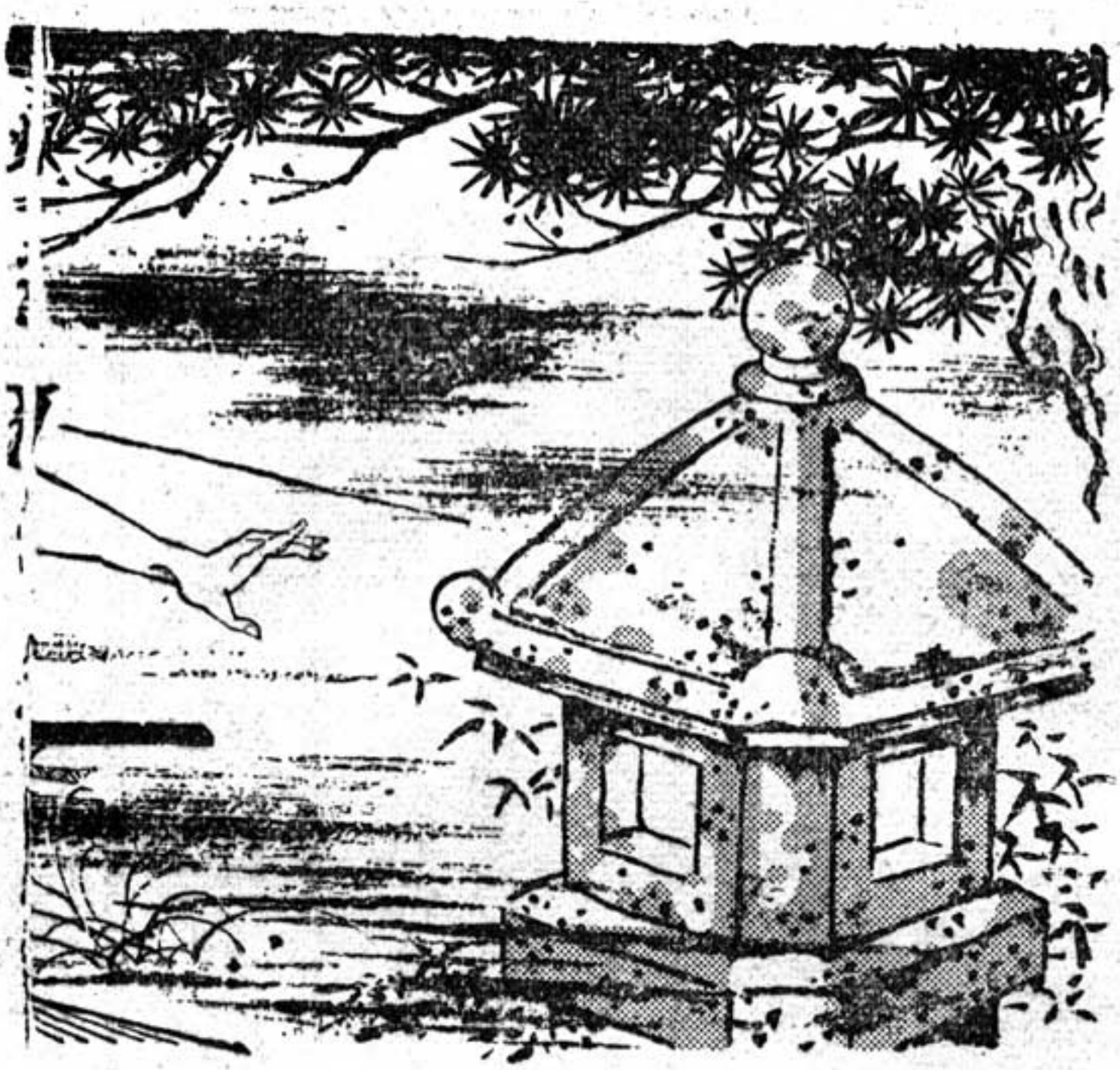
《十一月二十三日発売予定》

幕末異聞

悲願八丁堀

★封建の世に忌み憚られる氏を秘して異例の出世街道を行く男の悲願成るや成らずや？

橋爪彦七　古正英生・画



果し状

弘道館取締渡辺源兵衛は、青い顔をして下城してくると、一と間にこもって考えこんでいた。

様子をうかがっていた伜の源三郎が、

「ご免――」

と、襖を開けて入ると、源兵衛の近くに坐って、

「父上、お顔もともすぐれず、いかがなされました？」

「さればじゃ、父は、ほとほと徳の薄いを嘆いておるのだ」

「――と、仰せられますと？」

「この度の増年貢の一件、このままでは、どう考えても百姓が可哀そうでの、強って論争いたしたが徒労だった」

「父上の御説は通りませぬか？」

「うむ。何せい相手は郡奉行の半田与左衛門、横目の伊山平蔵、中小姓武富主馬の三名、奸曲の上に半田は御部屋様の兄じゃ。儂一人がどう叫んでも歯がたたぬ」

「では、その三名を斬っておしまいになれば？」

「は、は、は……斬るか。しかしそれは暴挙じゃ、いや匹夫の勇にも等しい。父祖代々、儒家として立つ儂は、あくまでも説くが、一刀に物を云わせる——それは避けたい」

「……？」

「また、こちらが、いかほど理前のある申し条にもせよ、一旦の憤りにまかせて相手を殺害に及ぶなどは愚じゃ。短慮功を成さず、よいかの」

「はい」

源三郎、父の前に、頭を下げはしたが、自分の部屋に戻ると、どうも歯痒くてならぬ。

（なぜだ？）

と、むやみに腹がたつ。

史に残るほどの天保の大飢饉の後、全国的とも云える百姓——農民の困憊した姿が、あありあり見えているのに、郡奉行や横目などの献策で、年貢を増すというのだ。まことに乱暴な沙汰であるのに、正面から反対しているのは、父の源兵衛がただ一人だというのである。

誰も、ぬきん出て、父の味方になり、奸曲三人を向うにまわして闘おうとしない。それに、困るのは、平素あまりに厳格すぎる父の

性質が、ただ、廉潔というだけで党をもたぬことだった。しかも学者――儒家である。よくある話で、孤立の立場に置かれることが多い。

（しかし、それはそれ、これはこれだ）

源三郎は、かッかと頭が熱してくるのだった。

いま、飢餓線上に喘いでいる百姓を、さらに絞ろうとする三名の説と、領民を庇う父源兵衛の説と――問題は、新羅三郎義光以来、連綿とつたわる秋田の領主佐竹本藩二十万余石の家名に疵がつくかどうかーーということである。

（もし百姓が強訴でも起したら、三名の罪とだけでは済まされまい！）

佐竹の藩中に人はないのか！　重役たちはもうろくしたのか！

だが、父は、敗れて下城したのだ。

（そうだとすると……）

源三郎は、暮夜ひそかに筆をとって、郡奉行半田与左衛門以下に果し状をつけたのである。

慈父のなさけ

夜が、ほのぼのと明ける久保田城外八幡神社の社頭――一騎、二騎、三騎、さすがに名を惜しむ半田たちが、果し合の場所に来るとまだ部屋住みの渡辺源三郎ただ一人、常夜燈の蔭からぬッと出て、

「お待ち申しました」

辞はおだやかだが、相手三人と刃を交えようとする意気。こちらは半田与左衛門、伊山平蔵、武富主馬の三名、ひらりひらりと馬背から降りると、

「殊勝じゃの」

と、主馬が言葉をかけた。平蔵が、

「意趣は、われわれ三名が、父を讒謗したとか、陥構いたらざるなしとか、都合のよいことが認めてあったの」

源三郎が、

「覚えござろう」

と、一と足前に出た。

「問答無用！」

与左衛門の一喝、同時に抜いた。

「このたびの仕儀、いまさら咎めだてなど致さぬが、追放とあれば、帰参の叶う日まで、親子の相見えるの機とてあるまい。いずこにあるとも便りを欠かさぬよう、それにつき、そちに申し聞けることがある」

と、鮫鞘造りの刀と、高蒔絵の印籠とを源三郎の前に置いて、

「おのれッ」

と、大上段の平蔵、拝み打ちに斬りおろすのをかわして空を斬らせた源三郎、捨身に一一閃、弧を描いた剣が、あざやかに相手の胴を咬む。

返す一刀――

「奸物ッ」

と、主馬の真ッ向へ、あまりにも凄惨な唐竹割りだった。

源三郎、このとき二十歳、意趣あっての果し合に、藩の法則は死んだ三人は武芸未熟の廉で家名断絶、源三郎は追放の処分ときまった。

父の源兵衛、源三郎を立退かせるとき、

「えい！」

みごと袈裟掛け、与左衛門、一瞬、爪先立って一刀を――だがその一刀を、ぼろ――と落すと、崩れるように倒れてしまった。

これを眼前に見た二人、はッと呼吸をうちへ引くように瞠目したが、

「さて、改めてこの二た品を遣わす」
「ありがとう存じます」
「しかし、餞にと云うのではない。実は――」
と、源兵衛の語るのを聞くと、源三郎は棄子だったというのである。
真実か!?
と、烈しい動揺に、こころの支柱をまで失いかける源三郎に、源兵衛は、じゅんじゅんと説ききかせた。
それは十八年の昔だった。
南枝の梅はほころびても、北国の春まだ浅い頃――一と夜、秋田の城下町のほとりにある毘沙門天の祠の杜に、突然、火のつくように泣く赤ン坊の泣声が聞こえた。通りかかった源兵衛が、近づいてみると、夜寒の風を防ごうとてか絹の綿入をまとわせて、色白の児が行李に入れて捨てられてある。そして、いま、目の前にある二た品と、金子が百両、養育の資にとしるして添えてあった。
子のない源兵衛は、
「これぞ毘沙門天の授けたもうところ――」
と、金子百両は、毘沙門天の堂宇修覆の代に当て、棄子はすぐさま家に引取って慈しみ育てた。幼にして穎悟――で、育つにしたがって鋭いほどな知性の光り、儒家ではあるが武道にも励ます。ことに剣の道は当人の好むところと見えて、十七の春には北辰一刀流で免許の腕――前髪立ちの少年として、よほどできたに相違ない、これが、現在の源三郎である――
「相わかったか」
と、語を切った源兵衛は、さらに、越し方の苦心――ことに妻を失ってから、男親一人の手塩にかけて育てたことなど、さまざまに話した。
聴く源三郎は、自分の人生が、暗い棄子の境涯から、明るく開けて行っていたことをはじめて知った。最初、血の気の褪せたような顔にも、だんだん生色が甦ってきて、源兵衛に対する感謝が、涙となって、止め度なく、あとからあとからと続いた。
(知りませんでした父上! その鴻恩を――)
ひたと額を畳にすりつけて、嗚咽する彼の姿に源兵衛も涙して、
「もうよい、よいではないか、なんの、親子じゃ。そちの五体には、この源兵衛の血が、息吹が、完全に通うておる。ははは、笑うて立て。さ、ここに百両金ある、これを路銀に、尽きたらば知らせてよこせ、なんどきでも金飛脚を仕立てようほどに」
「は、はい……」
と、源三郎は、切々、かわらぬ慈父の温情に、なお泣いた。

唸る大助

源三郎、ここにはじめて自分のおいたちを知り、源兵衛の父性の愛を噛みしめながら国を出る――
日を経て、さしかかる越後路――海岸沿いの村上という町、内藤紀伊守五万九十余石の城下、宿をとったのが本町の菊屋という旅籠、主人吉兵衛はじめ奉公人たちの客あしらいが気に入って、源三郎、いそがぬ旅、二三日が四五日となるうち、旅籠の一人娘おあさと割なき仲になってしまった。
こうなると青年武士の源三郎、はじめての恋の陶酔、香わしい女の肌の魅力に、溺れるともなく、すっかり腰をおちつけてしまった。
吉兵衛が、女房のおたみに、
「お前、どう思う?」
「どうッて?」
「離屋に逗留の若いお武家、なんだかおあさが変ではないか」
「それそれ、それですの。わたしもね、おあ

さの様子がおかしいので、聞きただそうかと思っているのですが」
「もうおそい」
「え？」
「手おくれだということ。私は、出来ていると睨んだ」
「……でしょうかしら？」
「これ、他人ごとではありませんぞ、もし娘に変なことでもあられたらどうしなさる？」
「そうつきつめておっしゃられましても…」
「いや、こんなことは早いうちに何とかせぬと——おたみ、どうだろ、二人をいっしょにしては？」
「でも相手はお武家様、旅籠風情の聟養子になど……」
「そこを一番、私が落城させてみせますよ」
と、一日、吉兵衛が源三郎の部屋に来て、
「時に——」が、源三郎と、この話をきり出した。——にとっては、この恋と、自分の将来とを天秤にかけて、どうも菊屋の若主人となることが惜しまれた。
「いずれ——」
とかなんとかごまかすうち、また四五日が夢の間に過ぎる。すると、この菊屋へ遊びに来る囲碁の客で浪人の原重右衛門という武家ある日、友人の軍書読みをやっている篠原大助という人物を連れてきたが、大助、吉兵衛の部屋に通って、ふと眼をやる床の間——
「御主人、あの刀架の一刀は？」
きくと吉兵衛が、
「あれは離屋に御滞在のお客様からお預りの品でございます」
「はて、さいぜんちらとお見受けした若い御仁？」
「はい。あちら様の御所持のもので——」
「拝見を」
「さあ、一応申しあげませぬと——」
「いや、ちと仔細が」
篠原大助、吉兵衛の言葉など耳に入れず、つかつかと行って取りあげる鮫鞘、すらりと鞘を払うと一点曇りのない刀身、見事とかなんとか云うかと思うと、大助、うむ……と唸りだした。

火の抱擁

「姿といい、地肌の青く澄む工合といい、刀身は山城住信国の作、御主人、これは拙者の刀だ」
「えッ？」
「ただ今は、むろん拙者のものではないが、わけはこうです。元来、拙者放蕩者でしてな ア、若い頃に家を飛び出したのですが、そのとき持ち出した家宝が、この信国の一刀と印籠でした。米沢在の紫村という穢多村で博奕にふけったあまり無一文となり、負い目に継ぐ負い目で進退に窮し、とうとう穢多頭の藤太夫に所持の二た品を二百両で買取って貰った。一時しのぎの無分別と云えば無分別、両三年後に再びおとずれ、藤太夫にあの品をーと買い戻そうとしたが、ないという、しかも、そのころ赤ン坊だった一子とともに紛失。赤ン坊の紛失も変だが神隠しとか申しており ました。いや、どうも前後の話といい、穢多頭の藤太夫がわが子可愛さから、神隠しなど と欺いて二た品を添えて武家方へでも遣わしたものと考え、余儀なく断念いたしたが、そうとすれば、あの客人の年恰好といい、あれかも知れませんぞ」
は藤太夫の伜かも知れぬ——穢多の……」
「そ、それでは穢多の……」
「左様、どうやら御養子にとのお噂も洩れ聞くが、もし藤太夫の血筋とすれば、畳の上に置くことさえ、この家の汚れではござらぬかな」
大助、冷やかな笑いさえうかべてきた。

驚いたのは吉兵衛で、気も顛倒するばかりにあわてたが、この話を偸み聞きした娘のおあさが、心の臓まで真ッ蒼にした。

夜ふけて源三郎の部屋に忍ぶと、

「もし源三郎さま……」

と、昼間の話を残らず告げた。見る見る顔色を変えた源三郎が、

「な、な、なにッ、拙者が穢多のッ!?」

と、のけ反るばかり愕然となる。国を出るとき、自分は棄子だとは聞かされたが、海山の恩を受けた養い父の源兵衛も、まさか自分を穢多の子と知っていなかったであろう——

闇だ！

源三郎は、自分の前途が、急に真ッ暗になった思いだった。

非人、乞食ならばまだしものこと、人交わりをさえゆるされぬ部落の民！

ああ穢多族！

不覚の涙が、ほろほろと頬に伝う。どこを見るともなく空間に瞳を吸いつけた美男の眦が朱を裂いて、ぎりぎりと噛む奥歯の音が、まるで骨の髄でも咬むおそろしさだ。

——が、おあさは、鬼面にも変じそうな源三郎に取りすがって、

「いいえ、いいえ——たとえあなたが穢多であろうとなんであろうと、いったん契りをかわした仲、どうぞ見捨てて下さりまするな」

と、ひしと寄り添って慕情をうったえる眼が、心が——全身が、源三郎の胸に痛いほどだった。

そこにはもう、若い男女の火のような喘ぎと、やがて、むせかえるような抱擁よりないのだった。

漂う血の香

次の夜である。

人目をはばかるような源三郎が、篠原大助の住居を訪れた。

「承りますと私の身の上を御存じの由、くわ

しくお聞かせ下さいませんか」
かすかに語尾を顫わせながら頼むと、立ちはだかったままで大助が、
「たわけ！」
「……」
「穢多に身の上など烏滸のかぎりだ、人がましく敷居を跨ぎおって——土下座をせぬか、こらッ」
罵られたが、源三郎はこらえた。
「私が、まこと藤太夫とやらの子でございますならば、一と廉の武士と相成り、それほどの親の望みも叶えたく、また一つには報恩——」
云いつづけるのを、
「うるさいッ、穢多の分際で武士に成ろうなどと、不埒とも何とも——こらッ、貴様がもしそのような料見で僭上至極な振舞をいたして見よ、見つけ次第に拙者が身元をあばいてくれるから」
「いえ、ゆめゆめ私の僭上な願いではございません、ただ、生みの親の今生の望み……」
「くどい！　穢多風情の愚痴を聞く耳はもたぬ、汚らわしいッ、退れッ！」
大助、いまにも足蹴にしそうなその様子を、じいッと睨みあげてきた源三郎が、
「頼まぬ！」
云い切るのと、抜打ったのと同時——大助口ほどにもなく、右肩から乳の下まで、左へ斜めに斬り下げられて、どうと倒れる。
源三郎、もうとたつ血の香を背に、素早く姿を消してしまった。そして、あらわれたのは原重右衛門の家——
（こいつを消して、身の素性を消して——だが菊屋夫婦……この二人は娘のおあさが慕っている以上、よもや口を割るまい……）
自問自答のところへ出てくる重右衛門、
「夜中に何か？」
と、いぶかるのへ、
「菊屋にて、篠原殿が急用とのこと、拙者にお迎え申して参れと——」
「左様か」
と、気のよい重右衛門が、仕度をして往来に出る。
折からの月——
源三郎、たった今、大助を斬って、ようやく胆が据る刻限、
「一命申し受ける！」
「な、なに？」
たじ……となる重右衛門へ、
「おぬしも拙者の素性を知る一人、気の毒ながら——」
と、身の護りに大助を討ち果した話をすると、重右衛門身に迫って感じる殺気に青くなって、
「そ、それは乱暴だ、拙者はなにも貴公の素性をあばこうなどとは申さん、証拠に、主従の縁を結んでもよろしいし、疑わしくばこの場において坊主になってもよろしい」
と、大地に膝をついてしまった。源三郎、とくと見て、
「二言はないな」
と、念を押して許した。これから重右衛門は源三郎の家来——ということになるのだが、菊屋に戻った源三郎は、おあさを呼んで事情をあかす。
「人一人を殺しておいて、安閑とここにはおられぬ——」
と、一緒に連れてというのを、後日かならず迎えに来るからと約して、重右衛門を伴って村上の城下を後にした。

堂々の上役人

重右衛門、途中、胸のうちで、
（なあに、穢多々々というが、穢多だって人間だ、渡辺源三郎、齢こそ若いが腕はたつし

立派な侍だ、それに金蔓が紫村――好い御主人じゃないか）

そう割切ったから、源三郎へは痒いところへ手のとどく世話――。

源三郎、すっかり気をよくして、江戸への旅――と思っていると、重右衛門が、

「ちょっと寄り道をいたします」

と、街道を外れ、米沢から二三里へだたったところへ宿をとると、紫村の藤太夫のもとへひそかに出した使者――

取るもの取りあえず馳けつけた藤太夫が、立派に成人した若侍姿の我が子を見て、思わずそこに泣き伏した。

「御立派な！　御立派な！　御立派な！」

これが、祖先から永々と、迫害されつくして卑屈になった穢多の姿か！

ああ穢多と――武家と――

愛児を捨てて十幾年、悲しみ多かった春秋は、いま、藤太夫に無上の幸福をもたらしたのである。

だが、藤太夫は、源三郎に云った。

「見事にお見上げ申します。しかし、藤太夫の子だと知れたなら、それきりあなたの御運が消える。まちがっても、渡辺様の御子息という衣をお脱ぎなさるな。万一、御不自由があれば内々でお知らせなされ、この藤太夫の身代は、そっくりあなたの物と思召して」

幾度も、くりかえしながら、はなむけに出す二千両を、源三郎も泣いて受けた。

もうそれからは一路江戸へ――

源三郎主従、馬喰町に宿をとって金にまかせての滞在――だが、重右衛門は考えた。

「いくら金蔓があるにせよ、座して喰えば――

――というところまで漕ぎつけた。

「いかが？」

と、重右衛門が、小鼻をうごかす時分には――である、これは今のうち一と分別」

と、遠縁の親類で、上野の宮家の御用達をしている鈴木五郎右衛門の養子にと、彼をすすめた。

五郎右衛門、会って見て、たのもしそうな青年武士、文武の心得も充分と知って、源三郎を跡目にした。

源三郎、ここで鈴木姓となり、名も改めて藤吉郎と名乗った。

「うまくゆきましたな」と、いつくづく感激した源三郎の藤吉郎、

「鈴木藤吉郎、生涯の恩にきるぞ」

と、しっかり手を握る。重右衛門が、

「いや、お待ちなさい、仕事はこれからです」

と、劃策、奔走――養父五郎右衛門の手蔓を手繰って、とうとう八丁堀与力の株を買い取ることに成功した。

無論、町奉行池田播磨守の蔭の助力がものを云ってではあるが、例の幼にして穎悟の藤吉郎の知性、才気喚発が播磨守の気に入って、その口添えで、老中阿部伊勢守の信任を得るに至ったのである。

八丁堀に屋敷を賜って、原重右衛門が用人格、仲間、小者を召使う堂々の捕吏――云うところの上役人である。彼は、暇ある毎に、柳橋に、堀に、吉原に、おびただしい黄金を撒いて折花攀柳の豪奢に耽った。美男で、金離れがよくて、押の利く役柄――彼にはあまりに女性が自由すぎた。

ちょうどその頃のことである。

社会の一般から指弾される穢多が上役人とまで出世をした藤吉郎、金につまれば米沢の本町笹屋仁兵衛にまで手紙を送り、仁兵衛から紫村へ連絡させて、多くの金品を取寄せていたが、その巨資で、今戸に立派な別荘をいとなみ、村上の城下から、あの、おあさを呼びむかえたのであった。

「どうだおあさ――」

と、丸髷姿のよく似合うおあさにこう云うとき、藤吉郎、心の底には、

（見たか世間の奴等！）

と、不法の迫害に反撥する報復の冷笑がひそんでいたのである。

（虐げられた穢多族にも、俺のような人間も居るぞ！）

叫びあげたい気持なのである。それはよい。それはよいとしても、彼ほどの才物が、ただ豪快な酒食生活に、どうやら満足を覚えそめて、

（見ろ！）

と、ここでも報復的な冷笑をうかべているときに、ただ一つ、どうしても藤吉郎の気持に逆らうものがあった。

柳橋の小染！

これなのである。

「芸は売っても柳橋の小染は、からだまで売物にはいたしません――」

そうした気ッ風で、いくら役目を嵩にきても、いっこう靡いてこようとしない。かえって――

「なにさ、たかがお奉行所の不浄役人じゃないの」

凛とした、こうした張りが、小染の鼻先にぶらさがっている感じなのだ。

「よし、意地でも――」

と、藤吉郎は躍気となった。

金を積む――通いつづける、搦手からは小染の出入りする料亭から、無理にも――と、口説きたてさせる。

――が。小染は、きっぱりとことわりつづけた。

「それだ！」

と、藤吉郎は膝をたたいた。

「重右衛門、おぬし、その大内蔵の底の底まで洗ってくれんか、こればかりは、下役どもを働かす――そうもならぬでのう」

「いや、そのこと、そのこと、吉左右はこの重右衛門におまかせを」

と、それから数日、用人の原重右衛門、どこへ行ったか、影も形も見せなかった。

蛇身の歓喜

元来、寺方は寺社奉行の係り、ことに上野は寛永寺の御座主として、一品親王の御座、たいていのことは、凌雲院大僧正を以て取りまかなわれているが、何といっても法親王の御威光はたいしたもの――

重右衛門、うかと手出しのできぬぐらいはと、笑い流してはいるが、焼けるような焦燥がつづく。

ある日、重右衛門が、百も承知、だが、曹操における荀彧（しゅんいく）の智を以てほこる彼である。どこで、何をどう調べて

きたか、颯爽と姿を見せると、

「およろこび下さい、杉田大内蔵の咽喉笛はかく云う重右衛門がしかと押えました」

と、藤吉郎の前に、得意の胸を反らすのだった。そして、密々に講じられた策は、翌々日、養父五郎右衛門の手引きで、藤吉郎が、凌雲院大僧正に面謁——という段取りに行ったのである。

「——これは、余事でございますが、もしや宮様に手元金に御不審はござりませぬか、手前、かまえて、町方の役儀を以て申しあげるのではございませんが」

謎をふくめた彼の一言——宮様の御手元金の一条は、ひどく凌雲院大僧正をおどろかした。

すぐ、調べに役僧がうごく。するとあった！　帳簿の粗漏が——

宮様の手元金三千両不足の事実！

大内蔵は、寛永寺御本坊の秘庫をひらいて小染との遊興の資にしていたのである。

係の役僧が、恐懼して大僧正に処分方を伺うと、

「暇を取らせよ」

と、ただそれだけ、上野山内からは、断じて罪人は出さぬという肚なのである。

「畏りました」

と云ったが、役僧たちは、ただちに大内蔵の住居に封印をほどこして、大内蔵を山から追ってしまった。

こうまでなると、大内蔵に寺社方の眼が光るのは必定である。そうと知ると、彼は、最後の別れを小染と惜しみ、夜にまぎれて、江戸から消えてしまった。

後年、この大内蔵が悪事を働いて、とうとう獄門台に首をさらすことになるのだが、それは別の話——

一方。

「これでよし」

と、ほくそ笑んだのは藤吉郎、それからは手を替え品を替えて猛烈に、小染を口説き落しにかかったのである。

「あああ、仕方がないねえ、大内蔵さんにはすまないけれど……」

我を折って、とうとう小染がこう云い出すまでには、小判小粒が山と積まれたのであった。

弱き者よ——で、一度なびくと、小染の意志は、急坂をころがす石のように、藤吉郎の方へ傾いて行った。

新たに建てられた別荘の灯は、夜毎に紅く閨房の色を染めた。

「嫌いぬいたの——」

ちく——と、藤吉郎が触れると、

「あ、またそれを。もう云わないという約束じゃありませんか」

「ふ、ふ、どうだ、今の気持は？」

「口惜しいんですよう」

と、憎くなく睨む女の眼のなかへ、藤吉郎の魂が吸いこまれるかと怪しまれるまで。

「女殺し」

と、藤吉郎の首筋へ伸びる手が、に絡んでゆく。

謎の紫

町奉行池田播磨守が、

「はて？」

と、不審をうったのは、既仲間の幸吉が、いつも金廻りのよいという噂だった。

呑む、打つ、買う——三拍子そろっての道楽で、しかも金に詰らぬ？

（どこか後に金箱がある）

こう考えて、下僚にそれとなく調べさせると、それは今戸の伯父に無心をするのだとわかった。さらにその伯父の正体を衝くと、与力鈴木藤吉郎の用人原重右衛門とわかってきた。

与力と——奉行の馬丁と？

（何のつながり？）

と、もう一と詮議、いわくの穴を掘ってゆくと、幸吉の従兄弟が、藤吉郎の用人原重右衛門とわかってきた。

（何かある。それに鈴木の遊蕩にも、眼にあまるものがある——）

気づくと、さすがに眼のたかい奉行、腹心の公用人鵜飼要蔵に命じる藤吉郎の身元しらべ——

当時、府内での腕利きと称された目明し、茅場町の三河屋定吉が、ひそと要蔵に呼ばれて、

「三河屋、ひとつ手をかして貰いたいが？」

「へい、手前のような者でも、何かお役に立てさせていただけますか」

「一世一代だ」

「へ？」

「当役所の筆頭与力、鈴木藤吉郎の影を捉えてくれ」

「な、なんでございますッて、あの鈴木の旦那の影……そ、そんな御冗談を」

「いや、冗談でない。そちだから申すが、御奉行の沙汰だ。はっきり云う、鈴木の身元を洗ってみてくれ」

「へい——」

答えたが三河屋、目明し風情が八丁堀の身元を調べるなど、これは至難中の至難だ。

「よろしいか、そちを見込んで明かすのだ、ゆめ他言は相ならぬぞ」

云われると、三河屋は決心した。

「かしこまりました、しばらく日数をちょうだいいたします」

と、茅場町へ戻ったが、なあに、一つ間違えば御用道具をお納めするだけだ——と、思案をするとすがしい気持、だが、どこからいったい手をつけようかと、その翌日、考

えながら通りかかる瀬戸物町、飛脚問屋の山形屋の表に、ばかに大きな菰包みの荷が着いているのに眼が行った。

差出人を見ると、米沢町笹屋仁兵衛、宛名は八丁堀鈴木藤吉郎様とある。

(妙だわい……)

と、これが捕物師の勘というやつ。

「御免よ」

と、店に入って、職権で解く包装、中味は米沢紬と太織物の類で百七八十反、その中から、紫の老父より藤吉郎殿と認めた封書が一通、開こうとすると、

「あ、それは――」

と、山形屋も渡世の上での止めだてを、

「黙って――お上の御用だ」

と、展げると、自分も追々取る年だから、存命中にいま一度会いたい――という文面なのだ。

「はて紫……紫……と、紫という姓は無し」

考えた三河屋が、この紫の老父の謎を解くには、大した手数がかからなかった。

日が暮れてから――

南町奉行所の通用門をくぐった三河屋定吉は、公用人の要蔵に、人目を避けて会っていた。

「……と、いう次第で、書面はこれでございますが、どうもこいつは、かんばしくねえお話でござんして」

「いやいや、さっそくの調べ、敬服の至りじゃ。米沢在の紫村――それで紫の老父とある。肯綮に価するの、それに相違あるまい。紫村と申すは、収穫五百石とある別天地、鈴木の眼には、きら……と一滴、光るものがあった。

「当座の代に――」と、五百両を置くと、藤吉郎、飄然と出て行ってしまった。

富は、その村から流れておるに相違あるまい。よろし、追って沙汰をいたす、杯をかたむけた後、

「一盞――」と、妻のおあさの住む寮へ足を向けた彼は、

「あさ、達者で暮したいものと申したまでは口外いたさぬよう」

と、三河屋を帰すと、要蔵はすぐと播磨守に答申に及ぶ。

こちらは藤吉郎、今日、着荷した梱包が、変に崩れていた様子といい、必ず同送される老父からの手紙がない。山形屋へ行って、

「荷を解いた者があろう」

と、きめつけると、飛脚問屋の山形屋も、妻の姿が、次室に消えると、すぐ覚悟の服毒をした。彼は、しずかに、猛毒包みきれずに、三河屋定吉取調の一件をうちの五官を冒すのを待った。明けた。

そのまま山形屋を出た藤吉郎、慧敏無比の彼の頭脳、(確かにこれは手がまわった――)すぐその足で今戸の別荘、小染に会って、

「仔細あって暇をやる。いずれ――」

小染が、顔色を変えてつめ寄るのを、

「いや、落度があっての暇でない。ここでお前に暇をやらぬと、藤吉郎、どうやら愛想をつかされようも知れぬ。ま、ま、何も聞くな。去らるるお前より、去らす拙者の胸のうちは……千万無量とでも申すかの」

笑いにまぎらしては居るのだが、藤吉郎の眼には、きら……と一滴、光るものがあった。

吉郎、飄然と出て行ってしまった。

妻のおあさの住む寮へ足を向けた彼は、

「あさ、達者で暮したいものと申したまでは口外いたさぬよう」

と、三河屋を帰すと、要蔵はすぐと播磨守に答申に及ぶ。

こちらは藤吉郎、今日、着荷した梱包が、変に崩れていた様子といい、必ず同送される老父からの手紙がない。山形屋へ行って、

「荷を解いた者があろう」

と、きめつけると、飛脚問屋の山形屋も、妻の姿が、次室に消えると、すぐ覚悟の服毒をした。彼は、しずかに、猛毒の五官を冒すのを待った。

(父上、父……父上ッ、これで源三郎の藤吉郎が、武士として果てまする、長年御養育の海山の御恩……)

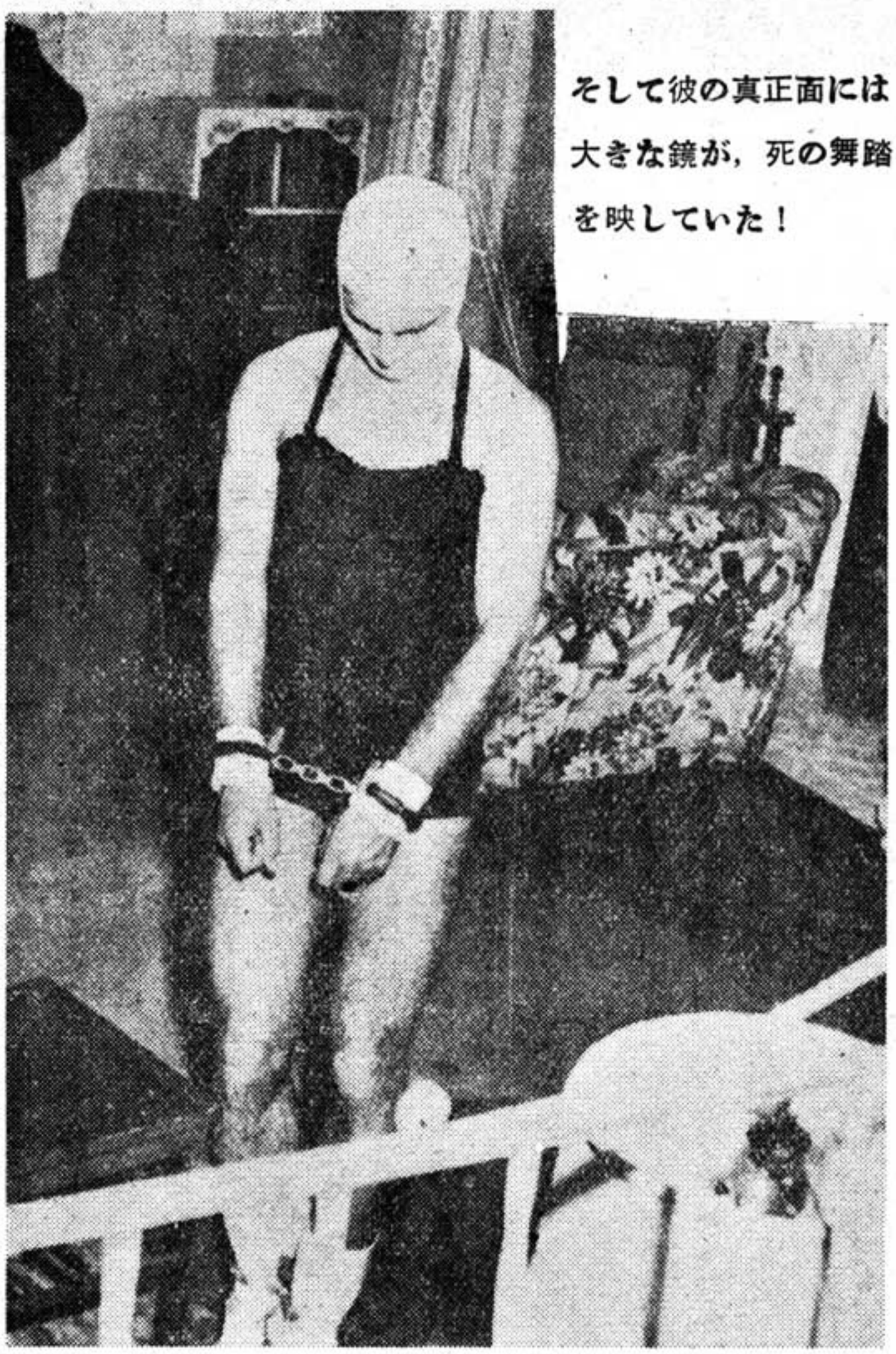
声なく、告げているとき、ここで、意識が混濁して、掻きむしるような痛苦が、藤吉郎の全身を締めつけてきた。

(おわり)

ロサンゼルス夜話

奇妙な自殺者たち

神戸裕



そして彼の真正面には大きな鏡が，死の舞踏を映していた！

一

気候のよいロサンゼルスにしては、珍らしく寒い夜だった。霧におおわれたハリウッドの丘に近い別荘風の建物に、黒と白に塗り分けたパトロールカーが停っていた。すっかり興奮した若い男が、家の中を指さしながら、早口に警官に向ってまくしたてている。すぐに二人の警官が家の中へ飛びこんで行った。

部屋のドアは、すでに大きく開け放たれていた。真中に、人間がひとりぼんやり突立っているのが見える。警官は足早に部屋へ踏みこんだ。

ひどく暗かった。電灯は一つもともされず灯りといえばすっかり短かくなった蠟燭が二本、突っ立った人間の両わきで燃えているだけだ。そして、突っ立っているように見えた人間の足は、宙に浮いていた。天井の太い梁からたれ下った長い鎖の先に、その人間はぶらさがっていたのだ。

それだけではなかった。死体の両手両足もそれぞれ鎖でしばられて、南京錠がしっかりとかけられている。実際、奇妙な光景だった。こんなことには馴れっこの警官たちでさえ、しばらくはぽかんと眺めていたほどだから。

死体は明らかに若い男だった。が、彼が身

につけているのは、美しい絹製の、女物の水着。顔は、鼻と空ろな眼だけを残して、巾の広いゴムベルトをぐるぐる巻きにしている。褐色の髪の毛は、やはり女物の水泳帽で覆われていた。さらに足には、婦人用のレインシューズをはいている。

警官たちは、死体の後ろに廻ってみた。死体の真正面に、壁にはめこまれた大きな鏡があって、この不思議な縦死体を映している。死体と鏡の間に、何か小さな物がぶらさがっていた。警官が近寄ってみると、どうやら手足の鎖をとめた南京錠のものらしい鍵が、細い糸でつり下げられているのだった。蠟燭の炎が揺れるたびに、部屋中の影が——鏡の中でも——ゆらりと揺れていた。

*

ロサンゼルスのような都会では、自殺など別に珍らしいことじゃない。交通事故と同じように、その多くは新聞にすら無視される。毎年、平均して七百人ばかりの男や女や、子供たちが自分から命を絶って行く。

でも、そんな自殺者たちは、たいていい彼らなりの理由を持っているものだ。ある十一才になる少年は、母親が映画に連れて行ってくれないというので、裏庭の木にロープをかけて首をくくったし、八十七才の老人が三十五才の未亡人と結婚して三週間目に前途を悲観して、手首を切ってしまったこともある。

それに、こうした自殺者たちのとる方法には、それほど突飛なものはありはしない。首をつったり、頭に拳銃弾をぶち込んだり、部屋を閉めきってガスの栓を開いたり——ある いは、水に飛び込んだり、睡眠薬をどっさり呑み込んだり、毒薬をあおったりするわけだ。

しかし鎖で首をくくった男は、ありきたりの自殺者たちとはまるで違っていた。彼の勤め先の少し後、やはりハ人たちは口をそろえて、彼がまったく健康な幸福な青年だったと語っていた。彼の友には、仲のいいガールフレンドもあったし、まして彼の過去には、性的な違法行為など、まったく記録されていなかった。

その上この自殺者は、自分の体になるたけ生傷がつかないように、細かい注意を払っていた。足首の鎖は、レインシューズの上にしっかりとめられていたし、手首と首にかかった鎖は、皮膚に触れる部分をプラスチックで包んであった。

彼に必要だったのは、おそらく死ぬことではなかったのだろう。手足の自由を奪われ、首がしまって、死が足早に近づいてくるのに、どうすることもできない苦痛——手足を解き放すための鍵が、すぐ眼の前にありながら取ることができない……。こうした苦しみが、正面の鏡に映る。二本の蠟燭に照らし出される死の舞踏——。彼に必要だったのは、きっと、鏡に映った不思議な映像だったのだろう。

このことがあってほんの少し後、やはりハリウッドのみすぼらしいホテルの一室で、同じような事件がおきた。自殺者は、顔だちの美しい若い技師で、二日前に結婚したばかりだった。

青年の身なりは、いっそう凝っていた。金髪のかつらをかぶり、黒いレースの肌着、黒

彼らは死を弄び、死と戯れ、陶酔しつつ最後の苦痛を最大の饗宴と味わうのだ！何かが狂っている。彼らを引き止める術はないのか？

のコルセット、それにフリルのついたペチコートをつけて、その上にタフタのドレスを着ていたし、足にはハイヒールまではいていた。先の自殺者と同様に、手足をしばった鎖を南京錠でとめて、その鍵を眼の前にぶらさげ、やはり鏡で首をつっていた。

彼が遺した数千語に及ぶ手記には、自虐のスリル、たとえようもない興奮、を追い求めた彼の姿が、生々しく書き記されていた。最後の、はなやかなショウをひかえて、何度かくり返されたリハーサル。衣裳をつけかえたり、鏡の工合をためしてみたりする度に、彼の体を襲う不思議な興奮、喜び——それらを文中に織りまぜて……。

その手記によると、彼は最後の一瞬にのぞむために、細心の注意をはらって自分の体を香水の匂いで飾ったのだった。それればかりじゃない。自分の死体を扱ってくれる警官たちに、彼はくれぐれも優しく扱ってほしいと頼んでいたし、服や下着の脱がせ方までていねいに書き遺しておいたのだ。

わずか数週間後、今度は少年が、同じように鏡を使って生命を断った。突然の悲しみにすっかり打ちひしがれた両親たちには、その原因がまるで理解できなかったのだ。学校の成績もよかったし、健康でほんとうにいい子だったのに——と。

そして二月経って、また同じタイプの自殺者が出た。三十二歳のこの男の死体は、水着のようにぴっちりした踊り子用の黒いけいこ着の上に、ブラジャーとパンティーとガーターベルトをつけ、黒いナイロンのストッキングをはいていた。

火を使った自殺は、もっとも導火線をつくったわけだ。二階の廊下の敷物のの一つだろう。

ビバリー・ヒルである夜、火事があった。燃えたのは、五万ドルは下る立派な邸宅だったが、ここまでは別に珍らしいことではない。消防夫たちも、あたり前の火事のつもりでかけたのだった。

ところが、焼けあとから、その家の主婦の焼死体がみつかった。当然のこと、めんみつな調査が行われたが、その結果をおおざっぱに紹介すると、こんな工合だ。

その夜、夫が外出すると、彼女はまず二枚のシーツをつなぎ合せた。階下の各部屋の床と家具にたっぷりガソリンをぶっかけ、つなぎ合せたシーツにも十分しみこませて、階段の壁にそれをかける。二階と階下とをつなぐ導火線をつくったわけだ。

彼女は、自分の名儀で相当の財産を持っていた。夫が冷たかったのでなかろうか——これが、すさまじい自殺の原因と考えられるだ一つのことだったが、やはり臆測の範囲を出なかった。

死体が発見された時、それはほとんど彼女とは見分けられない姿になっていた。燃えさかる炎のうなりに混って、どうにもいいようのない女の叫びを、たった一声聞いたと、消防夫の一人が話していたということだ。

直接火を使ったわけじゃないが、革製のセーターを頭からすっぽりかぶり、首のところでしっかりしばって、その袖を自動車の排気孔につなぐという変った方法もあった。エンジンを動かしておくと、排気孔からセー

ターの袖を通って一酸化炭素が吹き出してくる。少年が考え出した方法だ。汚ならしい路上に横たわっていた彼のポケットに、こんな言葉を記した遺書があった。——これを世の酔いどれたちへのみせしめにしてください。ぼくの考え出したいろいろな罰の中で、これが一番重いものなのだから——。

いったい、やっと世間を知りはじめたぐらいのこの少年が、どれほどの酒を飲んだのだろう。実際に酔っぱらったことがあるのだろうか。世の酔いどれたちのみせしめにするためだけの目的で、彼はこうした奇妙な刑罰を考え出したのだろうか？

火とは逆になるが、サンタ・モニカの海岸で、衣類をすっかり脱ぎ捨てて真直ぐ海中に歩いていってしまった若い水兵がある。

——きっと、私は天国に泳ぎつけるだろう、海兵遂も、天国までは私を探しにやってきやしまい——彼が書いた遺書の一節だ。彼の死体は、とうとうみつからずしまいだった。

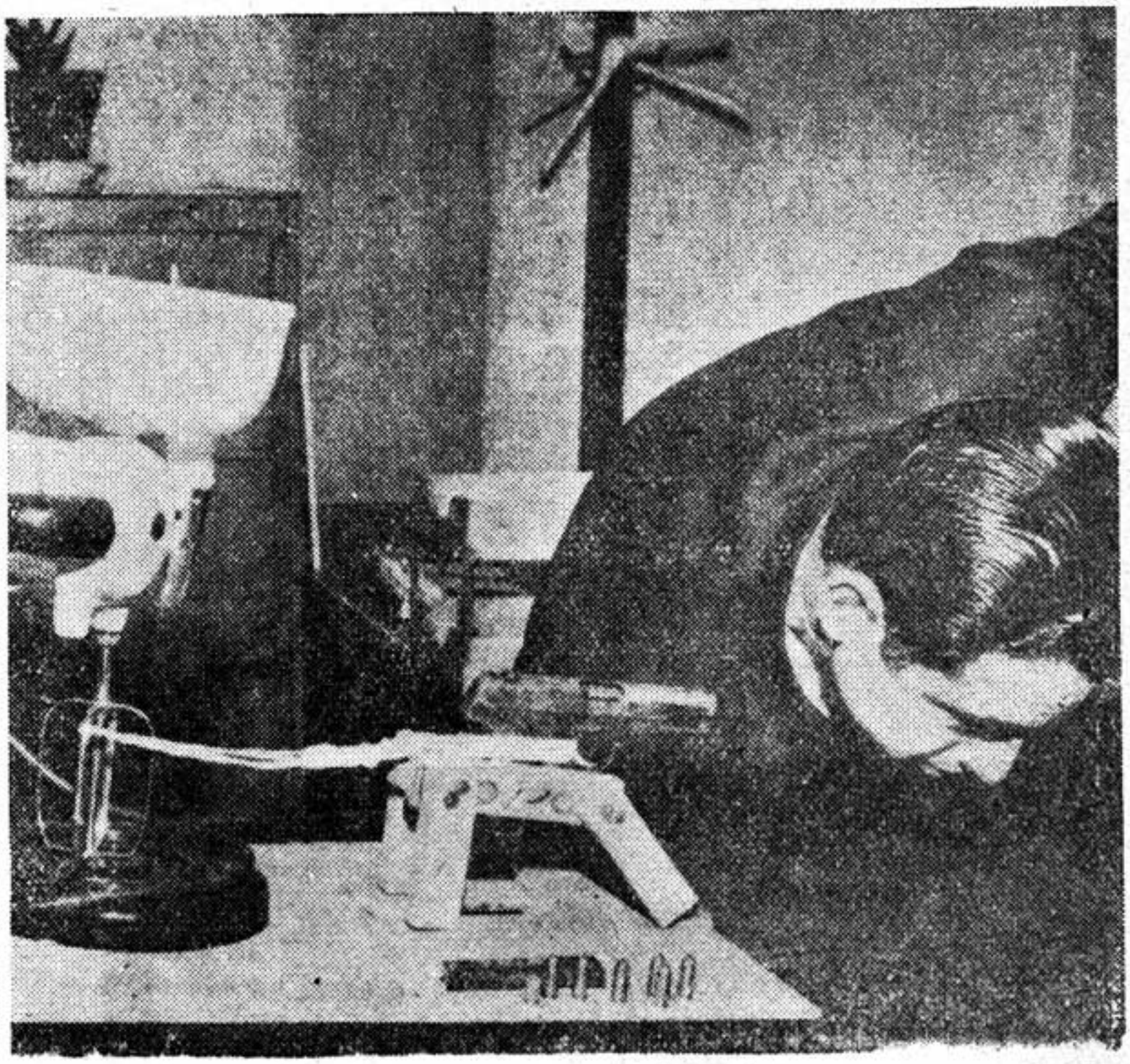
ハリウッドに、下宿屋が軒を並べている一画がある。その一軒から、ある朝早く自殺者があるというしらせが警察に入った。本署からの無電連絡で、二台のパトロールカーがすぐに駈けつけた。

家主の案内で警官たちがガレージに入ると、雑然と散らかった仕事台に、パジャマ姿の老人が上半身を投げかけている、ちょうど居眠りをしているようなかっこうだ。

老人のそばまできて、警官たちの誰もが一瞬、驚きの声をあげた。老人は自分の首を万力で絞めていたのだ。老人が自分の手で万力をしめたということを、警官たちは最初どうしても信じられなかったそうだ。いったいどんな衝動が、こんな奇妙で残酷な方法を考えつかせたのか——？

また、古ぼけたアイスボックスに頭を入れ

老人は遺書も残さず死んでいた。天国も遠くないのに……



綿密に計画された死だった。マッチをすり電気のスイッチをひねるとりよせられ、やがてぴんと張り切ると、同時に引金が引かれる。彼の体は、蜂の巣のようにぶち抜かれるだろう。床から燃えあがるガソリンの炎は、すぐに、重い袋をわずかに支えた紐を焼き切ってしまう。袋はものすごい勢いで彼の上に落ちてくる。部屋に充満したガスは発火し爆発する。彼の小さな家は、あとかたもなくけし飛んでしまうだろう。

これが彼の計画だった。確かに拳銃の引金は引かれた。が、発射されたのはただの一発、肩をちょっぴり傷つけただけだった。ガソリンの炎も、彼の期待ほどには燃えなかった。し、重い袋も落ちてこず、ガスも爆発しなかった。

近所の人たちが銃声を聞いてあわててやってきた。惨めな失敗にがっかりしていた彼を、救急車が病院に運んでいった。

数えあげれば、まったくきりがないほどだ。

優秀な若い技師が、ある朝いやに早く出勤したと思うと、小さな戸棚に自分の体を押しこめて、酸素の代りに青酸ガスをつないだガスマスクをかぶって死んだ例もある。——生きることに全く魅力を持てず、神経が自分の

て、そのふたで首を絞めた若い母親もあった。二人の幼児を残して……

このようにある一部の人たちは、自分を苦しめ、自らの生命を断ったために、さまざまな方法を考え出している。が、その中でも特に念の入った手段をえらんだ男があった。

こぢんまりした自分の家の居間で、彼はまず、三八口径の自動拳銃を、がんじょうな合板を使って自分でこしらえた特別の台に取りつけた。その引金にガーゼの紐をつけ、紐の一方の端を電気ミキサーに結びつける。次にしこたまおもりをつめ込んだ袋を、二本の細い紐で天井からぶらさげた。そして、床の敷物にはガソリンをしみこませる。

すっかり準備ができると、彼はガスの栓を開いた。銃口を真直ぐ自分に向けて、重い袋の下にすわると、マッチをすって床に投げたゆっくりと、彼の手が電気のスイッチをひねる。電気ミキサーが廻りはじめる……。

ミキサーの廻転につれてガーゼの紐がたぐ

内側にばかり発展するような人間は、自分自身に対しても社会に対しても、まるで意味がない――。こんな言葉が遺されてはいたが、せま苦しい戸棚などを死場所にえらんだのは、そうした自分への刑罰のつもりでもあったのだろうか。

浴槽の中に、ラジオやトースター、ヒーター、アイロンなど手当り次第に投げこみ、その中へ全裸の体を沈めて感電死した中年の婦人もあるし、頭にダイナマイトをしばりつけて、乾電池を使って爆発させた男もあった。

軍艦の模型を作るのが大好きなある発明家は、自分の作った軍艦の砲塔に、無線装置で動く、三八口径の拳銃を取りつけた。そして、大きな水槽に浮んだこの軍艦に、司令官自身を狙わせたのだった。

ものすごい人混みをものともせず、マリリン・モンローとジョー・ディマジオの離婚を扱っていたサンタ・モニカの法廷へ通い続けた若い婦人があった。莫大な財産を持っていたこの婦人は、モンローたちの離婚が成立すると同時に、裁判所の十階の窓から飛び降りたのだ。

またこんな男もある。

ハリウッドの共同墓地の管理人からのしらせで駈けつけた警官は、おかしな恰好のマスクをかぶった自殺死体をみつけた。このマスクは、手術の時に麻酔係りの医師がつけるもので、マスクは自動車の排気孔につながれていた。

一駿化炭素をたっぷり吸いこんだ男の片手は、十年前に死んだ妻の墓標にそっと置かれていた。

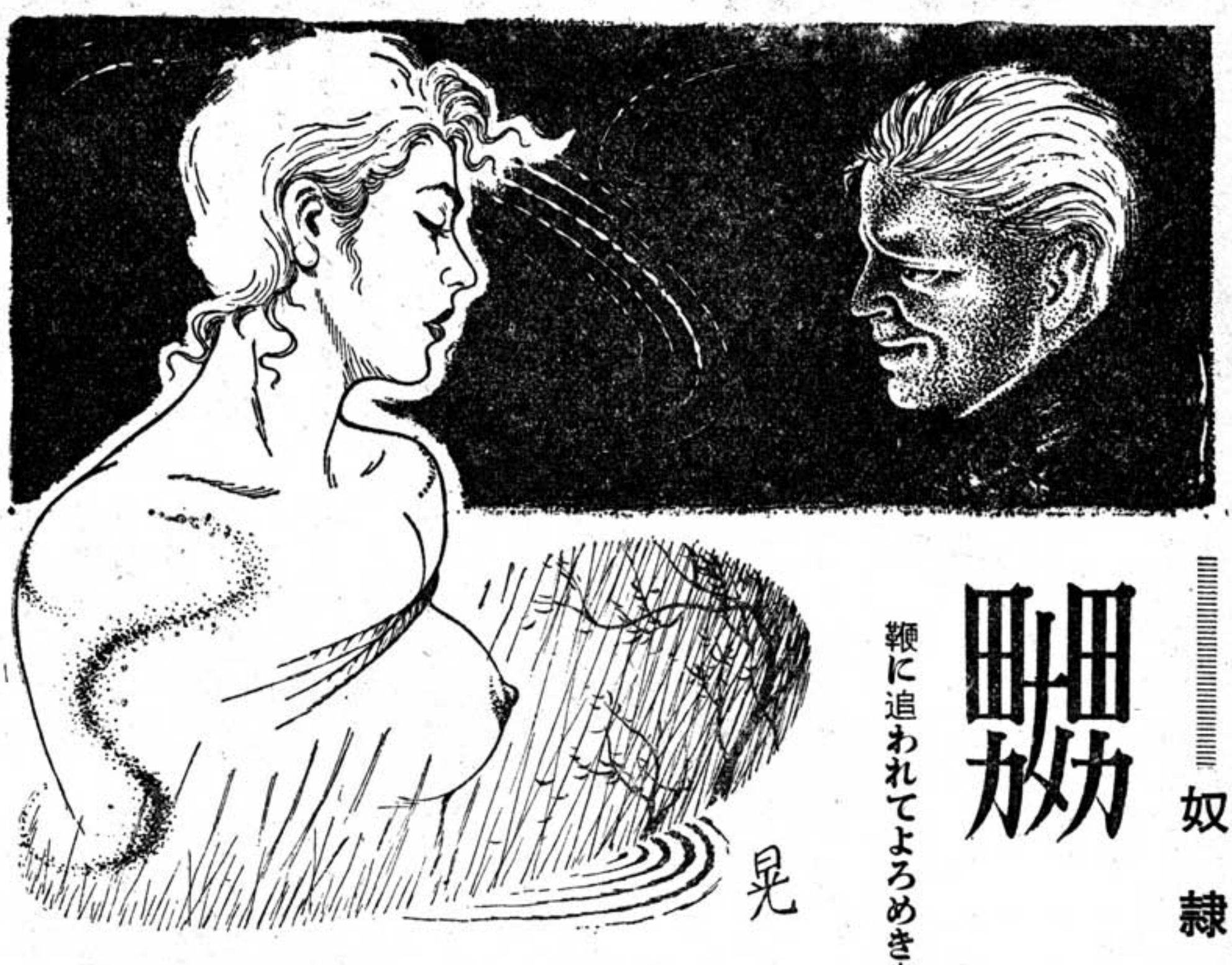
ガスマスクの中には青酸ガスが充満し、一呼吸ごとに死は近づいた。

一度決心さえしてしまえば、自殺なんてそれほどむずかしいものじゃない。

こんなふうに考える人も多いだろう。安易な死を選ぶより生き続けることの方がもっと苦しいのだと。

けれど、ここに取りあげた人たちがとった方法は、ただ死ぬだけが目的だとするとあまりにもむごいやり方だ。

まるで、とらえようのない鬼火と遊びたわむれるように、この人たちは死を相手にしてさまざまな意匠をこらして、不思議な世界を作りあげながら――。



晃

田舎娘

雨

奴隷夫人

衿垣残

美濃村晃・画

鞭に追われてよろめき歩く美少女の素肌を濡らして雨は容赦なく降り続くのだ！

中越太一先生。

―とこうお名前を、書いただけで、亜子の胸は、何か、妖しい切なさに、ふるえるようでございます……

先生。太一先生。

今、亜子は、一糸も纏わぬ姿でそうしてずぶ濡れに濡れて、夫の書斎の窓に面した豪奢な高机で、このペンを執りました。

髪からも、顔からも、雨の雫が滴たり、革椅子を濡らし、床の、厚い天鵞絨の絨毯へぽとぽと音を立てて落ちています。

先生。亜子は、たった今、豪雨の中を、裸で歩いて帰って来たところなのです。

そうして、たった今、夫、中条誠也の死を、この眼で眺めて来たところなのです。

―太一先生。

亜子は、狂ってはいません。いえいえ、狂ってはおりません。―けれど、ああ、何か強いお酒を飲んだときのように、身も心もじいんと痺れてしまうような、とてもいい気持。―ほほほほほ。

先生。やはり少し狂っているのかしら？。

お願い。呆れずに、どうかおしまいまで読んで下さい。ね。

でも、やはり先生は、びっくりなさっておしまいでしょうねえ。

誰だって、丸裸でお手紙を書い

て、そうして夫が死んだことを書いて、笑ったりしたら、愕いてしまいますわ。

けれど、先生、お優しい太一先生、亜子は正気で、自分でも怖ろしい位、まじめな気持なのです。亜子は今、このお手紙を認める以外に、何の考えもありません。裸で、ぐっしょり濡れたままいるのも、躰を拭いたり、服を纏ったりする、気持のゆとりがないからです。

服をつけたりする間に、この、ペンを執る衝動が不意に冷えてしまったら、と、妙にこわい予感が胸底を掠め、寒さに鳥肌立ちながら机に噛りついているのです。

もし、先生に手紙を書きたい気持を、失ってしまったら、亜子は今、一体、何をしたらよいのでしょう。

この雨の音に包まれた、暗い館のなかで、腑抜けたようにただ茫然自失した己が姿を、とりとめもなく眺めていなければならないことでしょう。

いや。先生、いや。

そんなこと、とても、堪えがたいことです。

ああ。だから、こうして書かして下さい。

——太一先生。

少し、昔のことを、語らして下さい。懐しい、あの頃のことを。ねえ。

先生が、亜子達の高校に、赴任していらっしゃった頃のこと。

あれは、亜子が三年生に進んだ新学期の初めでしたわね。

亜子達のクラスに、新任の先生が見えたのは、学期始まって、確か二日目の二時間目でしたかしら？

前日、始業式のとき、校長先生から紹介の辞を受けて、葉桜の色に染まる、講堂の教壇に上られたその新教師の、凛々しい美貌に、すっかり魅せられ気味だった、あたし達女生徒は、待ってましたとばかり、それこそ舞台に上る役者を讃えるかの如く、一斉に、わあっと、はやし立てたことでございました。

——先生。憶えていらっしゃいますか？

ちょうど、あたし達の教室の窓も、葉桜が埋めていましたが、その青い反映の中で、先生のお顔はっきり赫らんで、しばらく物がお云えにならないくらい、うなだれておしまいでしたわね。

後で、あたし達が何と云い合ったか、それは、こう……

「可愛いわね……」

まだありますの。早速つけた綽名が……

「光源氏」

先生、今さら怒ったって、遅いわよ。

でも、光源氏って、何かとてもぴったりした感じでしたわ。映画で、光源氏をやった俳優に、面ざしが生写しでしたし、役柄に漂った品位も、先生の面立ちに、感じられました。ともかくも、あたし達は、先生のファンになってしまい、先生があたし達の担任におなりにならないことを、大いに切歯して、口惜しがったものです。先生は、二年生のクラスを受持たれ専門の英語の他に、西洋史にも通じていらっしゃることが、やがて控えめなお口ぶりから察せられました。

——太一先生。

亜子が、先生と、特別親しく接触を持つようになったのは、その西洋史の垂教を通じてではなく、先生にとっては、全く余技の、水泳によってでしたわね。

——夏になって、学校に初めてプールが竣工し、水泳部が誕生することになると、亜子は真っ先に志願して、入部致しました。

集って見ると、意外に少く、男子七名、女子四名の、貧弱な構成でしたわ。

でも、先生は大層張切られて、放課後、西の空に陽が沈み、不気味なくらい赤い夕映えがプールの

水面を色どる頃まで、呼笛を馴らし、ストップウォッチを握り締められて、部員の育成に熱意を傾けられました。

「用意っ！」

という、お腹の底にぴーんと響くような力強い号令が、今もまだ耳の底に残っております。

亜子は、最初、クロールをやっていましたのに、平泳ぎに変ったのは、先生の指図でした。

「腕の力が、どうも弱い。脚の力をフルに発揮して、平泳をやって見たまえ」

そうして、先生は、亜子一人だけ残して、すでに夕闇の立ちこめるプールの、左端の1コースを、平泳で泳がせ、亜子についてプールの縁を、往復なさること数度に及ばれました。

「脚をもっと開いて、しっかり蹴るんだ」

「お臀が高い！　お臀が！」

―先生。あのとき、亜子の羞恥を、お気づきになっていられましたかしら。

亜子は、泳ぎながら、少し、お恨み致しましたわ……

ようやく、プールから上りますと、あたりはすっかり暗くなって遠くの山裾を縫って行く汽車の灯が、美しく見えました。

先生。先生は、亜子の濡れた髪を、うしろから、手で絞って下さいましたわね。そうして、

「髪も、美しいね」

確かに、そうおっしゃいましたね。憶えておいででしょうか？

そのとき、身の内を貫いて走った、甘い戦慄を、亜子は、鮮やかに記憶致しています。ええ。はっきりと、憶えております。

―髪も……と、先生はおっしゃったのですから……髪も……と。

ああ。先生、太一先生。

亜子は、嬉しさに、ぼうっと、酔うような心地に、なってしまいましたのよ。

―亜子は、先生と、特別近づきになれたことを、とても、感謝致しました。―云うまでもなく、亜子が、水泳部員を志願したのは、新任の中越先生が、部長になられると、聞いたからに、ほかありません。

肝腎の水泳には、からきし自信はなかったのです。―悪い子ね。ほほほほほ。

―亜子が、初めて、先生の御下宿へ遊びに行ったのは、水泳の練習がもうなくなった、初秋の、ある日曜日でございましたわね。

海北寺と刻まれた石門のある、寺院の境内には、素晴らしく高い銀杏の樹がそびえ、その樹蔭に先生は白絣の和服姿で、浮ぶように佇んでおられ、亜子をお認めになると、にっこりされて、すっと寄って来られて、そうして、不意に亜子の手頸をお握りになりました。あっと思う間もない速さでしたわ。

故知らず、頬が、真赧に染まるのを覚えました。手頸を握られたまま、ただ、じっとこらえておりましたと、眼を挙げて窺いますと、先生の白い首筋の辺りも、桜色が滲んで、お顔は、あらぬ方を向いておいでございました。

手を握り合って、たがいに、そっぽを向いているような、変な恰好でしたわねえ。

そのうち、先生は、つとお放しになられ、

「こちらだ。僕の部屋は」

くるりと、背をお向けになってさきに立って案内して下さいました離室の屋根には、黄ばんだ初秋の陽が、乾いた色で輝いておりました。

そのお部屋で、どんなお話をしたのやら、よく憶えておりません いいえ、すっかり忘れてしまっております。―あまりに、強いショックを受けたため、前後のことは一切念頭から失ってしまったのに違いありませんわ。

―先生って、ひどいお方……ふふふ、今考えると、変におかしな

気持が湧いて参りますが、むすめだった亜子には、それこそ、大変なショックでしたのよ。

―先生。なぜ、あんな卑猥な色刷の絵を、アルバムの中なんかに閉じ込んでいらっしゃったの？……くくくっ。

ぱらりと頁を繰った刹那、不意に眼を撲った鮮烈な構図！

思わず、眼をつぶって、両手で顔をおおって、それでもまだ足りない気持でしたわ。

「ばかだね」

その声と同時に、両手が押し除けられ、熱い息が掛った瞬間、音高く、唇が偸まれておりました……

「……教師として、羞かしいことだが、き……きみが、好きだっ……たのだ……」

やがて、そう、はっきり、慄えた声音でおっしゃいましたわ。

が、もう半分背中で聞いて、亜子は、泪ぐみながら、そそくさ靴を履き、銀杏の下を逃げるような足取りでした。追い駈けて来られましたね。歩調を合わせながら、しきりと、なだめるようなことをおっしゃっていましたけれど、もはや耳に入りません。ただ、涙をこらえるのに懸命でしたから――

乙女心というものは、先生、いじらしいものでございますわねえ。そうして、何と傷つきやすいものだったでしょうか。

唇を偸まれただけで、亜子は、もう取り返しのつかぬ大変な仕打ちを受けたように、学校へ行くのも嫌になって、無論、先生のお顔は、見たくもございませんでした。裏切られたような怒りが、胸底に白く光っておりました。胸に秘めていた先生の美しいイメージがすっかり毀れてしまった恨みでございましたろうか――

「光源氏」の先生は、相変らず、女生徒達の人気を集めながら、日がたって行きましたが、亜子にとっては、それからの日々は、乾いた土くれがほろほろこぼれるような、うつろなものでございました

廊下で遇っても眼をそらし、校庭で出遇っても、つと背をそ向け合う、白々しいおたがいでございましたねえ。

――そのうちに、「螢の光、窓の雪」、南国の街にも、はや雪が訪れ、その白い乱舞は、高校生活

で最後に見る雪でありました。そうして、今年の三月、先生とはあの日以後、一言も言葉を交さないままに、卒業したのでございます

——ああ。先生、美しい太一先生。

亜子は、今、後悔致しております。なぜ、あんな風に心を背けてしまったのか、一言も話さないままに打ち過してしまったのか、と、身悶えしたいほどの口惜しさに、襲われています……

——先生。寒い……ぞくぞくするほど寒い。長い髪からは、まだ雫がしたたっております。裸の脚は、感覚を失いそうです。

けれど、先生、亜子は書き続けましょう。こうして、ペンを走らせていれば、亜子は、気が触れずに済みそうです。—今日までの結婚生活を、しるしてみましょう。

——中条誠也との結婚は、地獄の扉を開いたようなものでした—いきなり、こう書きましても、先生には、唐突なことでございましょう。

順を追ってお話しますわ。そうすれば、地獄という形容が、決して誇張ではないことをも納得していただけることと思います。

中条誠也。この男が亜子の前に出現したのは、卒業してすぐでございました。彼は、亜子の父への債鬼となって、突然亜子達の眼の前に出現したのは、卒業してすぐでございました。彼は、亜子の父への債鬼となって、突然亜子達の眼の前に出現したのです。

とうから、家業の呉服商が、不振に陥っていましたのは、苦渋に満ちた日頃の父の表情から亜子にも察しられていて、秘かに気を揉んでいたのでございますが、まさか、高利のつく金まで、借りてやり繰りするほど、行詰っていたとは、存じませんでした。

「商売は、高利の金を借りるようになったら、もう駄目だ」

口癖のように云っていた父が、何と、その金に手を出して、首を締められる羽目に、なっていたのでございます。

祖父の代から、営々として築かれて来た、古暖簾を誇る老舗が、中条誠也という一介の金融業者の手に、掌握されていたのでございます。

「返済が付かねば、抵当のこの店を処分するまでだ」

彼は、父のどのような嘆願にもてんとして応じませず、そううそぶくばかりでした。

亜子は、いわゆる、鬼と呼ばれる高利貸の、その名に適った冷酷無情さに、怒りよりも、何か肌に粟を生ずる恐怖感さえ、覚えました。

——いよいよ、明日が期限という夜、客間からは、中条の居丈高な声に混って、父の必死に取りすがる声と、母のすすり泣く声が漏れて来ましたが、やがて、不意にしんと鎮まってしまいました。

ふと、いぶかしく思いながらも朧月夜の庭の泉水のほとりに佇んで、小さな妹をあやしていました耳に、また突然、

「な……なにを云う」

と、父の激した声が飛び込みました。

——なにを云うと、怒った父も母も、中条の申し出をきいてくれと、合掌せんばかり低頭して、亜子に頼みました。

——太一先生。

亜子は、前に、中条を夫と呼びましたが、亜子は、中条の許に正式にお嫁に行ったのではございません。挙式をした訳でもございません。裾模様も纏わぬまま——ばかりか、人目を忍び、衣裳類だけを持って、この古い西洋館の扉を叩いたのでございます——翌日の夕方でございました。

夜、二階の寝室には、窓から月光がなだれ込み、ベッドの上から一面の林が黒い影を伴って見渡され、その中を縫って流れている河

は、不気味に白く光って映りました。

亜子は、閃光のように、あの海北寺のお部屋での先生の口づけと色刷の秘画と、そうしてなぜか屋根の陽の色とが、一瞬、ごっちゃに脳裡を照しました……

中条は、アップに束ねて捲上げていた髪を亜子に解かせ、裸の背中に垂らさせると、脚の爪先から次第に、掌を上に這わせて来て、

「くふふ……」

と、含み嗤いを、低く漏らしました。迫って来る白髪頭の歯の欠けた顔が、ぞっとするほど醜怪で亜子は咽喉の奥で、声にならない叫びをあげていました。

そして気を失ってしまいました。

——先生。亜子が一家を救う為に払った代償は、十九歳の蒼の体を、五十を越した老醜の男に無惨に開花させ、そうして、想像を絶した嗜虐の虜になることでした。

——妻子のない中条誠也は、この落葉松の群落の中の舘に、ひとり起居していたのでございますが億を越えると噂されているほどの長者ぶりは、どこにも見えず、ただ、家具や調度類は、古いながら凝った贅沢な物でしたが、その生活は極めて質素で、一例を挙げますと、この舘には電気も通じていませんでした。

昼なお暗い、洞窟じみた内部で二人は動物のようにうごめいていたのでございます——

——父の嘆願、母の涙に、哀しく諦めてしまって、舘の扉を叩いたのが、まさに地獄への開門でございました……

中条は、調教という言葉を用いました。亜子を彼の妻として完全な物に、調教すると云うのです。馬を馴らすように鞭を振って、亜子を、自分の嗜好に順応させようとするのでございます。

亜子は、初めさからい、その抵抗が、かえって中条の内部に火を募らせることを知ると、半ば諦めてしまいました。

泣けば泣いたで、なぜ泣くと鞭が降り、懸命に声をこらえれば、なぜ泣かぬと、また鞭が肌に喰い込みます。

トイレが長いといっては踏み込んで来て鞭を浴びせ、寝化粧が粗末だといっては、全身に白粉を刷いて、紅棒で体中にいたずら描きをしたり致します。それをされると、さすがに亜子は、顔が真赧に赧らみ、鏡の前に立たせられて、鏡をのぞかねばならないのが顫えて来るほどの苦痛でございました

「おい。眼を挙げてよく見るんだ！」

びゅうと、鞭に素振りをくれます。

——そんな毎日の連続でございましたが、ある日、彼の出掛けた留守に窓を伝い降りて、どこへというあてもなく、ふらふらと落葉松の林の奥にさまよって行き、いつの間にか巾広くとうとうと流れている河の堤に出ていました。じっとみつめていると、眼が眩むような流れの速さでした。深いらしく、大きな渦が巻いていました。

——亜子は、ここへ来た目的をその大きな烈しい渦巻から、教わったようでした。死が、亜子を招いたのです。渦巻が手を挙げて、早くと亜子を誘うようでした。亜子は、低い湿った土堤を、奔流の渕まで降りて行き、下駄を揃えて脱ぐと眼を閉じて——

——ああ。先生。太一先生。

その瞬間、亜子の心を引き止めたのは、先生、あなたでございましたの。

亜子の胸に不意に浮んだ、先生の美しいお顔でございましたの。

どうしたことでありましょうか突然胸に浮んだその先生のお顔から、亜子はハッと我に返ったのです。

波の音が今さらに耳に蘇り、もはや渦巻の底から死魔の手招きはかき消えてしまっておりました……

——あのとき、死んでおけばよ

かった。先生の幻に邪魔されたことに、いっそその幻に対して、恨みの念さえ崩すほどに、亜子が後悔を覚えたのは、この梅雨季に入ってからでございます。

——太一先生。先生も今、学校の窓から、あるいは海北寺の竹格子の窓からか、この陰気な雨を、お眺めになっていらっしゃいますでしょうか？

連綿として降る、この長雨のことを、淫雨とかいう由——淫雨降る中で亜子に加えられた中条誠也の淫虐こそは、真に地獄図絵もかくやと想われ、死ねなかった自分の身を、自ら呪うような仕末に至ったのでございました——お話致しましょう。

——その「調教」が命ぜられたとき、亜子は必死にさからいました。無論、雨のように黒褐色の革鞭を浴びましたが、例え死んでも裸で道を歩くことには従えず、壁に身をすりつけながら、裂けるような悲鳴を挙げながら、頭を横に振り続けました。

「そうか。どうしてもきかないのだな」

そう云うと、中条は骨張った指で亜子の髪を掴み、床に引きずり倒してずるずると体を引きずりました。

「ウワーッ」

髪の根が抜けるかと思う痛さに絶叫が口から迸り、脚が床を掻きました。

「ばか奴」

「ヒイー」

また、二間余りもずるずると運ばれました。

「よ……よろしい」

中条の呼吸は、力の消耗で弾んでいました。

「お、おれの、命令に背くのなら、志麻田屋を潰してやるぞ。いいか」

片足が、乳房を踏みつけました。

「お前は、借金の人質だということを、忘れるな」

「おっしゃるように致します」

と、亜子は、云いました。云った途端、両の眼から、泪が噴き出していました。

「起きろ」

「お、お店は助けて下さい」

立上って、涙声で云うのへ、

「お前次第じゃ」と中条は、戸口へ向けてどんと肩を小突きました

外は一面瀑布のような雨です。落葉松林も、川向うの農家の聚落も、その向うの山脈の姿も、白い幕に距てられて霞んで見えました館の玄関脇の大きな八手の葉が、雨に叩かれてひときわ大きな音を立てていました。

防水衣を纏って、中条は玄関へ来ると、そこの敷石を烈しく鞭で叩きました。

はじかれたように亜子は、石段を駈け下りました。夢中でした。たちまち全身びしょ濡れになって、眼と口へ雨が流れ込み、顔を挙げていることができません。肌が鳥肌立って参りました。

「さあ、歩け」

背中へばしっと鞭が当って、思わずよろけそうになりながら、亜子は歩き出しました。

「うはははは」

先回りして、鈍い軋みを立てる鉄の表門を開けて、中条は亜子がいよいよ戸外へ出ると、雨の音の中で高く笑いました。

「うはは……こりゃあ、愉快だ」

そうして、

「そら！」

と、背後から腰へ鞭を浴びせました。

「あああ」

ぬかるみの道で、亜子は一瞬身をかがめて、苦痛を堪えるのです。すると、

「歩け！」

と云う叱咤と共に、また一撃が腰部へ火のような熱い痛みを走らせました。不意に、稲妻が地面を掃き、山脈の方で微かに雷鳴が轟きました。

——河まで来ると、水の色は茶褐色に濁って、堤を没するほど水

晃

嵩が増している奔流は、雑多な木片を渦の中に吸い込みながら、轟と不気味な響を立てて流れていました。

その堤の上を、中条は、なおも歩かせました。河は彎曲して、農家の聚落へ迫っています。

雨の縞の遮蔽幕を透して歩いて行くに従いだんだん迫って来る聚落の家々のたたずまいや、部屋の灯の色人の姿が、おぼろげに見えて来ると、もうこれから先は行かせないで、と亜子は彼に掌を合わせて頼みましたわ。それを云う間も、雨滴は容赦なく眼を襲い、口へ滑り込みます。きっと、金魚のような表情になったことでしょう

中条の、フードに包まれた顔が歪んだと思うと、鞭が大きくうねって、咄嗟に顔をおおった手に烈しく当って、先端が乳房の上に斜めに、赤い条痕を刻みつけました。

「ま、参ります」

と、逃がれるようにまた歩き出した背中へまるで牛か馬かをせき立てるように、続けざまに鞭が降りました。あー、あーと悲鳴を挙げながらうろつき、一度はこらえかねてぬかるみの中に膝を突きました。

「このみっともない姿を、百姓共が見たらたまげるぞ」

きききと云うような、歯の隙からせり出すような奇怪な笑い声をうしろに聞きながら、亜子は聚落の方へ進んで行きました。

と、凄い稲妻が閃めき、雷鳴が地軸を揺がして、雨は俄に猛然たる豪雨と化して、一切を白く閉ざしてしまい、僻易したらしい中条が「帰れ！」と、どなる姿もおぼろでした。

ほっと、亜子は気がゆるみました。

――その日から五日、亜子は、四十度近い高熱に冒され続けて臥床していました。中条はいらいらした不機嫌な表情を浮べていましたが、さすがに「調教」は控えてそれを機会に帳簿の整理をしたり執達吏と処分する抵当物件のことを話合ったり、表から施錠して、雨を衝いて外出して行ったりしていました。亜子は、死ぬのかと思いました。吝嗇な中条は、医者を招くことは愚か、薬も与えなければ滋養物一つ摂らそうともせず、休ませて置くのが精一杯の好意的な振舞のようでした。

熱に冒された頭に、時折ふっと水のように澄んだ意識が訪れると亜子はこのまま死にたいなと、実に静かな気持で想いました。あの

河で死魔の招きに魅せられて、先生の美しい幻に邪魔され、死に損なった身には、自殺ではない、意志を離れた自然な死への誘いが、先生、望ましかったのです。幾ら先生の幻が邪魔し、引き止めてもそれは音楽のように奏でられるだけで、自然に死に導かれて行くことが、どんなにか望ましかったことでしょう。

先生は、今どんなことをなさっていられるかしらとそんなことも想いました。お部屋で、読書でもなさっていらっしゃるかしら？

そう想うと、先生のお姿が、初めてお尋ねした初秋のあの日の白絣の和服姿で、眼に浮ぶのでした。

——と、また、あの口づけの感触や、不意に眼を折った秘画の毒々しさが想い出されて来て、亜子の顔は綻びました。そのとき亜子は遠い先生に、ふと〝女蕩し〟を感じましたけれど、この発見は如何、先生、怒っては嫌よ。ふふ。

——病死を願う心を裏切って、六日目になって、亜子は、恢復してしまいました。——六日目、すなわち、今日のことです。

朝、眼覚めて、すっかり熱が退いているのにびっくりしました。我ながら、キョトンとした感じでございました。

「治ったな」

中条は、早速、亜子を引き起して、階下の仄暗い湿った匂いのする、いつもの「調教場」へ引き立てました。天井のランプに灯を点すと、床に鞭を鳴らしました。

「久し振りに、よく味わえッ」

「あー」

壁にはまた新しく、亜子の爪痕が、がりがりと刻み付けられました。病み上りで、踏ん張っている足に力が入らず、ただ一撃で壁の土をこぼしながら、ずるずると崩れ折れてしまいました。

——お……鬼。

鞭の乱打の下で、亜子は、そう呟やきました。

鬼の所業は、それだけではありませんでした。

再び、あの雨中の行進を、命じたのでございます。

淫雨は執拗に毎日、細くなったり烈しい雨に変ったりしながら、いつやむともなり降り続いています。

鞭にせかされて、亜子は路上に走り出し、全身にまた雨を浴びました。そうして、逆巻く河の緑を農家の聚落へ向って辿り出しました。

波と雨の音の中にまじって、きときと云う奇怪な笑い声をうしろに聞きながら。

——先生。

中条誠也が、一声の悲鳴と共に奔流に身を没した箇所には、生々しい滑り跡がございました……

先生。

美しい太一先生。

亜子はこれからどうしたらいいのでしょう。

先生の許に、飛んで行ったらいけないかしら？

愛読者短評募集

◎本誌では愛読者の皆様方から、読まれたあとの短評を募集して居ります。シンラツな御意見、御希望等もおりまぜて、御投稿下さいますようお待ちします。

◎掲載させて戴きましたものには、掲載誌一部と謝礼をお送り致します。

◎読者短評送り先は左記の通りです。

東京都中野区江古田一の二三〇二

久保書店内　裏窓編集部読者係

本誌34年新年号より連載の二大興味篇

連載妖異小説

怪異愛霊教

飯田豊吉

情痴に泣く娘霊媒、尨大な信者を擁して奸策の罠を拡げる怪異の教団に挑む不敵な主人公冬島信吾！　微笑のかげに大胆な野望を秘めた男の動きは？

挿絵　中島喜美

第一話・蛇神異変・

まぼろし侍破魔暦

黒木忍

挿絵　山田彬弘

蛇神に呪われて狂いのたうつ魅入られ娘！　炎の舌と化した美女の紅唇に逢魔の巷は血塗られて行くのだ！　冷徹のまぼろし侍よく謎を解くや否？

あぶちっく・すりらあ

壺地獄

川口直樹

藤原隆・画

ボヘミアン・タイの男

呼吸をととのえ、ポーズをつけて、クイのオリエンタルの曲が小太鼓だけで前奏を続けている四小節の終りを待つ、ほんの僅かの間に、私はまたあのいまわしい合図をうけてしまった。

いつも、きまって舞台の正面前列に席をとって、牛のようなドロリとした眼で私を凝視する男——踊りのはじまる直前に、真赤なボヘミアンネクタイの結び目の上で、親指と人差指で輪をつくってから、ピンと弾いて見せる得体の知れない無気味な男——。

あいつは一体だれだろう？　あれは一体何の合図だろう？

初日から今日で九日間、その不思議なイヤ味

ドウ氏病というのがクタクタになり、楽屋にさがると、冷たい汗が腋の下にふき出ていた。

あれが、バセもらおうか……と、何べん考えてみたか知れない。でも、そうしたって、結局は、彼が来ているかぎり同じことにすぎないのじゃないかしら？

私は、半分はやけになり、半分は絶望した。

私は、何だってこの未知の、気違いじみた男のために、こうまで心をかき乱されなければならないのだろう？　何だって、やけになったり、絶望したりしなければならないのだろう？　変な話だ！

今日だってそうだ。私は踊りながら、踊りの間中、彼の牛のような眼に追いまくられ、からみつかれている自分を意識して気もそぞろだった。呼吸がはずんで、無性にのどがかわいた。終曲に近い頃、軽い吐き気をさえ催したけれど、どうにか頑張って、転げるようにして楽屋に逃げこむと、ブラジャーも飾りヒモもむしりとばしてぶっ倒れ、喘息病みみたいに息が切れて、からだ

な男は一日も欠かしたことなく昼夜二回の興行をよくも厭きずに通いつめられるものだ。

レヴューの踊り子に夢中になるほどの若僧でもない。ネクタイこそ一般にはあまり見られないもので、派手な色だけれど、服はおよそそれに似つかわしくない黒の無地で、型も崩れて乾いた氷嚢のようにシワだらけだ。いつも、節くれ立った大きな手を揉み合わせている。

陶器のような円い顔——そして、章魚よりも無表情な冷たさ！　観客を気にしていたら、舞台は勤まるものではない——私は一生懸命で、彼を一個の木偶に見立てようと努力したけれど、いつでも無駄に終った。

その日も、私はおかげでステップを三度も踏みちがえてしまった。息が切れて、からだ

あの男が迫ってくる！　彼女は逃げ道のないタコ壺にみずから飛び込んだ！

に息をひいて身悶えた。同室の踊り子たちはだ！　惚れたら惚れたとハッキリ言いやがれ！　ガムのしゃぶりカスくらいくれてやたまげてしまい、ただオロオロするばかりだあ。なにさ、サカリのついた牛みたいな眼玉った。監督さんが薄荷水を大コップいっぱい持ってきてくれたのを、一気に飲み干すと、やっと気が落ちついてきた。私は、監督さんの腕にしがみついて哀願した。

「私、もう我慢のしようがないの。こんどの出演だけ休ませて。お願い、お願いよ」

「弱ったなア……だいぶ具合が悪いようだから仕方がないけど、多摩ちゃんにやすまれちゃ、この代役をやる子がいないんだから、何とか頑張って、続けてもらえんかな」

「いや、いやよ！　私、わがままで言うんじゃない、あとまだ十五、六日も、こんなふうにしてやったら、私、気が狂ってしまう！」

きっと唇の色さえ紫色に変っていたのだろう。親切な監督さんは私を抱いて、ともかくも寝具のある宿直部屋に運んでくれた。

ひどい熱が出て、私はその夜とうとうアパートへ帰れなかった。宿直の爺さんと、泊ってくれた朋輩のみどりさんにみとられながら私は終夜うなされどおしにうわごとを言いつづけた。

――何だい、牛男め！　私を、この私を、M劇場の多摩ちゃんをどうしようっていうんだ！　惚れたら惚れたとハッキリ言いやがれ！　ガムのしゃぶりカスくらいくれてやらあ。なにさ、サカリのついた牛みたいな眼玉をでんぐり返して、私のどこが見たいッてんだ！

ふ、ふ、ふ、はばかりながら、私は、M劇場のスタア・クイン様だよ。お前みたいなでき損なった牛骨野郎のざらざらベロ（舌）になめられてたまるかッてんだ！

そうした強がりも毒舌も、所詮は熱の力の借りものだけのことだった。

疲れて、いつかうとうとまどろんでいた二人の看護人の隙をねらって、あのおそましい男の手で、私は声を立てることもできず、意識を失ったまま引っさらわれてしまったのだった。

私の、世にも奇怪な壺の中の生活が、こうした発端からはじめられたのである。

密室の恐怖

あんな大きな壺を見たのは初めてだった。高さは六フィート近く、口径はたっぷり三フィートはあった。壺というよりも、むしろかめといった方がいいかも知れない。形は中ふくらみで、ちょうど、蓋のない茶壺のように底へ向いてすぼまっている。それは陶器でも鋳物でもなく、コンクリートを固めて作ったラフな肌をしていて、色も灰褐色で、どこか荒磯の岩塊を思わせた。

こんな大きな壺を、わざわざ作らせる人もき、漁師の沈め仕掛けた壺とも知らず、これを屈強の隠れ家とばかりに身を忍ばせたばかり人だが、いったい何の用に使うつもりなのだ

ろう。水がめか、用水桶なら話もわかる。でも、それが、畳を敷いたら五十はゆうに数えられるほどの広間のまん中に、ぽつんと、ただひとつ据えられていたのだから、どう考えようもなかった。

その広間は、妙に天井が低かった。柱が一本もなく、床は実によく磨かれた板張りで、壷の倒影がくっきりと映っている。

窓ひとつ、扉ひとつ、まして家具などは小椅子ひとつないその広間は、まるで地下にあるもののように、無気味な静けさに支配されていた。

どこから、そんな光りがとり入れられるのか、広間はかなり明るかった。いっそ、真っ暗で、何も見えなかったなら、私は、あんなにまで怖ろしい思いをせずにすんだかも知れない。なまじ、広間の様子が、隅々まで克明に照らし出されていることが、私の精神を滅茶目茶に、恐怖でかき乱してしまったのだった。

ふと、正気にかえったとき、私が連れ込まれていた所は、そういう、夢にすら見たこともない現実ばなれのした部屋だった。

巨大な壷のそばに、私は靴下と踊り靴をはいただけの、すっぱだかのあられもない姿で転がされていた。

私はそれでも、いたずらさだに気がつくとホッと安心した。でも、当然予想されるはずの行為が仕遂げられていないということが、かえって限りない恐怖となって反響してきた。私はいったいどうなるのだろう？　どうされるのだろう？

あのボヘミアンネクタイの牛骨野郎が、どこからか、あの飛び出た眼玉をみだらに充血させて、私のこのヌードを舌なめずりしながらぬすみ見ているかも知れない。そして、欲情が最高潮に達したところで、突然魔獣のようにしてしまったのだ。私は、あの時どうしてに馳け寄って、脱出口があるかないかを調べてみなかったのだろう？　どうしていきなり絶望してしまったりなどしたのだろう？　私がこの部屋にいるということが事実である以上、この密室にだってどのようなカラクリがかくされていようと、出入口がすくなくとも一ヵ所はあるはずだのに——。

私は、その時の心の状態を、どう考え直してみても、自分で納得がいかない。

私は、壷のまわりを馳けめぐった。私の真白な姿体が、妖しい曲線が、どういうわけかカラー・テレビのような色彩をもって、ほど恐ろしいものだとは夢想もしないことだった。

もうどうでもいい、どんな凶悪な男でもいい、いえあの、おぞましい謎の男でもいい、たった今、この部屋に姿を現わしてくれたなら、あのとき私は、あげないでもすんだあまで絶望的な叫びをことだったろうに、私は拳を噛み、歯をむき出して、コンドルに襲いかかられた小猿のようなすさまじい叫びをあげ、壷のまわりを馳けめぐった。絶対に脱出することが不可能であるこの大きな密室の恐怖が、私を完全に獣にしてしまったのだ。私は、あの時どうしてに馳け寄って、脱出口があるかないかを調べてみなかったのだろう？　どうしていきなり絶望してしまったりなどしたのだろう？　私がこの部屋にいるということが事実である以上、この密室にだってどのようなカラクリがかくされていようと、出入口がすくなくとも一ヵ所はあるはずだのに——。

私は、その時の心の状態を、どう考え直してみても、自分で納得がいかない。

私は、壷のまわりを馳けめぐった。私の真白な姿体が、妖しい曲線が、どういうわけかカラー・テレビのような色彩をもって、

磨かれた床板の上に逆写しにきらめく。

そんなバカな！　と思って頭をふってみる。私は、あまりの恐怖にとうとう気が狂ってしまったのだろうか？　腸が、みんな胸の中に突き上げてくるような錯覚におびえて息がつまってきた。私は、何べんもすべって、何んも壷にしがみついた。さらざらの壷の肌に傷ついて、鼻の頭から、頬から掌から、指先から血が滴った。まるで、捕われた鼠のように狂いまわっていた。

私は、腐った果物のような息をハアハア喘ぎながら、力尽きて、やもりのようにしがみついて、ガックリと首を垂れてしまった。

どうしてそれを感じとったのだろう！　私は、危険の本能に目ざまされて、キッと首をあげて振り返った。おお！　三メートルとは離れない目の前に、あの男が突っ立っていた！　どこから、どうしてやって来たのだろう？　彼は、真赤なボヘミアンネクタイの結び目の上で、親指と人差指で輪をつくってからピンと弾いて見せた。紛れもなくあの男だ！

私はきつと、その時も野猿のように歯をむき出して、彼の凝視の眼におびえたことだろう。

血が一時に頭へ逆上した。狂ったのだ。私は、いきなり両手の指を壷の口にかけ、踊り靴を蹴飛ばして馳け上った。

壷の中へ逃げ込む！　何という愚かなことだ！　まるで漁師のワナにかかる海底の章魚ではないか！　でも、その時の私にそんな理性はなかった。そうする以外に術がなかったのだ。壷の中に逃げ込めば、それが二重の密室になろうことは、常人の頭脳だったらわかり過ぎることだのに——。

開かれた口、それはこの密室にはこの壷の口以外にはない。狂った錯覚、おそろしい錯覚の捕虜！

俘囚

手を掛け、足をふん張ってよじ登ったのに壷は不思議にビクとも動かなかった。

何という無謀なことだったろう。考えてみれば、その壷の中にどのような危険が待ちもうけていないでもない。

サソリが、マムシが、ひそんで毒牙を磨いでいるかも知れない。水がいっぱい満たされているかも知れない。ひょっとして、壷の底が抜けていて、どのような底知れぬ奈落の穴に顛落してしまうかも知れない。

でも、そうした一切の危険を顧慮するいとまはなかった。なかったというよりも、もう頭脳が完全に思考能力を奪われてしまっていたのだ。

私は、足から先に壷に突込んで、すぼッとはまりこんだ。足うらが、ヒヤリと、しかし固いものに突き当ってとまった。と、その瞬間、ゆえ知れぬ涙が、あとからあとからこみあげてきて頬を流れ、乳房の谷間を伝って流れ落ちた。

これで、当面の危険からは身を護ることができた。でも、それがどうだというのだろう私は、そのために、逆に今度は完全な壷の俘囚となってしまったのだ。

事態は、壷の外にいて密室の中にある以上に、二重に閉ざされた不利を自から求めてしまったことになる。

もう何としたって自力では外に出られないからだこと壷の内壁にぶちあててみた。壷は床に根を生やしてでもいるようにビクともしない。腕をのばして、背のびをしてみる。こんどは壷の口にツメ一つかからない。壷の底は床の下へ一フィートも食いこんでいるらしい。叩いたって、蹴ったって、音ひとつ立た

ない。

私は声をかぎりに救いを求めてみた。その声は壺の中にくぐもって、自分の声とはとうてい思われない醜い響きとなって戻ってくる。

私は、壺の底にしゃがみこんで、ジッと耳を澄まし、外界の気配をうかがってみた。あの男は、おそらく立ち去ってしまったのだろう。どこかにその出入口がかくされてあったのだ。あたりは前にも増してひっそりと静まりかえっている。

ふたたび、いいようもない恐怖が私の胸を締めつけてきた。私という女は、誰れにも知られずにこの壺の中で餓死し、誰れにも知られずに腐って白骨だけになってしまうだろう。

私は、髪をかきむしり、身悶え、呻いた。それでも私は、まだ絶望はしていなかった。こんな馬鹿げた目にあうなんて、これは現実の世界の出来事ではなくて、私は夢を見ているんだ。熱にうかされた悪夢なんだ。だからもうじき醒める、きっと醒める。私はその、最後の希望に悲しくも取りすがって、みずから作り笑いをさえしてみた。

いつの間にか、私は膝を抱いて、その間に首を突ッこんだまま眠ってしまったらしい。ハッと我れにかえった時、薄明るい壺の中に、そのままの姿勢の、まるで坐棺に入れられた屍体のような自分を発見したとき、私は初めてハッキリと絶望を感じたのであった。

壺の中にうっすらとした光りが射しこみ、やがて真

暗になり、また光りが射しはじめる。それだけの単調な、光りと影だけの中に生きて、私は三日三晩を数えた。それは、十年の歳月よりも長く思われた。その間、私はうつらうつらと眠ってはさめ、とりとめもなく半生の出来事を考えていた。小さい頃、故郷の山で食べた木通（あけび）の実の綿や、庭の南天にひっかかった糸屑の赤さなど、こんな場合にふさわしくもない、呑気なことばかりが想い起された。私の脳味噌は、もう半分役に立たなくなってしまったらしい。あと半分が役に立たなくなった時こそ、私は完全に狂うのだ！

　壷の底の隅には、小さな水がめが置かれてあった。私のいのちは、その中にある僅かばかりの水だった。それ以外に、私は何も与えられなかった。たとえ何かが与えられたってそれはむしろ気が楽になったかも知れない。石のように収縮してしまっている胃袋は、一粒の穀物だって受け入れてはくれなかったろう。

　かわいそうな赤城多摩子よ。お前は、どのような星の下に生れたのだ？　お前は、あまりにも美し過ぎた。だから悪魔に魅入られたのだ。M劇場の女王（クイーン）、東京の希望（ホープ）、渇仰の舞姫赤城多摩子！　お前はこうして壷の中に封じこめられて、その華やかだった半生を終ろうとする！

　私は、この時くらい壷というものの持つ恐ろしさを身をもって体験したことはなかった。無限の空間を、僅かの壁をもって区劃する小宇宙――壷というものは、その大小にかかわらず、計量しきれない恐怖をそれ自身包蔵しているものなのであろう。

　あの男はいったい何をたくらんでいるのか？　この不可解な密室はどこのどんな所にあるのか？　そして、この巨大な壷は何のために存在しているのか？　私は何も知らない私の考えからは遥かに飛躍しすぎていて、私はただその秘密の前に無条件に屈服してしまうばかりだった。私はこの場合、あの男が私を自由にするために俘囚としたというならばそれはむしろ気が楽になったかも知れない。そうでないということの中に、私は無限の恐怖を感じたのだった。

悪魔を逃がすな！

　S座はM劇場とは同じ資本系統の姉妹館でもあり、僕が以前にそこの舞台監督をやっていた関係もあって、レヴュー〝万華鏡〟の幕だけは是非とも面倒をみて欲しいというマネジャーの依頼を断りかねて掛け持ったのが、謎の失踪を続けている赤城多摩子と再会する機縁となったのである。

　レヴュー〝万華鏡〟の一幕は、照明をフルに活用して舞台をケンランたる五彩に変化づけ、特に立体的効果を狙って観客席までも舞台と同じように照明しようというのがミソだったので、特にその目的のために、舞台中央の天井に照明装置を作って、観客にはまぶしくないように工夫を凝らした。僕はその照明係りと一しょに席をとって、監督の任についたのである。

　幕が開く――。

　第一景は〝エデンの園〟濃い緑色の照明の中に、人類創造の世の、怪奇なシダやツル草の密生する園生が、あたかも海底のような色調に浮き出されている。イヴに扮する踊り子は全裸のまま、しかし、髪の毛を巧みに利用して乳房や前を覆う姿で、智恵の実の誘惑にうちかとうとするポーズをとって立つ。曲はドビュッシーの「牧神の午後」を借りた。

　舞踊は次第に展開されてゆく。舞台も観客席も、しんしんたる緑の照明の中に沈んでいる。舞踊の終りに近く、イヴがついに誘惑に負けて智恵の実を食べ、忽然として叡智の眼

を見開く一コマにかかった時であった。

僕も見た！　正面最前列に席をとって、魅入られたような、ドロリとした眼で舞台を見つめていた男が、真赤なボヘミアンネクタイの結び目の上で、親指と人差指で輪をつくってからピンと弾いて見せたのを！

ああ、その合図！　これこそ失踪した赤城多摩子を恐怖のどん底に追い詰めたおそるべき悪魔の合図ではないか——。

彼女をひっさらったのは、彼奴の仕業以外にはない。しかも彼奴は場所を変え、今度はS座の花形青山月子を第二の犠牲として狙いはじめている！

僕はもう舞台監督どころではなかった、ジーッとあいつの態度を観察しはじめたのだった。

幸いにも、まだ初日そこそこのことで、狙われている青山月子は、その悪魔の合図に気づく余裕がなかったのであろう。その一コマは満場割れるような拍手のうちに、第二景へと切替えられた。

彼奴はがっかりしたように、そっと席を立った。僕は照明係りの男に何とその場を取りつくろったか覚えてはいない。とにかく、転げるようにして走り出した。

彼奴のアトをつけろ！　彼奴の帰るところにこそ、可哀想な赤城多摩子は捕われているんだ！

僕は、あらゆる危険、困難を排除して、多摩子に対した場合から推論すれば、多摩子以前にさえ犠牲者があったかも知れないのだ。現に、彼奴は多摩子だけで満足せず、いままた美しい月子に挑みかかっているではないか。このままに放っておくことは更に多くの犠牲者を生み出すことだ。あいつの目的、あいつの正体？　そんなことは、今はどうでもいい。一刻を争う。

謎の男は、明らかに失望したらしく、そのずんぐりした、蟇のような醜い姿をS座の外に運んだ。僕は見えがくれにその後についた。

奴はすぐ近くの喫茶店に入った。そして、そこの一番隅のテーブルに陣取ると、注文したコーヒーには手もつけず、ポケットから何かの本を取り出して読みはじめたのである。

僕はがっかりした。奴はこうして〝万華鏡〟の夜の部を待つつもりらしい。

僕は急いで一杯のコーヒーを飲み終ると、S座へ戻るために腰を上げた。

だが、待てよ？

奴は果して、夜の部を待つためにこの喫茶店で時間を潰すつもりでいるのだろうか？　それはどこまでも僕だけの勝手な推測にすぎないのではなかろうか？

奴め、多摩子に対してはまさにその通りであるべきだ。だが、それだからといって、今度の月子の場合にも、それがそっくりそのまま再現されるものと誰れが保証する！

あきらめて、もう二度とふたたびS座へ姿を現わさなかったらどうする？

僕はこの時、ふと多摩子が、もう奴の魔手にかかって世に亡き者となっているのではないか、という予感に襲われてゾッとした。遅かったかも知れない。だが、今の機会を逸したために遅れた、という悔恨を味わなければならないとなったら、僕は男としてあまりにも惨めすぎる立場に立たされるのだ。犯人が目の前にいるのに——。

僕はそう考えた瞬間、赤城多摩子という女が無性にいとしくなった。まるで久しく恋し合っていた仲でもあったような気になった。何としてでも救けてやりたい。いや、救けずにはいられなくなった。

僕は、心を落ちつけるために、パイプを詰

め替え、ゆっくり煙を吐きながら、静かに、謎の男の前の席に腰を下ろした。測り知れぬ危険に備え、僕は頭の中で、右ポケットのジャックナイフをかき探った。

投げつけた眼球

謎の男は、読みふけっていた本から眼を上げて、不意に己れの静寂をかき乱した無作法をなじるような眼差しを僕に向けた。何という、その眼のおぞましさ！　それはまるで、糸みみずのべっとりとたかった、死んだ牛の眼だった。

僕は、故意に声を殺して囁いてやった。

「おい、多摩子はどこにいる？」

奴は、その一言を聞くと、サッと蒼ざめ、厚ぼったい唇を歪め、ジリジリと腰を浮かしはじめた。明らかに逃げ出そうとかかっているのだ。

「き、貴様だな、多摩子を殺ったのは！」

奴は、返事のかわりに、得体の知れない呻き声をあげると同時に、いきなりテーブルを僕の方に押し倒して、うしろの窓から飛び出そうとかかった。

僕も必死だった。奴の片足にしがみついて床に引きずり倒した。意外に手ごわかった。奴は弾ね返って僕を突き飛ばしたが、その拍子に、自ら後頭部をイヤというほど柱に強打し、脳震盪を起し、口端から泡をふき出してのけぞってしまった。

張りつめていた気がゆるんだのであろう、僕は非常な渇きを覚え、店のスタンドに置かれてあったジャッグを鷲掴みにして浴びるように飲み続けた。

奴を死なしてはいけない！

僕は、ジャッグの中の残った水を、奴の顔へぶちかけた。ぶるンと唇をふるわせて、奴は気を取り戻した。何よりも、何よりも今は多摩子の安否が気づかわれる。

「おい、多摩子はどうしているんだ！」

「……おそらく……」

奴は、牛のように呻めいて言いかけたが、ふたたび昏倒しかかった。僕は、奴の肩を激しくゆすぶりながら、狂気のように叫んだ。

「おそらく……ど、どっちなんだ！」

あとを聞くのが怖ろしかった。

「生きているだろう……」

奴は、辛うじてそれだけ言うと、とうとう意識を失ってしまったのである。

僕は、そのひと言を聞いた刹那、涙がポロとみぞれのように落ちこぼれ、この犯人をすら赦してやりたいような衝動的な歓喜に襲われた。

「ああ、多摩子は生きている！　多摩子はまだ生きていたんだ！」

僕は、呆然として事の成り行きを環視していた喫茶店の人々や、客の取り巻く中で、恥も外聞もなく、手ばなしで泣いた。泣きながら、僕は多摩子を深く愛していたことにはじめて気がついたのであった。

手短かに事情を話して、僕は店の女を使いにやって、S座の者に来てもらい、グッタリとのびている謎の男を楽屋へ運ばせたのであった。

奴を死なしてはいけない！

すぐに医者を呼んで注射をしてもらった。ようやくに奴は息をふき返した。

ああ、しかし何という不運なことであろう、奴は、後頭部の強打と共に言語中枢を破壊されてしまったのである。一言も口をきかなかったのである。不運はそればかりではなかった。紙をあてがい、鉛筆を握らせても、彼はただ頭を左右に振るばかりである。同時に文字も忘れてしまったのだ。

こうして一切の秘密は、奴の肉体の中に封

じこめられてしまったのである。

どうしたらいい？　僕は愛する多摩子が、どこかで生きているという事実を知っただけで、この悲運の前に崩れ折れてしまわなければならないのか！

「多摩子！　多摩子」

僕は彼女の名を呼びつづけ、髪をかきむしり、胸をうちたたいて狂気のように部屋の中を歩き廻ったと、この時である——。

僕は本当に狂ってしまったのだろうか。それとも、悲嘆のあまり幻覚に捉われたのであろうか？

僕は見た！

目の前の、部屋の入口に、にこやかな笑顔をつくった、しかしいようもなくやつれ細った多摩子の亡霊のような姿を——。

僕のその瞬間の驚きも、しかし奴の驚きにくらべたら物の数でもなかった。奴は、多摩子の姿が実在であるか幻覚であるかを見定めようと、あの牛のような眼をむき出し、肩であえぎながらジッと彼女の面に視線を吸着させていた。やがて、奴の額がアブラ汗でねっとりと光り出し、厚い唇がチリチリと痙攣しはじめた。カッと見開かれた大目玉から今にも真赤な血潮がほとばしり出るようだった。奴はいきなり、両手の指をその眼窩に突っこみもう半ば突き出している眼球をえぐり出すと筋とも肉ともつかぬヒモのような靱帯の付着したままの眼球を、多摩子を目がけて投げつけた。

「ひ、ひ、ひ、ひ……」

と、わけのわからぬ異様な、喚き声とも泣き声ともつかぬ叫びを上げながら——。それからは、ドッと血塊があふれと同時に奴の唇から、舌を噛み切ったのである。

多摩子は、その物すさまじい光景を、冷めたく見つめて何の感動をも受けないもののようだった。おそらく、彼女にとっては、奴の

この無惨な死にざまも、彼女に与えられた苦悩の償いには、まだまだ十分ではなかったのであろう。

彼女は、両手を伸べて、僕に抱きついてきた。僕はそれをしっかりと受けとめてやった。彼女の肩の何という痩せ細った痛ましさ！

地震

私がどうしてあの壺の中から脱け出せたか——いま静かに、その時のことを想い起すとからだ中が総毛立ってくる！　その時、重なり合ってひきおこった様々な外的条件が、一秒の狂い、十秒のずれをともなったら、私は絶対にこうして生きては戻れなかったのである。

絶望の三日間！　私の肉体はその三日間の恐怖の試練をうけて改造されてしまった。耳はもちろん、皮膚も髪もすべてが聴覚を持たされてきた。と同時に、嗅覚が異様に発達したのであった。私は全身で聴き、全身で嗅ぐ一匹の臆病な哺乳動物の牝に退化してしまったのではなかったろうか？

その三日目の夜だった。私は足うらに伝わって、かすかにかすかに響いてくる潮騒を聴いた。潮の香を嗅いだ。どこからそれは洩れ匂ってくるのだろう？　私は息を殺し、全神経を足うらに集中して、そのありもしない、かすかな音と匂いの源泉をまさぐってみた。私の、新しい感覚を備えた足うらは、その源泉をはっきりと教えてくれた。

私の足の下からこそ、まぎれもなくその音と匂いは立ちのぼってくるのだった。

私は、改めて壺の底を打診してみた。悲しいことには、底は厚さもわからぬコンクリートに固められているのだ。でも、それにしてはは不思議だ。潮騒の音は響くことはあり得ようが、潮の匂いは断じて隙間がないことにはは立ちのぼって来よう筈はない。壺の底には、だから少くともヒビ割れか隙間がなければならない。

私は壺の中で逆立ちになり、鼻をすりつけて、牝犬のようにクンクン嗅ぎさぐった。

可哀想な赤城多摩子よ！　悲しい裸のアクロパットよ！

私はついに発見した。ヒビ割れはちょうど壺底の円盤の中央に一線を劃して、はっきりと存在していたのだった。たったこれだけの発見が、私のいのちを救ってくれたいとぐちになろうとは！

私はふたたび元の姿勢にかえった。私は、この壺の底の円盤を、ヒビ割れにそって踏み抜こうとかかったのである。全身の力を足にこめて、私はその左半面を踏みたたいた。二度、三度と繰返すうちに、やがてそれはポッカリと踏み抜かれて落ちていった。そして、しばらくの間をおいて、かすかに、ガシャン！　と何か固いものにぶち当って砕ける音が響いてきた。ああ、何と、その下はかくも深い空間だったのである。その基底がどのようなものであるか、暗黒の中では見定めようもない。でも、ここから飛び降りる以外に、どのような脱出の手段がある？　私は、しかし、そのために死んだのなら潔よくあきらめられる気がした。それにしても、半分だけの開口では小さ過ぎた。私は両肘を壺の内壁にぴったり吸着させ、重心をその張り、左足をぴったり吸着させて右足を浮かした。右足で円盤の残りの半分を踏み破る。私のからだは、章魚のように壺の内壁に吸い着いて残される。飛び降りるのは、それからの思案だ。

こうして壺の底は完全に抜けた。私は肘を張り、股を蟹のように開いたすさまじい格好で、壺の中に宙乗りになって残された。もしこの壺の内側が、滑っこくうわぐすりが塗ら

れていたとしたなら、到底こんなサーカスの芸人のような芸当ができるものではない。幸いなことには、壺の内塗りは表面と同じように、いや、もっと粗雑で、肘がかりに、足がかりにも辛うじて役立つのであった。

波の音、海の匂いが、いまは大っぴらに聞えてくる。私はその下が、何十メートルもある断崖であり、おそらくは深くえぐられた洞穴の奥であろうと想像してみた。不用意に飛び降りたら、私はその真下の岩塊に頭蓋を粉砕されてしまうに違いない。私はゾッとすると、急に指先から力が抜けてゆきそうになった。

疲労が次第に私のからだを重くさせてきた。しびれる手足、おののく下腹、首が胸にめりこんできて、今にも頭から先に逆転しそうになる。でも私は必死に堪えた。顚落はもう時間の問題だ。でも、こうした絶望の刹那にだって、どんな奇蹟が現われないものでもない！

そう、たしかにそれは奇蹟と呼ぶだけの価値はあった、それは、突如として壺全体がはげしく左右に揺れ出したのである。私は何べんか振り落されそうになった。でも私は最後の力を振み出させてしがみついた。章魚が強大な吸盤の力でものに吸いつくようなわけにはいかない、人間である裸の私が、壺の中で宙吊りになり、両足を壺の内壁にふんばり、両肘を密着させて一生懸命にしがみついているそのすさまじい姿を想像したら、誰でも眼をふさいでしまうだろう。

肘からも足指からも血が流れた。人間の力には極限がある。顚落はもう時間の問題でしかない。

その地震は、海の中に起きたものらしい。それは恐ろしい津波をともなって、この壺の下の洞穴にも海水がドッと押し満たされたのである。ああ、その瞬間、私はついに力尽きて真逆さまに顚落した。そして、津波の退く力に奪い去られて、広い外海に引きずり出されたのであった。しかし、それはただ引きずり出されただけのことで、もはや生命は津波と共に海底に埋もれていかなければならないはずだ。私は、これでもうお終いだと観念し、そのまま気を失ってしまったのだった。

どのようにして私はその海辺に打ち上げられていたのであろう？　その奇蹟までは、私は知る術もない。私は、その海辺の人々によって救われたのであった。

殺人犯の男

多摩子の脱出記は、しかしそのまま信じてしまうには、あまりにも万事に筋道が整然ととのい過ぎている。第一、そのような生死を賭けなければならぬ、いわば一種の精神的虚脱の状態の中で、そのような理論的な行動がとられたということ自体が、すでに奇怪である。

僕はそれを、彼女の恐怖が生み出した妄想、救われた後に、極度の恐怖から解放された頭脳が生み出した一個の創作にすぎない、と考えている。真実は、もっと単純な、もっと必然的な過程に支配されたものに違いない。

彼女の朧ろげな記憶を頼りに、僕達二人はその壺のあったという家の探索に出かけたのであった。

犯人はすでに自殺してしまった。秘密は僕たちが探り出す以外には、何事も明らかにする術はないのである。

多摩子はすでに健康を回復し、精神も正常に戻っている。それでも彼女は、あの脱出記に関するかぎり、あくまでもその真実であり妄想でも幻覚でもないことを固執して譲らないのだ。

「多摩ちゃん、君は、もっともっと始めにさかのぼって、その大きな壺に封じこめられたということが、すでに君の何かこう、夢でも見ていたような、狂っていたものではなかったか、と考え直してみる気はないかね？」

「え、私が、壺に封じこめられていたのがウソですって？……どうしてそんなことを言うの？……じゃあ、私は三日三晩もどこにいたっていうの？　何をしていたっていうの？　おかしな方……」

多摩子は、からかうのもいい加減にして……とでも言いたげに、小さな抗議を、美しい唇いっぱいに含めて僕を睨んだ。

「まあいい……そんなら、そうとしておくさ。とにかく、その壺のある家が実在するかどうかを確かめることが先決問題だね」

僕は軽く笑って、彼女に導かれるままに、彼女が救われたという海辺の貧しい漁師の家に行ったのである。

そこは大森の町外れにある、釣客相手の船宿であった。

僕は肚の中で、そら御覧、と思った。大森や蒲田、いや、京浜間の海辺に、彼女が見たというそんな断崖のあるはずもなし、まるで外洋の荒海のような潮騒もするわけがなければ、波濤にえぐりとられた洞穴などのあろうはずがないからである。

僕が「ははーン」と頷いていると、そこへ出て来た人の好さそうな五十五、六のオッサンが、ニコニコしながら、彼女には思いもよらぬ話をして聞かせてくれたのであった。

その話というのは、

「娘さん、あんたはあの朝、わしの家の前に気を失なってぶっ倒れていなさった。どこからどうやって来たのか、夜通し歩いていたとみえて、着物は夜露でグッショリだったし、額にさわってみると、火のようなひどい熱だ。わしはすぐに家の中に抱き込んで、女房と二人で介抱してあげたよ。むろん医者も呼んだし、お巡りさんにも報らせた。しかし、お巡りさんは、ひどい熱だから動かしてはいけないと。熱の下るまでこのままここで面倒みてやってくれと言われた。何も持っていないので身許は判らないし、わしも女房も困ったが、まさかそんなあんたを無理に警察に押しつけることも人情としてできないじゃろうと三日三晩うなされ通しで、しょっちゅう、壺がどうしたの、何がこうしたのッて、譫言の言い続けだった。やっとよくなられて帰るところもわかるようだったから、わしらは何も聞かず言わずに帰してあげたが、見れば、もうすっかりよくなられたようで、まずは何よりですわい。娘さん、あんた夢遊病とかいうものにかかって、あの晩はフラフラと夜通し歩いて来たらしいね、あ、ははは……」

多摩子は、鳩が豆鉄砲を食ったように、大きな眼をみはって、ぽかんと口を開いたままだった。

「ねえ、多摩ちゃん、この小父さんの言っていることは本当なんだよ。君は、あの男にさらわれたんでも、壺に閉じこめられたんでもなんでもないんだ。みんな君の熱が、恐ろしい夢を見させていただけなのさ」

多摩子は、しかしにわかにそれを信じようともしなかった。到底信じきれなかったのであろう。

「教えて！　わかるように話して！　でなかったら私、気が狂ってしまうわ！」

「君は必要以上に、あの謎の男に怯え過ぎていたんだ。あの男の、奇妙な合図……あれは奴の何でもない癖だったんだ。むろん、奴は常人とはちがった性格の持主、美しい女性を見た時に限って、発作的にああした癖を出す、一種の癲性の持主なんだ。何も君に限って、あの合図をしたわけではなかった——。壺？

……どうして君が壷の妄想にとらわれたかッて？……　そこまでは僕にも想像はつかないよ。だが、強いて君の気持を推してみれば、君は奴の眼から逃れたい一心で、何か安全なものの中に身をかくしたいと一心に思いつめていたのじゃないかね。それと、あの宿直部屋の隅には、かなり大きな花瓶が置かれているはずだった。君は頭のどこかにそれがある。そうだ、あんな壷の中に身をかくせたら安全だろうと……ちょうど、章魚がタコ壷を安全な隠れ家と信じこむように……」

「ああ！」

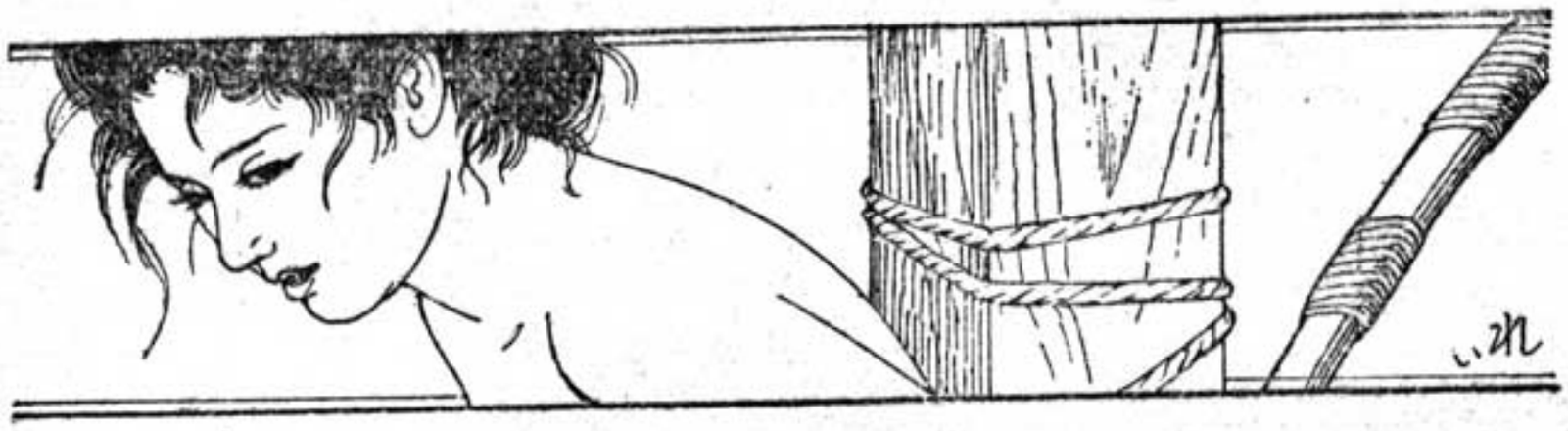
多摩子は深い嘆息をついて、覆いかぶさる妖気を払いのけるように頭を揺すぶった。

「だったら、なぜあの男は、私の生きている姿を見て、あんな気違いじみた自殺をしなければならないほどの衝動を受けたのでしょう？」

「そう、あの男はね、後になって刑事の口からすべての秘密が明らかにされたんだが……自分の貧乏にアイソをつかして不貞を働いた妻を、自らの手にかけて殺した殺人犯人だったのさ。奴は、完全に殺したと思っていた妻の顔を、君のやつれ果てた相貌に見出して、恐怖のあまり発狂してしまったんだ」

そう説明しながら、僕はふと一つの疑問に突き当った。

あの喫茶店で、僕が奴に「多摩子はどこにいる？」と訊ねた時、奴は形相を変えてふるえ出したではなかったか。それについては、僕はまだたしかめてはいないが、多分、奴の妻の名が偶然赤城多摩子の〝タマコ〟と同じだったとみてよいと信じている。



……裏窓忠臣蔵……

のぞき見平内

矢桐重八

「あッ、お許しを……身に覚えはございませぬ、ああッ」

嫉妬に狂う夫の折檻に身悶える若妻の乱れ姿。

のぞき見る平内にはこの上もない妖しい法楽……だが自分の出まかせからここまで事が大きくなろうとは……さすが空恐ろしくもあった。

無実に屈するはずのない女に、夫の妬心はさらにかき立てられて行くのだ——。

次号掲載!!　乞御期待!

情艶三の丸

伽羅肌ごよみ

妬情・愛執淀む大奥に将軍をしかと捕えた京女の肌！

岩堀光

東桂史・画

光る玉の肌

おそろしいほど、綺麗な、娘だった。

道でお玉と行きあうと、たいていの男は、まともに顔をみつめることができない。しぜんに規線を伏せるか、反らせるかしてしまう。そして、なにやらぽッと光る玉のようなものを、胸底に焼きつけられる。それが何刻か後になって、奇妙な痛みを伴ってくる。やっとのことで、であったあの美しい女の肢態を、それぞれの心の尺度で、勝手に想いえがく——と、いったていの娘だった。

だからといって、お玉は、別に人よりも着飾っているわけではない。むしろ、化粧もしてないし、衣裳も粗末なのだ。京の北小路露路をはいった、長屋の娘である。貧乏なのだ。それなのに、その顔、いや肌

理に、絶妙の美がある。それは天性、光を放っているように、輪郭がぼやけてみえるほどだ。

八百屋の行商で細々暮している父の太郎兵衛、母よねは、共に娘自慢である。

お玉が困で、たいへんな栄華をみられないとも限らない、と、楽しんでいる。竹取のおきなの昔語りではないが、お玉を、島原に出したとて、一級の太夫さまになるだろう。その艶名がとりもつえんで、いい旦那がつけば、それこそもう大根や人参をかついで歩かなくてもよくなろう。たとえば、百金ほども親の手にはいるかもしれない。

そこへ行くと男の子はクソの役にもたたぬ。二人あったが、長男は二条家の公卿侍に下働きをしている。次男は家でぶらぶらしているくせに、大根の泥を洗い落そうともしないのだ。お玉は末ッ子だった。

夫婦はお玉の奉公口をふだんから、これはと思う人に頼んでいた。もちろん〝ただ奉公〟になるようなことはしないつもりだ。一文でも多く金になりそうなところを選ぶつもりなのだ。できるだけ多くの人に口をかけておいたのもそのためである。

仁和寺の亮賢和尚も、その頼まれ人で、彼は、お玉がひいきなのだ。いつだったか、お玉が母に伴われて参詣したのにであい、

「これは素晴しい容貌の娘ごじゃて。左様、男ならまず、天爵の位と申そうか。おもとは女だが、まず将来に、驚くべき上福を得られましょうな」

と、讃嘆した。

美人に対する、坊主らしい理屈っぽいおべっか、にしてみたところで親の身になれば嬉しい。いらい八百屋はなにかにつけ、娘のことは亮賢に相談していた。

「どうじゃな、お玉殿を部屋子に上げてみられては？」

と、彼から話があった。

「部屋子というのは、なんでおす？」

「左様、まあ京でいえば官女、時の運で女御にも更衣にもなれようほどじゃ。江戸のお城の大奥にお勤めするのじゃがな」

「とんでもない、わてらの娘がそんな」

「そこじゃて。八百屋の娘では難かしかろうが、そこはいろいろ裏もある。と、いうのは、こんどお万の方、この人は、春日局にかわる権勢があるといわれるのじゃが、その後中臈さまが、久々に故郷の京にお里帰りなされ、当寺にもご参詣なさる。そこでおりをみてお玉殿をお目見得させてみては、と思うて、そなたに相談してみるのだが」

太郎兵五に、いなやはなかった。

恋と打算

「それ承知せなんだやろうな？　断わってくれたやろな？」

と、敬次郎は、お玉にせきこんできいた。

彼は気弱な癖に、短気なのだ。七条加茂川辺の仏師の内弟子だった。まだ、年期明けもほど遠かった。お玉から奉公の話があったと聴いただけで、もう、からだが小刻みに震えている。二人は、彼が一人前になったら、お互いの親に話して、世帯を持とうと約束していた。

「ご奉公に上ったら、三年間は宿下りもできないんですって」

「そんなことよりも、お玉さんの腹を訊いているんだ。なんと返事をした？」

「別に、返事ってしなかったわ」

「断わってくれたのだね」
「断わりもしなかったけど」
と、お玉は答える。そして何を思ったか、突然、敬次郎の手をとって、自分の胸に押しつけた。
「あたしを抱いて」
「どうしたのだ？」
「敬次郎さん、あたしを好きにして……」
敬次郎は、お玉のからだを支えかねたように、草の上に倒れた。十七才のお玉が、彼よりもずっと年上にみえた。これまでは、敬次郎が情欲にかられて求めても、お玉は唇以外は拒んだのに、今は、逆だった。敬次郎はかえって、彼女の要求に応じて気持がたかぶらなかった。
「何かあるんだね。何かあったね？」
彼は、お玉を突き離すようにして訊いた。
「敬さんの意気地なし！」
と、お玉はいった。
「なぜ、お玉さんは、おれの問いに答えようとしないのだ」
「あなたの年期が明けるまで、まだ、二年もあるわ」
「それがどうだというのだ」
「それから職人になっても、一人前の仏師になるには四、五年、あたしたち、貧乏でいなければならないわ」
「なにをいおうとしているのだ？」
敬次郎は、突然、ある予感につかれた。
「承知したんだね。ご奉公に上るんだな！」
「あたし、いっぺん、ご殿暮しをしてみたかったのよ。一生、貧乏でいなければならないなんて、がまんできなかったのよ。だから、だから、敬次郎さんに、何もかも、あげようと思ったのに」
「馬鹿！　馬鹿！　まるで、売女の考えだ」
お玉は、もう先刻の激情を忘れた顔をしていた。冴えた美貌が、無表情に近かった。
「さようなら」
「待て！　待ってくれ！」
敬次郎は、お玉の袖を捕えた。
「よく考えてくれ！　江戸城なんかに上ったって、女の幸福はないんだ！　奴隷なんだ。将軍のなぐさみものなんだ」
「あたしはそんなにならないかもしれない」
「それが間違いなんだ。誰だって、自分はちがうと思っているのだ。お玉さんを幸福にできるのは、おれだけなんだ。それとも、お玉さんは、おれを愛していないのか！」
「愛しています。だから、別れる前に、あたしをあげようと思ったのに」
「畜生！」
敬次郎は、お玉の袖をひきちぎった。
「さようなら」
と、お玉は、もう一度いった。

美しき尼のやわ肌

お万の方は、お玉をひとめみて、気にいった。お玉が引退ると、彼女のほうから、亮賢にきいた。お茶を運んできたお

「あの娘は？」
「当寺の旦那の娘でございますが、行儀見習のために、預かっております」
「どうであろう。わらわにくれませぬか」
亮賢は思惑通りにことの進んだのに、むしろ、驚きを感じた。
しかし、お万が、お玉を望んだのは、亮賢が考えているほど、単純に、お玉の美しさのためばかりではなかったのだ。もしそれだけならば、お万の方も、お玉ほどには美貌であった。ただ、その美しさが、今も将軍家光の心を掴んでいたならば、彼女は、決して、お玉などを身近におこうとはしなかったろう。
美しさを売物にする女は、男の視線が、自分以外にそれるようなものをとなりに並べるほど、おろかしくはない。お万は知っていたのだ。将軍の心をもし彼女が掴んでいるとしたならば、それは、彼女の美貌ではなく、もはや習性でしかないのを。
お万は六条宰相有純の娘である。れきとした家柄だ。幼年で尼に入った。伊勢内宮社僧慶光院となったのは、十六才。慶光院は常紫衣を許される重い寺格で、三百石の御朱印づきだった。そのため、彼女は上洛して、お礼のため将軍にお目見得した。
家光ははじめ女よりも男が好きで、酒井重澄や堀田正盛などの小姓たちを愛していたが、途中から、人なみな道を選びはじめた。
彼の大奥を取締っていた春日局が、美女を集めて、将軍風呂係りを命じたからである。気恥かしげな美貌の娘が、たくしあげた袖やからげた裾から覗く、露わな肌をもてあつかいかねながら、からだのすみずみまで洗ってくれる様子に、家光の意が動かぬわけはなかった。
次々と、彼は、娘を愛しては忘れた。中でも特別気にいったのは、おふりの方、お夏の方と呼ばれる女で、みんな風呂で発見したものだ。
そんな家光は、お万をみて驚いた。
端正な顔、なにより気品にあふれていた。浄らかにそられた頭の青さまでが、黒髪以上に心をひきつけた。むらさきの衣の袖からみえる肌の雪のようななめらかさ。それらは、小鳥を手づかみにひねりつぶすようなことの好きな家光の心を捕えるには充分だった。彼は寺社奉行を手許に呼ぶと、
「慶光院を還俗させるぞ」
と、いった。
お万は、江戸城内から出されぬ自分に、危険を感じていた。夜になって、大奥の年寄が来て、むりに彼女のからだをあらためた時、すべてを察した。反抗はできなかった。
「僧の身、仏罰がおそろしいのです。どうぞお許し下さいませ。決して、上さまがいとわしいというのではないのです」
「許さぬ！」と、家光は、白い衣裳だけになった青道心をいためるようにこびで、叫んだ。
「仏罰が恐ろしければ、なぜ、そのように形の良い乳房を持っている。みるがよい。そなたの胸も、腰もが、女でなくてなんであろう」
春日局は、お万が気にいらなかった。お万は、春日の勢力下にある女性ではなかった。彼女のいいなりにどんなことでもなってゆく奴隷ではなかった。むしろ、彼女の敵である。御台所派に属する人間である。ただ、彼女は家光より年が上だったので、家光は、嫌ってあまり大事にしない。そのために、大奥の勢は、春日局勢力下に統べられていた。中でも特別気にいったのは、

お万に対する家光の愛情が、日に増し激しいのをみた春日局は、この上、お万に子供でも出来れば、自分の失望をみないとも限らないと思った。彼女は、天下の諸侯に、機会あるごとに、美女を差出すように命じ、いっぽうでは、

「堂上方の姫に、御子でも出来れば、幕府の施政上、面白からぬのではござりませぬか」

と、老中をたきつけた。

そうして、お万には、奥医師に命じて、避妊薬をのませた。

お万は美しいばかりか、理性にも富んでいた。彼女は、春日局のやり方を冷たい心で眺めていた。もう、あのおばあさんも年だ。いつかは、自分が、あのおばあさんのようなやり方で、大奥を支配できぬとも限らない。それには、将軍を、細く長く握っておくことであろう。彼女は、家光の自慰的な変態趣味を充分に勘定にいれ、彼の心をにぎっていった。

家光が、いちばん愛した女は、お楽といった。春日局が上野参詣の途路見出した女だ。お楽はいなやもなく、春日の手で家光の伽を命じられた。家光は、誰にもまさる、その美貌に驚いた。彼女は、懐胎した。

男の子が生れた。家光もよろこんで、自分で産室へはいっていって、

「お楽、若を生んだぞ。天晴れだ」

と、いった。それがいけなかった。気弱なお楽は、人事不省に陥入って死んだ。彼女は微賤な牢人の娘だったので、突然、おとずれた光栄にまなこくらんだのである。

家光は、お楽に死なれてからも、次々と女を愛していった。しかし時々、彼女の面影を想い出すと、無常をふっと感じた。

春日局が死んだ後の大奥は、お万のひとり舞台であった。彼女に対してだけは、気まぐれな家光の愛情は少しもおとろえなかった。

ほかの女たちは、たいてい、むこうから与えられたのである。家光がもっていた奴隷たちだ。ただ、お万だけは、彼が奪ったのだ。

春日局がいなくなると、家光はお万に、

「そちがこれから、春日にかわって、いろいろのことをみてくれよ」

と、いった。

お万は、春日時代の女たちをしりぞけて、自分の仕込んだ女で家光の身辺をかためた。お万の勢力がどれだけ大きかったかは、そのころまで、戦国の武勇を誇っていた諸大名が、急に京流の礼法をやかましくいうようになり、身辺を飾り出し、元禄の下地を作っていったのでもしれよう。

「供廻り、がさつこれなきよう」

と、いうお万の言葉が、そのまま家光の口を通って諸大名に伝わったからだ。

しかし、お万は、君寵が、自分のからだだけを種にいつまでも続くとは思っていない。彼女も春日局の流儀を学んで、天下の美女を集めて家光の心を掴んだ。

いってみれば、お玉を見出したのは、そんな奴隷業者の眼であった。

お玉は、お万の方のお言葉をきいて思った。

「それでも、なんて豪華な暮しだろう。京都に来たというと、お宿はのを、犯されて、還俗した六条の姫なのか？　あの人が尼さんだった毎日、天下の大名共からの道中お見舞の送りもので、門前市をなしているという。あれだけものがとれるのなら、坊さんを売ったって惜し

くはない」

お万は知らなかった。八百屋の娘が、何を考えているのかを。

お玉はつぶやいていた。

「あの人は仏を捨てた。あたしは恋人を捨てよう」

だから、何もかもやろうといったのに、よう受取りもしない敬次郎に、未練などなかった。

京土産の味

家光は帰って来たお万の方の部屋にさっそく出むいた。お小座敷で茶菓子を前にして、彼はいった。

「面白い旅であったか？」

「はい。ありがとうございました。上様に、この上もないお土産を差上げたいと、万はずいぶん心を入れました」

「ほほう、それで？」

「やっと、味も香りも至上のものを」

「うむ、みせい」

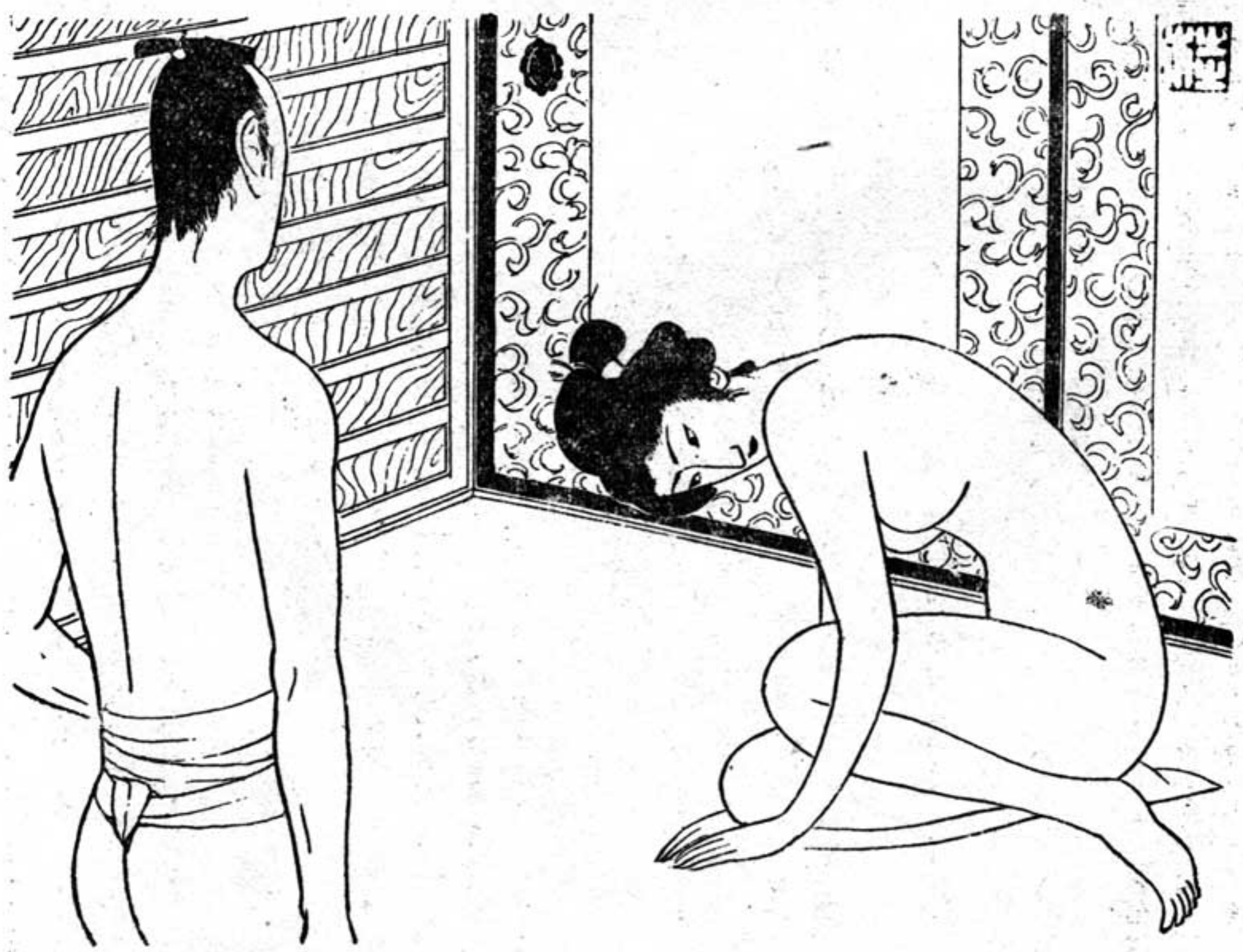
「ほ……、そう心急ぎ遊ばしますな。まず、お風呂など召して」

「風呂か。そういえばお楽を思いだす。あれが、予の眼にとまったのは、今宵のように、庭の桜も花を落した、なんとなく物の哀れを思わす宵であった」

彼が、想い出を追うように、ふと、廊下をへだてた庭に瞳をやった時である。そこを、ちらッとかすめすぎた女がある。

「おお、お楽……」

と、思わず家光はつぶやいた。



女は、廊を廻って、部屋の前に手をついた。台に盛ったまんじゅうを持って来たのだ。

「万、あれに似ているぞ。お楽に」

「京土産、お気に召しましたか？」

「なんと申す？　うむ、気に入ったぞ」

「この度、京より部屋子に召連れました、玉と申しまする」

「玉か？　玉、湯殿へ案内せい」

湯殿の東には、杉戸のはまった戸棚があった。家光が命じたのに、そこで、彼の着物をぬがせにかかったのは、別の女だった。

柳板の障子を開いて中にはいった家光は、そこでも、彼を待っていたのが、お玉でないのに、少し不機嫌になった。春日局なら、いやおうなしに、流しの役目を彼の望む女に命じたろう。

「万め増長しおって」

湯ぶねは卵形で、そのふちに四尺四方の栗の台がついていた。そこに家光は、裸形をさらしながら、女たちが、からだを洗ってゆくにまかせていた。いつか、お楽もこうした時、彼の眼にとまったのだ。

「もうよい、上るぞ！」

家光は不機嫌にいった。檜の厚板をはりめぐらした十二畳もある部屋を出ると、上湯の間にはいった。そこで、彼は、思わずぎょッとして、裸身のまま突立った。

お玉が、羞恥をからだ一杯にしめして、手をついていたのだ。しかも、彼女は、家光とおなじように何も身につけていなかった。家光は、その細い首や肩のやわらかな円やかさ、そして、背筋を流れ下る線の絶妙の造形美にうたれた。なんという肌の美しさだろうか。お楽と似ばなかった。はじめて知ったころのお万の尼の肌も人並秀れていた。その点では、さすがに京育ち、誰も及ぶものはあるまいと思われた。しかし、今、家光が眼にしているものは、それを遥かにしのいでいるのだった。しかも、その美しさは、内からにじみでる若々しさで、ぴちぴちはね動きそうなのである。

家光はしばらく、言葉をかけるのも、手を出すのも忘れていた。

「万の奴、さすがに心得おるわい」

と、彼は思った。

かりに、尋常に伽の相手を申しつけたとしたなら、家光にこの感動はなかったかもしれない。髪をくしまきにしてしまって、白無垢の着物を着て、五枚重ねの金襴ぶちどりの布団にくるまっていたのでは家光に、これほど幻しを征服するような欲求を覚えさせなかったであろう。

「玉と申したな。来い、もう一度洗うぞ」

家光は、つと寄って、玉の手をとった。

お玉はびくっとからだをおののかせて、家光の手を払った。

「お触れになっては、いやでございます」

「なに？　なんと申した？」

これは家光にとって、意想外であった。彼の命を拒み、彼の手を荒荒しく払いのけた女は、未だかっていないのだ。しかも、お玉は、黒塗ぶちの杉戸にそって、ひょうのような眼を光らせながら突立ったのである。

「お寄りになってはいやだと申上げたのです。玉は、今さきお女中方に、無理にこんな姿にさせられて、この部屋になげこまれました。上さまがおいでになるなどとは、誰もいってはくれなかったのです」

家光が一歩寄れば、お玉が、敏捷に一歩からだをずらせた。
「おのれ、小癪な！　予の腕を見事逃れてみるのかッ！」
「上さまは好きです。でも、こんなことはいやなのです」
「うむ」と、家光はうなった。お玉の言葉は、彼にとって耳新らしいことばかりだ。彼はまるで狩場で獲物を追うような、激しい意欲を覚えた。そう思うと、お玉の動きそのものが、野性のけもののように生気にあふれているのだ。彼は、たたっと飛びかかると、細い娘の肩を鷲掴みにした。
「いやッ！」
と、激しい叫びを上げて、お玉は、家光のたくましい胸を両手で突いた。そしてくるりと身をひねると、障子をくぐって、となりの部屋に逃げた。そこはれいの家光の衣裳をしまった戸棚のついた六畳である。そして、なるほどお玉のいうように、無理に裸にされたらしく、床に、彼女の衣裳が、色もはなやかに乱れ散っていた。それに足をとられて、お玉が倒れた。
「とったぞ！」
家光は、素速く、その白い背にかぶさった。お玉は、拒みながら、しかし、再び立上って逃れようとはしなかった。さすがに家光の腕力は、彼女に数倍したためだろうか。
お玉は考えていた。
「ちょっとのがまんなのだ。そう、お万の方はいった。けれど、あたしはがまんしているわけではない。この人は、あの敬次郎などより、ずっと男らしいもの」
湯殿から出た家光は、お万の方にいった。
「今宵の伽は、お玉に申しつけるぞ」
「まあ、もう終ったはずなのに」
と、お万の方は思った。こんな激しい家光の執着は、全く異例のことであった。

玉の輿の味

お玉はすぐに彼女だけの部屋を賜わったが、彼女は、何によらず、お万の方に打明けて、彼女の指示通りに動くようつとめた。だから、彼女に仕える女中たちも、すべて、お万の手の内のものである。お玉はちゃんと察していた。たとえ家光に愛されたとて、彼の眼が四六時、女を見守っていてくれるわけではないのだ。当然、大半の時間は、大奥という、女だけの都に暮さなければならないのだ。
彼女のように、身分もない、それと名の知れた後立てのないものが将軍の手つきとなると、どれほど、他の女たちの心を焼くものかを、お玉は見もし、聴きもした。彼女は、お万という権勢の人の心を捕えそれを盾にすることにしたのだ。もう子供の生めないからだに、春日時代にされてしまっているお万は、そんなお玉を愛した。お万の方は春日局とちがって何かと将軍にかえりみられない御台をいたわった。
そしてお玉に、
「上さまが、時には、中の丸に出むかれるようなことがあったら、けるがよい」
と、入智慧した。
そのためだろうか、家光は、忘れてしまったような、御台のいる中の丸に時々通うようになった。彼は、御台に隠しもせず、
「あなたをこうして尋ねるのは、お万やお玉のためですよ。あれらは

あなたひいきでのう。家光も惚れた女には弱いて」

と、いった。

そのために、寵姫といえば眼の仇にする、御台附の老女たちも、お万やお玉には好意を持つようになっていた。

お玉は、奉公はじめに、度々、無残な女のすがたをみた。それは、何げなく、大奥の廊下を渡っていた時である。誰の部屋か、布団をしまってあるところから、女の呻きの上るのをきいて、覗きみたのだ。

衣裳をはぎとられたひとりの女のまわりには、猛々しい老女を中心にして、四、五人の女が坐っていた。

「白状しや、なんどお情けを受けなされた。隠しやるな。隠しやっても、ほれ、そなたのからだには、伽羅の匂いがしみているわ」

考女が、裸の女のからだのすみずみに鼻を寄せて行く。そのたびに女は、身をもんで逃れようとする。それを女たちは、手取り足取り押えつけるのだ。

「うふッ、もうお許し下さりませ。隠しごとはいたしませぬ。すべて申上げましたものをなんで、そのほかに」

「なんと憎げなことよのう。ぬけぬけとようういいぬけられたもの。そなたがいわいでも、からだにいわせて進ぜよう」

火鉢に差した焼火箸をとると、老女はすいと情容謝もなく、おおむけの女の肌にあてた。ひえッ！　と、女は悲鳴をあげると共に、数人の女中たちの押える腕をはねのけた。すさまじい力である。そうして四ッ這ひになると逃れようとした。

「おのれ、ふさまな！」

と、老女は、持っていた火箸を、はっしと女に投げつけた。

きやッ！　と、その場に悶絶する女を、再び捕えると、ずるずる髪の毛もって庭にひき出して水を浴びせた。

お玉は、戦国のころからこのかた、ずいぶんいろいろ残忍な刑のあるのを、見聞していたが、こんなにねちねちと、いやらしくしつこいのはみはじめであった。たいていは、男が女をどうしたという話よりしらぬ、彼女は、はじめて、同性の心の底にあるものの激しさをみせつけられたのだ。

「そのようなことは、この世界では日常事なのですよ。たいして名もない人が、お上の寵愛を受けたといっては、水風呂にいれられたり、打擲される。やれ、老女さまの愛を裏切って、誰といっしょになったといっては、いじめぬかれる。なんといっても、ここでは、上さまがいに男はいない。ほかのかたは、自然に、おなじ性のなかに男の役をみいだしなさる。そんな争いもあるのです。そなたなどは、わらわというものがあるから、誰も手を出そうというものもないのだが」

と、お万の方はいった。

「恐ろしいところなのですね」

「ここでは、権力だけが、自分を支えてくれるのです。みながみな、女を売ものの奴隷なのですから、お上の下された権力をどう守って行くかだけが大事なことになるのです。げんに、このお万なども、尼僧から上の寵愛を受けるようになった時、全く生きた思いはありませなんだ。京の者というだけで眼の仇に思われる春日局が在世中だったものですから。でも、父の名があり、わらわの格もあって、手荒な真似は受けなんだが、それでも、もう子供の生めぬからだにされてしもうた」

お玉は、しかし、大奥をそれほどいやには思わなかった。たとえ何があっても、京の北小路の露地住いよりはいいと思ったのだ。

女の歓びと宝もの

お玉が、自分のからだの変調を知ったのは、城に上ってから一年半ばかりたった正保二年七月ごろである。食物をみると、胸苦しくなるのだ。動物好きの彼女は、部屋に小鳥や、犬をかっていたが、その匂いもいやになった。もうものを四月もみない。

「油断をしてはならないのだ」

お玉は思った。彼女は、家光と、お万にだけ打明けると、絶対、誰にももらしてくれるなと頼んだ。

「おお、若を生めよ。きっと若を生めよ」

家光はお楽の生んだ子と、お夏の方の生んだ子があった。ほかに数人の子供は生れたが死んでいる。彼は、お玉に子供が生れたなら、彼女の子を後とりにしたいと、ふと、思った。

お万の方は、自分の娘のようにしているお玉の子だから、これは、手離しで喜んだ。彼女は、お玉の食事から、日常の行動までを、充分に監視させた。誰が、どんな方法で、お玉を傷つけぬとも限らないのだ。

実際、子供を生む、と、いうのは、大奥の生活では、文字通りいのちがけであった。大奥取締の任にあるお万の方とて、油断をすれば、お玉の身を保証しかねた。

春日局在世中のことである。

御台所附きの女中、お琴という人に家光の手がついた。間もなく、彼女が妊娠した。優しい御台は、できるだけお琴を保護したようだが春日局に知られてしまった。

「お琴どの、そなたお上のお子をみごもられたそうなが」
春日局は、お見舞と称して、お琴を訪ねると、いった。お琴が恐る恐るうなずくと、
「それはそれはめでたい。徳川家のために万代のしあわせ、強い和子をお生み下され」
春日は嬉しそうにいった。
数刻後、お琴の許へ、春日局から使いが来た。
「ご安産のため、お腰をさすらせましょう。わらわのほうに、上手のものがおりまする」
と、いうのである。
お琴は八月をすぎたころだった。流産しやすいころでもある。動きたくはなかったし、行きたくもなかった。しかし、春日局が親切に申して来たものはこばみも変らぬ。
お琴は案内の導くまま、春日局の部屋についた。そこで、通された小座敷に待っていたのは、老女と、女中たちで、局の姿はなかった。
老女がいった。
「こちらへおいで遊ばせ。着物をおぬぎあそばさねばならぬでな」
そこは化粧部屋である。たちまち、上衣から、下着までもぬがされると、仰向きにならされた。お琴の方は、自分の醜い恰好をみつめる眼に堪えかねて、何べんも起き上ろうとした。ついには、
「うちかけなりとかけてから。さすってたもらぬか」
と、懇願した。
「なんのこの中に、天下さまがはいってござるを、羞かしがり遊ばすことがござりましょう。もっとゆったりと、ふくれ上ったお腹をわれらの眼にさらしなさるがよい」
と、老女は、ぼんぼんと掌で、お琴の腹を打った。
「あッ、何をなされます。無礼な」
お琴の方は、起き上ろうとした。しかし、ほかの女たちが、ご遠慮遊ばしますな、さすってお貰い遊ばせ、と、四肢を押えつけた。
春日局からは、将軍にも、御台にも、老中にも同じ届けがなされた。
——お琴の方、流産のため、病死——
将軍家光だけは、それを信じた。後は、誰も、文字通りにはとらなかった。大奥で死んだ女の屍体は、一日も置かれはしない。夜になると、不浄門から運び出されるのだ。
お万の方は、まだまだ、おなじ例をいくつも知っていた。お玉は、お万の用心ぶりを、ありがたく思った。
「あの人がそうしてくれるのは、あの人のためなんだ」
と、思いながら。

八百屋大名

お玉の方が、男の子を生んだのは、正保三年一月八日である。お玉は二十才になっていた。もはや、彼女は、大奥で愛寵をほこるお中臈である。
家光は、お楽の時でこりているので、男子安産のうわさをきいても三日間は、お玉を尋ねなかった。しかし、三日目には、がまんができなくなって、自ら、産室を訪ねた。
だが、ここで、女中たちを驚かしたのは、お玉が、寝たままで、将軍をむかえたことである。家光は気にもとめなかったが、寵愛の深さは、さすがにかげ口になった。

「お里が知れますわ。八百屋の娘とか申しますぞえ」
しかし、お玉は平気だった。来るのは将軍の勝手なのだ。お楽が死んだのは、絶対安静にしていなければならないのに、体を起して平伏したからなのだ。お玉は家光にいった。
「お上のお顔を拝して嬉しうございます。玉は、生みの苦しみの間中ただ、お上に似た子をと念じました。わらわは、今動くと、ほかの病が出て死ぬと奥医師が申します。このような格好で、お上をおむかえしとうはございませぬが、おゆるし下さいませ」
「ばかなことを気にするな」
家光は、なんだかお玉がいっそう美しくなったように思った。寝ている女をみるのは、彼には珍らしいのだ。
「わらわは動けませんから、御子をまだみていませぬ。あのように念じていたもの、きっとお上に似ていると思いますが、似ていると思いますが、似ていなければ、いやでござりまする。お上、御子をみて下さいませ。お上に似ているか、みて」
「うむ、似ていたぞ！　似ていたとも」
おれはこんな皺くちゃで、赤くはないと、家光は思ったが、嬉しそうにいった。
その時の様子をきいたお万の方はさすがにあきれて思った。
「あれは、いろいろの点でわたしに似ているが、わたしの及ばぬ点が一つある。それは、みながかげ口つくように、あれが八百屋の娘だということなんだ」
若君御誕生となると、すぐに老中に伝達された。京都にも知らせなければならぬ。幕府の早打ち飛脚が、京都所司代に走った。
八百屋だったのには驚いた。所司代自ら、駕籠の用意をととのえると、ひとまず、お玉の兄が、下働きに出ていた二条家に移した。
「北小路太郎兵衛藤原宗正侯は御滞在でござろうか？」
と、その日から、各大名の京屋敷から、祝いの使者がたえない。その度に、所司代からつけられた侍が応待に出た。
「ご丁寧なるご挨拶、殿にはいたくおよろこびでござる。おってお玉の方様と御対面のみぎりは、よろしく伝え申すとのお言葉でござる」
北小路太郎兵衛は、最初の内、所司代から以後、そう名乗るようにいわれても、どうにも他人の名に思えてしかたがなかった。しかし、しだいに馴れた。あのぶらぶらしていたお玉の次兄までが、後には、常陸笠間で七万石、本荘因幡守になるのだ。
家光も、老中の報告を受けて、満足のようであった。
「お玉の方さまご実父は、ただ今、京所司代より報告致してきましたところによると、二条関白光平殿のゆかりにて、北小路太郎兵衛藤原宗正どのと申される武士でございます」
お万の方は、家光から、そういう知らせがあったときかされても、別に否定はしなかった。ただ、お玉に、
「これからは、そうお信じなされませ」
と、教えた。
家光のお玉に対する寵愛は、長くかわりがなかった。彼は、在職中建築と女色に浮身をやつしたが、政治のほうはわりにうまくいった。彼が名君だったからではなく、腹違いの弟、保科正文が、もっぱらその面で兄に代行したからである。
お玉の生んだ徳松は、慶安四年上州館林で十五万石、つづいて寛文元年には三十万石の大守になった。

お玉は江戸城内三の丸に住んでいた。

家光が四十八才で死んだ時、お万の方は三十一才、お玉は、二十五才にしかならなかった。

お万は大奥をしりぞいて、もとの尼になった。

お玉は桂昌院と称し、館林にいって、若年の子供にかわって、諸事を切り廻した。

国政は、すべて彼女の意のままであった。

四代将身はお楽の子で、その死後、お玉の生んだ館林候綱吉が、将軍職をついだ。

ついにお玉は将軍の母になったのだ。

彼女の出世の糸口を作った仁和寺の亮賢は江戸に招かれて、神田知足院を賜わった。

後に寺領三万石、関東真言の大檀林、護国寺の住職となり威権をふるった。

お玉が、知足院に参詣する途路のこと、ふいに、彼女の行列を乱したものがあった。

「何事ですか?」

と、お玉が伴侍に訊くと、怪しい町人が、彼女にあわせてくれと願い出たのだという。

「それで?」

「引捕えましてございまする。すぐさま町奉行に引渡します」

「なりませぬ。今日は、大猷院さま（家光）菩提のための参詣です。そっと寺まで連れてきやれ」

と、彼女は命じた。

知足院の奥院で、彼女は、侍に引立てられて来た、敬次郎にあった。

彼女は、彼をみたわけではないが、彼ではなかろうかと思ったのだ。

警護の武士を去らせてから、お玉は、微笑をふくんでいった。

「久しいことでございますね。今はどうして暮していなさる?」

「お玉さん。わたしがいのちを投げ出してあなたの、行列を乱したのは、ひとめあなたにあいたかったからだ。わたしは、今もひとりでいる。あなたと別れて、どうしてほかの女を迎えることができよう。あなたは、あんまり美しすぎる」

「そなた、何が望みなのです?」

「わたしに望みはない。ただ、わたしは」

「ほ……」

と、お玉は笑った。

彼女は、むかしの恋人が、禄を望めば禄を、万金を望めばそれを、与えただろう。それなのに、この男は、まだむかしのままに、恋を欲しがっている。

その夜、お玉は知足院に宿った。

彼女は、敬次郎に、彼の望みに任せてやった。

しかし、翌日、敬次郎は、死体になって、人知れず知足院の基地にうずめられた。

そうならなければならなかったのだ。

お玉がそうしなければならなかったのだ。

お玉は、元禄年間、従一位に叙せられた。寛永二年に死んだ時は、鳴物普譜十七日間停止の布令が出た。

★あるホモの告白★

白い炎 (二)

★ぼくが愛すれば愛するほど、兄さんは
やつれる。ぼくはどうしたらいいんだ！

河野春雄　画・堂本良

兄さんは忙しいのだ。兄さんでなければ片づかない仕事が山のようにあるんだ。T大を優秀な成績で出た兄さんは、役所でも若手ながら重要なポストにいる。有名な実業家だった父親の七光りばかりではなく、兄さんの手腕は役所で高く評価され、若輩ながら課長級である。

寂しく兄さんを玄関に送った私は、乱れたベッドの上に顔を押しあて、兄さんの香りを嗅ぐ。しばらく兄さんのぬくもりをしみじみと感じていた私は、ふと恐ろしい不安にさいなまれて来た。

「兄さん！」

力一ぱいベッドへ身をすりつける。虚脱した元気のない兄さんの笑顔が、脳裡をかすめた。

それから一週間たった朝、私は信州の一湖畔に一人立っていた。

〝兄さん！　僕は兄さんが狂おしいほどにいとしい。その狂おしさで兄さんがだんだんむしばまれて行くのが、狂おしい以上に僕には辛いのです。

でも僕は兄さんと一緒にいると、どうしても我慢できないのです。兄さんにがむしゃらに、甘えたい。そして死ぬほど愛し合いたい。

ね、兄さん。こんな和夫いけないと思うんです。毎日、兄さんがいなくなったベッドに顔をおしあて、いつも和夫は兄さんにあやまってました。

お勤めに疲れた体を僕が欲し、そして無理やりに兄さんを愛する和夫の甘えん坊。

許して下さいね。

だから、とうとう決心したんです。

こんな和夫のがむしゃら、兄さんをほろほろしてしまいそうだから、すこし熱がさめるまでもこれは和夫にとって死よりも苦痛です。だが僕は兄さんを愛し初めて、和夫だけの欲張りはできなくなりました。

兄さんの苦痛は、兄さんの疲れは和夫の苦悩です。ね、兄さん、この僕の決心を許して下さい。離れていても兄さんの傍にいなくてもいつでも僕は兄さん以外の誰のものでもありません。それは誓います。

僕、そっと兄さんの抽出しから兄さんのいろいろの写真をぬきとり、アルバムにして持って行きます。そしてこの和夫のわがままが、抑制できる日が来たら必ず帰ります。

それまできっと、兄さん浮気しないで待ってて下さい。和夫も決して浮気はしません。では兄さん、また逢う日まで。

それから五万円ばかり拝借しました。〃

和夫より

御兄様江

僕は湖水の光りを眺めながら、兄さんから離れて、ますます兄さんにつのる愛情になやまされ続けた。道ばたの雑草の一本にも兄さんを結びつける。

僕が決心して一週間。

兄さんの強い愛情を感じれば感じるほど、僕だけの事は考えていられない苦しさに喘いだのだ。

あの日電話がかかって来て、あたふたと出社して行った兄さんは、午後三時、僕の留守に帰宅した。さぞ和夫が待っている事であろう。私の大好物のバナナを一ぱい両手にかかえて、兄さんは帰って来た。

私は、玄関に飛び出した。

靴をぬいで上にあがるなり、兄さんの腰にすがりつき、涙をながした。

その涙を静かにふいてくれる兄さんの力強いやさしさ。

「兄さんありがとう。和夫、とてもしあわせです。兄さん、お役所無理したのじゃない？」

「和夫はそんなこと考えなくてもいいんだ。兄さんは、和夫が兄さんを愛してくれることだけで充分。和夫が兄さんのこと考えてくれると——兄さん和夫にどうしてやればいいのかわからないじゃないか。さあ、泣くのはやめるんだ」

「うん、でも僕、きょうとてもさびしかった。一日中兄さんが恋しくて、恋しくて。自分でもわからない。僕兄さんが大好き」

二人はドアに鍵をかけ、陽の高い明るい部屋で着物をぬぎすてた。兄さんのすこやかに伸びた肢体が、まだ熟し切っていない僕の身体と対照的にたくましかった。私はつくづくと兄さんの裸形を眺め、肥り過ぎず痩せているでもない、たくましく伸びた肉体に深い魅力を覚えると、すっかりわれを忘れてしまうのだ。

その日もおきまりの如く、もう夢中になって愛し合った。

僕はしみじみ兄さんの情愛を身に感じて、いつまでも熱っぽい興奮からさめきらなかった。

僕のことをこれほどまでも想い、無理をして役所から帰って来てくれた兄さん！　そう思うとまたも新しい愛情が湧いて来て、しっかりと兄さんにすがりついた。

夕日が落ちてとっぷり日がくれるまで…。立ち上ると目がくらくらして、ガラスの破片か火花を散らすように空間にちらばって見える。頭を左右に強くふって電気をつけると、兄さんは、

「和夫、まぶしい！」

と言ってうつぶした。

ぐんにゃりとのびた身体を床の上になげ出し、正体もない。僕はそうした兄さんがいとおしく、肩をいだくとしずかに口づけた。ぎらぎらと兄さんの肌は汗でぬれて光り、僕の好きな体臭にあふれている。

「兄さんきついの」

僕はしんみりと言った。

兄さんはただ、黙って身動きもしない。戸棚からオーデコロンをとり出して熱湯におとすと、タオルで兄さんの体をマッサージする。

私はまた兄さんにすまない事をしたのだ。

「和夫、すまないね」

かすかに眼をあけてニッコリすると、また眼を閉じる。

私は一生懸命、心をこめて兄さんの五体を揉む。兄さんは気持よさそうに呻きながら、私の脚をしっかと握りしめ、

「好きだ、好きだよ。僕はもうどうなってもいいんだ」

とうわごとのように言う。

その夜、兄さんは軽くジュースを飲んだだけで、ぐったりとベッドに入るなり、こんこんとねむりつづけたのである。

僕は兄さんの青い寝顔を見詰めたまま、寂しくなった。

「兄さん、僕っていけない子だね」小さい声でつぶやき、今夜は兄さんを一人寝かせてあげようと、隣の部屋へ歩を運んだ。

でも翌朝私が眼をさますと、兄さんはもう出勤していた。

女中が「坊ちゃん、これ兄さまが」と云ってさしだした走り書きに、

〝昨夜はすまなんだ。兄さんって案外弱虫だね。ごめんよ、今夜なにか買って帰ろうね〟

私はまた兄さんにすまない事をしたのだ。静かにベッドに腰かけて私と兄さんの並んで写った写真に頭を下げた。

だがそのたびに激しい兄さんの愛情が湧いて来て、たまらない感情になる。夕方が来るのがとても待ち遠しく、早く兄さんの顔に身体に接したくてならなかった。

一日中ポケットで兄さんの走り書きをあたためながら、兄さんを慰めたい一心の計画をたてた。静かにそっと愛してあげよう。そして昨夜のわがままな愛撫の許しを乞おうと考えていた。

夕食もすんで、黙って居間で本をよんでいる僕の傍へ兄さんはそっと近づいて来た。

「どうしたんだ、和夫、今夜はばかに神妙じゃないか」

「うん」

「なんだか元気ないね」

肩に手を置き読んでいる本をのぞきこむ。

「ほら、これお土産だよ」

純金のロケットである。私は夢中になって首にかけた。

「高かったでしょう。僕、兄さんに何あげたらいいの？」

熱っぽい視線になって兄さんの顔を見上げていると、眼がしらが熱くなって来る。

「馬鹿だね」

頭を大きく掌でゆさぶって笑う。

「兄さん！」

私は兄さんの手をとるとしっかと握りしめた。

「ありがとう。忘れない、僕決して忘れない。兄さんいつまでもいつまでも和夫のものだね？」

すがりついて一緒に愛撫し合いたい衝動をじっとこらえて目をふせる。

傍へ腰かけると兄さんは笑いながら新聞をとり上げる。その顔の頼もしさ。僕はじーっと見ていると落着いた兄さんに限りなく信頼感がわいてくる。

きりっとひきしまった口元の精悍さ。切れの長い底光りのする眼。顔を二つに分けた高い鼻。その一つ一つが私の心にやさしく呼びかけている。

「兄さん、僕兄さんのひげそってあげる」

見ると兄さんは二、三日ひげをそる気力もないほどに疲れたのであろう。なんだか哀しい陰影が顔に宿っているように思える。夜分疲れて帰っては、私の堰を切る愛情に流されて、朝あたふたと出て行く兄さんの苦労が目に見える。

「ね、兄さん、和夫にそらせて」

静かに眼を閉じてつき出す兄さん。その兄さんをれほどこの世にいとしいものがあろうか。おも私の為ならしてくれる。

口紅をもって来て、兄さんの唇にぬろうと前にまかせきったと云うその表情。私は一心にカミソリをあてた。

「兄さん」

突然私はとんきょうな声を上げると、

「パックしてあげるよ！」

すっかりそり終って、タオルで顔を拭いながらそっと唇を掌でなぜ、

「ちょっとばかり、じっとしててね。こんなに兄さん皺があるんだもの」

眼尻を軽くひっかいた。

「僕、今夜、うんと、兄さんをきれいにして上げたいんだ」

有無も言わさず顔一面に一糎あまりの厚味にパックをぬりつける。兄さんはびっくりしれと目を細めている。いまだかってこんなに口紅をぬった事のない私は、なんだか変な気持になった。

しかに兄さんにとっては苦業であったろう。コールドでふきとり、ローションをつける。その間兄さんは始終苦笑いをしている。私は得意になって振舞う。

何をしても怒らない兄さん。その兄さんを私は今自由にあつかっている。どんなことでも私の為ならしてくれる。

口紅をもって来て、兄さんの唇にぬろうとした。

「和夫、そればかりはこらえてくれよ」

上半身を起し、

「もう兄さんこれで充分だ」

鏡の中に顔を映して、

「じゃ、兄さんがそれ和ちゃんにぬってやるよ、な」

私の手から口紅をとり上げ椅子にねかせると、眼と云わず口と云わず軽いキッスをした後、絵をかくように丹念に口紅をぬる。それこそ真赤にぬりつぶしたのである。

「わあー、和夫、すてきだぞ」

手鏡を私の前につき出して兄さんは惚れ惚れと目を細めている。いまだかってこんなに口紅をぬった事のない私は、なんだか変な気持になった。

「兄さんの、いじわる」

すねて見せると、兄さんは荒々しく私をひきよせ、口へかぶりついた。それこそ歯と歯がかみ合い、唇が歪み合い、紫色に腫れ上るほど力一ぱいに……。兄さんの唇へも口紅が無茶苦茶につく。二人は鏡を見合って声をたてて笑う。

私はまた、知らず知らずに兄さんを挑発する結果となったのである。

今、こうして信州の田舎に来ていながら、あの凄艶な日々に疲労した兄さんのたまらない魅力を、ひしひしと感じる。

私はホテルの一室に閉じこもり、鏡に向い自分の唇へ思いきり口紅をぬって見た。あの夜の兄さんの唇のように、炎と燃える唇が、二つの孤を描いて上下している。私はその唇を思い切り鏡におしあてた。鏡にあかい口あとが鮮かについて、その口あとに兄さんの幻が重なり合う。

私はその夜も悶々として、ホテルのベッドで一夜をまんじりともせずあかした。すっかり消耗しきって、やがて、夜が白み初めた頃やっと一時間ばかり眠ったのである。

朝おきるといそいで兄さんに手紙を書いた。

だが、いざ出す段になると、きまって手紙をびりびりに破いてしまう。もうこの湖畔にくなった。

来て一週間余りにもなるが、その間幾通兄さんへの手紙を書いたか知れない。でもそのたびに自分の心に鞭打って励まし、所期の目的を達成するための苦痛をたえしのぼうとしたのである。

だがある日、とうとう私はもう耐えきれなくなった。

〝兄さん！　兄さん……兄さん……〟

兄さんに会いたい！　和夫の馬鹿、馬鹿馬鹿……。なんで和夫はこんなにくるしむんだ。頭を割ってしまえ！

兄さん和夫を笑って下さい。偉そうに一人見得を切って湖に来ましたが、どうしても兄さんへの愛情はやすまりません。僕はこのまま、火のような兄さんへの愛情のために焼きつくされて亡びて行くのでしょうか？

兄さん、会いたい。たまらなく会いたい。でも、会えば兄さんと二人で深い渕に沈んで行ってしまいそうなんです。

僕はどうしても兄さんのためにこの苦悩にうち勝ちたい。ね、兄さん、兄さんも和夫のために祈って下さい。

何だかとりとめのない事を一ぱい書きたんです。でもこんな事でも書いていると兄さんを身近に感じて、とても気分が休まるので

兄さん、兄さん、僕を忘れていないでしょ

うね。

家をとび出したきり十日以上も便りをしなかった和夫を怒ってますか？

でも叱らないで。そして見捨てないで。

僕兄さんに見捨てられたら死にます。今でも兄さんと別れてくらしているだけで死よりも苦しい和夫ですもの。兄さんに忘れられ、見捨てられたら、もうこの世には何の喜びもない。

そう思うと飛んで行ってすがりつき、すばらしい兄さんの肉体に身をすりつけたい。でも和夫、じっと歯を食いしばって我慢してるんです。

偉いでしょう。ほめて下さい！　僕どうしても兄さんの為に〝いい子〟になって帰ろうと思うんです。このままここでこがれ死にしても！　兄さん、きっときっと……

ここまで書くとあとは狂おしくなって気もてんとうせんばかりに胸が波打ち、そのまま宛名だけを書いた封筒に投げ入れると眼をつむるようにしてボーイに渡した。送り主は白紙で。何だかそうして手紙を出すと、私はほっとした気持になった。

いくら遠く離れていても、これで兄さんと何らかのつながりができたと云う安堵にも似たものであろう。

私は懸命に戦った。孤独の寂しさと、募る兄さんへの愛情のもつれに、夜毎やせるのが目に見える。食欲もあまり出ず、一日中部屋にとじこもる日が多くなった。

そうしたある日。思いがけなくも、突然兄さんの訪問をうけた。否、やっと私を探し求めた兄さんは、連れ戻しに来たと云った。私は兄さんの顔がまぶしくて、暫くは顔を見上げる事ができない。

「和夫、ずいぶん苦労したんだな」

頬のおちた私の顔をしげしげと眺め、涙にむせぶ私の肩をそっとなでる。

「兄さん」

かすれた声で呼び、私はじっとうなだれ、長い苦悶の果てにいくらか落着きを見出したように思えた。

「許して下さい」

「何を言うんだね。僕こそ許してくれよ。和夫の純な愛に、兄さん泣いたよ。和ちゃん、兄さんうれしいんだ。兄さんこそ和夫のためにはどうなってもいい気持でいるんだよ。さあ、涙をふいて、笑ってごらん」

二人の手は固く握り合ったまま、いつまでも離れなかった。

「すぐ家へ帰ってくれるね」

もうさからえない。素直にうなずくと、久しぶりに見る兄さんの顔を、いつまでもいつまでも見る。

兄さんは和夫がいなくなって、置き手紙を見た瞬間、眼の前が真暗になった。どこへ行ったのか皆目わからず、一日役所を休んで心あたりを探しまわった。だが、どうしようもないとわかると一時に不安と寂寥が湧いて来て、仕事も手につかず、和夫の居ない自分の生活がこれほどまでに無意味なものかと今さらの如く感じたのだ。

十日あまりと言うものは生ける死骸である。

兄さんは和夫を忘れようと努めた。和夫は僕から逃げたのだ。もう再び帰っては来ない。その煮え湯を飲むような苦しさに夜毎愛し合った思い出の数々が、ベッドにも、机にも、一冊の本や壁にもよみがえって来る。

ある夜などまんじりともせず、わが身の恋情にさいなまれ、汗をびっしょりかいた。

そのたびに自分を呪い、和夫を薄情だと思う。でも和夫をうらめしく思い、憎めば憎むほど、いとしい気持が湧いて来る。どうにかして忘れたい！　と誓う心に何とかしてもう一度和夫をわが手に抱きたいと願うのだ。

和夫のような男を探し、そして幸福にひたるなんて、もう二度とわが生涯には望めないことだ。

ひしひしと和夫に思いが駆ける。逃げた魚は大きいが、和夫は魚どころではない。次第に、孤独を好み、兄さんはユウウツな性格になった。心にはただ和夫の面影を抱いて、かない人の世界での生き方には投げやりにさえなって来るのである。

そうした一日。女中が和夫の手紙を持って来た。その時の嬉しさ。

〝和夫の馬鹿〟思いきり叫ぶと知らず知らずの間に泣いていた。

「和ちゃんの手紙を見て兄さん探したんだ。ただ手がかりは消印だけだろう。ずいぶんうらんだぞ」

膝の上に和夫をのせてやさしく頭を撫でる。私は神妙に、兄さんの胸のボタンをいじる。

「兄さん、もう言わないで。でも和夫、兄さんのためを思って……」

長い湖畔での寂しさ……又も、涙が湧いて来る。今、死ぬほどに焦操と苦悩を経て、再び兄さんの膝の上にいるのだ。

無性に泣けて来る。兄さんの胸に額をおしあて、すすり泣く。片手を兄さんの胸に当てもり上る筋肉が上下する兄さんの鼓動をさぐっていたが、いきなりシャツの上から熱い熱い唇をおしつけた。

兄さんも眼に涙をためている。

「もう離しはしない。和夫、兄さんとは一生苦労を共にするんだよ」

涙にぬれた眼をふきながら、しっかり兄さんの胸に顔をおしあてる。

二人は、ひしと抱き合い、夕霧のせまる薄暗い一室でいつまでも動こうとはしなかった。

熱い血のぬくもりを感じながら兄さんの腕にだかれて……。たのもしい安堵感につつまれ、好ましい兄さんの雰囲気にひたる。

「お兄様、決して僕離れないね、もっと抱いて、もっともっと、ね、もっと」

くの字に身を曲げ、兄さんの肉体を永遠に一つになりたい私の願いなのだ。兄さんの両膝は夜通し私の重味でしびれた。

二人は抱き合ったまま、石のように動かず一夜を椅子の上で明したのだ。半月の別離が生涯の結びとなった晩秋の一夜。

二人は清らかな感動と強い愛情で深く結ばれたのである。

わが家に帰るのだ。一生涯、何の不安もなく兄さんのもとで楽しく暮せる幸福感と、信頼感に、しみじみと身がつつまれる。二人はいつまでもこれから共に苦楽を分け、生活しつづけて行くであろう。

そう嬉しく心に描いた私であったが……、翌朝、再びボストンバックを下げた私は田舎道を一人歩いて行くのだった。

どこへ行くのか？　あてもない将来ではあるが、ただこうする事が、愛する人に対する私の唯一の道であると信じたからである。

名もない草が白い花を一ぱいの露で光らせている長い道を、私は急ぎ足で兄さんから遠ざかって行った。はるかな連山に傾く暁けの明星を見る瞳にはわれ知らず一条の涙が宿っていた。これから私にとって一生懸命の苦闘が始まるのである。

"不気味な手帖" より

その箱をあけるな!!

★玉手箱は開けてはならない!
何が入っているかわからないのだ!

佐々木力

江淵晃夫・画

序・手帳は生きている

誰でも、秘密の手帳を持っているのではないでしょうか?

手に持っていなければ、心の中に秘めています。心のどこかで、そいつはそっと誰かに開かれるのを待っているのです。

それに気づいた人は、誰でも、ハッとするのです。そればかりでなく、奇妙な事には、その秘密の手帳を、誰かに見せたくなるのです。その内容が異常であればあるほど、多くの人に公開したくなるのです。

たとえば、小松川高校事件の少年は、自分の恐るべき体験を、小説にして公開しようとしました。秘し隠したい記憶をさらけ出そうと、不思議な情熱が彼のペンをぐんぐん動かしたのです。

これは手帳が生きているからなのではないでしょうか? その手帳が本人の意志や生命と別個の生命や意志を持って、悪魔の呼吸を

いとなんでいるとしか思えません。なぜなら彼はその秘密を公開するに及んで、更に悪魔の道につき進んでいるではありませんか？

人間は時によると、底知れぬ、悪の魅力に陥って、破滅への道を辿る事があるものですが、かくいう私も、実はそのおそろしい道を今歩きつづけているのです。

といっても私の場合は、殺人や盗みなどの犯罪ではないのです。それより一そうタチの悪い忌わしい病気なのです。

だから私は、この手記を綴る気持になりました。

投稿するに及んで、あの少年のように私も破滅の道に今一歩ふみこむか？　それとも前人未踏の悪の世界にたどりつくか？　それは判らないのです。

とにかく、悪の神秘にふれたような気のする今日このごろ、何もかもだめにならぬうちに、まだ正常な理性の残っているうちに、私は私の告白を、つづる気持になったのです。

私はこれまでにたくさんの悪の文章を読み漁ったような気がします。そして、まだこの最後の場面を聞くのでしたが、おそろしさに堪えかねてような手記にお目にかかったことはないような気がします。

私は、この拙ない一篇を裏窓に捧げます。

これは、悪魔の手帳の第一章にすぎないのですが……。

(一)　玉手箱の恐怖

私達は幼い頃、いろいろな物語を大人達から聞かされたが、私は中でも浦島太郎のお伽話に、かなり強烈な印象を与えられたのです。

あれは恐怖の物語です。浦島太郎は、龍宮城の乙姫様からおみやげにもらった玉手箱をあけて、白髪の老人になったのですが、その玉手箱は、あけてはならぬとかたく乙姫様から禁じられていたものなのです。にもかかわらず彼はそっと蓋をとりのぞいて見ました。とたんに、白い煙が出て、彼は見る見るうちに老人と一変してしまった……その光景は、ぞっとするほど物凄い、無気味な地獄絵です。

考えてもごらんなさい。今までの優美な若者の顔が、幾百歳とも知らぬ年老いた醜貌に一変するのです。

幼い私は、えり元に水を浴びたような気持いて、右を見ても左を見ても、皆未知の人ばかり。その淋しさ、おそろしさに堪えかねてまだ五つか六つのこの幼な子は、凄まじい人間変貌の瞬間を夢にまで見て、うなされたのです。その恐怖の度合は、とても一つ目入道や、三つ目小僧の此ではありません。そくそくとしてせまる現実的神秘感と、凄惨な地獄絵巻の恐怖です。

以来、黒い長方形の箱が床の間か何かのうすぐらい片すみに、ひっそりとおかれているのを見ると、ワーッと叫び出したい衝動にかられるのです。

この物語を、少年時代になって、じっくり考えて見た事があります。すると恐怖の情は一そうつのるばかりなのです。その深い深いおそろしさに、一そう戦慄の念を禁じ得ませんでした。

太郎は情深い性質で、海岸の漁師の子供達にいじめられているカメを、あわれに思って助けてやったほどの、心根のやさしい若者なのです。

それが龍宮城に案内され、あの美しい天国でたのしく時をすごして帰ると、このわざわいが彼をおそったのです。

帰って来たら、いつの間にか代がかわって

それが、あの恐るべき結果です。この悪魔の如き神秘力を持った煙を封じこめた玉手箱が、ほかならぬ乙姫様からおくられたという事実！

太郎が自分が年をとるのも忘れるほどの喜びに長い月日を龍宮城ですごしたという事はそも一体何を物語るのか？　いうまでもない魔界の天女乙姫とのただれるような恋と愛欲であったにちがいありません。

その愛情の相手からのおくりものが、これだったのです。

太郎にとっては女神にも等しい乙姫からのおくりものが、実は太郎にとっては幸福なものではなかったという、これだけでも少年の純真な魂をおびやかすに充分なものがありますが、それだけではないのです。

むろん、太郎が老人と化すには、化すだけの道理も理由もあるのでしょう。しかし、しかし、おろかな人間は、自分がそうなって見なければ、その当然な事柄が、身にしみてわからないのです。

そこに、無限の恐ろしさがあると思うのです。

さらに、ギョッとする事実に気がつきます。乙姫様は、

「この箱を、あけてはならない。どんなことがあっても……」

とかたく念をおしました。

ということは、「あけてごらんなさい」ということに同じなのです。

なぜか？

人間はかたく禁じられたものを、破って見たくなる動物です。

ことに、好きな女から、あけてはならぬとくどいまでに念をおされれば、誰だってはげしい誘惑を感ずるのは男の通有性です。

あの美しくも聡明な乙姫が、このことに気がつかぬはずはありません。

こう考えて来ますと、この物語は不思議に淋しい一様なものでないことに気がつくのです。

私は成人した後、もう一度改めてこの物語を考えて見ました。するとさらに深い意味を見出したのです。

(二)あなたは何を入れたか

浦島太郎の物語を前半だけきくと、人間は情深くあれば幸福が来る、恩はかえさなければならない……こういうような教訓が含まれているように感じます。ところが後半において、実はそれよりももっと重大なことを教えているのです。

第一に、人間というものは必ず年をとるということ！

龍宮城でのあの言語に絶した大歓楽も、過ぎ去って見れば、一片の白煙にすぎなかったという事実！

しかも、その一片の煙にも等しいはかない愉悦のために、自分の老衰にも気づかぬという恐ろしいまでの人間のおろかさ！

これらが渾然となって、海岸にうちよせる波の音のように、この物語は不思議に淋しい恐怖の交響楽をかなでている、それが幼い私の魂を心の底からゆすぶったのです。

だが、第二の恐怖のものすごさは、考えるだに肌に粟が生じます。

太郎は煙が出たために老人になったのではなく、実はすでに老人になっているのを、太郎だけが気がつかなかった。それを煙のために、ハッと自覚した。真実の恐怖です。

こう考えると、われわれは知るという事に深い恐怖をおぼえるのです。

第三は、恋人からおくられた箱でさえ、うっかり開けられぬという事実です。ましてや見も知らぬ他人の落して行った箱や、気心もわからぬ人のくれた箱など、やたらに開くも

のではない。

この物語は実は、このことをも教えているのではないでしょうか？

浦島太郎は老人になるべき道理があって、当然な運命だったのですが、しかしもしもしそのような当然な理由が少しもなかったとしたら？

その箱の中に煙でなく、もっと別なものが入っていて、われわれは一瞬の中に白骨と化すかも知れない。

そういう可能性が、絶対にないと言い切ることができるでしょうか？　もし、そういう事はないと断言できる人は、次のような事実を知らないからなのです。

たとえば、こういうことを考えて見て下さい。私達は、子供からだんだん年をとって大きく成人したのです。年をとれば、体はなるほど、一応どこもかしこも成人します。しかし精神やあらゆる心理状態までは、何から何まで成熟し切ったとは限らないし、またそんなことはそれこそ絶対にあり得ないでしょう。

身は大政治家とうたわれながら、女にかけては少年のような初々しい心根の老紳士もあります。一世を震憾せしめた稀代の侵略者がワンパク少年のような幼い心根をもっていたりします。ノーベル賞をもらった世界的な老科学者が、家庭的にはとんだ暴君で、世間的には坊っちゃんで、女にかけては異常性慾者で、子供のように不能者だったりします。これのように、われわれは、ちぐはぐに育っているのです。

私はそれが恐ろしいのです。大学教授のようなりっぱな人物がおろかな犯罪をおかすのも、つまりはこの成長しきらぬ幼い心が原因なのです。知性は発達していても、感情が少年のままなのです。子供のままに足ぶみしているのです。

子供というものは、自己本位でむじ気です。そこに無限の恐怖があります。無邪気に自分の思った通りにしたい放題のことをやってのけます。残忍なこともします。おとなにはとてもできないはなれ業をやってのけることがあります。

私達は幼い頃、おとなをびっくりさせることがかなり好きでした。私達は次のようなたずらをよくやったものです。

空箱や空袋の中に馬糞や人糞や、蛇や蛙やその他見るも忌わしい汚物や、無気味な生きものなどを、適当につめこんでこれを仔細ありげに念入りに包装をして、いかにも落しものや忘れものでもあるかの如く、適当な場所に捨てておくのです。

通行人がそれを見つけます。ああその時のスリルと期待！　ついに手にとって、自転車か何かにのせてそこを去って行くのを、たしかめた時の満足感！　今思い出してもゾクゾクします。

われわれは、その人が途中でまたは家に帰ってから、その包みを開いて、あっとおどろく光景までは、めったに見る事はできなかったけれど、それだけに、いろいろ空想して悪魔の如きニタニタ笑いが口元に浮ぶのを、どうすることもできなかったものです。

皆さん、あなた方はその箱の中にどんなものを入れましたか！

私は実に罪なものを入れました。馬フンや人糞などは無邪気なものですが、私のは念が入っていました。ひろった人が非常に当惑するものです。それは何か？

私は箱の中に、次のような手紙を一通入れただけです。

「この箱を拾った方は、交番にとどけてはいけません。そのかわり、これと同じ箱をつくり、これと同じ手紙をその箱の中に入れ、七

つだけ、あなたの好きな所に落しておくのです。そうするとあなたに幸福が訪れますが、もしこれにそむく時には七日以内におそろしい不幸があなたの家におそいかかる事になっています」

とまあ、こういった手紙なのです。迷信深い昔の田舎町の人々が、これを拾ってハッと当惑してしまったのは言うまでもありません。

方々にこの種の箱が落ちているようになりました。

一時はもの凄い流行で、〇〇町の悪魔の玉手箱という題で地方新聞に出たものです。

私はぞくぞくするほどの得意さを押えることはできませんでした。

この幼いいたずら心が、成人してもなお私の胸の中に残っているのです。

ただ、理性でそれをおさえているだけなのです。しかし、もし、そのブレーキが何かのはずみでとりのけられてしまったら……。

そしてその人が、私のような無学なものではなく、大科学者が何かであったら？

彼が箱の中に入れるものは、乙姫様の玉手箱の白い煙などより、もっと恐ろしい魔力をもったものだろうと思うのです。

乙姫様には、悪意は少しもなかったとすれば、それは女の独占慾か彼女の茶目ですが、科学者の場合は、自分の新発明の実験が目的で、玉手箱を未知の人々に郵便か何かでおくるかも知れません。世間的に名高いそのような科学者が、そんな事をするはずはない。いろいろな常識的観念が彼を完全な嫌疑外におきます。

私はそこが恐ろしいのです。

たとえば、アイゼンハワーが、忌わしいそういういたずらを三度ぐらいくりかえしても人々は決して疑わないでしょう。

アイクほどの人物でなくても、世間の人は案外疑わないものです。

そこに可能性があるのです。

実は、そういう実話があるのです。

㈢ 地獄からの贈り物

やはり、幼い頃読んだのですが、それは探偵小説家でもあり医学博士でもある小酒井不木先生の作品で、「恐ろしき贈物」という実話なのです。

今から三十年も昔のアメリカで起った事件で、やはり箱にまつわる物語です。

その箱は一見、菓子箱のようでした。差出人は書いてなく、あて名だけが、タイプライターで書かれてありました。白い紙で包まれた長方形の箱で、紅いひもでゆわえてありました。

おくられた人は、例外なくその箱をひらきました。すると、その箱のふたがひらくかひらかぬかの中に、恐ろしい光景がそこに展開するのです。

最初の犠牲者は、ニューヨーク市の、あるアパートメントにすむ、グレース・ウォーカーという四十前後の肥った女です。彼女は、表面おだやかな生活をいとなんでいましたが、実は裏では今でいう売春業をやっていたのです。事件の起る少し前にも、十五才になる少女を、客に取持っていて警察にふみこまれ、少女は感化院に送られたし、ウォーカーも、相当な処罰をうけています。

放免されて後も、彼女は後暗い商売を止めようとはしませんでした。

そうしたある日の事、友達の訪問を受けて世間話に興じ合っているところへ、郵便で一箇の小包がとどきました。それが問題の地獄の箱だったのです。

とも知らぬ彼女は、

「誰からかしら？　菓子箱のようね、それにしては少し重いようだけれど」と友達にたず

ねるようにいいました。

「きっとお菓子よ、まああけてごらんなさい。名刺が中に入れてあるにちがいないから」

ウォーカーは、友達の言うままに好奇の念にかられながら紅いひもを解き、白い紙をひらくと、果して菓子箱が出て来たので、やがてそのふたをひらきました。

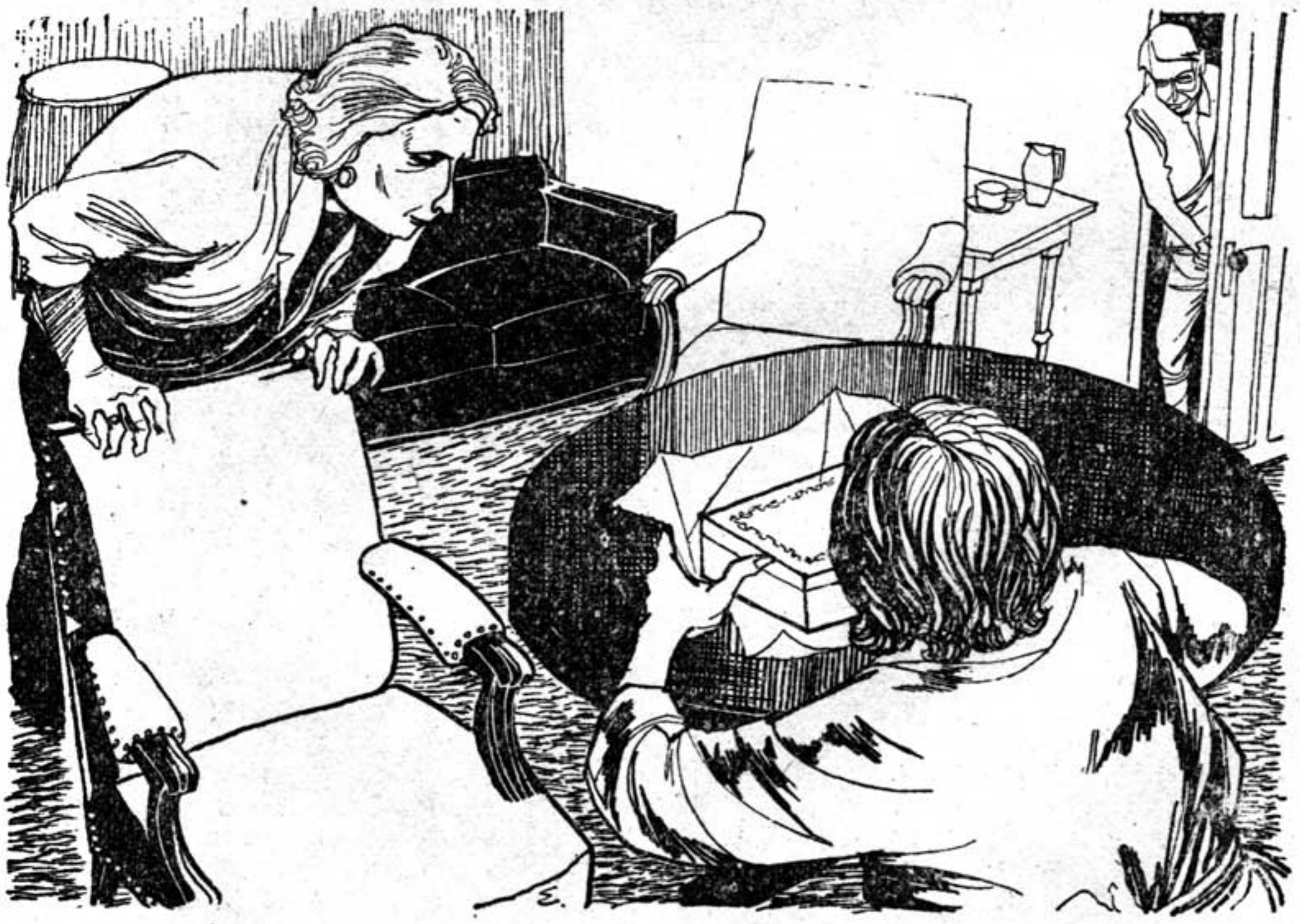
とたんに、バガーンと大音響がとどろいたかと思うと、アッという間に血まみれになって、ウォーカーは即座に絶命しました。彼女の頭は、ほとんど、胴体からもぎはなされ、箱の中から雨のように飛び出した鉄や鉛のかたまりによって、心臓も肺もめちゃめちゃにつぶれてしまいました。

対座していた友達は、不思議にも難をまぬがれ、きもをつぶして一時は阿呆みたいにぼんやりしていましたが、目の前の地獄絵巻にわれにかえると、警察に急を知らせました。

警察からは、時をうつさず係の人が飛んで来て、早速現場の検証にかかりました。

死体の横たわっている部屋は、目もあてられぬ惨状です。

窓ガラス、姿見鏡、壁板、額、その他の器具は粉々にうちくだかれて、その間に血まみれの肉片が散乱しています。



問題の箱も大分こわれてしまって居ましたが、その中には小さな電池、銅線、弾丸をつめたガス管がつめこんであって、箱のフタをひらくなり電流が通じて、中の火薬に火がうつる仕掛であることもわかりました。これらの物品には、これという特徴もなかったけれど唯一つ捜査の手がかりはタイプライターで記された、あて名の文字でした。

それに著しい特徴があったので、タイプライターの捜査が始められたのです。一方ウォーカーにうらみのあると思われる人々の捜査も始まりましたが、この方面からは少しも手がかりが得られず、容疑者はみな白と決定、タイプライターの捜査も、何一つ犯罪の手がかりをもたらさなかった矢先、ニューヨーク市裁判所

の判事、ロザルスキー氏の許へ、突如として第二のおくりものが届いたのです。

㈣悪魔は自滅するけれど

判事は、菓子箱にしては重いので、怪しんで警察に電話をかけました。すると警察から は爆発物の取扱に自信のあるエガンという探偵がやって来て、問題の箱の蓋に手をかけました。

箱の蓋が一分か一分五厘も開いたかなと思われた時、またもやおそろしい音響と共に、判事は床にエガンは壁の方につきとばされ、判事は、おそろしくまたしてもこの不思議な犯人は、おそろしいおくりものを、今度は善良な平和な家庭に忘れっぽい世間は、いつしかこの恐るべき爆発事件を忘れかけていました。

今度の犠牲者は、ウォーカーのような悪らつな女でもなかったし、裁判官のような犯罪人相手の闘士でもなく、全く平和な一市民で老人に向ってただずねましたが、もうその時老人はその室の外に出ていました。

夫人は、それから冗談を言いながら紅いモを解くと、中から菓子箱が現われました。「お菓子は分けて上げましょうね」

とか何とか言いながら、何気なく夫人はその蓋をあけました。とたんに轟然たる音響と共に、夫人の体は見る影もなく破壊されました。ヘララは右眼を失いましたが、残る左眼を騒がせました。新聞は一せいに警察の無能を攻撃し始めたし、ある新聞は、エドガア・アラン・ポウの探偵小説「マリー・ロージェ事件」を引用して、ポーのような推理の力の発達した人間はもういないのかと慨嘆しました。しかし何と言われても、警察は手も足も出ませんでした。

犯人の得意や思うべしで、時日の経過と共る日、人々の記憶を呼びさまそうとするかの如くまたしてもこの不思議な犯人は、おそろしいおくりものを、今度は善良な平和な家庭におくりとどけたのです。

今度の犠牲者は、ウォーカーのような悪らつな女でもなかったし、裁判官のような犯罪人相手の闘士でもなく、全く平和な一市民で老人に向ってただずねましたが、もうその時老人はその室の外に出ていました。

夫人は、それから冗談を言いながら紅いモを解くと、中から菓子箱が現われました。「お菓子は分けて上げましょうね」

とか何とか言いながら、何気なく夫人はその蓋をあけました。とたんに轟然たる音響と共に、夫人の体は見る影もなく破壊されました。ヘララは右眼を失いましたが、残る左眼

「誰やら、こんな菓子箱を入口に置いて行きましたよ、おおかたあなたにおくって来たのでしょう」老人は夫人に渡しました。

「まあジョンさん、うまいこと言うわね、あなた御自身で買って来たのでしょう。しかし姉さんにはれっきとした良人があるのよ。なぜ私に下さらないの」

と妹がいいました。

御夫婦は大声で笑いました。老人はすこぶる面くらいましたが、

「はっは、これはこまった」といいながら自分の居間に去りかけました。

「本当は私にくれたのよ」と妹。

「本当にそうなの、ジョンさん?」と夫人も

と共に、夫人の体は見る影もなく破壊されました。ヘララは右眼を失いましたが、残る左眼の判事、ロザルスキー氏の許へ、突如として第二のおくりものが届いたのです。

㈣悪魔は自滅するけれど

判事は、菓子箱にしては重いので、怪しんで警察に電話をかけました。すると警察から は爆発物の取扱に自信のあるエガンという探偵がやって来て、問題の箱の蓋に手をかけました。

箱の蓋が一分か一分五厘も開いたかなと思われた時、またもやおそろしい音響と共に、判事は床にエガンは壁の方につきとばされ、判事は、おそろしくまたしてもこの不思議な犯人は、おそろしいおくりものを、今度は善良な平和な家庭に忘れっぽい世間は、いつしかこの恐るべき爆発事件を忘れかけていました。

今度の犠牲者は、ウォーカーのような悪らつな女でもなかったし、裁判官のような犯罪人相手の闘士でもなく、全く平和な一市民で老人に向ってただずねましたが、もうその時老人はその室の外に出ていました。

夫人は、それから冗談を言いながら紅いモを解くと、中から菓子箱が現われました。「お菓子は分けて上げましょうね」

とか何とか言いながら、何気なく夫人はその蓋をあけました。とたんに轟然たる音響と共に、夫人の体は見る影もなく破壊されました。ヘララは右眼を失いましたが、残る左眼

「誰やら、こんな菓子箱を入口に置いて行きましたよ、おおかたあなたにおくって来たのでしょう」老人は夫人に渡しました。

「まあジョンさん、うまいこと言うわね、あなた御自身で買って来たのでしょう。しかし姉さんにはれっきとした良人があるのよ。なぜ私に下さらないの」

と妹がいいました。

御夫婦は大声で笑いました。老人はすこぶる面くらいましたが、

「はっは、これはこまった」といいながら自分の居間に去りかけました。

「本当は私にくれたのよ」と妹。

「本当にそうなの、ジョンさん?」と夫人も

犯人は正しく同一人であると推定されましたが、これ以上どんなに調査しても、黒と見なされる容疑者が浮んで来ないのです。

この第二の爆発事件は、ニューヨーク全市

何かにつまづきましたので、よく見ると紅いひもでゆわえた白い箱が足もとにおかれてありました。彼は不思議に思いながらこれをひ

もきずついて間もなく視力を失いました。妹は諸所にやけどや創傷をうけましたが、命に別状なく、老人ジョンもその部屋にいなかったので難をまぬがれました。

急報によってかけつけた警察の取しらべに犯人は正しく、前二回の犯人と同一人である事が判明しました。しかし今回は郵便で送られて来たのではなく、老人が直接にもって来たのであり、しかも老人自身は難をまぬかれているので、当然、老人に嫌疑がかかりました。

しかし間もなくそれも白いと判明、ここに至って警察はまたしても、迷路にまよいこんでしまったのです。

第一に犯罪の動機が、まるで見当もつかない事です。

いたずらかも知れないが、いたずらにしては恐るべき所業でした。

警察も、捜査につかれ切ってさじをなげかけているところへ、さらに第四の爆発事件が突発したのです。

そしてこの第四の事件での犠牲者は、非常に意外でした。

この箱の製作者、悪魔の如き人物が、あやまって爆死したのです。

ヘンリーという変質者でした。

ヘンリーは、最初けんか友達に爆発物をおくって、これは未遂でしたが、次にウォーカーが客に取持った少女とヘンリーは恋仲だったので、感化院に送られた少女を、ヘンリーはウォーカーが自分と引きはなす為と誤解して憤激のあまりに送ったのでした。

しかしあとの二つは、全くのいたずらだったのです。

彼は瀕死の重傷にあえぎながら、警察官の尋問に答えています。

「ヘララ一家とは、どんな関係があるのか？」

「何もないのです。ヘララという人は見たこともありません」

「では、なぜ、わざわざあの家をえらんだのか？」

「ただ、ためして見たのです、どこでもよかったのです。偶然それがヘララさんの家だったのです」

二時間の後、ヘンリーは息を引きとりました。

しかし、犠牲者が、それまでには必ず出るのです。

だから！

だから！

その箱をあけてはいけません！

あなたの所に、近いうちに誰かから妙な箱がおくられるかも知れないのです！　しかしあけてはなりません！

私はかたく禁じます！　開けるな、その箱を！

人間は禁を破りたがるものであることを充分承知しながら、私はあえて叫ぶのです。

あなたの所に送られた箱をひらくなと！

私は今度、とてもすばらしいおくりものを未知の人に郵送することを思いついたからです。

それがあなたの所に行くかも知れないからです。

あなたはその箱をあけたとたんに、自分も必ず私のまねをしたくなるのですよ！

そして地獄への道をふみ出すのです。

浦島太郎の玉手箱よりすばらしい箱ですから、絶対にあけないでくださいね。

ああ、悪魔は最後には自滅するのです。邪が栄えるはずはない！

——終——

お望みどおりの裸体（ヌード）

SERVICES RENDERED

容疑者の女房は，ヤケにいい体つきをしていた！

ジョナサン・クレイグ

「まあ、かけたらどうです、ミセス・ホウバート。実は、ちょっとのやつ、見てくれは貧相だが、あれでなかなか……話があるんでね」

彼女はソファに腰をおろした。スンナリのびた脚のカーヴ・若いわりに肉付きがいい。ホウバートは専門外なんでね」

「トミイはどうしてますの？」

「どうしてるって？」

「あのひとが関係のないってことご存じでしょ——あのホールドアップに？」

「おくさん」コーランはまたニヤニヤした。

「私は殺人課のものでね。殺しか用がないんさ。ホールドアップは専門外なんでね」

彼女はゆっくり頭をふって、

「トミイは、あんなことやれたはずがないわ。ぜったいにできっこないわ。いろんな刑事さんがみえて何度も何度も訊問されましたけど、あたし——」

「ああ、わかってるとも。トミイにはぜったいにできっこないと答えたんでしょう？」

「でも、本当ですわ！」

コーランは火を点けないままの葉巻を口からはずして、ポケットへおさめた。キャロルの曲線美を上から下まで、なめるように眺めおろし、踵へきてやっと眼をとめた。

「いやです」

彼女はキッとなった。

「そんなイヤらしい眼付きで、あたしのからだを見ないでほしいわ」

彼は、なんだかウキウキしてきた。

だが、時間がない。ゆっくり時間をかけて、煮つまるのを待っているだけの余裕がない。

それにこっちもカラカラに乾いてきた。

「話がイヤにかたくなるが、どうやら、ご主人は電気椅子行きらしいな。ちょうど今、私の係りなんだが、ご主人が熱い座ぶとんにすわらされるッてことは、まあ動くまいね」

彼女の手がサッとのどにのびた

「いやッ！　だめです、ぜったいに、いやですッ！」

（詳しくは、既刊好評の「マンハント」十月号を御覧ください！
久保書店発行・定価百円〒八円）

外誌に現れた女奴隷

介浩峠

奴隷大陸

MALE 1958・3

「さっさと歩かないか！」

突きとばされた女の、全裸に近い体が甲板の上に転がった。手首にがっちり手錠がかかり、右足につながれた鎖には大きな鉄の玉がとりつけられている。倒れたはずみに鉄の玉が転がって、女の足がぶざまに開く。水夫たちがどっと笑った。

岸壁に渡された板の上を、同じような恰好の男女が、足につながれた鉄の玉を抱えて、ぞろぞろと渡っていく。男たちの顔は、どれも絶望と空しい怒りに憔悴しきっているし、女たちの服装はまるきりひどいものだった。胸もともスカートも大きく裂けて、ほとんどが半裸同然、中にはまる裸の女も混っていた。

いずれも、数ヵ月前には希望に胸をふくらませて、故郷を離れた人々だった。新大陸に新しい幸福をみつけようと、先を争って船に乗りこんだのだ。

彼らの夢は、あっという間にけし飛んだ。

手に手に拳銃を持った水夫どもが、移民たちにかたっぱしから手錠をかけ、足に鉄の玉を結びつけてしまったのだ。男たちは棍棒や鞭でさんざ痛めつけられた果てに、そして女たちは、存分に水夫どもの笑いを浴びた挙句に——。それから数ヵ月、何十人かの移民が、あるいは発狂したり、あるいは死んで、海中に投げ捨てられた。

自分がどこへ連れてこられたのか、移民たちにはまるで見当もつかなかった。ひどく殺風景なところだ。岸壁には、たくさんの男が待っている。男と女がわけられた。

「ようく、面を見せるんだ」

岸壁に待ちかまえる男たちの前へ、鎖につながれた女が一人ずつ立たされる。

「どうだい、いい眼をしてるだろう。上玉だ。おい、歯を見せてみろ」

女の髪をつかんで、水夫がぐいと引く。

「そうさな、まあまあというところか」

男の手が、女の胸元にかかった。裂けて、辛うじて体にとまっている服を、勢いよく引きはがす。

「悪くはないな」男がつぶやいた。

「いいだろう」全身を見終って男が言うと、水夫は女を押しやった。鉄の玉の重さに、女はそのままくずおれる。

「次！」

太陽が照りつける。どこか南の国なんだろう。だが、移民たちはもうものを考える力を失っていた。ただわかっているのは、自分がもう移民などではなくって、奴隷にされてしまったということだけだ。

女たちは次々に値段をつけられていった。値のきまった女を、買手の部下がゲラゲラ笑いながら裸にしてしまう。そして、長い鎖に手錠が一つ一つつながれていく……。

新大陸に夢を托す人々を、多くの悪人が食い物にした。移民から奴隷に転落していった人たちの数は、莫大なものだったのである。

忘れられた孤島

STAG 1958・3

外では、空気も地面も、まるで燃え出しそうだった。幾本かのココ椰子だけが、化物のように立っている。海岸にほど近い掘立小屋の中で、二人の女が、もう長い間身動き

男は女の髪をグイと引いて顔を上に向けさせた！

一つせずにうずくまっていた。

かすかな物音がした。二人の女は、眼だけを動かして戸口を見やった。

「ルル」一人が言った。それきり、誰も口を開かない。ルルは、のろのろと少屋へ入ってきた。服はめちゃめちゃになっていた し、顔も、手足も、かき傷や打ち傷がいっぱいついている。小屋にいた二人、マリーナにもドーラにも、ルルの身に起ったことはわかりきっていた。昨日はマリーナが、その前の日にはドーラが、同じような姿で同じように呆然とした面持で小屋へ戻ってきたのだから。

すっかりくたびれたキャンバスのベッドへ、ルルはくずれるように体を横たえた。

体じゅうの力が抜けてしまったのだろう。ほとんど腰のあたりまで裂けたスカートから、太腿が力なく開いて、ひどく痛々しい。鞭のあとが一条、くっきりと残っていた。

メキシコから六百マイル、クリパートン島は太平洋のまん中に、ぽつんと一つ浮かんでいる。かつてカリブ海を荒し廻った英国の海賊クリパートンが根拠地としていた他には、人類から全く忘れ去られた島だった。ところが、二十世紀になって、人間はこのちっぽけな島に新しい価値を見出した。何百年何千年の間につもった海鳥糞がそれである。

メキシコ海軍の士官が人夫を引きつれてこの孤島に渡り、小規模なものながら、産業の音がひびきわたった。やがて士官や技師の妻たちも海を渡ってきて、殺風景な孤島にも明るい生活がきずかれるかと見えた。が、とんでもないことが起ってしまった。第一次大戦とそれに続いて起ったメキシコの革命さわぎで、クリパートン島はふたたび人類から忘れられてしまったのだ。本国からの連絡がとだえたまま、数ヵ月が過ぎ去った。

ある日、沖に船かげを認めて、救援を求め

にボートで乗り出して行った男たちは、突風に見舞われて全滅、わずか三人の若妻と、二人の赤ん坊だけが孤島に残された。

絶望と恐怖の数日が過ぎた時、さらに恐ろしいことが起った。とんでもない男が残っていたのである。陰険で兇暴な性格のために、一人仲間はずれにされていたミュートという男だった。それまで、みんなから嫌われて、一人離れて生活していたミュートが突然現れたのだ。まずドーラが連れ去られ、次の夜にはマリーナが、そして昨夜はルルがミュートの太い腕にひきずっていかれたのだった。

荒々しい足音がした。小屋の中で、三人の女の体は一様にこわばった。ミュートのいかつい姿が、戸口に立ちはだかった。体じゅうに武器をつけ、二羽の海鳥を片手にぶらさげている。おずおずと目を見上げている三人の顔を見て、ミュートの兇暴な顔に微笑がひろがった。

かまえる。ドーラのまとっていたガウンがひき裂けた。

およそ三年の間、忘れ去られた孤島で三人の女たちが送った日日は、とても一つ一つ紹介できない。たまたま通りかかった船に救われた時には、三人ともほとんど狂人に近かったということだ。

王さま遊び

CHALLENGE FOR MEN 1958・3

厚いカーテンの向うで、東洋風の奇妙な音楽が、静かに続いていた。正面の椅子についているのは、金持らしい中年の男、服の上におそろしく派手な布をまきつけている。下半身だけをわずかに半透明のスカート一枚で覆った女たちが数人、男を取りまいて、酒を注いだり、つまみものを運んだり、色っぽい話で笑わせたり、何かと世話をやいていた。

カーテンのすぐ外で足音がして、若い男一少年と言った方がいいかもしれない——が顔を出した。

「よろしゅうございますか」ひどく丁寧な口調で、若い男は聞いた。中年の男がうなずい

お前たちは、おとなしく待っていろ！
男はそう云って……

た。突き飛ばすように、若い男は一人の少女を部屋の中に押しこんだ。きちんとした服装の、ちょうどハイスクールの生徒といった感じのきれいな少女だった。続いて入ってきた若い男は、まるで中世の軍人みたいな恰好をしている。片手に鞭を持っていた。

「マリー・ブレザーを連れてまいりました。十八歳、本人は処女と申しております。入会の資格を、お手ずからお調べください」

切口上で言うと、若い男は一礼して一歩りそいた。少女は体を固くして立っている。どうしていいのかわからないといった表情だんだ。下着も全部」若い男の鞭がさっと上る少女はあわててブラウスに手をやった。

やがて少女は、椅子にすわった男のすぐ前に立たされた。思わず胸にあてようとした少女の手を、若い男の鞭が軽く打つ。少女の全身に中年の男はゆっくりと眼を走らせた。男を取りまいていた女の一人が、盆に一枚の紙切れをのせて差し出した。男がニヤッと歯を見せた。

「そうか、まず寸法をはかるんだな」

「そこで横になるんだ、マリー」若い男が言

った。少女は眼をあげて、一瞬訴えるような視線を若い男に投げたが、相手の鞭がピクリと動いただけだった。若々しくはりきった体を、少女はおずおずと床に横たえた。すぐにスカートだけの女たちが四人、マリーの手足を押えつける——。同じような服装をした、若々しい青年が一人、巻尺と、物差しと、大きな拡大鏡をのせた盆を捧げて入ってきた。少女はわずかに身もだえしたが、それだけのことだった。押えつけられた手足はまるで動かせないし、その度に若い男が鞭をかまえる。

マリーの体の、あらゆる部分が測られた。巻尺と物差しが、洋服屋と医者を加えて何十倍かしたほどの執拗さで、マリーの体をはい廻り、拡大鏡が体のすみずみに当てられた。

「ほぼいいようだ」立ちあがりながら、中年の男が言った。

「次のテストは、御自分でおやりになりますか？　それとも私どもが」若い男が聞いた。

「そうだな。まかせた方がおもしろいかもしれんから」

東洋風の音楽はまだ続いている。やっと解放されたマリーは、じっと床にかがみこんだままだ。若い男が六人、部屋へ入ってきた。みんな同じような服装をした、若々しい青年たちだ。裸のマリーの前に、ずらりと並ぶ。

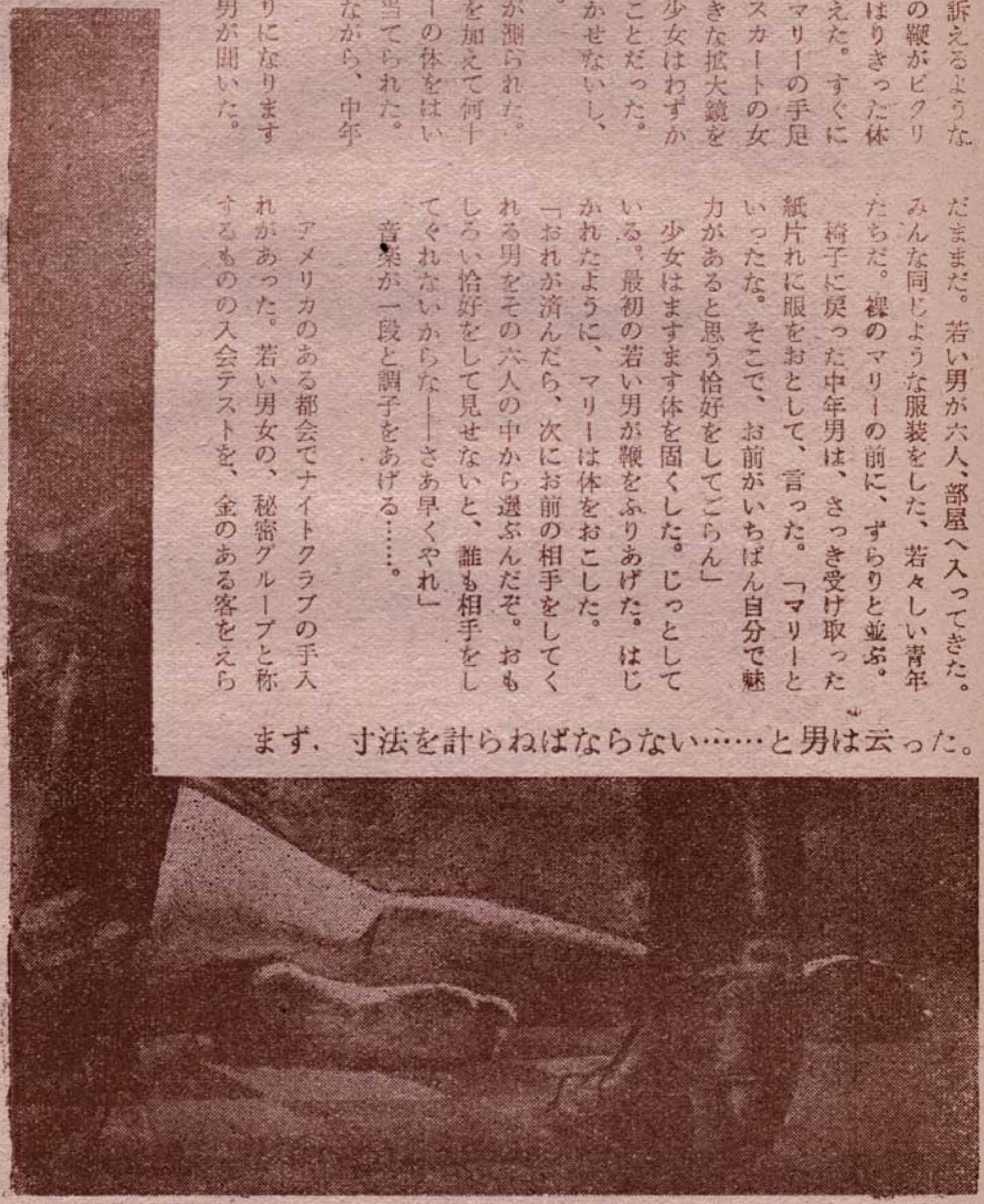
椅子に戻った中年男は、さっき受け取った紙片れに眼をおとして、言った。「マリーといったな。そこで、お前がいちばん自分で魅力があると思う恰好をしてごらん」

少女はますます体を固くした。じっとしている。最初の若い男が鞭をふりあげた。はじかれたように、マリーは体をおこした。

「おれが済んだら、次にお前の相手をしてくれる男をその六人の中から選ぶんだぞ。おもしろい恰好をして見せないと、誰も相手をしてくれないからな——さあ早くやれ」

音楽が一段と調子をあげる……。

アメリカのある都会でナイトクラブの手入れがあった。若い男女の、秘密グループと称するものの入会テストを、金のある客をえらまず、寸法を計らねばならない……と男は云った。



んで主賓にしたて、御披露に及んでいたというわけだ。中世の王さまの奴隷遊びといった趣向で――。

「おもしろいグループへ入れてやろうか。厳重なテストがあるんだけどお前なら大丈夫だ。ずいぶんと楽しめるぜ」

ちょっとした桃色遊びを予想して、若い娘やオフィスガールが巧みに誘いこまれる。テストさえ通れば、もちろんグループの一員として若い男たちと遊び廻れるわけだが、実際はバックのナイトクラブにがっちりしばりつけられているのだ。テストといって一晩中なぶりものにされた挙句スカート一枚の姿で客の接待につとめなければならないのだから。こうしたナイトクラブの数は、想像以上に多いといわれているが、実体はまだまだわかっていない。

絶対楽しめるあまとりあ社の特撰新刊単行本をどうぞ!!

★異色官能サスペンス★

地獄の乳房

飯田豊吉・

定価 二五〇円
送料 四〇円

謎の黄色いトランクをめぐって東京暗黒街にくりひろげられる凄惨な死闘と執拗な復讐地獄！ 息もつかせぬ迫力篇！

★続・隠密覚書★

忍び夜秘帖

島本春雄・

定価 二六〇円
送料 四〇円

大江戸の夜に咲く逢魔の花！ 大名屋敷旗本屋敷、そしてまた分限者の夜の闇を探ぐる影のような公儀隠密鳴子善四郎！

★東京やどかり族★

欲望よこんばんわ

東 智恵子・

定価 二五〇円
送料 四〇円

ネオンの蔭に羽ばたく夜の蝶たちの美しいドレスを脱ぎすてた秘密の姿態。そっと覗いたバー・キャバレーの内幕！

★エロチック・スリラー★

悪夢を追う女

朝山靖一・

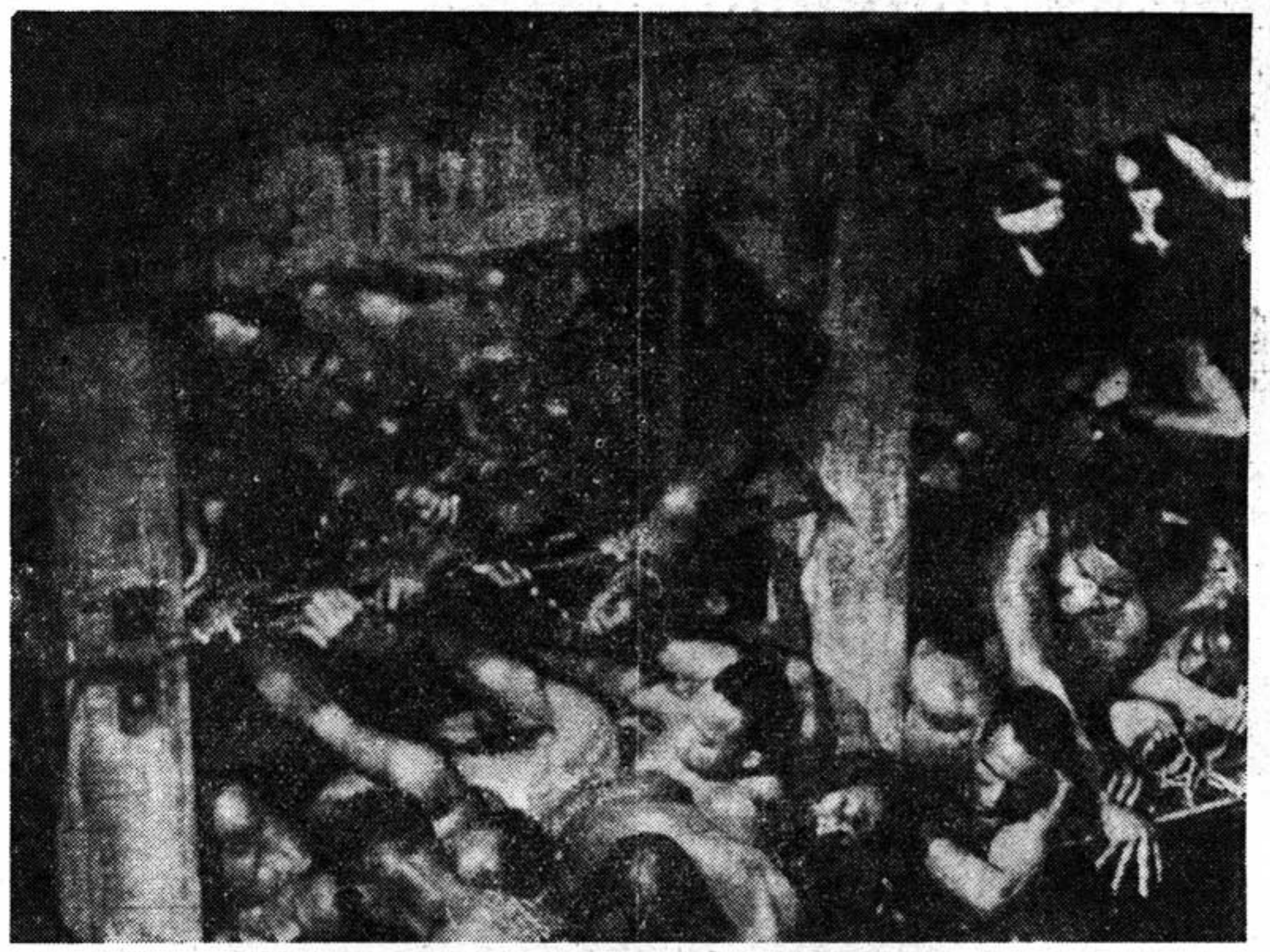
定価 二五〇円
送料 四〇円

泥沼に生え出た隠花植物のようなからみつく男の官能！ ただれ果てた都会の闇を鮮やかに描く異色ミステリイ！

東京都中野区江古田1~2302 株式会社 あまとりあ社

象牙の王座

奴隷境秘話



象牙と奴隷を求める秘境の王者ティプー・ティブの行手は？

橘　新太郎

I

ゆっくりした動作で、ヌサマは豹の皮の腰巻をしめなおした。でっぷり肥った男で、みるからに貫禄がある。やおら、『玉座』につく。四つん這いになった二人の娘の肩が、ぴくりと動いた。重い。謁見が早く終れればよいが——全裸に近い恰好の玉座は、いつもそうが、玉座の気持を考えたことなどヌサマには一度だってありはしない。そんな甘い神経の持主には、タンガニーカ湖の南方のこれほど広い地域を征服することなど、逆立ちしたってできっこないのだから。

貢物を捧げた奴隷たちが、まず玉座に、近づいてくる。美しい紅色に染めあげられた木綿、絹、飾りをちりばめた短剣、数々の香料……。それに続いて、武装した黒人兵の護衛を従えた商人が、静かに歩を運んできた。純白のローブをまとい絹のターバンを巻いている。

貢物の行列から商人へ、商人から護衛へと移っていったヌサマの視線が、ぴたりと釘づけになった。ありふれた剣とは別に、護衛の黒人兵たちは手に手に奇妙な武器を持っていた。鉄と木で作られた、およそ得体の知れぬ道具。数えきれぬほどの戦いを経験してきたヌサマが、一度もお目にかかったことのないものだった。

ハメッド・ビン・ムハミドは、アラブの作法どおり、額、唇、胸の順に手をやって、ヌサマに初対面の挨拶をした。おもむろに口を開くと、巧みなスワヒリ語が流れ出る。

「偉大なるヌサマの力と、その豊かな富は、遠く広く知れわたっております。ささやかな貢物を持って、御挨拶にまいりました。どうぞお納めいただきますよう」

重々しくうなずくと、ヌサマは部下たちに命じて、玉座のすぐ背後にある巨大な草葺きの建物の扉を開かせた。数えようもない量の象牙の山が、そこにあった。純白の象牙、斑点のある象牙、曲ったのや真直ぐのや、さまざまの象牙がうず高く積まれていた。

商人の眼がギラリと光った。中央アフリカの幾多の部落を攻め滅ぼしたヌサマの戦利品これがハメッドの目的であった。

「すばらしい……」ハメッドの口から思わずつぶやきが洩れた。「お目通りをいただいた記念に、小さいのを一つお恵みくだされば、これにまさる光栄はございませんが――」

しばらくの間、ヌサマは鋭い眼で商人をじっと見つめていた。やがて、かたわらにひかえていた老人の方へ振り向くと、めんどうくさげにヌサマは言った。

「この男を送り出してやれ」

ヌサマが立つと、玉座をつとめた二人の娘も静かに立ちあがった。残された商人の顔に、怒りの色が一瞬浮かんだ。が、つとめて手に武器を持った部落民が駈けだしてきて、ハメッドの一行を取り囲んでしまった。怒りを鎮めながら、ハメッドは部下たちを連れて、部落のはずれに作ったキャンプへ引きあげていった。

その夜中ずっと、一行のキャンプはひそかに見張られていた。もちろん、ハメッドは部下たちにづいていたのである。ヌサマの出方も、およそ見当がついていた。朝になると、果してヌサマの使いがやってきた。象牙を運ぶ奴隷を連れて、部落までくるようにとの伝言だった。ハメッドの内心に、ほくそ笑みがひろがった。

「すぐに参上いたします」ハメッドは丁寧に頭をさげた。

黒人兵の中から、特に腕の達者な二十人を選ぶと、ハメッドは彼らの二連発銃を念入りに検査した。むろん、予備の弾丸にも慎重に眼を通す。護衛たちの装備に満足して、ハメッドは十人の奴隷とともに部落へ入った。

玉座にどっかり腰をおろして、ヌサマは大股に近づいてくる長身の商人をじっと待っていた。距離がちぢまる。商人が玉座から十数歩のところまできた時、ヌサマの片腕があがった。玉座の左右に並んだ男たちが一斉に立ちあがった。と同時に、あちこちの物蔭からも、怒りの色が一瞬浮かんだ部落民が駈けだしてきて、ハメッドの一行を取り囲んでしまった。野獣のような喊声がどっとあがる。二本の矢が、ハメッドの胸板を狙って飛んだ。

「射てっ」地面に体を投げ出しながら、ハメッドは叫んだ。命令を待ちかねたように、銃声がとどろく。たちまち、十数人の部落民が、金切り声をあげて転がった。その黒い肌から、みるみる血が吹き出した。

部落民たちに銃声は生れて初めてのものだった。ものすごい音と、すさまじい威力は、包囲陣を一瞬のうちにめちゃめちゃにしてしまった。黒人兵は落ち着いて弾丸をこめなおした。銃が鳴り、悲鳴があがった。硝煙と血

のにおいが、部落の広場を覆いつくした。逃げまどう男や女を、銃声がしつように追いかける。

ほんの数分のうちに、生きた部落民の姿は広場から消えていた。生きているのはみんなハメッドの一行だったし、広場に残された部落民はみんな死体になって転がっていた。

太陽が完全に没してしまうまで、部落の周囲一帯で生き残った部落民が狩りたてられた。みつけられるたびに、少しでも反抗の気配をみせるものは即座に射殺され女子供と、おとなしく降参したものたちは手足を厳重に鎖でつながれて、奴隷の仲間に加えられた。

鉄砲の威力は、ハメッド自身が予想しなかったほどにすばらしかった。ひどく旧式なしろものだったが、百数十人の土人がその餌食になったし、残った部落民全部をたやすく鎖につなぐことができたのも、すべてが鉄砲の力だったのである。おびただしい血を流して集められたヌサマの財宝は、こうしてハメッドの所有に帰した。

およそ三十トンもの象牙、幾トンかの純銅黄金や宝石をぎっしりつめた無数の甕が、ヌサマの宝物庫から運び出された。新しく加えられた奴隷たちのひきずる鎖が、重苦しい音を密林にひびかせる。黒人兵の手にした鞭が奴隷の背中を容赦なくひっぱたく。彼らは馴れぬ鎖に足をとられ、鞭を浴びながら、かつては自分たちの王のものであった財宝を、新しい征服者のために運んで行った。

ハメッドが『ティプー・ティプ』と呼ばれるようになったのは、この日からである。鉄砲ばかりでなく、ティプー、ティと木でできた奇妙な道具が、ティプーに、それに刃向う者はいブーとどろくたびに、とも簡単に死んでしまう。槍も弓矢もまるで刃が立たない。美しい玉座を失って奴隷の一人に加えられたヌサマは、自分を打ち破った男を恐ろしい武器がたてる音で呼んだ。無敵のヌサマをたおした男にふさわしい名前であった。

Ⅱ

ティプー・ティプは、ザンジバルでアラブ人の家に生れた。曾祖母の代には奴隷であったという。だが、アフリカの密林の中へ入ってしまえば、家柄も、人種も問題ではない。原住民以外はすべて外国人なのだから。黒い肌にもかかわらず、ティプーを白人だと思っているものも実際に多かった。

ティプーは白人には大変好意を持っていたやがては白人の手でアフリカが治められることを予見していたのかもしれないが、彼の白人に対する気持には、一種の畏怖の念さえあったようだ。ちょうどヌサマの部落で受けた矢傷を治していたころ、ティプーは近くで一人の白人が病気で弱っていることを耳にした。さっそく黒人兵の一隊をやって、彼はこの白人を救い出させた。

伝道師であり、有名な探検家として知られたリヴィングストンは、病気と食料の欠乏ですっかり弱った体を、タンガニーカ湖の南岸にほど近いティプーのキャンプ地まで無事に運ばれてきた。一八六七年の六月のことである。元気を取り戻すまで、リヴィングストンは十週間ティプーの世話になっている。

矢傷が完全に癒ると、ティプー・ティプは再びコンゴの奥地へ踏みこんだ。この時には、四千人に及ぶ黒人兵と奴隷を従えていたまだコンゴ河の上流と知られていなかったルアラバ河の流域にまでティプーは象牙を求め

てわけ入った。

部落を通り過ぎるごとに、象牙と、何十人かの男が奴隷として徴発される。兇暴な原住民たちも、恐ろしい武器を持ったティプーの黒人兵の前には、まったく無力だったのだ。

だが、中には財宝を隠し場所におさめたまま、徴発に応じない部落もあった。そうした部落には、たちまち予想もつかない残酷な運命が襲いかかる。まず黒人兵の銃が一斉に火を吹く。土人たちが鉄砲の威力に気づいた時はもう遅い。家は焼かれ、男ばしから射ち殺される——。

死体の散乱した広場に、やがてかり集められてくる。象牙の隠し女や子供が るまで、恐怖のあまり満足に口もきけない女 場所がわか たちを、黒人兵は考えつく限りの方法で責め さいなんだ。隠し場所はあばかれ、象牙は一本残らず運び出される。さんざ痛めつけられた女たちは、子供も共に、今度は自分たちの象牙を背負って、鎖につながれ、鞭の雨を浴びるのだった。

象牙商人を自認していたティプー・ティプは、奴隷商と呼ばれるとひどく気分を害したという。原住民をつかまえるのは、象牙の運搬のためと、その身代金としてさらに象牙を得るためだというのだ。だが、奴隷たちが身代金として払える象牙などあるはずもないし、ザンジバルの港までくると、奴隷たちは大半が象牙もろとも売り飛ばされてしまうのだった。もっとも、港までなんとか生き永らえるのは半数以下で、多い時には八割までが途中で死んでしまうのだが。

に追い立てられひしめき合っていた★

男たちの中で、これはと見込まれた者だけがティプーの許に残される。そして、その中の何人かは、ティプーへの忠誠を誓って黒人兵としての訓練を受けることになるのであった。が、いずれにせよ、一度ティプーの鎖につながれたら最後、原住民たちはその瞬間から完全に幸福から見放されてしまうのだ。

ティプーはタンガニーカ湖に近いムワナ・マンバに、ぜいたくな家具や、ハレムまで設けた根拠地を作って、周辺の部落を荒し廻った。

ティプーが、やはり高名な探検家、ヘンリー・モートン・スタンレイと知り合ったのもこの頃である。スタンレイは、ルアラバ河がコンゴの上流なのか、それともナイル河の支流なのかを見きわめようとしていた。彼はティプーを呼びつけて、千ポンドの謝礼で道案内をさせようとした。日頃白人には好意を持つティプーも、スタンレイの居丈高な態度は気に喰わなかったようだ。

「金など欲しくない」ティプーはスタンレイの言葉を頭からはねつけた。だが、スタンレイにはどうしてもティプーが必要だった。兇暴な土人を防ぐためにも、地理に詳しいことでも、ティプーは得がたい男だった。スタンレイは態度を改めて頼みこんだ。

約二百マイル、ティプーはスタンレイのために道をきりひらいてやった。スタンレイがルアラバ河をコンゴの上流と証明できた裏には、ティプーの大きな力があったのである。

Ⅲ

残虐な象牙狩りが数年続いて、ティプーはもう一度スタンレイにめぐり会った。スタンレイはこの時、ドイツ生れのトルコ人でエミン・パシャという名の男を探し出す準備を進めていた。ある探検隊の一員として奥地に入りこんだエミンは、ベルギー領コンゴの北東部、赤道に近い密林の中に置きざり同様になっているということであった。スタンレイは例によって道案内をティプーに依頼した。ティプー以外に適任者は見当らなかった。

この話を聞くと、ティプーは内心大いに興味を持った。エミン・パシャが莫大な量の象牙を隠しているという噂があったからである。このことはスタンレイも知っていた。エミン・パシャの象牙は、七五トンにも及ぶ量だといわれていた。それだけの象牙があれば、探検隊の資用をまかなうのもいとやすいことだ。スタンレイは案内の報酬として、コンゴの上流にある七つの瀑布――スタンレイ瀑布周辺の地域一帯の全権をティプーに与えようと申し出た。もちろん、ベルギー政府公認のものである。うまくいけば象牙も奴隷も取り放題、ティプーが断るわけはなかった。

原住民との不必要な争いを避けるために、一行はひとまず二手に別れることになった。そして、これがティプーの運命を大きく変える原因になったのである。

★奴隷達は鎖につながれ使役される家畜のよう

ティプーをはじめ、一行の副長格であるバートレット少佐、ジェイムスン、ボニイ以下一行の主力は、コンゴ河をさらに遡る準備のためにキャンプし、その間にスタンレイは一隊を率いて、アルウィミと呼ばれるコンゴの一支流を探検することになった。

さしあたって、多数の人夫を補充しなければならない。エミン・パシャを救出し、七五トンの象牙を運ぶためには、少くとも六百人の人夫を新しく集める必要があった。もちろん、ティプーの仕事である。

だが、この地域での絶対権限を与えられたティプーが、せっかく集めた土人たちをそのままスタンレイの人夫にしてしまうはずはなかった。黒人兵を駆使して、ティプーは自分の象牙と奴隷を集めるのに専念した。探検隊の補強は遅々としてはかどらない。

隊員たちはキャンプに閉じこめられたまま、暑さと、一向に進展しない仕事に、いらいらしながら毎日を送っていた。中でもバートレット少佐は、まるで発狂寸前といった有様だった。

ある日、たまりかねたバートレットは、きびしい、どなり出さんばかりの口調でティプーにつめよると、何度目かの催促をくりかえした。

「六百人やそこらの人夫は、明日にだって集めてみせますよ。もしアラーがお望みとならね」

冷然と、ティプーは答えた。神さまがお望みなら——アラブ人たちが、まるっきり実行するつもりのない約束をする時の科白であった。怒りに言葉の出ないバートレットを、さも馬鹿にした眼つきで見やると、ティプーは冷笑を浮かべながら自分の仕事に出かけて行った。

その夜。隊員たちのキャンプで一人の奴隷娘が踊りをはじめた。人夫たちは最高潮に達しようとしていた。これみよがしに、娘はちきれそうな尻を振った。ドラムに合せて、奴隷娘は腰のまわりだけをわずかに覆った豊かな肢体を、妖しげにくねらせた。ドラムの調子が徐々に高まっていく。興奮の絶頂にいるかのようだった娘はあるいは眼を閉じ、あるいは目玉が飛び出るほどに見開いて、乳房をゆすり、足を踏み鳴らした。踊り手を取り巻いた人夫たちが、ドラムの合間を縫って奇声をあげる。

「うるさいぞ！　静かにせんか」

天幕の中からバートレットがどなりつけたが、踊りは続く。バートレットがティプーに軽くあしらわれたことを、人夫たちの誰もが知っていた。

「やめないか！」天幕をはねあげて、バートレットが姿を見せた。手には拳銃を握っている。「やめろ！　さもないと——」

のぼせあがったバートレットは全く気づかなかったが、彼が拳銃片手に現れた時、別の天幕の蔭で一人の黒人兵が銃をかまえた。セーガと呼ばれるこの奴隷あがりの黒人兵は、出発の当初からバートレットを、いま踊っている娘に心を奪われていたのである。

ドラムのテンポはますます速くなった。踊りは最高潮に達しようとしていた。これみよがしに、娘はちきれそうな尻を振った。ドラムに合せて、奴隷娘は腰のまわりだけで頭を抱えて、娘はのけぞるように体をそらせていく。興奮の絶頂にいるかのようだった腹の筋力はいっそう速く、いっそう微妙な動きを見せる。力が入って、筋肉のひきしまった太腿が、じりじりと開いていった。

「馬鹿！　やめろと言うんだ」猛烈な勢いでバートレットは自分の天幕から駈け出した。拳銃を握った腕を、ぐっと突き出した。銃声がとどろいた。バートレットの体は一回転して、たたきつけられたように地面に転がった。

あたりが一瞬静かになった。娘も、人夫た

ちも、それにセンガ自身も、呆然と立ちつくしていた。白人たちが駈けつけてきた。センガはすぐに鎖につながれた。

この事件には、さすがのティプーも顔色を変えた。もともと白人には頭のあがらないティプーである。虫の好かないバートレット少佐ではあったが、自分の黒人兵が白人を射ち殺したとなると、ティプーにとっては大変なショックだったのだ。

キャンプに戻ってくると、ティプーはすぐに、きびしくセンガを問いただした。センガのやったことは無事に救出されて理由のないことではない。ティプーは一々うなずきながらセンガの話を開いた。そして、最後にぽつんとつぶやいた。「わにまかせることにする」

鎖から放たれたセンガは、わずかな衣服をはぎとられて、餓えた無数のわにが待ち構えるコンゴの流れに突き落とされた。

Ⅳ

アルウィミの流域を探検する途中、スタンレイは幾つかの荒れ果てた土人部落を通り過ぎた。焼け跡に、禿鷹が喰い散らした残りの白骨が無数に散らかっていた。もちろん、ティプーの徴発のあとである。あまりのことに、スタンレイは慄然とした。

さらに、ティプーの黒人兵のためにバートレットが殺されたことを知り、スタンレイのティプーに対する憎悪の気持は決定的なものになった。

エミン・パシャ捜索の旅は、不穏な空気のうちに続けられ、エミンは無事に救出されたが、ティプーはむろんのこと、スタンレイも大いに期待していた巨額の象牙は、ついに発見されず、エミンもそのことでは固く口をつぐんで、決して話そうとはしなかった。しつように尋ねるティプーに、エミンは象牙などないと答えるばかりであった。

スタンレイたちの探検行は、莫大な損害を残して終った。

帰途、スタンレイはティプーをバートレット殺害の責任者として告発し、ティプーが人夫を集める約束を反古にしたこと、ティプーがザンジバルに持っている全財産で損害を賠償するよう要求した。

だが、スタンレイはあえて告発する必要もなかったのだ。兇悪な奴隷業者を一掃するために兵を送ったベルギー政府と争って、ティプーは二万挺に及ぶ鉄砲もろとも、象牙と奴隷で得た富のすべてを失ったのである。

一九〇五年、ティプー・ティプは死んだ。今では、アフリカ開拓史上最も兇悪な奴隷業者としてその名が残っているばかりである。アフリカの王は鉄砲だ——これがティプーのスローガンだったが、その言葉通り、ティプー自身もベルギー人の銃で征服されてしまった。

エミン・パシャは、その後もう一度コンゴの西北部に旅出ったが、途中何者かにナイフで刺されて死んでしまった。

恐らく、かつて自分が隠した象牙を取りに行ったのであろうという噂が、彼の死後も絶えなかった。

幾組もの探検隊が、エミンの後を追ったが、象牙はついに発見されていない。七五トンの象牙が、いまもコンゴの奥地に眠っているかもしれないのだが……。

エミン・パシャが殺されたこと自体、理由がわからず、すべては謎に包まれたままである。

よろめきの秘戯

泡

（あわ）

忘れねばならぬ人に打たれ虐げられた記憶が、
夫と二人の浴槽に甘く蘇えるせつなさ……

松井籟子

港　新平・画

待つ時

タ方の阪急の構内は人待ち顔に立っている男女がいつも何組かいた。

西口の方はこの建物の九階にある民間放送の、公開録音を見に来た人達が、長い列を作っていることもある。

純子はそうした人達の群の、一粒の泡のように、さっきから柱のかげを動かなかった。

もう一時間以上立っていた。

純子の目は、デパートのエレベーターの並んだ一番端にある。放送局専用のエレベーターを見ているのだが、それを見つめているこ

とを人にみとがめられまいとするように、わざと、大阪駅の方へ視線をうつしたり、新聞売場の派手なキャッチフレーズを読んだりしている。

大柄な純子は人の目をひく華やかな雰囲気を体全体に持っていたので、さりげない風で立っているのに、通りすがる人が必ず視線を投げて行った。その中には、自分が知らなくても、相手が知っている人がいるのではないかと思うと、何とか小さく、目立たなくなる方法はないかしらと、純子は自分の体の大きさがうらめしかった。

純子はできるだけ、立っている人の影へ、柱の影へと、身をすべらせるように移動させて、ただエレベーターの上りおりに気をくばった。

いつかはそのエレベーターから鍛治がおりてくるはずだった。何時におりてくるか、それもわからない。約束してあることではなかった。

鍛治の仕事はお役所仕事と違って、五時から五時きっちりにおえるというものではないし、九時、十時になることだってある。あるいは、どこかへ出張していて、今、この上の放送局にいないかもしれない。

電話をかければわかることだったが、純子は電話をかけるのは厭だった。

交換手は必ず「あなたは？」と聞く。名を告げたら、鍛治が「いないといってくれ」というかもしれない。

「もう会わない」

と約束したのだ。

「今度こそ、もう会わない」

と——。

純子は二時間でも三時間でも待つつもりだった。

会いたいと思う苦しさよりは、会えるかもしれないという可能性の中で、立っている方がらくだった。

五時から十時まで立っていたら、いつかは鍛治がそのエレベーターから姿をあらわすだろう。そしたら、その姿だけ見て帰ってもいい。

「もう会わない」

と云ったのは純子の方からだったが、

「そんなことできない」

と云った鍛治はそれっきり手紙もよこさないのに、純子は「会わない」ことで息がつまりそうに切なくなっているのだ。

家にいても、夫の耕一から話しかけられても、うわの空で耳に入れ、満足な返事もできない始末だった。

純子には子供がなかったから、夫さえ別れてくれれば鍛治と一緒にならないまでも、鍛治の妾のようにくらすことはできるだろう。

しかし、鍛治には彼の妻との間に二人の子供がある。子供にとって、父親と母親というものが、どんなに大切なものか純子は自分の身で体験していた。父と母が不仲であっても子供は父と母とそろっていてほしいと思う。継母に育てられた純子は母の違う家庭の冷たさを知っていた。父が継母を愛しても、子供は新しい母に愛情をもてるとはきまっていない。

見合をして、愛してもいない耕一と結婚してしまったのも、自分の育った家庭から早くぬけ出したかったからだ。そして、純子は自分を幸福だと思ったこともなく今日まですごして来た。

純子の不幸は父が母を変えたことからはじまったのだ。

今、純子は鍛治を知って、恋をする苦しさの中に、女の幸福を味わった。

しかし、その幸福をしっかり握る為に、鍛治の二人の子供を不幸にし、何にも知らない

彼の妻を不幸にしていいのだろうか。
（いけない、いけない）
と純子は思う。
「やっぱり会わない方がいいんだわ」
ひとりでつぶやいてみたが、恋しい人に会いたいという思いは、体の奥底からほとばしってくる奔流のようで、理屈では押さえられないものだった。

逢い見て

大柄な純子が傍へよると小さく見えるほど長身な鍛治が、エレベーターからおりるのは一目でわかった。
純子の胸がどきっと鳴った。瞬間体の中の血の流れが変な工合に流れるような気がした。そして、次の瞬間、どきどきと、急に激しく胸が鳴り出した。
それを押さえるように、純子はいったん柱の影へ身をひそめた。
鍛治は、阪急の構内をぬけて東の口から交差点を渡った。
純子は後からついていった。彼が振向いてわかればそれまでと、すぐ後からついていった。
鍛治は純子に気がつかないらしく、交差点を曾根崎警察の方へ渡って、御堂筋を歩いて行く。
人の流れが薄くなったので、純子は鍛治の横に並んだ。
「ああ」
と、鍛治はのどの奥でつぶやくような声で純子をみとめた。
そのまま無言で並んで歩いて行った。
息苦しさをはき出すように純子は云った。
「会いたかったの」
下を向いたまま、怒ったような調子で云った。
鍛治はだまっていた。
「どこへ行くの？」
純子は彼の方を見ないで聞いた。
会いたい会いたいと思った彼の顔を、まともに見るのにはじらいがあった為、放送局には専属のピアニストもいるのに、特にその友達が純子をひっぱり出したのだ。
「一杯のんで帰ろうと思ったんだけど……どこへ行く？」
鍛治も正面を向いたままで云う。偶然会ったとは思っていない口調だった。
「どこでもいいわ、静かな所……」
鍛治はタクシーをとめた。
前に一度行ったことのあるホテルの近くでタクシーをおりた。
純子は鍛治がバーや料理屋でなく、彼女をホテルへつれて行くつもりだということに、何となく安堵した。
「もう会わない」
と約束した手前、会っても、友達のように話だけして帰ろうとするかもしれないと思っていたのだ。
情事のくりかえしを、鍛治が避けやしないかという気がしたからだ。深くなればなるほど傷が大きくなるのは彼の方なのだ。妻と別れなければならないところへ追いこまれたら困るのは目にみえている。純子の方はたとえ夫に知れても別れさえすればいい。ピアノの出稽古だけでも生活できるのだ。
鍛治の演出したラジオドラマに純子の友達が出た時、ピアノをひきながらのせりふがあったとは思っていない口調だった。
それが鍛治に会った最初だった。
かたいで通っていた彼が、ふと純子にひかれたのは、大阪の土地にいながら、鍛治と純子が同じ東京の下町育ちだったからかもしれない。
夫があるということも、妻があるというこ

とも、忘れたように、少年と少女のような思いで近づいていった。そのくせ、愛情を語るすべを知っている少年と少女はいつか肉体的に結ばれてしまったのだ。

「どうやったらあなたを嫌いになれるの？」

一つベッドへ並んで腰をおろしながら、純子は云った。

情事のくりかえしに二人とも躊躇があったのか、ベッドへ身を横たえず、ソファーにかけるようにただ腰かけていた。

「だめなの、どうしても……会いたくてたまらなくなるの、でもいけないでしょう、こんなことつづけていたら……でも……」

純子は自分から銀治の唇を追った。

唇が合うと、男は今までの躊躇をふっきるように、純子をかき抱いて、唇を合わせたままベッドへ倒した。

ベッドの裾においてあった寝巻の紐が、玉のようにたたんであったので、ころころところげおちた。

体をおこした銀治はそれをすっととって、手でもてあそび出した。

まだ次の行動に移るのに躊躇があったのだ

「ねえ、どうしたらいいのかしら？」

純子が云った。

銀治の逡巡が彼の指にはさんだ紐をのびちぢみさせていた。紐の赤さがなまめかしかった。

「君が僕に二度と会いたくないようにしてあげようか」

銀治は自分の指にはさんだ紐をみながら云った。

その言葉の調子に、純子の皮膚を筆の先でさかさになでるような、奇妙な戦慄があった。

「どうするの？」

純子も

その赤い紐を見ながら云った。

胸の奥で鈍い音がひびき出していた。

あえぎ

「どう？　僕を嫌いになれるでしょう？」

銀治が云った。

純子はだまって首を振った。

素裸の手を後手に、赤い紐で結ばれていた。

ホテルの小さな風呂場には湯気が一杯にこめていた。

純子は頭からさかさまにお湯へつけられたのだ。

もう少しで息がつまりそうになると、銀治は純子を引きあげる。そして、ふっと息をつく間もなく、冷たい水がジャーっとかけられる。

思わず水を気管へのみこんで、苦しい咳をした。

その咳のやまないうちに、また、逆さまに湯舟へつけられるのだ。

銀治は真赤に上気していた。

しかし、純子の長い髪を手へからませるように持って、この残酷な遊びに夢中になっていた。

湯舟からひきあげられる時は、髪の毛がひかれて、

「ああっ！」

と、思わず純子は声をあげるほど痛かった。

「どうだ？　これでもか、これでもか」

熱にうかされたように、銀治は純子を苛んだ。

はては純子を仰向けにタイルの上へ寝かせると、馬のりになって純子をしっかりおさえた。

後手に縛られた手首が、タイルの床と、背中の間でゴリゴリときしんだ。

銀治は純子の顔を、水道の蛇口の下へおしこんで、水をかけた。

そして、両方の手で彼女の乳房をつかんで乳首に指をふれた。

純子は苦痛と陶酔に、体がバラバラになるような気がした。

「もうこれっきり会わないと約束したまえ、もう、僕が会おうと云っても会わないと……。僕の方から君に会いたくなるかもしれない。けれど、僕の呼び出しに応じちゃだめだ。ほら、痛いだろう？　会ったらもっと痛いめにあわせるよ。さあ、僕から離れられるね。嫌いになったと云いたまえ」

銀治は言ったが、純子は彼の瞳を見ながら静かに首を振った。

「君は……！」

銀治はいきなり純子の頬を平手で打った。

「痛い！」

純子は悲鳴をあげた。

銀治は狂ったように、右から、左から、純子の頬を打ちつけた。

「僕を嫌いになれ、君なんか、君なんか、僕は大嫌いだ、もっと、もっといじめてやる」

銀治はめちゃめちゃに純子を打った。

純子は声を押し殺して、銀治のするままにまかせていた。

痛さだけではない、得体の知れない涙が純子の目にあふれた。

ひどいことをしている銀治の愛情がひしひ

しと感じられたのだ。
「はなれてあげなければいけないのだ」
純子は思った。
いじめられたからはなれるのではない。今まで以上に愛情の深まりを感じたからこそ離れなければいけないと思うのだ。

笑う女

鍛治と別れて純子が家へ帰ったのは、十一時をまわっていた。
夫の耕一は茶の間でラジオをきいていたが細くかん高い三味線の旋律が流れていた。純子の顔を見ると、パチッとスイッチをとめ、
「おかえり」
と笑顔をむけた。
純子はそうした夫の気の弱さに理由のない反感をおぼえるのだ。
「ラジオをききたいのならかけておいたらいいじゃないの」
立ったまま純子はいう。
一言一言が粒立って聞こえる東京弁がよけい強くひびいた。
「そやけど……」
耕一はやわらかい大阪弁を使う。
なぜ、どこへ行ってきた、こんなにおそく何をしてきたと怒らないのだろうと純子は思う。
「おなかすいてへんか？　さっきおとなりからおいしいシュークリームもろうてな、一緒に食べよう思うてとってあるのや、今紅茶入れたるわ」
「いらない」
「まあ、そういわんと……」
耕一はお茶の仕事をする。いつものことだった。
耕一の収入より純子の収入が多いせいもあるだろうが、結婚した当初から夫に愛情のもてない純子は、夫の為に何かしてやろうという気にならず、反対に耕一が妻の機嫌をうかがう習慣がついてしまったのだ。
しかし夫がどんなに不甲斐なくても、夫以外の男を愛することが、いいことだとは思えない。純子はやっぱり悪いことをしてきたという感じが胸の底にあった。
夫が親切にしてくれると、自責の念が彼女をせめて、かえって苛立ってしまうのだ。
子供がいたずらをして叱られると思っているのに、大人が平気でいるとひどいいたずらをしてみたくなる心理に似ているのかもしれない。
純子の前に出してくれた紅茶とシュークリームを見ると、純子はそれを素直に食べる気にならなかった。
「よく喜劇なんかで、シュークリームをペシャッと顔をぶつけられるシーンがあるでしょう、どんな気持するかしら？　あんた、私に投げてみない？」
純子は云った。
「そんな、無茶な……」
耕一がいうと、
「じゃ、私がぶつけてあげるわ」
純子はシュークリームをとると、夫の額を目かけて放った。
「あっ！」
と、耕一がよけたので、シュークリームは耕一の後の水屋にあたってグチャッとつぶれた。
「無茶しよる……」
耕一はつぶやくと、台所へ雑巾をとりに立って行く。
（なぜ怒らないの、男のくせに……）
純子は歯がみした。
もっとひどいことをしてみたくなった。
「それふいたら、一度だけちゃんと私にぶつけさせるのよ」

「そんな……」
「いや？」
「ううん、そやけどな……」
「はっきりしなさいよ。さあ、着物をよごすといけないからぬぎなさいよ、そしてちゃんとそこに坐っているのよ、よけちゃだめよ」
耕一はのろのろと帯をとくと、丹前をぬいだ。袷に浴衣をかさねた丹前を着ていたから下は裸だった。
銀治にくらべて貧弱な体がみすぼらしかった。
純子は耕一の顔の真中へシュークリームをペシャンとぶつけた。
「ウワァー」
耕一は目をつぶったまま、手さぐりで手拭をとろうとするのを、
「そのままなめちゃいなさいよ」
純子は云った。
「もったいないわ、せっかくのシュークリーム……」
「舌がとどかへんが……」
耕一が舌をペロペロと動かすのに、純子はいたのだ。

弱い手

純子は一度夫を怒らせてみたいと思った。
夫が怒ってくれないと、夫と別れるきっかけがつかなかった。
銀治と結婚できないまでも、純子はひとりになりたかった。
夫がいるということを気持の支えにして、銀治の家庭をこわさない為にも、銀治との恋は浮気という形ですまそうと思っていた。
けれど、浮気ではすまない感情になっていた。
会う度に、「もう会わない」と云って別れながら、純子がやっと会いたい気持を押さえて一週間、二週間とすごしていると、突然銀治から電話をかけてくれという葉書が来たりする。誰に見られてもかまわないような、淡淡とした文面に、純子はいつも、「これは仕事の話なのよ、私のピアノをまた使う番組ができたんだわ」と自分に云ってきかす。
（彼が情事をはなれて、事務的に葉書をくれるなんて失礼だわ）
思いきり笑った。気違いのように笑った。
その笑いの中には複雑な感情が渦をまいていることはあきらかだった。
それでもまだ純子は、
（でも、外部から頼まれたことかもしれないわ。たとえばファッションショウの伴奏とか……）
と、あくまで仕事だ、仕事だといいきかして銀治の待っている場所へ急ぐのだ。
会うと彼はいう。
「今日は一日バタバタして疲れた。風呂へ入りたいんだけどな」
そして、情事の繰返しになってしまうのだ。
純子は夫に別れてくれと云い出した。
「わいが甲斐性なしで、お前に何にもしてやれへんが、女中おいてるつもりで一緒にいたらええやないか」
と耕一はいうのだ。
「お前が浮気してもかまへん。わいはお前が好きや。どんなことでもするよって、別れるのだけはかんにんしてや」
「だって、女中さんなら御飯もたいてくれるし、肩をもんでもらうことだってできるわ。まさか旦那さまをあごで使うなんて……」
「使ったらええがな」
「じゃあ、肩をもんで」
純子は耕一に背を向けた。

長い髪をかきあげている衿足が白くて長い耕一は後へ廻って肩に手をあてた。

鍛治のかたい指にくらべると、女の指のようにやわらかくて力がなく、純子は虫でも這っているようにぞっとした。

「もんでくれるんならちゃんと力を入れてよ」

純子はきつい声で言った。

「そやけどな……」

と耕一は彼女の肩を撫でながら、

「何でこうすべっこくて、プリプリして、ていのに、

というのやろ」

純子は云った。

「ちょっと手をかして」

「あんたの手をここへ出してごらんなさい」

「なんや……」

耕一が純子の前へ甲をみせて手をのばすのを、彼女はピシャッと打った。

「痛ッ！」

耕一の手の甲が赤くなった。

「撫でてくれって頼んだんじゃないわ。もんでちょうだいって云ったのよ。なにさ……」

純子はもう一度平手で耕一の手をピシッと打った。

耕一は怒ろうともせず、

「かんにんな、ちゃんともんでやる、そやけど、お前の肌があんまりきれいやから、つい……」

と、卑屈そうに笑った。

純子の胸にまたしても得体のしれない黒い塊がひろがった。それを払うように、純子は夫の頬を思いきりひっぱたいていた。

泡と犬

耕一は純子と一緒に風呂へ入ることをたのしみにしていたが、

「風呂わかしといたで」

といわれると、純子は溜息が出る。

瞬間、鍛治がホテルのバスルームで純子にしたひどい責め方を思い出すのだ。そして、

それは苦痛の記憶よりも、甘いなつかしさとなって彼女の胸をしめつける。

さんざん彼女をいじめたあとで、

「もうこりただろう、僕は鬼のような人間なんだよ、そう思いたまえ」

と銀治がいうのに、

「フフフフ」

と純子は笑ったものだった。

「何を笑うんだ?」

という銀治に、

「だって、鬼っていうものは二本ツノがはえているものでしょう? あなたは天狗の面なんですもの……」

はじけるように笑う純子に、

「ばか」

と、銀治も笑って、嫌いにならせる為にしたひどい仕打ちが何にも効果のないことになってしまったのだ。

純子は風呂へ入る度にそれを思い出すと、口もとに微笑がうかんできて困るのだ。

そんなひそかな思い出を、夫にこわされたくはなかった。

しかし、夫の焚いてくれた風呂で、恋人のことを思うのは、あまりに夫に悪いような気もするのだった。

「入ってもええか?」

純子がさきに入ると、夫は気弱く声をかける。決して、だまって入ってはこないのだ。

「ええ」

純子はそういうより仕方ない。

あとから風呂へ入って来た耕一は、

「流したるわ」

と、純子の後にまわった。

「いいわ、また、あなたの悪いことをして、できなくてなでるんですもの」

純子は云った。

「痴人の愛って小説に、女の人の肌に指をふれないで、うぶ毛をそる場面があったわね、お風呂の中で、シャボンだらけになって……絶対に私の肌に手をふれないのなら、背中を流してもらう」

「そんなこと、でけへんが……」

「そんならいいわ、自分で洗うわよ」

「手を使わなんだらええのか?」

「ええ」

「ほなら、まずわいの手を後でくくったらええわ」

「くくってどうするの?」

「くくられてみたら、何をどう使うて、お前の背中流してやれるか、ええ考えがうかぶやろ」

純子は云われたとおりに、耕一の手を後手に手拭で縛った。

「さてと……」

耕一は考えている。

純子はその風呂場のタイルの上へ、耕一を押し倒して、ギュウギュウふみつけてみたいような気がしたが、僅かにこらえた。

痩せた細い体を、裸のまま後手にくくられている耕一の姿は、純子の心を異常にさわがせた。何かしらんひどいことをして、できればバラバラにくだいて、うずめてしまいたいような、やりきれない醜さに思えるのだ。

それは耕一が醜いというのではない。

耕一を夫とよび、何年間も寝室を共にしてきた自分が腐っているような感じがするのだ。

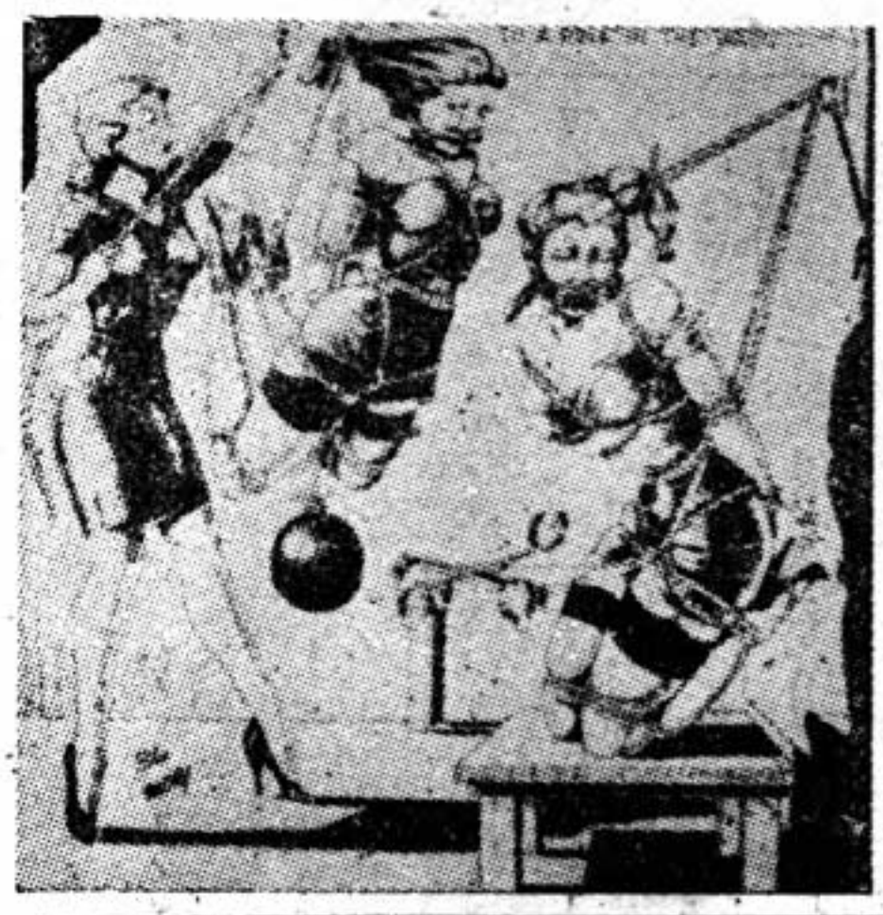
何もかもが醜く思えてならないのだ。

耕一のいうとおりに、夫の手を後で縛るという行為だって醜悪以外の何ものでもないだろう。

純子は夫に背を向けて、シャボンの泡をたてて体中へこすった。

ジャスミンの香りが、せめて腐った空気を新鮮にしてくれるようだった。

「ああ、ええこと考えた」
耕一がいう。
「わいの口にタオルをはさんでくれへんか。猿ぐつわと違うで。犬のように口を使うたらええと思いついたのや。口で洗うてやるわ。そのかわり、体中洗わせなんだらあかんで。お前のいうように、ひとつも手は使わへん。タオルを口にくわえて洗うてやるわ」
耕一は女中から、さらに犬にまでなり下ろうとしているのだ。
(私はこの遊戯に身をゆだねよう。夫を犬のように扱う女なんて、しよう。夫を犬にしてやるんだ。私の奴隷にしてやるんだ)
が聞いたらあきれて私を嫌ってくるだろう。鍛治が私にあいそをつかしてくれなければ、私からあの人を忘れることはできないのだ。これから私はひどい女だと人にいわれよう。こんなに
純子はそう決心した。
純子は石鹸のついたタオルを耕一の口にくわえさせた。
耕一は後手のまま、不自由な姿勢で純子の体をタオルでこすった。
耕一の顔はシャボンだらけになった。
「洗面器にお湯をくんでえな」
と、純子に頼む。
「自分でくみなさい」
純子はいう。
耕一は洗面器のはしを歯でかんで、もちあげると、湯舟へ入れたが、湯を入れてもちあげることは無理だった。
「くんでえな」
耕一はいう。
純子は知らん顔で、自分だけ桶にお湯をくんで顔を洗っている。
耕一は何度か失敗してから、やっと、少しのお湯をくみ出すことができた。
彼は犬のように洗面器に顔を入れてブルブルと顔をふるように洗って、自分の顔についた石鹸をとった。
純子はさきに体をふいてあがると、着物を着てから耕一の結び目をといてやった。
そして云った。
「あしたっから、私もあなたを洗ってあげるわ。そのかわり、犬のブラシを買っていらっしゃい。犬のように洗ってあげるから……」
こうしてはじまった耕一と純子の奇妙な夫婦生活は、また稿をあらためてつづることにしたいと思う。



ハガキを下さい！

目録を無料で直送します

★冬の夜のつれづれをかこつ一とき〝あまとりあ社〟の書籍は如何でしょう？
★あまとりあ社では、皆様にじゅうぶん楽しんでいただける、数多くの単行本を出版しております。
★出版目録を見るだけでも、結構タノシメます。ハガキに、あなたの御住所とお名前をハッキリ成記入の上〝裏窓十二月号で見た目録送れ〟とだけお書きになってスグお申し込みください！

東京都中野区江古田一の二三〇二
あまとりあ社

虜囚・美人伝

戦塵の中を逃げ惑う女達は、勝ち誇る征服者の手に陥ちて生身のあぶらを貪られるのだ!!

葉田 栗原 伸・画 光

戦勝のいけにえ

どの男の眼も、ギラギラと脂ぎっていた。

戦勝の酒宴に酔いしれた男たちは、真ッ赤に充血した眼で、哀れな虜の女たちを舐めまわすように見詰めていた。

男たちの半獣的な欲情の体臭と酒のにおいとそして若い女体からむんむん発散するなまめかしい匂いとが、広くもない艙部屋に充満していた。

虜の女は、いずれも、女ざかりの豊満さをむき出しにして啜り泣いたり、放心したりしていた。

虜の女は七人。育ちの良さが偲ばれる美貌と、やわらかでふくよかな体である。

「興が湧かぬぞ、誰か、もそっと、女子共を喚めかせろい…踊らせろい!」

村上兵庫之介が、鎧をガチャガチャ鳴らしてどなった。

兵庫之介のその怒声に応じて、十数人いる中の武者の一人が、のっそり立つと、折弓をひゅうひゅう鳴らして、女たち

で、七人の女が最初の女子えらびじゃ……早ようえらばぬたちの、苦痛と、いい女子を他の奴に取られてしまうぞ。に歪んだあやほら、あの女子はどうじゃ……乳房の実り具しい踊りが繰合といい、腰の丸さ、それに、白く柔らかそりひろげられうな餅肌じゃ……顔もなかなか美しいではなた。いか……さぞや、上々じゃろうて……あれに「ぴしりッ、するか」ぴしりッ…」「殿、私奴は女子なぞ無用でござります」折弓が女の「相変らず堅いことを申す奴じゃな……武人柔肌で音を立が戦務の廉の女子を自由にするのは罪ではなてるたびに、い……それ、早くえらばぬと、他男たちの眼が の奴等に先に取られてしまうぞ」狼のようにギ「無用にござります」正常な人間の「堅い奴じゃな」ばかりに、白い兵庫之介は、ちょっと苦い顔に穢物に喰いこんでいた。なると、大声でどなった。綾部弥平太は、そんな惨忍な酒宴を、冷た「者共、それ、女子共は取り勝ちい、憂いの眼で見守っていた。恐らく、酒にじゃ」も酔いしれず、裸女のあやしい踊りに声を挙うオーッ……と男たちの歓声がげなかったのは、彼一人だったろう。湧き上った。「弥平太よ……その方に、好きな女子を一人荒くれ武者たちが、眸りをあげやろうぞ……どの女子がよいか？」て挑んだ。兵庫之介が酒盃をなめながら云った。阿鼻叫喚。落花狼籍。「なぜ黙っておるのじゃ……こたびの初陣に女の柔らかな裸身が、仄かな光その方、なかなかの働きを見せた故、その方の中で、くの字に折れ、への字に

を睨め廻した。
「ひいーッ」
白い女の裸身がくの字に折れまがり、黒髪を振り乱して、悲鳴を挙げた。
続いて、折弓が容赦もなく、柔らかな女の素肌へ打ちおろされた。一人、二人、三人……女たちの膨れ上った乳房が揺れ、丸い腰が波打ち、四肢がみだらに躍った。
「そうれ、もそっと、打て、打ちのめせ」
兵庫之介の上ずった声と、武者たちの淫らがましい哄笑が、どっと湧く。
艙部屋を照し出している蠟燭の淡い光の中

曲り、悲痛な悲鳴が、つんざいた。

弥平太は、正視できなかった。

「戦に負けたとはいえ、女子になんの罪があろうか……」

弥平太は眉根を寄せると、暗い、やりきれない気持になった。

眼の前で展開するあらわな情景に、弥平太はたまらなくなって、艫部屋を出た。

船上に出ると、こうこうとした秋冷の月が凪いだ海を照し出していた。

三十艘ばかりの軍艘が、黒い影をつくって進んでいる。

（この船ばかりではなく、他の軍艘でも、艫部屋では、地獄のようなことが繰りひろげられているのであろう）

弥平太の心は、滅入る一方だった。

文禄元年秋十月はじめ、朝鮮征伐で大勝を博した加藤清正輩下の軍艘三十余が、名護屋本陣差して進んでいたのである——。

妻の俤

弥平太の主、村上兵庫之介は、加藤清正の諸将の中でも、勇猛果敢をもって知られていた。

文禄元年五月の京城攻略の際、兵庫之介は先陣を承り、小西行長軍の先陣と競い、行長勢に先駆けて、加藤勢に京城一番乗りの功をなさしめた。

弥平太も初陣だったが、花々しい若武者ぶりを発揮したのは云うまでもない。

弥平太が、村上兵庫之介と京城に攻め入った時、敵の軍勢は総退却、それも、日本軍の急進撃に、大方の家族を置き去りにしたままだった。赤い焔をあげる民家の間を、女子供が右往左往していた。

勝ち誇った加藤の将兵は、徒士から陣笠に至るまで、手あたり次第の掠奪暴行だつた。

路傍では若い女が押さえつけられている。部屋では、地獄のようなことが繰りひろげられているのであろう。

逃げまどう女は、すぐさま男たちに担がれ、蟻が獲物にたかるように、白い女体は、戦塵にまみれた鎧の中に埋もれてしまう。

若い女は、数珠つなぎに追い立てられ、もも早や、彼女たちは人間ではなく、一個の美しく白い戦利品であつた。

弥平太がとび込んだ屋敷は、ひつそりしてまだ踏み込まれた形跡はなかった。かなり高貴の者の住居らしく、調度も作りも、品がよく、おちついている。部屋々々を覗き廻った中をのぞき込んだ弥平太は、かぐわしい脂粉の香を嗅いだ。女部屋だと直感した。

曇子の垂幕を上げて中をのぞいた弥平太はドキッとした。

というのは、彫物のある寝台の隅で、ひしと抱き合っている若い二人の女の恐怖におびえた顔に、一瞬、出陣前、死別した若妻の紅葉の俤を見たからである。

二人の女は、戦場を馳け廻って、返り血をベットリ浴びた弥平太の姿に、眼をみはった。

弥平太は、二人の女を逃してやろう、と思った。そして、二人を安心させるために、優しく笑った。それが通じたのか、二人の眼にほッと安堵の色が浮んだ。

弥平太がそのまま部屋の外へ出ようとした時、ドサドサッと足音が乱れて、一人の雑兵を引き連れた武者が近づいて来た。

「誰もいぬぞ、ここは……」

弥平太が云うのへ、その武者は、団子鼻をうごめかした。

「女の匂がするではないか」

弥平太がさえぎるのを押しのけて、部屋の中をのぞき込んだ。

「ほう、いるぞ、いるぞ。若い綺麗な女子が二匹じゃ」

「待て……その女子に手を出してはならぬ」
「なんと？」
武者は眼をいからすと、雑兵を手招きした。
「ちょうど二人いるぞ。しょっぴいて行く前に、とっくり楽しもうぞ」
「ならぬ」
弥平太が叫んだが、フフンと鼻先で笑った武者と雑兵は、部屋の中へおどり込んだ。
瞬間、弥平太は、悲痛に歪んだ女の顔の中に、紅葉の顔を見たような幻想にとらわれた。
「ぎゃあーッ」
雑兵が、弥平太の太刀に首をはねられて、絶息した。
「やッ、その方、味方を殺したな。気が狂ったのかッ」
武者が、女を離すと、ギラリと反り身の大刀を抜き放った。
「儂は、大崎倉之丞という加藤清正公の旗本じゃが、その方、誰の手の者じゃ、名乗れッ」
「村上兵庫之介の家臣、綾部弥平太」
「なんと、村上殿の手の者が、どうして、味方を斬った……ただでは済まぬぞ」
だが、倉之丞が、白い眼で、弥平太を威圧するように睨めつけて、女をむんずと掴んだ時、またしても、平太の太刀がきらめいた。
「むッ……」
倉之丞はその場にぶッ倒れた。
「さ、早く逃げろ」
言葉は通じなかったが、弥平太の意志は二人にわかったらしく、両掌を合せた。そして部屋を出ていった。
味方を斬ってまで、二人の女を救った弥平太は、事の重大さにやがて重く暗い気持になった。
（俺は、どうしても、あの二人の女を放っては置けなかったのだ……紅葉に似ていたといふことが、俺を夢中にさせたのだ……）
弥平太は、生々しく、その時のことを思い出しながら、暗い海を見詰めた。
（あの女たちは無事に逃げおおせたであろうか……）
弥平太は、月の光の中に、まざまざと、あの異国の女の顔を思い出すのだった。
「弥平太……何を致しておる？」
いつの間に近づいて来たのか、兵庫之介が酒臭い息を吹きかけて云った。
「お前も、普通の男並に、異国の女子を楽しんではどうじゃ……どの艘でも、今頃は、虜の女子共と合戦の真ッ最中じゃろう……大勢の味方が討死しての虜の女子共じゃ、討死した味方への供養というものじゃぞ」
弥平太は、庫之介の言葉を苦い思いできながら、黙り続けていた。

白い戦利品

本陣、名護屋の浜辺には、軍兵や兵糧陣や荷馬が、上ずった興奮を湧き上らせて、ひしめいていた。
海上には、無数の軍艘がうかび、勝利に酔うた将兵が、陸続と真砂浜に降り立った。
金、銀、財宝の戦利品へ、出迎えの軍兵は眼を見張るよりも、手首を数珠つなぎにされた若い婢（女奴隷）が、羊のように追い立てられてくるのへ、好奇の眼をむけた。
衣を剝がれた、女も大勢いる。疲労し尽した婢たちは、ふらふらと重い足取りで、誰も放心したように歩いている。
砂の上に突ッ伏す女もある。それを容赦なく、鞭を振って追い立てる。が、誰一人、あわれみの眼で見る者はいない。それどころかゲラゲラと哄笑する。髪を引ッつかみ、小突きまわし、このなまめかしい生きた戦利品を嘲

笑し、罵るのだった。

「むこい……」

弥平太は、岸辺に突ッ立って、引き立てられて行く、若い婢たちの、白い隊列を見詰めながら呟いた。

遠く、異国へ虜婢として連れて来られ、大勢の異郷人の晒し物とされている彼女たちの身の上に、激しいあわれみを弥平太は疼くように覚えた。

「ひいーッ」

白い隊列から婢の絶叫がつんざいた。

見ると、砂浜に突伏して動かない一人の婢が、手首に喰い込んだ縄を無惨に引かれて、胸をのけぞらしていた。

弥平太は、ドキッと胸を衝かれた。

京城で、味方を二人まで斬って助けたはずの女だった。

倒れている女に、もう一人の女が取りすがって、泣き喚いている。

(二人とも虜になっていたのか……)

弥平太は、ガクンと首を折ってしまった。

衆人環視の中では、どう救い出しようもない。

「このしぶとい女子奴!」

雑兵が縄のまま、ズルズルと砂の上を引きずって行き、白い砂浜に、引きずられた跡が痛ましく続いた。

虜婢たちは、あらかじめ拵えられた格子牢の中へ抛りこまれた。

全部で五十人あまりの数であった。

偶然にも、虜婢の采領役を、村上兵庫之介が受け持つことになった。

「太閤殿下の仰せには、虜婢共は、勝利のたむけとして、雑兵陣笠共へ差しつかわせということじゃ……この布告を聞いて、もう、雑兵共が眼の色を変えておる……」

兵庫之介は太閤殿下の御前から退出してくると、弥平太に云った。

「ところでじゃ、なにせ、女子に飢えた雑兵共のことじゃ、格子牢の女を盗み取ろうやも知れぬ、その方、今夜はしかと警護をするのじゃぞ」

弥平太は警護の役を命ぜられた時、脳裏に浮んだのは、あの女を逃すことであった。

逃亡行

虜婢の格子牢は、二、三丁先に浜を控えた所にあった。竹矢来で囲み、警護の番卒が、あぶらぎった眼で立っていた。

夜が来て、名護屋城のまわりに屯する陣屋は、夜っぴての酒宴で、かがり火が夜空をこがし、泥酔のよいどれ声や、女にたわむれる喚き声がしていた。

弥平太はいくども耳を蔽った。

「弥平太殿……儂等は、女子共の護り役でつまりませぬな……こうして、格子の中にぎっしり詰った女子を見るだけでは、殺生と申すもので……」

番卒の一人が、下卑た眼で、格子牢の中をのぞきこみながら云った。

格子の中は、正に、なまめかしい柔肌の氾濫である。

生け捕られた白い獣のようだった。獣にしては、あまりにも美しく、大人しい。どの女も、呆うけたように、横臥したり、うずくまったり、立ったりしていた。

弥平太は、あの二人の女を捜した。一隅に豊かな胸と胸とをひしと抱き合わしていた。年齢の頃は、一二十を二つ三つ越えたばかりの、はち切れんばかりの肉づきだ。黒々とした髪を丸い肩に振り乱し、蒼ざめた顔は、凄艶なまで美しさだった。

二人の女の視線が、弥平太の眼とからんだ。長く黒い睫毛の底の四ツの眼が、哀れみを乞うように、弥平太を見詰めている。

彼は眼を伏せた。

(似ている……紅葉と生き写しの眼だ……)

胸が痛んだ。

「ここは儂ひとりでよいから、お前も、陣屋の酒宴の仲間に入って来い」

弥平太は番卒に云った。

「では仰せに甘えて……」

「他の者共も連れて行ってやるがよいぞ」

「はッ、これは有難き仰せで……」

番卒はニタッと笑うと、弥平太の傍を離れていった。

弥平太は自分ひとりになると、激しい焦燥にかられた。頭の中で、走馬燈のように、女の救出の計画を思いめぐらした。

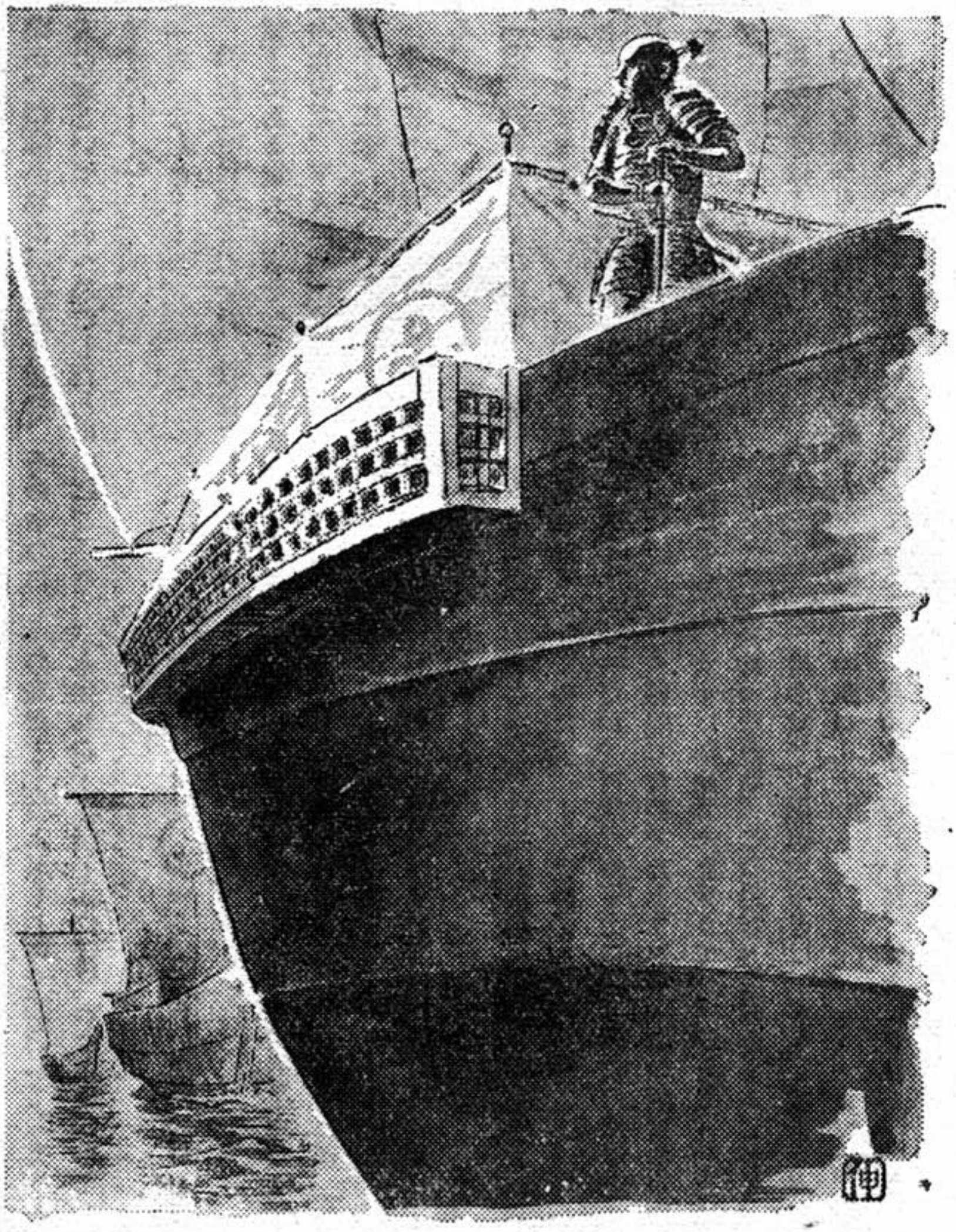
(全部の女子を救い出せないまでも、あの二人の女だけは……)

彼は、平戸にあるきりしたん屋敷を思い出した。

(そうだ、あそこなら、女をかくまってくれる)

彼は決意した。

浜はすぐ傍だ。小舟一艘あれば、なんとか潜ぎつける。彼は、格子の間から、二人の女へ手招きした。他の女は、身の危険を覚えたらしく、二人の女が近づくのとは反対に、尻ごみした。弥平太は、錠を外すと、二人の女が飛び出して来た。



二人の女が、弥平太に取りすがった時、弥平太は、その生暖い女の素肌の感触に、どぎまぎした。

若い弥平太の血潮を一瞬湧かしたが、すぐに、逃亡という緊張感が、弥平太の燃えた胸を冷やした。

竹矢来を破り、浜に出ると、人影はなかった。すべての軍兵は、酒宴に酔い痴れて、弥

平太たちの逃亡を知る者はいなかった。

巡よく、小舟に二人の女を乗せ、弥平太は力一杯漕ぎ出した。

沖に漕ぎ出したとき、弥平太は、名護屋城本陣のかがり火を見詰めながら、安堵と共に一抹の寂寥を覚えた。

（俺は二人の女を救うために主とも離れ、あまつさえ、虜婢と逃亡したという大逆人になり果ててしまったのだ……恋でもない、ただ異国の女が、死別したいとしい妻に生き写しというだけのことなのに……）

潮風が、弥平太の胸の中を冷たく吹き抜けてゆく。

二人の女は、冷たい潮風に身を震わせ、抱き合って、舟底にかがんでいた。

「寒かろう、これを纏え」

弥平太は、わが小袖を脱ぎ、二人の女へ抛り投げた。

潮の流れが早くなり、舟は漕ぐ手間もなく沖へ沖へと矢のように流されていった……。

惨忍の眼

太閤殿下本陣、名護屋城内では、朝鮮役の武功を賞でて、加藤清正、小製行長、石田三成、宇喜多秀家、その他、秀吉の随臣、小寺休夢、直江山城、織田有楽、大谷刑部などの諸将の宴が開かれていたが、村上兵庫之介も加藤家の一族として末席にはべっていた。

宴たけなわの頃、家臣の一人が、そっと、兵庫之介の耳もとで囁いた。

「殿、一大事でござりまする……綾部弥平太殿が、朝鮮の婢の牢錠前を破り、その中の二人の女といずこかへ逃亡したとの由にござりまする……」

「む。なんと……」

兵庫之介は眼をむいた。彼はこの自分の栄領下にある重大失策を知られては大変だと思ったのだ。早々に城内を退出すると、虜婢の格子牢に来た。

番卒共が大声で、虜婢たちを追い立てている。

「殿、錠前を外したのは、綾部弥平太に相違ござりませぬ……いま、婢共を調べましたるところ、二人の婢の行方がわかりませぬ……どうやら、弥平太の仕業のようで……」

「だが、何故、弥平太の奴、異国の女子と……懸想したのであろうか……あの船旅の途中女子は無用じゃと云うて、ひとり、船上にあったのは、この謎だったのか……しかし、虜の女子に懸想するとは、どうしても合点がゆかぬ……」

兵庫之介の思いは、徐々に錯乱し、やがて

（虜婢を逃がしたこと、太閤殿下の耳に入れば、ただでは済まぬ……しかも、己れの家臣の一人が、けがわらしい虜婢と逃げたとあっては尚更のこと……家臣の恥はこの主たる儂の恥だ……村上家もこれで断絶してしまうかも知れぬ……飼い犬に噛まれたとはこのことだな）

兵庫之介は、苦々しく、白い虜婢の群を見詰めた。

「者共……草の根を分けても、弥平太と女子を探し出すのじゃ……もし探し出せねば、わが村上家も無くなるものと思え……それに、弥平太奴を探し出すまでは、他言は無用ぞ。よいか……」

兵庫之介は沈鬱な顔で、家子郎党へ云いふくめた。

「だが、何故、弥平太の奴、異国の女子と……懸想したのであろうか……あの船旅の途中女子は無用じゃと云うて、、ひとり、船上にあったのは、この謎だったのか……しかし、虜の女子に懸想するとは、どうしても合点がゆかぬ……」

兵庫之介はうなった。

幼少の頃から、兵庫之介は、弥平太を側近く仕えさせ、実子のようにいつくしんで育て来たのである。いわば、腹臣以上の家臣なのだ。

は、弥平太をまどわせた虜の婢へ、激しい憎しみを抱くようになった。

「そうだ、虜の婢の魔性に、弥平太奴はいかれてしもうたのだ……われらと異なる異国の女子には、けがれた血が流れておるに違いない……婢共をなんとか早く始末してしまわねば、また、弥平太のように、大それたことを仕出かさぬとも限らぬ……」

兵庫之介の眼が、ランランと、惨忍な光を帯びて来た。

芳蘭・香蘭

その頃、弥平太の小舟は、運よく、潮の流れのままに、鷹島沖から、平戸の方へ近づいていた。

弥平太は、平戸の灯を点々と海岸線に見つけたとき、漕ぎ手に力をこめた。

(潮の流れが運んで来てくれたとはいえ、これは天助というものに違いない……)

ぐんぐん、小舟は灯の方へ進んだ。

平戸のきりしたん屋敷の主、秋山玄助は、いたり合人の宣教師、エロニモ・デ・アンゼリスから洗礼名をフランシス・玄助と与えられた男で、弥平太とは親しい間柄だった。

二十五才の弥平太とは三十も年上である。

やっとの思いで、弥平太が、秋山玄助の屋敷の門を叩いた時、東の空が茜色に明け初めていた。

門を開けたのは、玄助自身だったが、弥平太の姿を見ると、驚きの眼を見張った。

「弥平太殿、いかがなされたのじゃ?」

玄助は、傍の半裸の二人の女へ、目をしばたたせて聞いた。

「仔細は後程お話し申す……とにかく、中へお入れ下されい」

「さあさあ、遠慮のうお入りを……したが、その姿は余程の仔細がおありになるのであろう……」

玄助は、弥平太たちを招じ入れながら、痛ましそうに、眼をしばたたした……痛ましいことじゃ……しさんた・まりあの画像の飾られた聖壇のある部屋で、弥平太から仔細を聞いた玄助は、益々、沈欝な顔になった。

「どうして、人と人とが殺し合い、あまつさえ、負けた国の罪もない女子を、犬畜生同様に扱うのであろう……同じ人の魂を持っている者同志が……」

弥平太奴はいかれてしもうたのだ……われらと異なる異国の女子には、けがれた血が流れておるに違いない……婢共をなんとか早く始末してしまわねば、また、弥平太のように、大それたことを仕出かさぬとも限らぬ……」

兵庫之介の眼が、ランランと、惨忍な光を帯びて来た。

芳蘭・香蘭

その頃、弥平太の小舟は、運よく、潮の流れのままに、鷹島沖から、平戸の方へ近づいていた。

弥平太は、平戸の灯を点々と海岸線に見つけたとき、漕ぎ手に力をこめた。

(潮の流れが運んで来てくれたとはいえ、これは天助というものに違いない……)

ぐんぐん、小舟は灯の方へ進んだ。

平戸のきりしたん屋敷の主、秋山玄助は、いたり合人の宣教師、エロニモ・デ・アンゼリスから洗礼名をフランシス・玄助と与えられた男で、弥平太とは親しい間柄だった。

二十五才の弥平太とは三十も年上である。

やっとの思いで、弥平太が、秋山玄助の屋敷の門を叩いた時、東の空が茜色に明け初めていた。

門を開けたのは、玄助自身だったが、弥平太の姿を見ると、驚きの眼を見張った。

「弥平太殿、いかがなされたのじゃ?」

玄助は、傍の半裸の二人の女へ、目をしばたたせて聞いた。

「仔細は後程お話し申す……とにかく、中へお入れ下されい」

「さあさあ、遠慮のうお入りを……したが、その姿は余程の仔細がおありになるのであろう……」

玄助は、弥平太たちを招じ入れながら、痛ましそうに、眼をしばたたした……痛ましいことじゃ……しさんた・まりあの画像の飾られた聖壇のある部屋で、弥平太から仔細を聞いた玄助は、益々、沈欝な顔になった。

「どうして、人と人とが殺し合い、あまつさえ、負けた国の罪もない女子を、犬畜生同様に扱うのであろう……同じ人の魂を持っている者同志が……」

弥平太は、姉の芳蘭の方に、いい知れぬ愛慕の情を湧き立たるようになっていた。

ある日の夕方、秋山玄助が、血相変えて戻って来た。

「玄助殿、どうなされたのじゃ？」

「弥平太殿……今朝早く、私は、名護屋本陣の様子を見に参ったのじゃ……なんというても、そなた方の詮議立てが気になったからのう……ところが、名護屋の城下で、この世のものとは思えぬものを見たのじゃ……」

玄助は身内を震わして、憂いの目でまじまじあ画像を見詰めた。

「……虜の女子たちが、重い足鎖を引きずって、右往左往……そんな自由のきかぬ女子への男共が、浅ましや、よってたかっての乱暴狼籍……聞いて見ると、なんでも、そなたの主、村上兵庫之介の采領で、虜の女子たちは、いまいった足鎖の姿で、あたかも犬畜生のように野放し、非人といえども、乱暴してもよいとの布告が出たので、いやしい男共までが、獣のざまじゃ……逃げまどえど、虜の身、女子たちの中には、そのはずかしめに耐え切れなくて、自ら、生命を絶った者も大勢いるとか……これが、この世の地獄図でのうて、なんであろうか……」

「なんという人非人……」

弥平太は低く伸いた。

「して、われ等の詮議の様子は……」

「そ、そのことじゃ……儂が馳せ帰って来たのは。そなたたち三人の詮議は、各所に高札を立て、捕えた者には黄金五十枚、居所を訴え出た者には黄金二十枚を差しつかわすとのこと……そろそろ、ここも危のうなって来たぞ」

「何かよい才覚はございませぬか……どのようなことをしても、あの姉妹を、そのような憂き目にあわせとうない」

「この平戸も、最早や、安穏の地ではない……ここから一里ほど先に、度島という小島がある……そこの洞窟にしばらく隠れているがよい……そのうち、機会を見て、おらんだ船で、明国へ逃げればよい……」

早速、弥平太は、度島へ籠る準備をはじめた。

孤島の愛欲

度島での生活は単調そのものだった。隠れ島としては、恰好だったが、弥平太にとって思わぬ悩みが持ち上ったのである。

その夜は、ちょうど、度島に渡って来てから、七日経っていた。よく晴れた初冬の月が、凍るように海を照していた。

洞窟の中で枯木を燃やし、焚を取っていた。メラメラとあがる焔の赤い光に、弥平太の前の芳蘭、香蘭二つの顔が、美しく浮き上っていた。

「弥平太、あなた、どうして、あたくしたち助けたの？」

香蘭がたどたどしく訊ねた。

弥平太は、香蘭の眼の中に、ギラギラ焼けつくような熱さを覚えた。

「どうして？」

「……」

「あなた、いつも、あたしたち見る眼、さびしそう……そのわけ、知りたいの」

「……」

「恋じゃないの……日本の男も、朝鮮の男も恋する時の眼、おなじ……きっと、そう」

弥平太は、香蘭の言葉に、ぎょッとした。

「あたしたち、ふたご……顔はいっしょだけど、やっぱり、どこかちがう……あなた、どちらに恋してる？　教えて……」

妹の香蘭の言葉に、姉の芳蘭の方も、熱っぽく真剣な眼差しになった。

弥平太は沈黙し続けた。

彼の頭の中では、芳蘭と香蘭の二つの顔がぐるぐる廻った。

（どちらも好きだ……しかし、芳蘭の方に、俺は恋をしている……顔は同じでも、芳蘭はいつもしとやかでひかえめだが、香蘭の方は熱っぽくひたむきだ……）

弥平太は、芳蘭と香蘭の性格の相違を、いまのようにまざまざと見せつけられたのははじめてだった。

やがて、夜は更けた。三人は寝に就いた。

何時経ったか。

弥平太はねっとり柔らかなものを唇に感じて眼を開けた。

「だ、誰……」

叫ぼうとした弥平太の唇に、女の唇が力をこめて押しつけて塞いだ。

「芳蘭よ……香蘭が眼をさますわ……」

「芳蘭か。さっき、俺は答えなかったが、本当は、芳蘭、お前が好きなのだ……」

「う、れ、し、い……」

「お前は、俺の死んだ妻と生き写しなのだ。顔も気立ても……」

「……」

「京城で、お前を最初に見た時から、俺の心の中には、お前が住みついてしもうたのだ」

女の唇の力が少し弱くなった。

「芳蘭、俺はお前を離さないぞ」

弥平太は腰を抱いた手に力がこもった。

抱いて睦言を交した女は、芳蘭ではなく、香蘭の方だったのである。

積極的な香蘭が、芳蘭を装うていたのだ。

このことから、弥平太と香蘭、芳蘭の間に、とげとげとした感情の摩擦が起ったのである。

その夜から、香蘭は、絶えず冷たい眼で、弥平太と芳蘭を見るようになった。

弥平太は日を重ねるたびに、やり切れない

気持になっていった。

そんなある日、平戸から秋山玄助が小舟に食糧を積んで訪れた。

「弥平太殿、平戸の町も今では、各所に高札が立って、詮議立がきびしゅうなっておりますぞ……それに、詮議方の侍大将が乗り込んで来たが、なんでも、そなたに深い怨みを持っている男らしく、詮議のきびしさは気狂い沙汰だ……早いところ、おらんだ船で外海へ出てしまえればよいのじゃが、あいにく、船便がのうて……」

玄助は暗い顔だった。

「だが、この度島は大丈夫、滅多に見つかるものではないから安心するがよい……気長に機会を待つのじゃ」

玄助は、半ば慰め顔で帰って行った。

恋の怨み

芳蘭と香蘭の反目はますます酷くなっていった。

「弥平太さま……香蘭は、あなたに抱かれたりあんな夢中の妹を見ると、あたしは苦しい……」

「同じ姉妹でも、恋は一つ……それが人間の運命というもの、仕方がない」

「でも、妹は普通ではない……昨夜、あたくしを殺すといった……あたし、おそろしい……」

「馬鹿なことを……」

「いえ。恋の怨み、姉妹でも、こわいもの……」

「心配はいらぬ……機会に話そう……」

そうは云ったものの、弥平太の心は晴れなかった。

度島に来て、ちょうど一月近く経った師走の末である。

夜来の暴風雨が真昼近く、嘘のように晴れ、弥平太が浜辺につないである小舟の安否を見に行くと、小舟はなかった。暴風雨に流されたのかと、がっかりした時、はるかな海の上に、艪の音を聞いた。

眼を上げて見ると、小舟が、島を離れて、平戸の方へ漕ぎ出して行く。

乗っているのは、明らかに香蘭だった。

「香蘭！　どこへ行く？――」

弥平太の声は波に呑まれて、香蘭は答えなかった。

弥平太はざんぶと海中に飛びこんだ。

必死に泳ぎついて、小舟の舟べりを掴み、上ろうとするのへ、香蘭がやにわに艪を振り上げて打った。

「あッ」

弥平太が手を離して波にあふられるのへ、香蘭は、唇をゆがめて罵った。

「これから、平戸へ行く……ここの隠れ家、知らせてやる……いい気味……」

「なんと？……気が狂うたか？」

「芳蘭といい夢を見ているがよい……そのうち、こへ侍共が押し寄せる……」

「愚か者……その方も廣の身なのだぞ……他の婢と同じ憂き目にあいたいのか」

「芳蘭とお前のむつまじい仲見ているより、死んだ方がまし……」

香蘭は狂ったように艪を漕いだ。

平戸の方へ漕ぎ出している弥平太は追いつけなかった。

弥平太の声は波に呑まれて、香蘭は答えなかった。

香蘭が平戸の浜辺に小舟をつけると、詮議所へ行くまでもなく、番卒に捕えられて、引

き立てられた。

詮議所の侍大将は、意外にも、芳蘭、香蘭を救うために、斬り殺した筈の大崎倉之丞だった。

倉之丞は弥平太に斬られたが死なゝかったのだ。深傷で気を失っているのを、他の味方に救われ、最後の軍艘で遅れて帰って来たのである。

倉之丞の訴えによって、弥平太は、味方殺しの罪状を負わされたし、このために、村上兵庫之介は、その責をおって、切腹。家は断絶してしまった。

虜婢たちを地獄の苛責に追いやった、その天の制裁というものかも知れない。

「やッ、たしかにこの女子じゃ……弥平太奴が、儂を斬ってまで助けた女子じゃ」

倉之丞は、香蘭の顎を指先で持ち上げて云った。

「今まで何処に潜んでおったのに」

倉之丞が呟くのへ、番卒の一人が云った。

「殿、この女子奴、弥平太の隠れ家を存じていると申しております」

「な、なんと……したが、異なことを申す奴……己れが虜の身でありながら、何か仔細があるのじゃな」

倉之丞は首をかしげた。

「居所を教える前に、願いごとがあると申しております」

「なんの願いごとじゃ」

「生命を助けて呉れと……」

「よし。早く、隠れ家を吐かせろ」

倉之丞はニタッと笑った。

今更のように、彼のその笑いの中には、香蘭の豊満な肉体へ、いやしい欲望を湧き上らせていたのだ。

（京城では、弥平太奴に邪魔されたが、今こそと云うのへ、香蘭は鼻先でせせら笑った。

彼は心の中で、呟いていたのである。

悲恋の果

倉之丞の下知で、度島は捕吏の急襲を受けた。

弥平太と芳蘭は、捕えられて、倉之丞の前に引き据えられた。

「あッ、その方は？」

弥平太は、倉之丞の顔を見て低い声を挙げた。

「フフフッ、覚えていたか……殺されたはずの儂が、ここに居ようとは、よも存じていなかったであろう……あの時の怨み、今こそ存分に晴してやるからな」

調べもなく、弥平太と芳蘭は、詮議所の内庭の松に縛られたまま、夜を迎えた。

「芳蘭、死ぬ時は一緒じゃ、判ったな」

「はい」

「したが、そなたの妹の香蘭が、このような裏切りをしようとは……」

今更のように、恋の怨みの恐ろしさに、弥平太は身をおののかせた。

跫音がした。

二人が眼をやると、香蘭が日本の小袖を纏うて近づいて来た。

「香蘭、お前は……」

芳蘭が峻しく云うのへ、香蘭は鼻先でせせら笑った。

香蘭は折弓を持っていた。

ピシリ、と芳蘭の肩が鳴り、衣がちぎれて白い胸が露になった。

「明日、芳蘭は裸に剝がれて、足かせを引きずって町の非人の、なぐさみものにされる」

香蘭が云うのへ、弥平太は怒鳴った。

「実の姉をその上のような……儂がさせぬぞ」

「喚いても、だめ。お前の方は、名護屋本陣に送られて、車裂きの刑にされるそうな」

「む……」

「明日までの生命、とっくり楽しむがよい」

皮肉な笑みをうかべて、香蘭は闇の中に消えていった。

南の島には珍らしく、師走には早い粉雪が舞いはじめた。

「弥平太さま……雪が……」

「綺麗な雪じゃ……汚れを知らぬ、真ッ白な……」

「京城の雪を憶い出します」

「故郷へ帰りたいであろう……」

「はい、このまま帰りたい……」

「帰ろうではないか……儂が共じゃ……」

弥平太と芳蘭の眼と眼が、お互の心の中を射抜くように、長い間見詰めあった。

翌朝——。

番卒が、弥平太と芳蘭が舌を噛みきって自害したのを発見して、倉之丞に注進した。

倉之丞は、抱いていた香蘭を邪樫に突っ放すと、弥平太と芳蘭の死骸の前に立った。

「このおれの手で、責め殺してやろうと思うたに……」

倉之丞は、憎々しげに、弥平太と芳蘭を見詰めていたが、青い疳筋が、眉間に浮き上った。

倉之丞は、自分の座敷に戻ると、いきなり香蘭の着物を剝ぎ取った。

「あれッ——」

容赦はなかった。

みるみるうちに香蘭は一糸纏わぬ丸裸にされて転がった。

「誰か居らぬか…この女子に足鎖をはめろ」

倉之丞の声に、素ッ飛んで来た一人の侍が倒れている。香蘭の足首に、重い鉄鎖をはめた。

「町へ抛り出すのじゃ……乞食、非人共に、しゃぶらせてやれ……殺すも生かすも勝手じゃと云うてな」

唾を吐くように倉之丞は云った。

「約束が……」香蘭が泣きじゃくりながら云った。

「己れのような異国の女子を、この俺が、いつまでも囲うておると思うのか、たとえ、三日三晩でも、抱いてやったが、お前の果報、とっとと出て、犬共に喰われてしまえ」

香蘭は、足鎖をジャラつかせながら、詮議所の門前から、路上に抛り出された。

「女子じゃ」

「凄えべっぴんじゃぞ」

「誰が喰うてもええとのお布告じゃ」

「おれが一番じゃ」

「いや、おれが先じゃ」

門前には、女に飢えた薄汚ない非人共が、獣の眼をギラギラさせて、吠え、喚きながら群がっていた。

蠅のような非人たちの地獄図を、雪晴れの青い空を見上げながら、顔を硬ばらせて凝視している一人の男があった。

「恐ろしいことじゃ……恋の怨みで、血肉を分けた姉を売り、その報いがこの地獄図……人と人とがいやしくいがみ合うて、なんになるというのじゃ……さきに、あまた罪のない異国の女子を責めさいなんだ村上兵庫之介の末路が自害……何もかも罪の報はめぐってくるもの……今に、太閤の世の中も碌でもない末路を遂げるであろう……詮議所の倉之丞とやらいう侍大将も同じこと……罪に天の報いがのうて済む筈がない……この世が、この白い汚れのない雪のような清らかさに、なぜならぬのであろうか……」

男は、きりしたんの秋山玄助であった。

彼は、積雪の眼にしむような白さへ、祈るように、両掌を組んで嘆息した……。

（完）

エロチック・スリラー特集号!!

好評発売中!!

裸女観音……岡田鯱彦
淫楽の価……夢座海二

ヌード狂想曲

吉丈影日

耽奇小説 臨時増刊

お色気とスリルをミックスした耽奇小説ならではの傑作特集!!

壁の中の男……渡辺啓助
女妖……山田風太郎
何処かで見た女……香山滋
☆その他、興趣篇多数満載!!☆

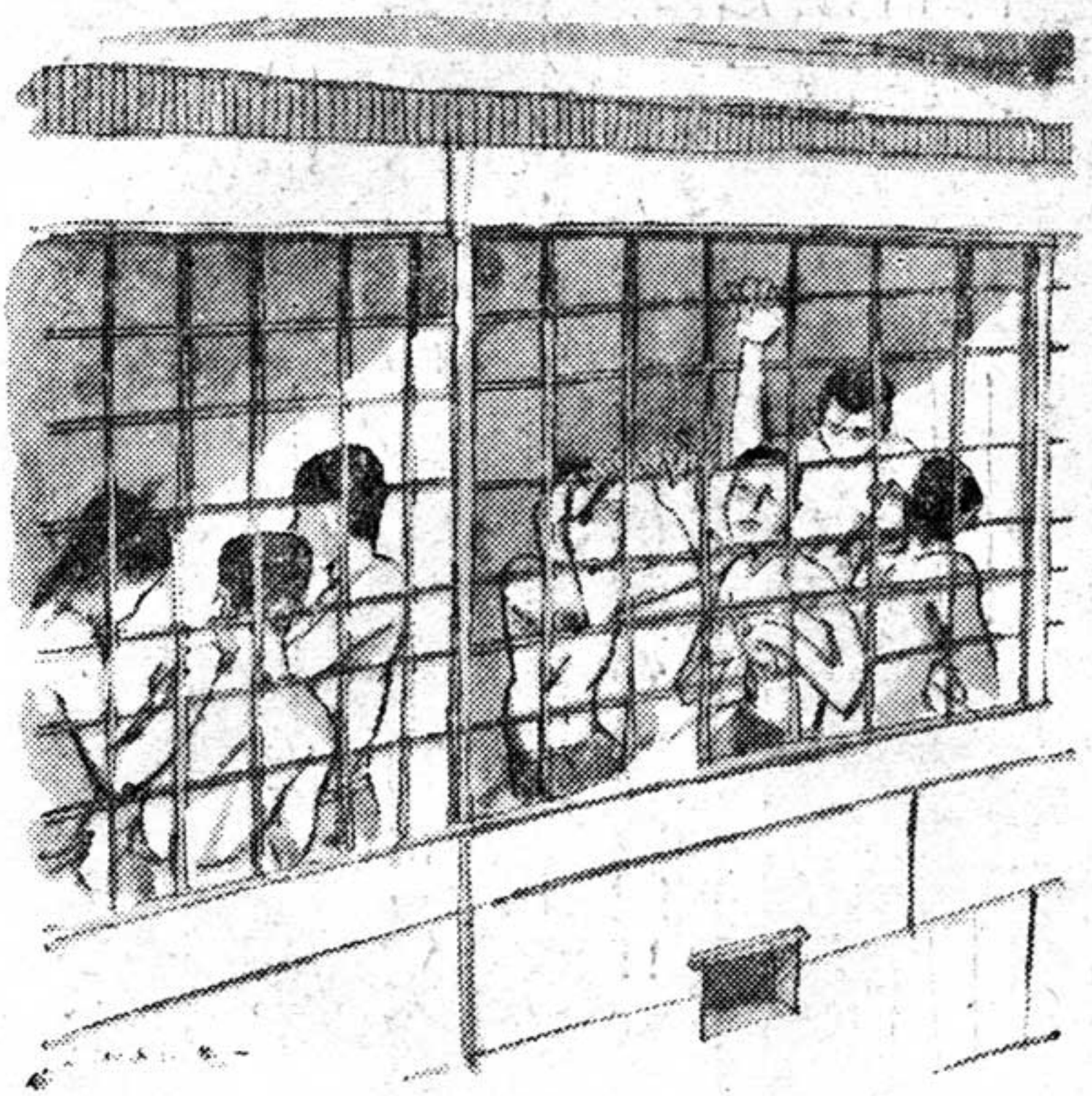
一華 蜻
火山 朝
の悪天女
土屋隆夫
鏡の中の人生
三橋一夫

久保書店発行
120円　送料12円

舵子島

孤島の少年達

孤児達のあこがれた島に、待っていたものは何だったか？



新博・画

柾木亀山

檻の中の少年たち

ある慈善団体の役員たちが、少年院を見学に行った。不良少年の集りなのに、かれ等は実に規律正しく、礼儀もわきまえているようだった。教官の案内でぞろぞろ歩いてゆく役員たちに、

「小父さん、今日は！」

「皆さん、いらっしゃい！」

立ち止って大声で挨拶してゆく。ひどく感心した見学者の一人が、教官にこう云った。

「どうも驚きましたナ、礼儀が正しいのには……むしろ一般の少年たちに、見習わせたいようなものですな」

教官は苦笑をうかべて返事をしなかった。彼は、少年たちが、大声で挨拶するのは、附近にいるものに、

——ほら。先公が、見学者を案内してきたぞ、——

と警告を発しているのであることを知っているからだ。

キビキビと体操したり、真面目に学習したりしているらしいのを見て、その役員たちの一行は、満足そうだった。が、帰るときになって、一人の少年が見学者のそばにつかつか

やってきて、吐き出すようにこう云った。
「――小父さんよう、動物園は面白かったかい？」
慈善団体の役員たちは、足もとをすくわれ、上から泥をかぶせられたような気がした、浮べていた笑いをあわてて引っこめ、彼らはコソコソと逃げるように帰っていった。
少年たちは、見学者たちのさらしものになるのは、真ッ平御免だ。院内を好奇心だけであちこち見て歩いて、
「ほう、なかなかよくしつけてありますというようなことを云って、褒めて貰ったところで、何のトクにもならないのだ。
××委員とか民間の少年問題の協議会の役員とかのところに、少年たちが仮退院してから、何か頼みに行っても、玄関先でおい帰されるのがオチだぐらいのことは、よく知っている。人間の冷たさ、非情さは、その人が社会的な地位があればあるほどはげしいということを、今までイヤというほど思い知らされている。だから少年たちは、
――大人どもにゃ、もっともらしいゴ託を並べるだけで、オレたちのこたァ、何も分っちゃァいねえじゃねえか……――
そう激しく反撥しているのだ、
少年たちが本当に喜ぶのは、お内儀さん連中の慰問とか、町の野球チームとの慰問試合である。
大阪の郊外にある新光少年院に、その少年たちの喜ぶお客さんが週に一回、月曜の午後から必ず訪れはじめてから、もう半年になる、少年たちは、どんな慰問よりも、彼の来ることを喜んだ。好きな野球の練習をしてくれるからだ。しかもその青年は、少年たちを見る目に、肉親以上の慈しみと親しさの柔い光をたたえているのはなぜなのか。
それがこれから物語ろうとする芝本茂の恐るべき少年期の記録である。
昭和廿五年、まだ戦争の傷手は大阪の表玄関、梅田駅の周囲にもなまなましく残っていた、読者は、駅の周辺や地下で、
「おっさん、靴磨かしてんか？」
「靴磨かしてえナ、一〇円に負けとくで」
そういって、磨き台を手に下げうるさくつきまとう少年たちが、たくさんいたのを覚えておられるだろうか。警官の姿を見れば逃げ

廻り、隙があれば、置引きや掻っ払いもやってのける、町のダニであった。

芝本茂はその頃、その中にまじって、旅行者たちの隙をうかがう浮浪児の一人であった。かれ等の間にもボスがいて、稼ぎはすべて吸い上げられ、一日の食費として百円宛が渡されていた。進駐軍の残飯雑炊が一杯十円、銀シャリが三十円、百円では足りずに、茂はいつも腹を空かしていた。

仲間の少年が、一度金をゴマ化そうとしてボスに見つけられ、半殺しの目にあったのを見てから、茂は怖ろしくて、とてもそんな真似をする気になれなかった。といって、彼の幼い頭ではこの駅のまわり以外に、自分の生きてゆける場所があるとは思えないのだ。

食べるものは、腹をへらしながらでも、まだ辛抱できた。しかし十一月も末になると、とても表では寒くて眠れない。一時十五分発の東京行が発車すると、駅の場内は掃除がはじまり、浮浪者は全部追い出される。風の当らないビルの軒先で、むしろをかぶって寝ているのだが、寒さに、とても眠るどころではなかった。

だから茂は、夕方暗くなると磨き台をかかえて待合室の中へもぐり込み、隅の壁に背をもたせて追出されるまで居眠りをすることにしていた。

十二月に入って間もなく、いつものように片隅で眠っている茂の肩を叩くものがいた。

「——おい。チビ、靴磨いてくれんか」

どうせ、まき上げられる稼ぎだ。それよりいまの茂には、眠ったほうがいいにきまっている。

「——カンニンしてえナ。誰か外の人に……オレ眠くてたまらんのや」

「眠いってか……うん。可哀そうになァ。よくしぼん。いいものやるで。ちょっと目開けてみい」

「かなわんなァ」

ねむい目をこすりながら見ると、うまそうな菓子パンが二つ、さし出されている。

「おっさん。これくれるのんか？」

「おお。やるで」

「おおけに。ほんなら、磨かしてもらうわ」

「ええ、ええ、もう磨かんでもええ」

その男は、パンにむしゃぶりつく、茂のそばにしゃがみこんだ。

「お前。おふくろさんやおやじさんどないした？」

「死によった」

「空襲でか？」

「……」

パンを食べるのに夢中だから、茂はうなずくだけだ。

「そんなら、小父さん、いいとこ連れてったろか。そこなら、うまいもの腹一杯食べさせて、フカフカの蒲団に寝せてくれて、洋服も良いもの着せてくれるでえ」

幼なくても、この世の中に、そんなウマい話が、そうザラに転がっているものではないくらいのことは知っている。

「うまいこと云って……小父さん、施設に連れて行くのとちがうか？」

孤児の収容施設は、腹をへらしても、寒くて寝られなくても、どこかに野放図な自由の味わえるこの生活に馴染んだ浮浪児たちには息苦しくてたまらない。警察に保護されて施設に収容されても、大ていの少年は二、三日で、また駅のまわりに逃走して来ていた。

だから、

「うまいこと云ってもあかんわ。オレ施設は嫌いや」

「ちがうちがう。施設やあらへん。小父さんの連れてくところは、瀬戸内海の……お前瀬戸内海知ってるやろ？」

「死によった」

「うん。知ってる」
「そこの、島や。景色はいいし、船には華やかなビーチパラソルが並んでいる、ボートもある。浮袋もある、とび込み台る、それにたらふく食わせて、フカフカの蒲団やで」
「どないして、そんなことしよるのや？」
「う、うん。それはな、慈悲深い網元の人がいてな。そのお人が、浮浪児は可哀そうだから世話をしてやろう、良い子を四、五人連れて来いいうて、わいに、云いつけはったのや」
「ふーん」
まだ半信半疑だ。
「そいで、何もせんでええの？」
「そりゃ少しは働かな、いかんわ。地引網をひいたり。畑の手伝いをしたり……でもちゃんと小遣いはくれるで。日曜日には映画にも連れてってくれる」
「そんな島に映画館あるの？」
「あるある、二つもある」
「ふーん」
茂は、そっと姿を胸にえがいてみた、熱い砂浜。沖を走る汽船。波の上をすべるように走るヨット、白い雲がポッカリ浮んでいて、浜には華やかなビーチパラソルが並んでいる、ボートもある。浮袋もある、とび込み台から。どぶーんと海の中へとびこんで……。
「おっさん。オレ行くわ、連れてってえな」
茂は思わず弾んだ声を出した。
その男の顔に、一瞬酷薄なうすら笑いが浮び、狡猾そうに目が光ったのを、少年はむろん気がつかなかった。

どれい島

愛媛県の久里浜から海上二里、大島まで八里という瀬戸内海の孤島、雄志島は、島の周囲八キロ余り、戸数七十戸、人口六百人という、電燈もない文化から取り残された漁村である。
この附近に群れる小魚を追って鯛があつまり、全国でも有数な鯛の名産地として有名だが、潮の流れが早く、魚を獲るのに網はつかえない。漁師たちは小さな船に乗って、一本釣という原始的な方法で、小さな舟に乗り鯛の群れを追う。
釣糸をあやつる漁師が一人、それに潮の流れが早いので、舟を静止しておくために、たえず流れに向って櫓を漕ぎつづける舵子が一人、このコンビで漁をするのである。
島では〝舵子〟を〝梶子〟と呼びならわしているが、一年中朝から夜まで、舟をとめておくために口をこぐという単調な仕事が、一人前の男にできるはずはない。漁師のほうとしても、日に二百円、三百円という日当など一本釣のたかが知れた漁獲からは、払えるはずもない。
そこで、十二、三の子供を、伊予の貧しい農村から買ってきて、梶子に仕上げるという方法が、遠く江戸時代から行われてきていた。
ところが敗戦後の農村ブームで、梶子の供給源がなくなってしまった。そこで目をつけたのが、都会をうろうろしている浮浪児を、この島に連れてくるということである。一戸に一人、六十七、八人いる梶子のうち、半数はこうして連れて来られた浮浪児たちであった。周施人は、なるべく体格の良い、性質もおとなしそうな浮浪児をさがし出すため、広島、姫路、神戸、大阪と、各戦災地をうろつきまわり、一人島へ連れてゆくと、五千円から六千円ぐらいで取り引きされる。かれ等にとって、こんなボロい儲けはなかった。
漁師はまた、食べて寝かせるだけ、あとは

月給を与えるでもなく、小遣をやるでもなく、こき使えるだけ使い、万一病気になって死んでも尻のもちこまれる怖れのない浮浪児は、このうえない梶子の供給源であった。

茂が連れて来られたのは、このどれい島であった。

銀シャリのはずが、麦だけの飯で、おかずは鰯だけ。〝フカフカの蒲団〟はむしろのことであり、寝るところは土間の隅であった。島に着いた日に、だまされたことを知ったが海の上では逃走もできない。

苛酷な運命には馴れ切っている茂ではあったが、さすがにその晩は、目がさえて眠れなかった。生ぐさい魚の匂いが、むっと立ちこめ、戸の隙間から海を渡ってくる寒風が、チリチリと肌に痛かった。

「――おい。しっかり働くのやで。この島はなァ、逃げよう思うたかて、逃げられへん、今まで逃げよう思うて、海へはまって死んだやつが何人おるか知れへんよってに。気いつけや」

漁師から金を受とると、それまで優しかった人買いは、がらりと調子を変えて、むしろ憎々しげにそう云うのだった。

茂の雇主になった漁師は、ほとんど口をきかなかった。

人買いがペコペコ二、三回頭を下げて帰ったあと、

「――小父さん。オレだまされて来てしもうたんや。明日大阪へ去ぬで……」

強気にそう云ってみたが、ギロリと睨まれただけだった。家族はお内儀さんと五つぐらいの女の子に赤ん坊が一人。暗いランプの下で、誰ひとり口をきくものもいなかった。赤ん坊がときどき泣声をあげるだけ、食事は茂だけ土間でさせられた。ふちの欠けた丼に、麦めしが盛られており、その上に鰯の焼いたのが二匹乗っていた。闇市のどんな食べ物よりまずかった。

「――明日は早いんじゃから、早よ寝えよ」

色のまっ黒い、眉の間のせまった漁師が茂に口をきいたのは、それだけだった。

明日からどんな生活がはじまるのか見当もつかない。人買いと、不機嫌におし黙った雇主の顔を交互に思いうかべ、果てしない不安が襲ってくるのを、どうしようもなかった。

何時ごろだろう。まだ夜も明けぬうちに、トロトロと眠ったところを茂は起されて浜へ連れて行かれた。

「これかついで、ついて来い」

漁師に渡された櫓が、肩にめりこむほど重かった。梶子たちの逃走を防止するため、この浜では舟小屋に船具をおさめず、いちいち家まで持つて帰るのが習慣になっていた。

「いま何時頃やろか？　小父さん」

「――親方って呼ぶんだ」

「ほんなら親方。いま何時かね」

親方は返事をしなかった、星が冷くさえかえり、裸足の足の裏から、寒気がのぼってきて、頭がしびれるようだった。

浜では舟を出す支度をしている人々の黒い影が、忙しげに動きまわっていた、どこの浜でも、船出は景気のいいものだ。それなのにここでは、かけ声ひとつ立てられず、話し声もほとんどしなかった。皆黙りこくって海へ舟をおろし、音もなく闇の中へこぎ出して行った。

「今日はお前は見とるだけでええ。よう見て早く覚えるんじゃ」

親方は左手だけで器用に口をあやつり、右手で糸の仕掛をしらべていた。

茂の空想の中では、海はキラキラと明るく、空にはぽっかり白い雲が浮んでいるはずであった。

だが、この海の暗さは、どうだろう。まる

で墨汁を流したような黒い水に、ときどき星の光が映るのか、キラリと波頭が光った。

東の空がかすかに明るみかける頃、舟は漁場につく。

「お前。名前はなんていうんじゃ」

「――しげる」

「ふーん。しげか、お前ちょっと、ロをあけてみろ」

茂はともに立って、ロを握った、親方が軽と押していたロが、茂の手にかかるとじるで自由にならなかった。

「もっと腰に力をいれて……、そんなこと、舟は流されてしまうぞ。もっと力を入れて……」

親方がロべそのところを外れないようにえていた手を放すと、ロが忽ち外れ、身体がよろけて茂は思わず海の中へ落ちそうになった。

「はらほら。注意しろや。つい二、三日前も海にはまりこんで、一人死によったけえ」

十分もこいでいると、呼吸が苦しくなって院が動かなくなる。手の動きがにぶると、

「しっかりせえ」

罵声と一しょに。麻のロープがとんでくる。その日、茂は四回ロープで叩かれ、身体に残ったアザが、十日余りも消えなかった。

梶子

風のつよい日と、ひどい雨が降る日以外は、漁は一日も休まない。朝三時に起きて、家へ帰るのは八時近くなるという想像を絶した十七時間労働が、梶子たちには課せられていた。ただ機械的にロを押すだけで、口をきく元気さえ失くなってしまう。楽しみは寝るだけ。土間の隅で、むしろをかぶって寝るのも、疲れ切った身体には、苦にならなくなっていた。

茂がこの島へ来てから、六ヵ月たつ。

ロの押し方もすっかり上手になり、少年は

一人前の梶子に成長していた。

鯛の不漁のときは、鰯をつる。とったばかりの鰯の骨を手でしごいて、海の水へつけて食べることも覚え、色もまっ黒に陽やけしていた。

生のいわしは、口の中で甘くとけ、それがいちばんの御馳走だった、鯛のとれるときは麦を食べさせたが、不漁の季節には、鰯の干物とふすましか食べさせて貰えなかった。

腕だけが太く、身体はアバラが見えるほど痩せて、茂はときたま梅田駅での生活をなつかしく思い出すだけの、無気力な少年になっていた。

漁が休みの日には、使わなくなった浜の納屋に誰いうともなく梶子たちは集ってきた。なつかしい都会の思い出を語り合ったり、遠く雨にかすむ伊予の浜を望んで、なんとかこの島を抜け出したいと話したり、哀しさをまぎらわせるために、唄をうたったりした。

茂が長尾政雄と知り合ったのは、この納屋の集りでだった。

神戸の不良少年で、少年院へ入れられたいい顔のお兄いさんだと、ちょっと得意そうに自己紹介をした。年も茂より四つ上の、十八だった。

うまが合うのか、政雄は何かと茂をかばってくれた。どこで手に入れたのか、黒砂糖の大きな固まりをくれたこともあった。島へ来てから甘いものの一片も口にしていなかった茂は、咽喉をならしてむしゃぶりついた。

「うわーッ。うめえなァ。こんなにうめえもの、食べたことあらへん」

目を細めて笑う茂を見て、政雄も満足そうだった。シャツの下にかくして、家へ持ち帰り、茂は漁から帰って、毎日少しずつその黒砂糖を舐めるのが、何よりの楽しみだった。

ある晩帰ってみるとその黒砂糖がなくなっていた。ただ一つの楽しみを奪われて、茂はがっかりすると同時にむしょうに腹が立った。

――畜生ッ。盗ったやつを見つけて、どついたらなァ、辛抱でけんしょ――

犯人はすぐ分った、親方のところの女の子だった。

「――お前盗ったんやろ！」

頭をこづいただけで、女の子はぐしゃりと雑巾のように、顔をくしゃくしゃにさせて泣き出した。

「しげがどついたァ――」

家の中からお内儀さんがとび出してきて、茂は後ろ手にくくり上げられた。土間の柱にしばりつけられ、漁に出されなかった代りに飯も与えられなかった。

「ようも、家の娘に手を上げくさったナ」

日に何度かお内儀さんが来て。両頬をはげしく殴った。女の子が石をひろってきて、投げ、その一つがこめかみに当って血が流れた。

茂は泣かなかった。盗ったものが罰せられずに、自分だけが仕置をうける不合理に対するいきどおりが、いまにも流れそうになる涙をやっとこらえさせた、

腹がへるのはまだ我慢できる。しかし喉がいがらっぽくなるような喝きは、神経の末端を、焼火ばしでこすられるような苦痛を呼んだ。泣かない茂を見て、お内儀さんはますますいきり立った。

「しぶといガキじゃ、謝りもせんと。こうして、こうしてやるわい」

鰯を通す細い鉄棒のさきで、腕や太ももをつきさした。

この島では、梶子はどの家でも人間扱いにしていなかった。島の者よりも一段低い種族として扱っていた。だから梶子にはどんな残忍なことをさしても、誰も反省もしないし、

他人がやるのを見てもとめるものもいなかった。

二日間しばりつけられ、いじめぬかれて茂はやっと縄をとかれた。

その翌日は漁に出たが、その晩から腕や足がほてって、ズキズキ痛みはじめ眠れなかった。鉄棒で刺されたあとが、はれ上ってひどい熱をもっていたのだ。茂は浜へ出て、海へ両手をつけた、塩水が小さな傷口からしみて思わず声を上げたほど痛んだが、冷やすと気持がよかった。熱が出たのか、瞼の裏がカッカッと熱く。身体がひどくだるかった。

熱にうるんだ目に、三日月がぼうっとかすんで見えた。茂はこの島へ来てから、はじめて涙を流した。たまらないほど心細かった。

「――おっ母ァ」

沖へ向って叫んだ、その声は闇の中へ吸いこまれてゆき、伊予の浜の電気の光が点々として見えかくれしていた、

茂は朝まで浜にいた。六月とはいっても明け方の海は冷めたく、砂浜に寝ころんで、少年は高熱と冷えとで、真っ蒼になってころがっていた。

梶子は病気をすれば。見殺しだ。医者にかけるよりも、その金で人買いに頼んだほうが早いからだ。自然になおるのを待つだけで、熱を出しても薬の一服も貰えない。

いつか赤木三平という十六になる梶子が病気になった、赤痢らしく、一日中下痢ばかりしていた。食べ物を欲しがって、土間をはいまわり、あちこちに下痢をした。

家のものが汚ながって、鯛の生き餌を入れるダンベーの中に入れられ、釘をうちつけられて、丘の上に放っておかれた。

三日目に三平は死んだ。

「赤痢みたいなもの、家の中にようんでのう」

三平の雇主は、さすがに気がとがめたものか、そう弁解した。

「外に出しときゃァ、食べ物をあさって、あちこちはいずり廻りよるし。バイキンでもあるし。バイキンでもあるし。伊予のちこちまかれるといけんと思うてのう」

島の人々は、干からびたように骨と皮だけになって死んでいた三平の死を、その弁解だけで、当然のことと納得した。

茂は病気の間集会所の納屋で寝ていた。働かないものにはむろん食事は与えられない。どこからか食べ物を見つけてきてくれたり、漁の行き帰りには必ずのぞいて、あれこれ世話をしてくれたのは、札つきの不良、政雄だった。

「おい。どや、ちっとは具合ええか。ほうえ

地獄からの脱出

茂は病気の間集会所の納屋で寝ていた。働

らいはれとるなァ、痛いやろう。辛抱せえよ。その代りお前なおったら、どえらいことやってこまして、あいつらをきっとぎゅうという目に逢わしたるさかいナ」

そう云ってニヤリと不敵な笑いを浮べてみせた。

「三平を殺しくさって。茂をこんな目にあわせよって、オレはもう辛抱ならんわい」

「政兄ちゃん。この飯兄ちゃんの分やろ」

「う、うん。そうや」

「これオレ食うてしもうたら、兄ちゃん腹へってかなわんやろ」

「えええ。大丈夫や。オレは沖へ行ってイワシでも食うさかい。心配せんでお前食べえな」

「すまんなァ」

「なに云うてんね。男は涙なんか流すもんやない」

「兄ちゃん、どうしてこんなとこへ来たん?」

「欺されてよ。人をだますことばっかりやっとったのに、こんどばかりは反対に一杯食うてしもうたわ。夏の間だけ、海水浴に行くつもりで、行かへんかいうてナ、うかうか口車に乗って来てしもうたら、このザマや。チャリンコ政も、どうやらヤキが廻ってしもうたらしいわい」

「兄ちゃん。少年院帰りって、本当か」

「うん、本当や。新光学院ってナ。布施のそばにある景色のいいところやぜ」

「少年院って、どんなことするのや」

「どんなことって、勉強したり、体操したりや、モクの吸えないのが困るけどなァ。食べ物はいいし、蒲団もきれいだし。考えてみると、オレがもの心ついてから、いちばん楽しかったのは、少年院に入ってた間かもしれへんなァ」

「ふーん」

「でもあそこは悪いことばかりした奴の入るところや。茂はそんなことしたらあかんでえ」

「兄ちゃんは何やったん?」

「オレか、オレはやったなァ、掻っ払い、恐喝、ぼたはたき……」

「なんやね。ぼたはたきって?」

「掏摸のことや。やちもけったしたし、赤ねこもはわした……」

「それ。なんやね」

「ええ、そうか、そんなこと、お前ら知らんでもええわい。じゃァ、行ってくるで、帰りにまた寄るわ」

「うん、おおけに」

ほてる場所を水でひやしたり、話相手になって慰めてくれたり、肉親の愛情にうえていた茂にとって、政雄の示してくれた愛情は、本当の兄以上に思えるのだった。

五日目に熱が上り、一週間目にはほとんどハレもひいた。その間、親方は一度も見に来なかった。

茂がやっと癒って家へ帰ってゆくと、

「おう、やっと癒ったか。病気なんかしやがるから、まるで一人じゃァ仕事にならなかったぞ、気をつけろよ」

親方はお内儀さんに刺されたのが原因で病気になったのに、そのことには一言もふれず放ったらかしておいたことの弁解も何も云わなかった。その日から茂は、家のものとは一切口をきかなくなった。それがせめてもの反抗だった。

梅雨がやってきた。

雨が降っても、海さえ荒れなければ、漁は休まなかった。親方だけは合羽を着て梶子は口を押しながら、濡れっぱなしだった。肺炎をおこして、梶子が三人死んだ。漁から帰っても、着たきりすずめの梶子は、濡れた洋服を着ているしかない。親方の着物は火をおこ

な菓子袋が渡された。カリン糖が十四、五、それに飴が五つ六つ入っているだけだったがそれでも痩せて目ばかりギョロギョロした顔をほころばせて、梶子たちは一日羽を伸ばすのだった。

政雄が茂と二人で島から逃げ出したのは、その真夜中のことだった。

北極星へ向ってこいでゆけば、江田島か大島につくはずだった、しかしその夜は曇っていて、星くず一つ見えなかった。

ロはむろんない。板切れだけで海上八里を乗り切ることはまず不可能に近かった。

「けどナ、この島にいてもどうせ殺される。そんなら一か八かやってこましたろやないか」

政雄の言葉に茂はむろん一も二もなかった。流れの早い瀬戸内海を乗り切れなくて、逃げ出した梶子たちが、全部死んだという話も何回となく聞かされていた。しかし、

「オレ平ちゃらやで、兄ちゃんと一しょやったらナ」

茂はただ無邪気に張り切っていた。

「行きがけの駄賃に、お前の親方と三平のとこに火いつけてったろうか」

「やめとこ、兄ちゃん」

して乾かしても、梶子には、暖まれ、という言葉すらかけなかった。

濡れた服をぬいで、真つ裸でむしろにくるまって土間に転がり、朝はまた濡れたままを着てゆく、そんな中では、肺炎を起さないのが、むしろ不思議なほどだった、

まだ梅雨の残っている七月五日が、この島の祭だった。丘の小さな祠に供物が捧げられ、島の主だった人々が、その年の豊漁を祈願するのである、この日だけは、誰ひとりとして漁に出るものはいなかった。親方たちは朝から焼酎に酔い、お内儀さん連中は、おハギをつくって、一日中遊び暮した。

この日だけは、組合から梶子たちにも小さ

茂は、それだけは、反対した。

「もし火事になったら。オレたちいないのんすぐ見つかるでえ、ほしたら二丁口で追いかけよるで。すぐ捕まってしまうわ」

反対した本当の理由はそれではなかった。〝火つけ〟という罪悪感が、茂にはイヤだったのだ。

政雄もむろん茂のそんな気持が分らぬではなかった。

「オレはいいけれど、もし向うへ渡ってからそれがバレたら、サツにとっ捕まるよってにな。そうなったらお前が可哀そうや。やめとこ」

毎日のように出ている海だから、潮の流れも、大渦がどのへんに巻いているかも知りつくしているつもりだった。黒く影を落す無人島の間を縫って、舷の両側に坐ってこぐ小さな板切れだけがたよりの舟は、音もなくゆっくりと怖るべき奴隷の島をはなれていった。

「おい大丈夫か、あんまりあせってこぐとすぐ疲れるで、ゆっくりやれや」

「うん。大丈夫だよ兄ちゃん」

幸い波は静かだった。食べずにとっておいた飴をしゃぶり、疲れれば手を休めて舟底に寝ころび、小舟はゆっくりと北へ向って進んでいった。

「お前。向うへついたら先に何する?」

「警察へ行って助けて貰う」

「それから」

「それから梅田へ行って……」

「また靴磨きやるつもりか。やめとけ、そんなこと、心配しなや。オレがかせいでちゃんと食わせて、学校へも通わしてやるよってにな」

「本当か。兄ちゃん」

「本当とも、こう見えても、舎弟分もぎょうさんいるし、いい顔の兄哥もついているよってに。お前一人くらいひもじい思いささんわい」

「ほんなら、兄ちゃんいちばん先になにやりたい?」

「オレか、銀シャリ食って、酒を呑んで、それからオレは女に会いに行く」

「スケてなんやね」

「女いうたら恋人やないか、お前なんも知りよらへんな、尼ケ崎の飲屋の娘やで、新宮美子いうてなァ」

「ふーん」

「お前にも会わしたるわ。気質の優しい、ええ女やでえ」

「ふーん」

茂は自分ひとりの兄のように思っている政雄に、彼の心を奪うそんな恋人のいたことが少し不服でないこともない。

「さ。また漕ごうか」

腕を動かしている間は、二人とも黙りこくって話をしない。口をきくと、疲労が早くくるからだ。

島から二里ほど離れたところに。激しい潮流がある。昼間見るとところどころにぶきみに渦をまき。馴れないうちは。舟のロがいうことをきかなくなるような急湍だった。

「ほら。そろそろ潮にかかるぞ。頑張れよ」

一里ばかりつづいているこの潮流を乗り切れば間違いなく本土へ着けるはずであった。二人ともう汗をびっしょりかいていた。

潮は東へ流れていた。

「えい。えい」

かけ声をかけて、二人は夢中になって水をかいた。腕はしびれ、目はくらみそうだった。対岸の灯が、かすかに見えてきた。

「ほら、もう少しだ。頑張れ」

政雄の声もかすれている。

どのくらい漕いだろう。きゅうに流れが静かになったようだ。

「しめたッ。とうとう乗り切ったぞ」
政雄が喜びの声をあげた。その声で茂は胴の間に仰向けにひっくりかえって、荒い呼吸をしていた。
「ほら。あれが島の灯だ、あれが大島かな。あれが……」
舟がグラリと大きくゆれて。くるくるくるはげしく廻りはじめた。渦に巻きこまれたのだ。
みよしに立ち上ってあちこち指さしていた政雄の身体が、大きくゆれて、水音を立てて海へとびこんだ。
「——あっ、兄ちゃん」
黒い海の上に、一回、二回、政雄の首が浮んで消えた。茂は慌てて板をとって、気が狂ったように、水をかきはじめた。しかし板ぎれ一枚で、このすごい大渦から出ることなどとても出来そうになかった。
「兄ちゃーん」
悲痛な声が、海上にひびいた。
「しっかりしてー、いま助けに行くよってなァ」
その声に応えるように政雄はもう一度波の上に浮んだ。手にもった板きれを素早く投げたが、届かない。
「兄ちゃーん」

「しげるう」
それが、茂が政雄の声を聞いた最後だった。

茂が気がついたのは、三原市の病院のベッドの上だった。疲労とショックのために、失神して、舟底に倒れていたのを、漁舟に救われたということだった。
暗黒の奴隷島。雄志島は、茂の訴えで警察の手入れさうけ、島の梶子は全員本土へ送り返された。漁師たちのうちで何人かは少年保護法。労働基準法違反で。体刑を申し渡されたものもいるという。
茂は孤児の収容施設に入れられ。そこから中学校、高校へと通わせて貰った。悪夢の中に、ただ学校を卒業し、小さな商事会社に入って、そこの野球チームの三塁をやっていた。
昔の出来事が、悪夢としか思えない。平穏で幸せな日々がつづいた。悪夢の中に、ただ一つ、思い出すたびに胸のしめつけられるような懐しさに襲われることがある。弟のように可愛がってくれた、政雄のことだった。
——不良だとかチンピラとかいって、人は毛ぎらいするけれど、あんな連中の中にこそ本当の人間性をもった少年がいるのではないだろうか——
自分の食物をさいて、看病してくれたときのことを思うたびに、茂は今でも瞼が熱くなる。
方々のグランドを借りて、試合をしている間にスカウトに発見され。去年の十月に正式にプロチームに入団した。二軍とはいっても給料もはね上って、合宿費をひいても、手許に一万円以上の金が残った。
練習の合間を見て、彼の少年院通いがはじまった。人々からまともに相手にされない、自分も〝動物園は面白かったかい〟と自嘲するかれらの間に、政雄の面影を見出そうとしているのかも知れない。
社会に出てから尼崎にいる恋人をさがし彼の最後を伝えようとしたが、とうとう見つからなかった。嫁にいったのかもしれない、もしかすると、彼の空想の中の恋人かも知れないい、とそんな気もするのだ。
「ほら。もう一丁いくぞ」
白球を追って、右に左に少年達は走り廻る。ショートを守っている少年の、まくり上げた腕から、イレズミがのぞいていた。ノックをしながら、茂はふとその少年の上に政雄の顔を重ねてみた。彼にも左の腕に〝御意見無用〟のイレズミがしてあったからだ。

昆虫の体臭をまき散らすデス・マスクの女！飢えた夜の巷に男は黄色い女にまたしてもあの体臭を嗅ぎ当てたのだ！

黄色い毒蛾

溝呂木寂子

雨

横なぐりの雨がベランダのたたきにしぶきを上げて通りすぎてゆく……

田久島は籐椅子にもたれながら目の前のベッドに寝ている妻の笙子を眺めていた。

別荘で療養するようになって一、二ヵ月の間は、見舞うたびに久しぶりに会う妻への暮情からか抱きたいと思う衝動もおきたが、もう二年目になり、だんだんと体がやせて来ると、同情が先に立って、言葉だけの慰めだけになってしまうのである。

最近はいつもそうなので、妻の笙子の方が焦燥をうったえて、彼の方が気をつかうくらいである。

T・B特有の異常さは病的であり、それだけに受け入れることは田久島にとっても、笙子にとっても、大きなマイナスであった。

だから、長い時間二人で話していると欲情を一層かりたてるので、肝心な話だけを済ませるとすぐ帰るようにしていた。

笙子はそれを知っているので、彼の帰宅しそうなそぶりを感じると、空虚な目を向けて、かすかに笑いながら、パインのふとんから細い小さな指をさし出すのである。

その指先きは螢光灯に映えて、妙に青白くすきとおり、皮膚を通して骨がギクギクと透けて見えるようだった。

今夜も田久島は、外が雨なので、笙子が哀れげにふとんから手をさし出すのを思うと、いっそのこと添寝して明日帰ろうかとさえ考えたが、笙子の病状では到底無理なことであった。

笙子の死を早めてまで、一緒にいることもないので、

「笙子、じゃ僕今から帰るよ。体に気をつけてくれよ。養生すればよくなるんだから。また、二、三日うちに来るよ」

「そう。また来て下さる？　うれしい。笙子こんなに駄目になっちゃってごめんなさいね。東京のうちで、私より他の女の人を好きになってもいいから、ここだけでは私だけの人であってほしいわ」

「あたりまえさ。何を急にそんなこと云うんだい。馬鹿だなあ――どうした。淋しいのかい？」

「ううん、淋しいなんて思う気は少しもないわ。私の心の中も体の中も病気でいっぱいなんですもの。ただ、あなたが帰ってしまうんだと思うと、何となくそう云って見たかっただけ……じゃあ、握手しましょう」

「うん……」

田久島はいつも通り細い笙子の指を握った。今夜の笙子の手は火のように燃えていた。そして、彼

が握りしめるのに答えるように、ぐいと腕をのばして力いっぱい熱っぽく握り返してきた。あえぎながら笙子は小声で、

「今夜、ワタシをかわいがって……帰っちゃあいや。ワタシ死んでもいいんだもの。おねがいよ、ねえ……」

「僕もそうしたいさ。しかし、そうして君が永久に僕の前から姿を消す結果を作るんだもの。お互いに辛抱しなくちゃあ。ねえ、そうだろう。君の気持はよくわかるんだよ。しかし男である僕はそれ以上苦しいんだ」

笙子はふかふかした枕に長い髪をおしあてて、さめざめと泣き出した。肩がふるえ、唇がゆがんだ。大きな瞳から涙が流れ出て、赤みのない頬をつたって掛布団に小さなしみをつくっていった。

「さあ、泣いたりしちゃあ、僕が抱いた方がかえっていいぐらい疲れてしまうよ。体に毒だよ」

笙子は黙っていた。そして、細い手を伸ばして枕元のサイドテーブルの上に薬と一緒に置いてある睡眠薬を取って、ダダッ子のようにすねた。

そのしぐさに田久島はふと情欲を感じ、布団の上から抱くようにしてベーゼをしようとすると、

「いや、帰って。T・Bがうつることよ。私が後向きになっているから、そおっと帰って」

笙子は強引に田久島に帰ることをすすめた。彼は苦笑しながら

「じゃあ。そうしよう。一本取られたよ。笙子、また来るよ。さよなら」

「さ、よ、な、ら……」

と、小声で云いながら、ふとんの衿を掛けて、口唇で抑えていた。田久島は二、三度、ドアまで行く途中に振り返りながら、哀れな女だと思った。彼がドアの前に立った時、笙子はやせた肩をふるわせて声を殺して泣いていた。しかし、そんな笙子の姿を目の前にして、さっと引き返し介抱してやるだけの情熱は、みじんもわいて来なかった。気持ちの動きはあっても実行できそうにもないのである。

そう云った、かなりあせりのある生活を送っている田久島の毎日は、たえず変化を求め、完全に充足しようと、しきれない状態で満足しようと、無理な努力がいった。

今夜もそのことを考えながら、心の中で笙子を捨てればいいのだと思ったが、あの病弱な妻を裏切ることは、やはり、多少なり罪悪感を覚えずにはいられないだろう。

暗い気持ちで二階から下りて、部屋の横に続いているガレージに入っていった。

病気の笙子を看護している藤田加代子が、中年女独特のネチネチした物の云い方をしながら見送ってきた。

「また来て下さいませ。あのとおり弱っておいでですので……。今夜は降っておりますがやはりお帰りでございますか？」

「うん、帰る。笙子をたのむよ」

藤田は外を見て、小降りになってきたのを知らせるように玄関のドアを開けた。霧のような雨が降っているだけである。

においい

田久島の運転するクライスラーは、効外の閑静なアスファルトをすべるようにして走って行く。遠くの墓場の石塔が煙るような小雨に幽かに光って見えた。

この辺りは東京の自宅と別荘との中間あたり、かなり淋しい場所で周囲に人家はなかった。時々、最のホーホーと鳴く声が、ヴェールをかけたような景色へ消えていく以外、音らしいものは全くなく、静寂そのものである。

車は幅の狭い道に入ったが、鋪装してあるので、ヘッドライトで遠くの方まで一筋光って見えた。

車が急カーブのある雑木林を過ぎて墓場の前へさしかかると、さっきまで、ぼんやり光っていた石塔が、リンでも燃えているようにぬめぬめと闇の中を泳いでいて不気味である。

スピードを出そうと思ってハンドルを握り変え、前方を見詰めた。

その時、田久島の背中に冷たいものが走った。一〇〇メートルほど先に奇妙な恰好の女が、スタスタと歩いていたからである。

女。たしかに女であるが、その恰好が変っていた。田久島のクライスラーが女との距離を縮めると、その容姿がヘッドライトの光ではっきり照らされた。

女は裾まで続いている薄いネグリジェを着て、雨が降っているのに傘もささずにいたが、そのかわり、物凄く長い透明のビニールのマントを、頭の上からスッポリ被っていた。

ビニールのマントから透けて長い髪の毛が黄色っぽく見えた。田久島は人間だったと云う安心感に、どこまでか知らないが乗せてやろうと思い、車を後姿の女の側へ停めた。

女は、スーッと自分の横に停った車にギクリとしたらしく、振り返った。

今度は停めた田久島の方がギクリとしてしまった。女の顔が普通の人間のそれでなく、デスマスクをつけていたからである。

「どうです。乗って行きませんか？　この雨じゃあ大変ですよ。お宅まで送りましょう。さあ」

と、田久島は思いきってそう声をかけたが、女は、ビニールのマントを両腕でたぐりよせて無表情な視線を向けているだけで、喋ろうとはしなかった。

「立ってちゃあ、ぬれますよ。よかったら乗ってらっしゃい」

「ええ、でも私すぐそこですから乗らなくても平気です。私、歩いて行きます」

女の声はどこか遠くで喋っているように田久島の耳に響いた。大きな闇と云うほこらの中から途方もない怪物がかすれ声でささやいているようでもあった。

「近くてもいいでしょう。乗りなさい。いくら小雨でも傘なしでは大変ですよ。さあ」

「じゃあ乗せて貰いましょうか……、ほんとうにすぐそこですけど。私がおろしてと云ったらおろして下さい」

「もちろんおろしますとも。あなたをどこかに連れていくほど、私は野性の男ではないですからな。アッハッハ」

田久島が冗談を云っても、女は

涙々としていて表情なく坐っていた。相変らずビニールのマントは脱がずに、頭の上からスッポリ被っていた。両滴が落ちていたので、

「冷たいでしょう。マントを取ったらどうです？」

「いえ、すぐそこですから……。それに冷たくありませんので」

「でも体に毒ですよ」

「毒？　私の体に勝つ毒なんてありませんわ。もしかして、このマントを取ったらあなたはもうこの世の人でないかも知れません。だから好意があれば何も話しかけないで下さい。私はすぐ下りますから……」

田久島は驚いた。女の言葉の中のふくみの意味はわからなかったが、この女は何か常人にない異常さを持っているようである。

彼はバックミラーに映った女の顔を見た。

表情のない白ろうのような皮膚が（デスマスクだからであろうが）生彩なく鈍く光っていた。しかし、女のマスクの顔は物凄く美人であった。

さっきから女が、自分の家はすぐそこだからと何度も繰り返しているのを聞いて、田久島は大きな疑念を抱くのである。

なぜなら、車の走っている辺りは森と墓場があるだけで、到底住宅があろうはずがないからである。小雨の夜に女を乗せたため、いろいろな妄念が彼の頭の中を支配してゆく。

その時、妙なにおいが鼻をつくのに気がついた。

女の体臭なのだろうか？

生臭い、それでいて気が遠くなりそうな強烈なにおいである。野性的な花の匂いのようでもある。しかし一番に感じるのは、香炉で燃す線香の煙の死人臭いにおいである。その中から、カビ臭い昆虫のような生気のあるにおいもあった。普通の女の人にはない不思議なにおいをこの女は持っていた。

その、言葉につくせない数々のにおいが、田久島の官能を大きくゆさぶり、妻の笹子と対照的な違いが一層、彼の肉体を動かした。

焦操を感じている時、横に坐っていた女は静かに口を開いた。

「ここで下ろして下さい」

「ええ、こんなところですか？　家まで乗っていかれたらどうです？」

「でも、私の家はこの近くですから」

「でも、ここからだと歩くことになりはしないのかな」

「私がいいと云ってるんですもの。いいじゃありませんか」

「まあ、それはそうですが。しかし、こう見廻すところ、墓のほかは、家らしきものはありませんんからな」

「そう。もし、その墓が私の家だとしたらここで下りても不思議はないでしょう」

「えっ！」

「フフン、そう云うふうに考えてみるのもチョットおもしろいでしょう……」

女は声だけで笑いながら、札も云わず舗装道路の横の雑草をわけて、墓の方へ向ってゆっくり歩いていった。

裾まであるネグリジェが濡れた草にまつわるのか、女は何度か立止り、裾を膝のところまでまくりあげているようだったが、一度も田久島の方へは振り返らなかった。

田久島は狐にでも化かされたような感じでしばらく女の姿を眺めていた。

女は一体どこへ行くのだろうと思った。自殺するのでもなさそうである。長い間好奇心で見送っていたが、女の姿は墓石と墓石との間に見え隠れしながら消えて行った。

まるで一枚の黄色の布の動きか夏の夜に舞う大きな蛾の群れのように、印象深く田久島の脳裡にやきついた。

女の姿が完全に闇の中に消えた頃、田久島のクライスラーはぬれたアスファルトの上をすべるようにして走っていった。

あの女の青白いデスマスクを思い浮べると背筋に冷たいものがするすると流れるようである。

車の中は、あの異様なにおいが田久島の官能を刺激するように充満していた。

黄の女

車は東京の繁華街に入った。暮れた夜空の下で男女の肩が触れ合わんばかりに快楽を求めて、ひしめき合っていた。

田久島は今夜の不思議な女とのめぐりあいが、単なる偶然なものとは思えないような気もしたが、女が彼の前から表情も変えず消え去った事を思うと、やはり路傍のできごとでしかないと思った。

彼はクライスラーを停めて、行きつけのメーゾンハマのドアを開けた。

雨のせいか、フロアには四組ぐらいの客とダンサーがブルースを踊っているだけで、テーブルにもあまり客はいなかった。

むせかえるような熱気のため、中はまるでセックスだけの渦が、グルグルとダイヤライトと一緒に空間を泳いでいるようである。

田久島は支配人の越路を捜したが、カウンターの附近にはいなかった。バーテンの野村を相手にハイボールを飲んでいると、少かった客もふえて、狭いフロアはダンサーの群と、かなり酔いのまわった紳士達でうずまってしまった。

バンドから流れ出るハワイアンギターの夢誘うメロディーに、じわじわとムードが濃厚さを増して、フロア全体に盛り上ってきた。バーテンの野村はシェーカーをふりながら、一人で飲んでいる田久島に、

「少し雰囲気が出てきましたね。だれか女の子、呼びましょうか？」

「いや、今夜はいいだろう。女より今夜は酒のとりこになった方がよさそうだ。ところでマネージャーの越路、いないようだが出かけてるのかい？」

「いえ、実は今夜が開店記念でして、ヌード・ショウをやることになってますんで……その準備に一時間ばかり前から二階の方で用意をしているんですよ。用事でもあれば呼んでまいりますが」

「でも、いずれここへは来るんだろう。まさか二階へ上りきりってことはないだろうから」

「ええ、そりゃあ、も

ちろん来ますよ。三十分もすればショウも始まりますし……」

と、云っているうちにステージに越路の姿が見えた。ショウが始まるらしい様子である。

カウンターで飲んでいる田久島をみつけると軽く手を振ってあいさつした。

そして、越路の姿がステージから消えた途端にバンドは狂騒的なマンボ調の烈しいリズムに変っていった。グルグル廻っていたダイヤライトが消えたかと思うと、ステージの中央に黄色のライトが一本暗闇を切るかのように射した。

そこにはアラビア風のコスチュームの大柄な女が、天を仰ぐような恰好でポーズを取っていた。メロディに乗って女の腕が動き、足がフロアをなめるようにすべっていった。

その細かい妖艶な肩と胸と腰の動きは、観客の官能を誘うに充分である。曲がボンゴだけの低いスローに変っていった。

女は体をくねらせながら大きな乳房をプリプリさせて、テーブルと椅子の間を、ゆっくりスネークダンスをして踊っていった。

腰のくびれに黄色のライトが蛇のようにまつわり、豊満な色気がショウダンサーの体の隅々から発散されていた。

「なかなか踊りのうまい娘だなあ。どこのクラブかな?」

「所属はしてないらしいんですよ。フラリと時々来るだけで、風のようなダンサーですね。とにかく踊りもいいけど体がまず日本人ばなれしてますよ」

「まったくだ」

支配人の越路がそう話している時、ショウダンサーの女は狭いフロアの上を体をグッと折りまげ、両足が床につくくらいに拡げた。

奇妙な恰好だったが大柄なダンサーの体を一層魅力的にしてみせた。そして、ライトだけのメーゾンハマのザロン内を人魚のごとく踊りまくりながら、時々、田久島のカウンターの方を一瞬ではあるが、射おとすようなするどい目でみつめた。

女は体を動かしながら二人の前に踊りよってきた。そばで見ると女の皮膚は黄色っぽく光っていて揺れ動く腰の線には、不思議な色っぽさがあった。その時、田久島はハッとした。なぜなら、女のバタフライが黄金のキラキラした物で、その形が普通のショウガールのやっているものと違っていたからである。女のバタフライは羽先の鋭い黄色い蛾がたくみに恥部をかくしていた。ふと、墓場で消えたネグリジェの女のことが頭に浮んだ。

子はコケティッシュに男達の腕をとり、次々に握手しながら踊り寄ってきた。越路に握手し、田久島に握手した。ネットリとしたあぶらぎった手である。

女が離れた時、田久島の掌の中に小さな紙片があった。ギクリとして女を見たら、一人で見ろと云うような目をして笑みを投げて、ステージの方へ踊り去って行った。曲は急テンポのマンボに変り、女の肢体はメロディーに酔いしれたかのようにクライマックスに達していった。

黄色いライトは消えた。

ショウは終ったのである。

大勢の客は再びグラスを重ね、夜の更けと共にめいめいの女の肩を抱いて、第三の世界へと吸い込まれていった。

田久島は女から握らされた紙片を見るため化粧室の中へ入っていった。田久島の掌の中には黄色の小さな紙片があった。四つに折ったそれをひろげると、黄色いインクで、

「三ツ目ノ交差点ニイマス。モシ来ル気ガアッテ、ワタシニ好意ガアルナラ、イラシテ下サイ。ワタシハ、モシ、アナタガ来ナクテモ、行クデショウ」

と、かなで書いた誘い文だった。

外は、まだ小雨のようである。

黄色い家

田久島は外へ出た。何となくスリルを欲求している時だったので、女から紙片を渡された時から覚悟はきまっていた。それに、彼が遊んでも悔いないような女であったから……

小雨の中の街はネオンで明るかった。

交差点の前に行くと、女は、黄色いワンピースに黄色のハイヒールをはいて、雨の中に立っていた。ブリッと張った胸もとに、小雨の露が街燈にキラキラと光っていた。

車を停めると女はニッと白い歯をみせて笑った。

「やっぱり来て下さったわね。今夜、私と御一緒しても平気?」

「じゃなかったら来ないさ、さあ乗り給え」

と、女の言葉じりを取って云うと、鼻さきで笑いながら彼の横に坐った。

「ところでどこだ。行先きは?」

「すぐそこよ。私の家に行きましょう」

「今夜はよくそんな風に云う人に会うな」

「女の人?」

「そう。デスマスクをつけた凄い美人だったな」

女は一瞬ギクリとしたようだったが、田久島は気がつかなかった。

「まるでスリラーめいた話ね。でも忘れましょう」

「そうしたいな。今夜は君と楽しむことだけを考えよう」

「ええ」

「ところでどこなんだい君の家は?」

「道順がわからないかもしれないから、私が運転するわ」

女は、そう云って田久島と代ってクライスラーを運転しだした。

車は止った。女は目で、下りろとうながした。しかし、口は開かなかった。そして、車を古いガレージに置くと、女は先に立って歩いた。静寂さの中に女のハイヒールの音が響いた。一軒の洋風の家の前にくると、女は小声で、

「ここよ。近いでしょう」

と云って街燈の下に群れている蛾を眺めていたが、

「いないわ」

と、一人ごとを云って、肩を落しながら田久島を玄関へ招じた。

玄関のドアも、家の外側も全部女のワンピースの色に近い黄色い色をしていた。

——黄色い女——黄色い家——

と、田久島は心の中で思った。

もし、この女と別れても黄色と云う色だけで、女を感じられそうなくらい、女のまわりは黄色でうずまっている、

知れない——

田久島は考えるともなく、そんな事を考えていた。

車は止った。女は目で、下りろとうながした。しかし、口は開かなかった。そして、車を古いガレージに置くと、女は先に立って歩いた。静寂さの中に女のハイヒールの音が響いた。一軒の洋風の家の前にくると、女は小声で、

「ここよ。近いでしょう」

と云って街燈の下に群れている蛾を眺めていたが、

「いないわ」

と、一人ごとを云って、肩を落しながら田久島を玄関へ招じた。

玄関のドアも、家の外側も全部女のワンピースの色に近い黄色い色をしていた。

——黄色い女——黄色い家——

と、田久島は心の中で思った。

もし、この女と別れても黄色と云う色だけで、女を感じられそうなくらい、女のまわりは黄色でうずまっている、

女はスイッチをひねった。黄色の電気がパッとついた。

部屋のほとんどが黄色の基本色で塗装されてあり病的な感じである。窓の少いせいと、女が前にいるのが、妙に彼の欲望をかりたてた。喉がからからと乾いてきた。

女は、

「水持ってくる？　それともお酒？」

「水がほしいな」

「そう、すぐ持ってくる」

女は洒落れたスモークの黄色いコップに水を入れて持ってきた。水の色だけが、ここでは通常な透明色である以外は、すべてが、黄色なのである。だんだんと頭の中が混乱してきそうである。田久島は一息にコップの水を飲みほした。そして、女の顔を見た。

黄色い熱っぽい部屋の中で女は色づいた頬を向けて、なまめかしく笑っていた。

田久島は女の半開きになった唇を見ているうち衝動的に女を抱いた。女の唇は冷たくぬれていて、やにっぽい彼の唇を噛むようにしてはげしく撫でまわした。

その女の体から発散される蛾粉のようなにおいは、彼を包み彼の肉体を誘った。そして女も、堰止められていた欲情を田久島にぶつけるようにしてにじりよってきた。

女は胸をはだけて、スネークダンスで揺り動かした乳房を、我が手でもみ上げるようにしながら、

「もっと強く抱いて……」

田久島が抱くとそのまま眠るようにソファの上で、ぐったりとなっていった。女の激しさに、田久島はたじたじとなったが妻の筐子にない強烈さと積極さに大きな魅力を感じるのだった。女が半睡状態になった時、物凄い疲労感が五体をしびれさせた。まるで毒気にでもあてられたようである。彼は立上り、ソファの前の椅子にゆっくり腰掛けた。

うとうととしてハッと目覚めた時には、半裸に近い恰好で寝ていた女の姿はどこにも見当らなかった。

ただ、この家のどこかの部屋から聞えてくるらしい、ガラス器の触れ合う音と、かすかなアルコールランプの油煙のにおいが田久島の鼻をついた。

真夜中の静けさが不気味である。しばらく、じいっとその音を聞いていた。

田久島はまたギクリとしてしまった。だれもいないと思っていた家の中に、あの女以外の誰れかが歩いているような気配がしたからである。聞き違いかと思った。

耳をすますと、やはり足音は錯覚でなく彼の耳にかすかであるが聞えてくる。ヒタヒタと迫る足音は高くなった。一緒にきぬずれの軽い音もした。

足音はドアの前で止った。

蛾毒

音もなく、力ない動作でドアのノップが回った。じわじわとドアがひらいていった。廊下の強い黄色い光がさしこみ、顔が覗いた。

「あっ！」

と、声にならない叫びが田久島の口からもれた。かすれた妙な声である。足音の主は、あの小雨の中で会ったネグリジェの女だった。彼を見たが相変らず無表情のまま、その部屋を通りすぎ、さっきからカチャカチャと音のしている部屋へ向って歩いていった。

明るさの中で見ると、女は相当の年配のようである。裾の長いネグリジェには、泥がはねて、その上まだビニールのマントをスッポリ被っていた。

田久島は幻のようなできごとに、次元の違った世界にきたような気がし、このまま夜明けと共にこの世界から脱出できるだろうかと不安と焦躁が心の中で渦をまいた。そんな風に考えている時、二人の女のはげしく口論する声が、田久島の耳をつんざいた。

・声をたよりに細かいほこりのたまった廊下を歩いて行くと、どの部屋も外に面している方が窓になっていて、廊下側の方は薄い黄色の金網がはってあった。窓は一番上だけ開かれてあり、そこから無数の蛾が灯を求めて飛びこんできた。金網の中は蛾の群れでいっぱいであった。

しかし、一番つきあたりの金網の中は別造りで、白い紙がきっちり敷きつめてあった。中には蛾らしきものはなく、金網の影だけがむなしく空室をくまどっているだけである。

真正面の部屋は実験室のようで、フラスコやビーカーや試験管が雑然と並べてあり、その室の中で何かにとりつかれたような二人の女が、つかみ合いそうな恰好で喧嘩をしていた。ショウダンサーの方の大柄の女がネグリジェの女に、

「ママ、お行き！　でないとまた蛾が死んじゃうじゃないの」

「でも、あの墓はもう駄目だよ。雨で納骨堂の方が水浸しで、黄蛾はみんな死んじまったよ。だから今夜行ってみたのさ。わざわざデスマスクをつけていったのさ。毒が顔にかかるといい気持ちだけどだんだんと骨格がくずれてくるから……」

「そんなことはどうでもいいわ。それで肝心の蛾はどうしたの」

「みんな死んでたよ」

「ええ、じゃ黄蛾はここにいるだけなの。私よりママの方が蛾毒にかかっているのよ」

「仕方がないさ、私は年だし、もう婆人だから、生きていることを考えるより死ぬことの方を考えた方がよさそうだ。お前もだよ」

「いや！　私はいやよ。今に開けひろげている窓から蛾が入ってくるわ。それを期待しているの。体だってママより勝っていてよ。それに若いわ、生きるのが本当よ。そして黄蛾に男の血を吸わせて蛾粉をとってやるわ。アッハッハッハ」

「しかし、私よりお前の方が若いかわり、蛾毒はしみこんでいるのだよ。それにこの黄蛾は世界に数いても、人に発見されるのは百年に一回ぐらいなのだよ」

「そうよ。その百年に一回の日が去年の夏だったのよ。私達はそれを繁殖させ蛾粉をとることに成功した。でも、その毒蛾がいなくなる頃に、私達は完全に蛾粉の中毒者になっていたわ。でも、もう手元には二匹の蛾だけしかいないわ。ママは死んでいく。私は二匹を利用して生き残るわ」

「そうなればいいけど……この蛾は産卵する力はないんだよ。こう蛾粉がなくちゃあ完全に交尾ができないからね」

「バカ、おだまり。私はやってみせるんだ。早く部屋へ帰ってお眠り……永久にね、ママ、さよなら」

「そうしよう。私はもう喋っているのも苦しいわ。さよなら」

「ママ、死ぬのよ。デスマスクを取ったらどうなの。二つの死に顔なんてナンセンスよ」

ネグリジェの女はデスマスクをとった。しわのある、それでいて理知的な老女だった。

女はドアを開けて外へ出てきた。田久島を見て、

「よく会うのね。今の話きいた？不思議な親子でしょう。私はもう体力が続かなくなったから死ぬわ。あの子をたのみますが、えじきにはならないように。さよなら……」

彼が口を開くまもなく、女は足早に廊下の角をまがって消えていった。今聞いた女の運命をどうしようすべもない田久島にとって、ただ、無言で同情するのがいっぱいだった。

『黄蛾』！　田久島の、いや世の中の人々が、ほとんど知らない猛毒

をもち、人の体を中毒させてしまう蛾。黄色いとがった羽を持ち、そこから魔の蛾粉をまき散らして、一人の年老いた女を死の府へ招いているのである。

田久島は、大柄な影が動くので実験室を見ると、女が、生き残った二匹の黄蛾をしきりと交尾させようとあせっていた。

そして、毒がきれた状態になると、女は二匹の黄蛾の蛾粉を指先きでペロペロとなめた。田久島はあまりにも異妖な女の姿に恐しいような気もしたが、女の肉体には離れられそうにもない魅力がひそんでいた。

女は眺めている田久島に気がついたのか、少しばかり蛾粉のついている唇を向けて、近づいてきた。あのむせるようなにおいが、なまなましく性を呼ぶのであった。

田久島は女の肩を抱いて接吻した。女は迫りながら低い声で、

「もう抱かせない」

「なぜだ」

「私にも交換条件ができたから」

「どんなことだ。君の云うことなら何でもきくよ。ただし僕が君に興味がある間はな」

「それでいいわ」

「じゃあ遠慮なく話したらどうだ」

「あなたの生血を少しだけちょうだい」

「生血？」

「そう、私の蛾のためにぜひいるのよ。駄目だったらいいわ」

「僕も男だ。やろう」

「そう、ありがとう。じゃあ用意するわ」

女は嬉しそうに注射器を持ってきて、アルコールで消毒した。腕の血管の浮き上った処に針をさし、ほんの二ccほどを取って、

「これだけでいいわ」

「なんだ、これだけなのか」

「そう。蛾はこれだけでいいけど、私も少しほしいの」

田久島はドキリとした。女は吸血女なのだろうか。その話しぶりには常人さはなかった。

「私にはベッドでちょうだい」

女の目を見ているといらいらしてきた。今までの執着が消えて嫌悪が走った。彼が口早に、

「もう血はやらないぞ。僕は帰る」

「いや、帰さないわ。帰すもんか。あなたは私のえさよ」

と云ったかと思うと女は飛びかかってきた。その拍子に田久島は横倒しになってしまった。二人は上になり下になり狭い実験室をころげまわった。女の手がゆるんだ

時、田久島の胸に、ふと蛾を逃がしてやろうと云う気が起った。

すっと立上り、テーブルの上の小型の昆虫箱のフタを取ってしまった。

二匹の蛾は一瞬の明るさにとまどうように部屋の中をグルグル飛んで、外へ出てしまった。

女は茫然とそれを見ていたが、泣くように顔をくちゃくちゃに歪めて、田久島の側へすうと寄ってきた。青白い顔が少し笑ったと思うと、

「おかえしよ」

と云ったので身をかわしたが、遅かった。彼の左頬に刃物の冷たさが走った。痛みはなかったが、出血のため首筋に血が流れて気持ちが悪かった。女はひきつるような声を出して、

「バカ！　バカ！　人殺し奴が……人殺し奴が……人殺し奴が……」

と云ってバッタリ床の上に倒れてしまった。

田久島は放心したように頬のずをおさえてほこりをかぶった廊下を歩いていった。

黄色い光線の下で金網の中の蛾だけが、人間の汚なさを笑っているように、クルクル飛び廻っていた。

囮

（おとり）

山村正夫

ホックがはずれると、由利は前かがみになって、如何にも巳代治の眼の前で見せびらかすように、頭からワンピースを脱ぎ捨てた。とたんに彼の眼の前で、白いセックスが、大きく羽撃いたような気がした。トリコットのスリップを通して、由利の汁ばんだ肌やむっちりした腿のくびれのあたりから、香水のまじった甘酔っぱい匂いが漂って来た。見馴れた肉体だったが、そのそばに別な男を配すると、忽ち女は見違えるほど新鮮な果実に生れ替る魔術を心得ている——巳代治はごくりと生唾をのみこんだ。

男は男で、そんな強烈な彼の視線など気がつくはずもなく、由利と二人きりでいるという意識に、すっかり中年の本性をさらけ出したのか、酔いに濁った眼に獣のようなキラキラしたものが加わって、彼女の肌をながめまわした。

「いいからだをしているね。乳房なんか、指で押してみたいくらいだ」

「嫌よ。そんなにじろじろ見つめちゃ」

由利は立ち上った。

「電気スタンドに切り替えましょうか。その方が少しは涼しいかもしれないわ」

「それより……」

男は、舌なめずりをするようないい方で、いった。

「赤線が消滅してから、もうこんなところはないかと急っていたが、やっぱりあったんだね」

「失礼なこといわないで。わたしは娼婦じゃないわ」

由利は、電気スタンドのコードを、ソケットにつなぎながらいった。

「わたしには夫があるのよ。お金なんかが目的であなたを誘ったんじゃないの」

≪詳しくは耽奇小説11月号を御覧ください！
久保書店発行・定価一二〇円・〒一二円≫

艶笑文学の決定版！　全八巻

武野藤介風流文学自選集

第一巻	第二巻	第三巻	第四巻	第五巻	第六巻	第七巻	第八巻
娼婦（くろうと）篇	処女（おぼこ）篇	御家（ごけ）篇	年増（としま）篇	新妻（にいづま）篇	浮女（うかれめ）篇	人妻（ひとづま）篇	続人妻（ひとづま）篇
赤線の灯は消えたが、巷に媚を売る女は後を絶たない。桃色社交クラブや結婚仲介所、白線青線に至るまで、千姿万態の隠花植物は、現代の谷間に妖しく咲き乱れる。「悪魔の寝床」外二十四篇。	「半処女受難記」「処女を貸した男」等々、ここに収めた二十篇はすべて処女とセックスの問題がテーマとなっている。抑圧されたハイ・ティーンの衝動が思いもよらぬ行動となって現れるのだ。	触れなば落ちなん風情。これが未亡人族の生態である。敗戦によって未亡人時代を現出し、巷間には未亡人クラブなどという世の浮気男の意表をつく怪しげなものさえできたのである。	女の魅力が、年増女にとどめをさすと云われるのは、年齢的にもセックスの爛熟期だからである。また女が、女であることに確信を持つのもこの年齢である。恋愛技巧の円熟、口説の妙味、これこそ粋人必携の色道小説集。	新妻は美しく魅力的である。その顔にほのぼのとセックスの花が咲き初めているからである。しかし内には未知の世界への憧憬、好奇心への希求と追求を秘めて……新妻に取材した二十五篇の小説集。	淫風蕩々、現代の日本ぐらい、えたいの知れぬ女性の登場した時代は類がない。悩ましい春の夜の雌猫のごとき女性の横行濶歩である今や素人女が、男女同権を口にして男性に挑戦しているのだ。「浮気病」等二十七篇の小説集。	人妻の色恋にこの作者はユニークな文学を開拓したが「火と遊ぶ女」等、この二十五篇はいわゆるよろめき夫人に取材した小説集である。悪妻物語である。西鶴の「好色一代女」の現代版である。秘密のテクニックを描く人妻小説の決定版。	夫の浮気をいかにして早く見破るか、またはこれをいかにして未然に防止するかは、人妻が大いに頭をいためるところである。「人妻の本音」「更年期の妻」等、賢明な人妻を語った美談集である。が果してこれが美談といえるであろうか？
好評発売中	十月二十五日発売	十一月十日発売	十一月二十五日発売	十二月十日発売	十二月二十五日発売	一月十日発売	一月二十五日発売

各巻定価250円　東京都中野区江古田1　あまとりあ社

奴隷船事件

二達檀

敢然、異国の地獄船を救いに起った快男児，大江卓！

ペルーの地獄船

「女郎に限らず、一切の人身売買的行為を禁止しなくちゃいかん」

と、云い出して、吉原、千住、洲崎、品川などの遊女の解放を厳令して、女たちを郷里へ帰らせ、年季小僧の奴隷的飼殺し制度を潰滅させて一年以上の雇傭契約を厳禁した人物に大江卓がある。

実に、小気味のいい改革をやったもので、元来が、明治の先覚中江兆民の訳したルソーの民約論に傾倒してこれを丸呑みに、土佐の板垣退助などと、自由民権の急先鋒だった男である。彼の封建打破の雄弁は、さすがの伊藤博文を降参させたほどで、四民平等と自由民権は、彼の骨の髄にまで喰い入っていた信念だった。

この大江卓が、神奈川県の参事官だったときのことである。

明治五年——数えて八十三年ほど昔になるが、六月の四日に、横沢へ、マリア・ルーズ号という南米ペルー国の帆船が寄港した。三百五十噸というから大した船ではないが、乗員二十一名、船長が、ペルーのリカルド・ヘルローという碧眼人、船客を二百三十人積んでいて、清国の南方、つまり南支那のマカオから清国の貧民を買い取って帰航の途中、しけに遭って船を損じ、修理に寄ったという話なのだった。

当時、清国のアモイには奴隷市が立った。マリア・ルーズ号の二百三十人も、そこで船長のヘルローに買われ、ペルーのゴム園や珈琲園へ送られてゆく人たちだったのである。

ところが、この奴隷市場で買われた二百三十人は、誰も、ペルーへ奴隷に買われてゆくとは知らなかったのだった。

「よい出稼ぎの口がある――」

との話で、賃金はよし、生活は比べものにならぬほど良い話だし、挙って、ヘルローに買われたもので、後にわかったのだが、銘々が一枚宛の書類に名前だけ記入させられていた。彼等は、横文字が読めるでなく、みな、雇傭契約の承諾書だと考えていたので、それが恐ろしい呪縛となる売買の承諾書だなどとは、夢にも考えなかった。

で――乗船、抜錨、海へ出ると、がらりと変るヘルローの態度で、完全な奴隷待遇、彼等は横浜に入港した当時、なお一文の給金も与えられていなかった。しかも船長ヘルローの意欲が、木慶の全身にわきあがった。

以下の暴虐は大へんなもので、ちょっとしたことにも滅食、絶食の虐待はまだしも、時には船員たちで帆柱に縛りつけて、鞭で滅多打ちにするという有様、そればかりか、その頃の清国人は弁髪と称して、頭髪を長く編んで背中の方へ大切に垂らしていたものだったが、その弁髪を、無慙にも切ってしまうなど彼等には、堪え難い苦痛と屈辱だった。

こうした行為は、すでに、人間個々の問題でなく、民族的にも堪えられぬ侮辱だったのである。

「地獄船だ！」

彼等は、はっきりそう認識した。

人権保護の本腰

この奴隷のなかに、木慶という男がいた。

彼は、とうとう堪えきれなくなって、船員に、その不法をなじった。すると、その船員は

「なにを奴隷(スレイブ)が！」

と、いきなり彼を撲り倒した。すぐ集って来る仲間と木慶を船艙へ引きずって行って、弁髪だった頭半分と眉片方とを剃り落して、一室に檻禁してしまった。

ここまでくると、中国人独得の不屈な反抗のため、腰を据えてやって下さい。

意欲が、木慶の全身にわきあがった。

「逃げよう！」

そして、機会をねらっていた彼が、夜――見張りの隙を見て、さんぶと海中に飛びこんだ。運よく発見されずに、海岸通りへ泳ぎついて、おなじく、横浜に碇泊中の英国軍艦アイアン・デューク号の艦長からも、艦長自身が神奈川県庁に出頭して、

「附近に碇泊しているマリア・ルーズ号の船室から、絶えず清国人の悲鳴が起り、聞くに堪えぬから、宜しく取締っていただきたい」

という申出を受けていた。

それと、警察からの報告と――この事件にぶつかったのが、好漢大江卓だった。

「ようし、我輩が処理する。第一奴隷売買なんかけしからん」

と、かんかんになって、外務省に通じた。

時の外務卿は副島種臣である。

これも民権論の先覚ではあるし、この件に限り貴公の専権とする、大江卓を外務省へ呼んで直接に話を聞くと、

「それア捨てて置けん、人権保護のため、腰を据えてやって下さい。県令の指揮を待たず、ぐんぐんおやんなさい」

こう云われたから、青年参事官――権県令の大江卓、人権保護を真ッ向にかざして、大へんな勢となる。

尤も、県令として、陸奥宗光がいたが、当時、地租法の改正に着

手しようとしていたために、こうした事件には気乗り薄だったから、自然、大江の活舞台ともなったわけで、後年剃刀大臣の称まで受けた陸奥宗光ではあったが、

（まあまあ大江に働かして――）

ぐらいに考えているうち、その月十八日には、宿願の租税頭に転出してしまうことになった。

そこで、話を戻すが、面白いのは、この副島種臣が、漢学者であるのに、大江卓が、ルソーで固めた新進の参事官、ここに肝胆相照すというわけあいで、さっそく、マリア・ルーズ号の船長ヘルローを呼びつけて訊問に及んだ。

しかし、こうなるまでに、副島種臣が、なぜこれを重大視したかというと、実は、英艦アイアン・デューク号の船長が、自身マリア・ルーズ号に出かけて行って、清国人悲鳴の事態の糺明と、虐待緩和を論そうとしたところ、船長のヘルローが、てんで受けつけず、無礼な言動に及んだので、これを駐日英代理公使のアール・ジー・ワットソンに伝え、ワットソンから書面で、

「この事件は、日本の港で発生したことであるから、是非とも日本の名誉ある解決を――」

と、云ってきているし、米国の公使からも同じような意味の勧告を受けていたからであった。

ヘルロー訊問のときは、陸奥宗光の転出で参事官から新県令となった大江が、通訳を通じて、きびきびとやっつけたのだが、ヘルローは、言を左右にして、いっこうにこちらの云うことを肯かない。はては、ペルーは日本の条約国でないから、日本の干渉は受けないという突ッ張りかたをした。

「よし、そうならこちらにも考えがあるぞ」

と、新県令は、海軍士官をマリア・ルーズ号に派遣して、実力で二百三十名の中国人を全部県庁に召喚することにした。

越権是非

むろん、その中に、清国婦人もいたのだがその女性の一人が県庁へ来ない。後になって知れたことだが、これは、船長のヘルローが、船中で弄ばれていたもので、狡猾なヘルローが、どこかへ隠したものだった。

ともかく、事情は解明した。あきらかに、人買船であったとわかった以上、大江はその解放を勧めた。ところが、ヘルローは、頑として応じない。

こうなると、裁判より手がないということになって、大江が自分で臨時裁判長を拝命することにしてしまった。

「見ろ、一気に片づけてやるぞ！」

と、大いにいきまいている大江のところへ

「ちょっと待った――」

と、飛びこんできた翻訳官、やがては政界の大立者となる星亨だ。

「君それアいかんよ。慶応二年に締結している条約の第四条に、条約未済国人に対する事件は、各国領事立会の上、之を処分すべし――とある。君が裁判長になって日本だけを立会わせ、勝手に宣告をしてみたって、それで外国人を束縛はできんよ」

そう云われると、大江卓も、なるほどと云わなければならない。

「そうだったかねえ、とんと失念しておったが、効力がないかねえ」

と、痒そうな鼻をして、早速下僚に命じて

「神奈川県庁吟味目安並に見込書」というおそろしく長い題目の書類をつくり、各国の領事に交附して、賛否を徴することにした。領事は各々回答してきたがこれを翻訳したのが星亨や福地源一郎で、意味の通じるような通じないような、まことに心細いものだ。――

が、それによると、各国領事が居留地のゼルマン倶楽部に会合し、日本の云う目安と見込とを模索したもので、独、仏、丁、葡の四領事が反対、米、蘭は中立で見送りの形だし、一人英領事だけが賛成を申し入れてきた。

この徹底的に歩のない回答に接したにかかわらず、最初脱走した木慶その他の奴隷を審問した結果、船長ヘルローには、マリア・ルーズ号の出帆停止を命じ、司法省と打合せて七月十七日に調書を作製、これを翻訳したものを、法律顧問ヒールに船長に読み聞かせ、陪審の形式をとった各国領事にも配布したのだった。

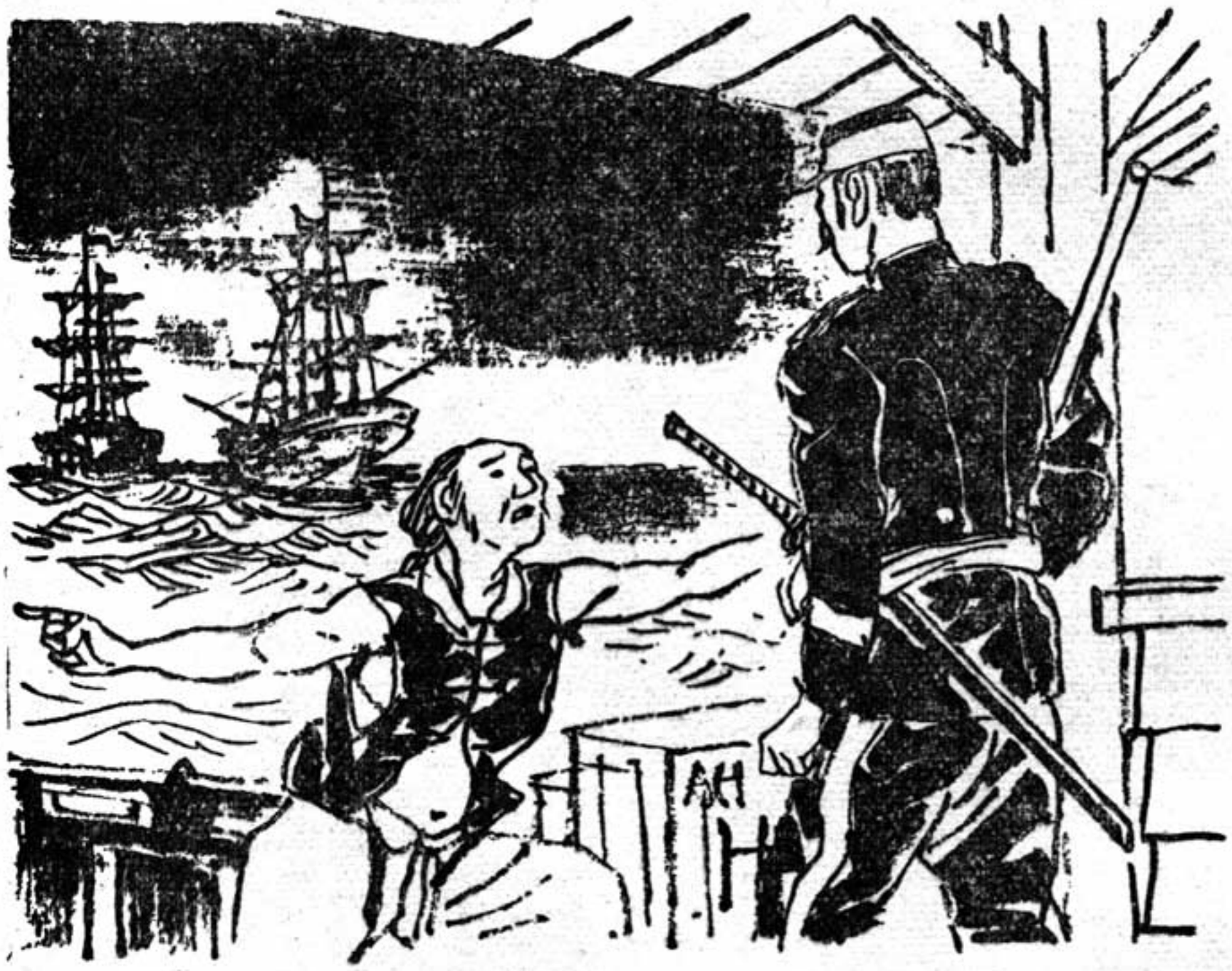
これではまるで領事達の意見を無視した話だし、第一、二百三十人の清国人の奴隷は、ことごとく本国へ送還するというのだから、領事たちは日本当局の行動をはなはだ快く思わなかった。

「新県令の処置は、越権行為だ！」

と、怒り出したが、大江は、そんなことに頓着なく、どしどし実行に移して、日本政府の名のもとに、事件の経緯を清国政府に通告して、木慶以下の送還を申し出た。

よろこんだのは清国で、清国政府は、そく江蘇省の知事陳福勲を派遣して、彼等の受取りの任に当らせた。

陳が横浜に来着したのはその年八月廿七日だったが、外務卿の副島など大そう気をよくして、陳等の一行を東京芝の離宮延遼館に招



いて大いに歓待したのだった。

つまり、解放された清国人労働者は、奴隷となる一歩手前で、日本政府神奈川県令大江卓によって支那領事の手を経て、無事に帰国が出来たのである。

清国官民のよろこびは、これまたたいへんなもので、清国政府は、即時、特命全権大使を派して、日本政府へ懇篤な謝意を表してくるし、横浜在留の清国人一同は醵金して見事な衝立その他を記念品として大江に贈った。

露国皇帝の裁決

さて、奴隷受けとりの清国使節陳福勲は、九月二日、便船で一行を伴って帰国の途についたが、これに洩れたのは、前にも述べた女性一人、それどころか驚いたことは、船長のヘルローが、いつの間にかその女性と馳落ちをしてしまった事実だった。

一説には、米船によって米本

土へ行ったとあるが、それかあらぬかペルー政府から海軍大佐アウレリヨ・ガルシアを特別全権公使として、日本に派遣し、さらにむしかえし、事件の再吟味と審判を行う旨を通じてきた。

「日本政府の措置は越権の行為であるから、損害を賠償する責任をもて――」

と、こうだった。

副島外務卿は、外務少輔の上野景範に会談させて、

「我が方の措置は、正義人道に基いた人類相愛の行為で、何等の非難も受ける筋合でない」

と、撥ねつけた。

「いや責任がある！」

「絶対にない！」

と、ガルシア対上野の激しい対立となったが、ペルー政府は、

「では世界の世論に聴こう！」

と、ヘーグの国際審判所へ事態をもちこんで、露国皇帝アレキサンドル三世の裁判を仰いだ。

これが、翌る年の明治六年（一八七三）六月廿五日のこと、アレキサンドル三世とは、露国帝政終期のニコラス皇帝の父で、豪放な気性の人だった。

「日本政府が、マリア・ルーズ号事件にあたり、奴隷売買が文明国の善良な風俗に反くものと認め、同船の乗客解放を命じたことは、むしろ正当な措置で、そのため日本政府が、ペルー国官民に対し、信義を欠き或は損害を与えようとした意図ありとは認められない。

不幸にして、ペルー国官民が損害を受けたとしても、それに対して日本政府が、その損害を負担すべき限りでない」

こういった意味の裁決が下った。

云うまでもないが、その頃になってはマリア・ルーズ号は、船長であり船主であったペルローは夙に逃亡してしまっているし、船客を装わせていた清国人の奴隷も居ず、そのまま放置してもおけぬ実状だったので、上野景範はガルシア公使と協議の結果、同船を競売に附することにし、その競売方を米国公使に一任することにした。

要するに、人買船と称されたペルーの奴隷船、マリア・ルーズ号事件も、道義的な血気の大江卓と、そのよき指導者であった副島種臣の協力によって、二百三十名にものぼる支那人奴隷を、完全に解放させ得たのだった。

（画・木原三樹）

寝室に入りながら、コルビーは眼を輝やかせた。ルシーの抵抗、という新しい経験が、ますます彼を興奮させた。ルシーはのどのところでロープをかたく抑え、片手で彼を押しのけようともがいた。コルビーは彼女をベッドにおろした。

ルシーは固くロープをおさえると、すごい勢でころがり、彼から離れた。

「灯りが」

ルシーは壁のスイッチの方へ二～三歩あるいた。コルビーは餌物にとびかかる猛獣のような素早さで、ひるがえるロープの裾を掴んだ。ロープが音もなく脱げて落ちた。

だが、その瞬間灯りが消えて、ルシーのヌードを捉えようと輝いた彼の瞳は、暗闇の中で方向を失った。

「あなた……」

★マンハントより★

ルシーのベッドに戻る気配がした。暗闇の中にただよう、女の裸の匂いがかすかに動いた。

「あなた……」

「待っておくれ……」

コルビーは用心深く手を伸ばすと、急に、ベッド・ランプをつけた。驚いたルシーが、サテンのシーツで身体をかくそうとした。だが彼は見てしまったのだ。ルシーの二の腕はあざで紫色になっていた。片方の乳房も、大きなこぶし

男ごろしの魅惑

DEADLY CHAKM

スチュアート・フリードマン

で打たれたような醜いあとが残っている。ももにも、ふっくらとした尻のまわりにも、みみずばれが出来ているのだ。

コルビーは軽い目まいを感じた一言も云えなかった。ルシーは身いた。

コルビーは彼女を愛撫し、愛を囁やいてやりたかった。だが、何か胸の中に冷たいものがあった。彼はただ彼女をみつめ、待っていた。ルシーは何も云わなかった。何もしゃべらず、遂に言葉を口にしてしまった。

「どうしたんだ」

コルビーは沈黙の重味に耐えきれず、ルシーは起き直ってうなだれた。

「先週の木曜の晩だったの。あなたは仕事でおそかったわ。そしたら部屋に入ってきたの……」

コルビーは大声でどなった。

「それを君は、僕にもだまっていたし、警察にも届けなかったんだな。顔をよく見た？　ルシー。畜生――」

（久保書店発行〝マンハント〟11月号より）　発売中！
定価百円・送料八円

裏窓 ★★★

既刊号目次

品切の号は御容赦を願います。
お早目にお申し込み下さい。

○絵物語・女水芸師……文・櫛笥重三郎
　画・古正　英生
○絵物語・地獄舟……画と文・中島　喜美
○絵物語・鬼火河岸……画と文・歌川　大雅
○グラビア・光と肌と……撮影・藤沢　修
○絵物語・蝙蝠座の秘密……文・夏本圭之助
　画・山田　彬弘
連載完結篇・地獄の乳房……飯田　豊吉
隠密覚書・死棺小町……島本　春雄
旗本闇房譜……橋爪　彦七
絖肌呪文……高木　龍二
ストック・ホテルの怪……竹谷　十三
お島仇討旅……矢桐　重八
膚塚美女因果……葉田　光
変化若衆……三国沢　隆
妖異死神旗本……小田桐　爽
もうじき命日……宇治川　龍
傲れる女達……殳野　元
万年娘……笹本　透
足にひそむ悪魔……溝呂木寂子
毒蝶の宿……松井　籟子
妖気を誘う家……猿若　屯平
死を売り歩く男……尾島　新
怪異変幻抄……鈴木　和夫
（定価百二十円・送料十二円）

33年（九月号）敗戦落城秘史特集号

○絵物語・夢魔の殺人……画・山田　彬弘
○〃・雪姫受難……画と文・歌川　大雅
○〃・女夜叉……画と文・東　桂史
グラビア・夜のえくぼ……撮影・藤沢　修
白い炎……河野　春雄
隠密覚書・般若狂女……島本　春雄
女漁り旅……野田　淳
ゲヘナの火……麻布　義朗
夜の秘潮……松井　籟子
穴倉菩薩……円城寺　達
臀の下の男の小指……藤見　郁
ザルドの帝王……竹谷　十三
暗黒の白夜……堀　杏子
森で死のう……宇治川　龍
裏窓のぞき（読者評論）……天野　謙
（定価百二十円・送料十二円）

33年（十月号）怪異復讐譚特集

落城悲倉譜……宇治川　龍
餓鬼供養……伊能　孝
関ケ原悲歌……橋爪　彦七
父恋い娘旅……矢桐　重八
怒りの焔……麻布　義朗
落城洞窟地獄……高木　龍二
疾風馬賊黒鷹団……南村　蘭
琴姫散華……葉田　光
戦国女房……小山龍太郎
アポロの少年……砧　真砂男
切支丹殉教史(下)……鈴木　和夫
変性の破戒尼……梅田　楠雄
髪地獄……志摩　不二
邪宗門小町……小田桐　爽
隠密覚書・妖雲小倉城……島本　春雄
おつや櫛……鷲尾　素人
連載妖異・地獄の乳房……飯田　豊吉
（定価百二十円・送料十二円）

33年（八月号）一揆殉難秘史特集号

○口絵・泥人形……画と文・東　桂史
グラビア・渇きの夜……カメラ・藤沢　修
天保血笑録……小田桐　爽
美作一揆秘譚……葉田　光
独立黒月党……南村　蘭
一揆に咲く花……曲　二十八
四郎時貞の復活……宇治川　龍
美女門一揆……高木　龍二
黒旋風一揆……小山龍太郎
人魚と短剣……画・沖　渉二
切支丹殉教史……鈴木　和夫
宗吾秘命……橋爪　彦七
お綱草紙……画と文・東　桂史
天正あじさい若衆……大門　正人
黒い陽炎……浜松　武
隠密覚書・幽霊奉行……島本　春雄
佐渡夫人の魅惑……飯田　豊吉
蜥（とかげ）蜴……堀　杏子
秘密のよろめき……三国沢　隆
連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
（定価百二十円・送料十二円）

33年（七月号）裏窓妖異譚特集号

○口絵・花髑髏……画・古正　英生
蒼白い手……（文・岩堀　光／画・柴谷宰二郎）
黒猫小町……画と文・高須信次郎
あおみどろの座……秋吉　櫛
七化け死霊……南条　慎一
怨霊狂い化粧……黒羽　新
変化屋敷……曲　二十八
妄（もうきょう）鏡……橋爪　彦七
寄生人の恐怖……藤見　郁
かっぱ沼の魅惑……葉田　光
近松門左衛門の血……小田桐　爽
天使をいじめるな……高木　龍二
苛責厳刑譚……円城寺　達
黒い陽炎……飯田　豊吉
いざりが夜にやってくる……島本　春雄
レインコートは左利き……鈴木　和夫
ハラハラ場面オンパレード……画と文・歌川　大雅
K君の女装系図……柳生　亘
隠密覚書・裸女小判……島本　春雄
お町の罪……小田桐　爽
危険な曲り角……竹谷　十三
過去のない女……堀　杏子
連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
（定価百二十円・送料十二円）

33年（六月号）女忍者・女間諜特集号

○口絵・女城鶴巻地獄……（文・岩堀　光／画・柴谷宰二郎）
○グラビア・夜の砂時計……構成・喜多　玲子
蛇林洞秘文……南条　慎一
間諜暁に消ゆ……黒羽　新
伝奇怨霊沼……曲　二十八
血染曼陀羅……橋爪　彦七
間諜散華……藤見　郁
雪肌密書……葉田　光
紅紐呪縛……小田桐　爽
傾城忍者……高木　龍二
慶安女忍道……円城寺　達
連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
隠密覚書・妖異呪文鏡……島本　春雄
極刑秘抄……鈴木　和夫
女館南蛮船……画と文・歌川　大雅
にせ札を獄中で造る男……柳生　亘
天使をいじめるな……大門　正人
苛責厳刑譚……藤　琴也
黒い陽炎……矢桐　重八
いざりが夜にやってくる……神行　京一
蛇使いの王女……
死者は蘇える……
悪魔は見ていた……
（定価百二十円・送料十二円）

裏窓増刊・第七集≪耽奇小説≫③

（定価百二十円・送料十二円）

33年（五月号）裏窓妖異捕物特集号

○絵物語・乱世艶色隠密記…画・山田　彬弘
○絵物語・血まみれマリー…画・秋吉　巒
グラビア・別離の詩……撮影・藤沢　修
新連載・地獄の乳房……飯田　豊吉
愛憎血潮傘……松井　籟子
白い幽霊……中村　貘
大名屋敷の怪……橋爪　彦七
獄門首供養……宇治川　龍二
麝香肌小町……高木　龍八
妖異お告げ狸……矢桐　重一
吸血艶魔伝……青木　憲一
アマゾン流刑奇譚……大町　三郎
女刺青師……歌川　大雅
戦国刑譚……真野　麗
黄色い帯をしめた少女……竹谷　十三
海賊貴族……川野　京輔
拷問と処刑……鈴木　和夫
マダム僕をどうぞ……青葉　繁
連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三
隠密覚書・美女秘巻……島本　春雄
服地がほしい……岬　洋之助
波に笑う女……柳生　亘

（定価百二十円・送料十二円）

裏窓増刊・第六集≪恥奇小説≫②

（定価百二十円・送料十二円）

33年（四月号）あぶちっく・さすぺんす特集

○口絵・白獣の市場……画・山田　彬弘
裏窓巷談・島の喜三郎……鳴海　玄吉
東西映画・名場面を探る……高円寺一郎
野鶏復讐奇譚……矢桐　重八
魔の二十分間……横山　正勝
手提金庫の鍵……神行　京一
肌絵を蒐める男……三国沢　隆
桃色の替え玉……大河内常平
冷酷な雌獣……京極　美岐
鼻から上だけを見た……宇治川　龍
情炎千姫絵巻……橋爪　彦七
禍夜草紙……黒木　忍
隠密覚書・闇若衆伝奇……島本　春雄
十寸髪執念……大門　正人
仁俠恋まんじ……槇　剣吾
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
美代吉捕物暦……飯田　豊吉
伝馬町牢屋敷……鈴木　和夫
蛇女郎呪文……滝　一平
連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三

（定価百二十円・送料十二円）

33年（三月号）裏窓妖婦伝特集号

○口絵・お百化粧草紙……画・東　啓三郎
十六夜お新……橋爪　彦七
白狐呪伝……青木　憲一
奴の小せん……松井　籟子
刺青百万石……高木　龍二
まぼろしお徳……伊能　孝
松風吟味……宇治川　龍
からす猫お紋……飯田　豊吉
らしゃめん駕籠……小山龍太郎
紅筆ざんげ……岬　洋之助
黒い王座……ワトスン・独田
地獄部隊……大宮敬一郎
獣（じゅうじん）人……横山　正勝
隠密覚書・幽鬼大名……島本　春雄
仮面の青春……藤川　博
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
白い顔の悪魔……矢桐　重八
連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三

（定価百二十円・送料十二円）

裏窓増刊・第五集≪恥奇小説≫①

（定価百二十円・送料十二円）

33年（二月号）裏窓遊侠伝特集号

○口絵・柔肌偶奇……槇　剣吾作・古正英緒画
英五郎笠松土産……橋爪　彦七
情怨姫買宿……葉田　光
疾風飯岡街道……飯田　豊吉
やわ肌仁義……中村　貘
ちょぼ一お松……滝　一平
遊俠剣法……高木　龍二
愛憎メキシコ無宿……大門　正人
人工怪物……ワトスン・独田
仮面の青春……藤川　博
リュカ大王の宝庫……藤　琴也
隠密覚書・どくろ遊女……島本　春雄
白いくちなわ……三国沢　隆
狐（きつねび）灯……松井　籟子
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
鏡の中に男がいる……岬　洋之助
死体を運ぶ男……潮井　拓
地獄の指輪……神行　京一

連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三
（定価百二十円・送料十二円）
33年（新年特大号）あぶちっく忠臣蔵特集
○口絵・妖説女忠臣蔵……画・中島　喜美
阿撫的赤穂囃子……法界寺　嘉
美しき奴隷ジェリスナア……海部　陽三
閻に生きる義士……島本　春雄
元禄二筋道……橋爪　彦七
黄泉路の影……宇治川　龍
投龕燈秘聞……松井　籟子
妖説絵図まんじ……窪村　弘
元禄匍妄暦……真野　麗
雪嵐お美代ざんげ……伊能　孝
血まみれ観音像……飯田　豊吉
元禄乱れ小袖……黒木　忍
二人の内蔵助……小山龍太郎
あしのうら源内……岬　洋之助
こんばんわァ……鳴海　玄吉
墓屋敷……神行　京一
狐（きつねび）灯……松井　籟子
白い芋虫……杏笠　一郎
SS秘密クラブ……横山　正克
隠密覚書・逢魔娘……島本　春雄
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
パチンコ地獄……大河内常平
リュカ大王の宝庫……藤　琴也
痴情仏心……山田　重義
放浪の記……伏見　和夫
音響魔……阿部すけはる
（新年特大号定価百五十円・送料十二円）

裏窓臨時増刊（第四集）ムード
（臨時増刊・定価百三十円・送料八円）
32年（十二月号）あぶちっくすりらあ特集
○色頁・倒錯のよろめき……高月　大三
○口絵・女を探せ……秋吉　巒
○グラビア・罠に陥ちた暴漢……編集部・編
隠密覚書・怪異蠟人形……島本　春雄
鱗肌異聞……南屋　彦七
地獄島……美作　賢
雌花のいたずら……京極　美岐
死人駕籠……黒木　忍
盗賊煙丸の最後……藤　琴也
妄（もうしゅう）執……大河内常平
輪（りんね）廻……三谷　春樹
殺（さつい）意……岬　洋之助
夢（むえん）魔……岩堀　光
死体工場……大町　三郎
妖夢呪薬譚……窪村　弘
青い顔の男……飯田　豊吉
歪んだ眼……真野　麗
狐（きつねび）灯……松井　籟子
死を弄ぶ女……花町　右門
紅燈夢……横山　正克
血の蜜月旅行……陶山　密
刺青弁天……中林　節三
（定価百二十円・送料十二円）
32年（十一月号）あぶちっくみすてりい特集
○口絵・廃屋の妖精……秋吉　巒
人差指の妬み……朝山　蜻一
闇（やみ）……大河内常平
悪魔の祈禱師……神行　京一
闖入者……三宅　一郎
地獄から殺しに来る男……真野　麗
金曜日の戦慄……鳥羽　瑛子
殺意の黒白……宇治川　龍
窓（まど）……岬　洋之助
傷痕だらけの人魚……松井　籟子
なめくじ幻想曲……坂　みのる
宝石呪縛……黒木　忍
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
隠密覚書・鬼姫変化……島本　春雄
恋人形……鳴海　玄吉
罠にあえぐ女……波戸　容
手裏剣……狭山　温
死体買います……柳生　亘
妖　虫……京極　美岐
女炎脂地獄……岩堀　光
コレラの正体……田井　良栄
黒いマニキュアの女……木原　康夫
偶奇談義……川口　映治
放浪の記……伏見　和夫
（十一月号、定価百二十円・送料十二円）
（裏窓臨時増刊・第三集）ムード
（定価百三十円・送料八円）
32年（十月特大号）時代伝奇小説特集号
○口絵・妖異羽子板呪法……秋吉　巒
海外グラマア写真集……編集部・編
書き下し長編・猿鍔伝奇……島本　春雄
悲曲梟雄伝……岩堀　光
女犯経秘図……円城寺　達

笄呪文……松井　籟子
隠密覚書・地獄大名……島本　春雄
摺摩灘の裸女……稲垣　史生
紅毛卍秘筐……鳴山　能平
絖肌邪宗門……杉　良平
甲斐の舞面乱……宇治川　龍
耽奇亭秘舌……真野　麗
人肌菩薩……橋爪　彦七
放浪の記……伏見　和夫
悪魔と情婦……呑笠　一郎
女妖の檻……京極　美岐
（十月特大号、定価百二十円・送料十二円）
32年（九月号）耽美小説特集号
○口絵・日光浴……絵口　浩
○〃・殺された七人の裸女……真野　麗
悪のホザナ……円城寺　達
女足の賦……夢野　蓉古
女犯経秘図……柳生　亘
毛……花町　右門
黄金の処女帯……薔薇蒼太郎
チーズ臭い三人の女……鳴山　能平
紫（しどく）毒……早川小夜子
ヒー・イズ・マイ・ギャッグ・マン……岬　洋之助
虹の雫……須崎　龍平
マヒトの告白……神行　京一
花吹雪天保女地獄……三宅　一郎
悪魔に呪われた三人の男……稲垣　史生
おもとの亡霊……三谷　祥介
放浪の記……伏見　和夫
ヒットラーの財宝を探しあてた男…陶山　密
扉をたたく女……広尾麻津夫
隠密覚書・十人小町……島本　春雄
ウェストニッパーの枷……竹谷　十三
殺された七人の裸女……北小路一郎
偶奇坊主……岩堀　光
鐘ケ渕因果絵巻……稲垣　史生
（定価百円・送料八円）
（裏窓臨時増刊・第二集）よるとひる
（臨時増刊・定価百三十円・送料八円）
32年（八月号）異色読物特集号
○口絵・裏窓裸天国……松井　籟子
贅の花……村岡　良平
狂恋懲罰監房……竹谷　十三
貞女お道……麻布　義朗
いぬ……伏見　和夫
放浪の記……鳴山　能平
夜の緋縮緬……佐々木　力
蝦蟇物語・肉ごたつの群……ワトスン・独田
隠密覚書・首吊り中藤……柳生　亘
最大の逃亡者……稲垣　史生
日本ムスメを売買した男……花町　右門
黒髪ざんげ……真野　麗
仇情お浜船……加藤　晋三
隠密覚書・女人駕籠……島本　春雄
道化地獄図絵……夢野　蓉古
山西の黒い嵐……大町　三郎
胡蝶秘文……岩堀　光
（定価百円・送料八円）
32年（七月号）倒錯の手記特集号
○口絵・映画緊縛場面集……佐々木　力
蝦蟇物語・むしだんご……新津　勉
あべじの足……西条恵美子
金色に魅せられる女……鳴山　能平
草雙紙の世界……伏見　和夫
放浪の記……三宅　一朗
あ（虹）ぶ……片岡　省吾
嬉媒嬲哀史……岩堀　光
悦虐濡れ肌地獄……神行　京一
乳房を蒐める男……花町　右門
死に誘う天使……稲垣　史生
生きている竹槍……ワトスン・独田
ノーマン氏の不思議な実験……柳生　亘
情炎白肌双紙……雪俊　遥
弄（ろうじゅう）獣……杉山　清詩
青（あおせん）線……梅崎　登志
魔（まくつ）窟……松井　籟子
妬（とけい）刑……大町　三郎
脱（だつごく）獄……島本　春雄
隠密覚書・女人駕籠……竹谷　十三
耽美小説・紫夫人……境　幸彦
旅芝居見てある記……大町　三郎
（定価百円・送料八円）
32年（六月号）女隠密・スパイ特集号
○口絵・ケツ圧が高いのヨ……岩堀　光
○〃・憲兵と女スパイ……佐々木　力
マタハリ二世の悲劇……大町　三郎

連載伝奇・お小夜嵐……高月　大三
（定価百二十円・送料十二円）

33年（新年特大号）あぶちっく忠臣蔵特集

○口絵・妖説女忠臣蔵……画・中島　喜美
阿撫的赤穂囃子……法界寺　嘉
美しき奴隷ジェリスナア……海部　陽三
閻に生きる義士……島本　春雄
元禄二筋道……橋爪　彦七
黄泉路の影……宇治川　龍
投簪燈秘聞……松井　籟子
妖説絵図まんじ……窪村　弘
元禄閙妄暦……真野　麗
雪嵐お美代ざんげ……伊能　孝
血まみれ観音像……飯田　豊吉
元禄乱れ小袖……黒木　忍
二人の内蔵助……小山龍太郎
あしのうら源内……岬　洋之助
こんばんわァ……鳴海　玄吉
墓屋敷……神行　京一
狐（きつねび）灯……松井　籟子
白い芋虫……否笠　一郎
SS秘密クラブ……横山　正克
隠密覚書・逢魔娘……島本　春雄
連載伝奇・刺青弁天……中林　節三
パチンコ地獄……大河内常平
リュカ大王の宝庫……藤　琴也
痴情仏心……山田　重義
放浪の記……伏見　和夫
音響魔……阿部すけはる
（新年特大号定価百五十円・送料十二円）

裏窓臨時増刊（第四集）ムード
（臨時増刊・定価百三十円・送料八円）

32年（十二月号）あぶちっくすりらあ特集

○色頁・倒錯のよろめき……高月　大三
○口絵・女を探せ……秋吉　巒
○グラビア・罠に陥ちた暴漢……編集部・編
隠密覚書・怪異蠟人形……島本　春雄
鱗肌異聞……南屋　彦七
地獄島……美作　賢
雌花のいたずら……京極　美岐
死人駕籠……黒木　忍
盗賊煙丸の最後……藤　琴也
妄（もうしゅう）執……大河内常平
輪（りんね）廻……三谷　春樹
殺（さつい）意……岬　洋之助
夢（むえん）魘……岩堀　光
死体工場……大町　三郎
妖夢呪薬譚……窪村　弘
青い顔の男……飯田　豊吉
歪んだ眼……真野　麗
狐（きつねび）灯……松井　籟子
死を弄ぶ女……花町　右門
紅燈夢……横山　正克
血の蜜月旅行……陶山　密
刺青弁天……中林　節三
（定価百二十円・送料十二円）

32年（十一月号）あぶちっくみすてりい特集

○口絵・廃屋の妖精……秋吉　巒
人差指の妬み……編集部・編
闇（やみ）……朝山　蜻一
悪魔の祈禱師……大河内常平
闖入者……神行　京一
地獄から殺しに来る男……三宅　一郎
金曜日の戦慄……真野　麗
殺意の黒白……鳥羽　瑛子
窓（まど）……宇治川　龍
傷痕だらけの人魚……岬　洋之助
なめくじ幻想曲……松井　籟子
宝石呪縛……坂　みのる
連載伝奇・刺青弁天……黒木　忍
隠密覚書・鬼姫変化……中林　節三
恋人形……島本　春雄
罠にあえぐ女……鳴海　玄吉
手裏剣……波戸　容
死体買います……狭山　温
妖　虫……柳生　亘
女炎脂地獄……京極　美岐
コレラの正体……岩堀　光
黒いマニキュアの女……田井　良栄
偶奇談義……木原　康夫
放浪の記……川口　映治
（十一月号、定価百二十円・送料十二円）

（裏窓臨時増刊・第三集）ムード
時代伝奇小説特集号
（定価百三十円・送料八円）

32年（十月特大号）時
○口絵・妖異羽子板呪法……秋吉　巒
海外グラマア写真集……編集部・編
書き下し長編・猿鍔伝奇……島本　春雄
悲曲梟雄伝……岩堀　光
女犯経秘図……円城寺　達

笄呪文……松井　籟子
隠密覚書・地獄大名……島本　春雄
摺摩灘の裸女……稲垣　史生
紅毛卍秘筐……鳴山　能平
桃肌邪宗門……杉　良平
甲斐の舞面乱……宇治川　龍
耽奇亭秘舌……真野　麗
人肌菩薩……橋爪　彦七
放浪の記……伏見　和夫
悪魔と情婦……呑笠　一郎
女妖の檻……京極　美岐

（十月特大号、定価百二十円・送料十二円）

32年（九月号）耽美小説特集号

○口絵・日光浴……絵口　浩
○〃・殺された七人の裸女……真野　麗
悪のホザナ……円城寺　達
女足の賦……夢野　蓉古
女犯経秘図……柳生　亘
毛……花町　右門
黄金の処女帯……薔薇蒼太郎
チーズ臭い三人の女……鳴山　能平
紫（しどく）毒……早川小夜子
ヒー・イズ・マイ・ギャッグ・マン……岬　洋之助
虹の雫……須崎　龍平
マヒトの告白……神行　京一
花吹雪天保女地獄……三宅　一郎
悪魔に呪われた三人の男……三谷　祥介
おもとの亡霊……伏見　和夫
放浪の記……阿部　佐治
ヒットラーの財宝を探しあてた男…陶山　密
扉をたたく女……広尾麻津夫
隠密覚書・十人小町……島本　春雄
ウェストニッパーの枷……竹谷　十三
殺された七人の裸女……北小路一郎
偶奇坊主……岩堀　光
鐘ケ渕因果絵巻……稲垣　史生

（定価百円・送料八円）

（裏窓臨時増刊・第二集）よるとひる

（臨時増刊・定価百三十円・送料八円）

32年（八月号）異色読物特集号

○口絵・裏窓裸天国……松井　籟子
贅の花……村岡　良平
狂恋懲罰監房……竹谷　十三
貞女お道……麻布　義朗
いぬ……伏見　和夫
放浪の記……鳴山　能平
夜の緋縮緬……佐々木　力
蝦蟇物語・肉ごたつの群……島本　春雄
隠密覚書・首吊り中蔭……稲垣　史生
最大の逃亡者……雪俊　遥
日本ムスメを売買した男……ワトスン・独田
黒髪ざんげ……真野　麗
仇情お浜船……加藤　晋三
隠密覚書・女人駕籠……夢野　蓉古
耽美小説・紫夫人……大町　三郎
旅芝居見てある記……神行　京一

（定価百円・送料八円）

32年（六月号）女隠密・スパイ特集号

○口絵・ケツ圧が高いのヨ……三宅　一郎
○〃・憲兵と女スパイ……稲垣　史生
マタハリ二世の悲劇……阿部　佐治
胡蝶秘文……佐木　勉

（定価百円・送料八円）

32年（七月号）倒錯の手記特集号

○口絵・映画緊縛場面集……佐々木　力
蝦蟇物語・むしだんご……新津　勉
あべじの足……西条恵美子
金色に魅せられる女……鳴山　能平
草雙紙の世界……伏見　和夫
放浪の記……三宅　一朗
あ（虹）ぶ……片岡　省吾
嬉媒嫺哀史……岩堀　光
悦虐濡れ肌地獄……神行　京一
乳房を蒐める男……花町　右門
死に誘う天使……ワトスン・独田
生きている竹槍……柳生　亘
ノーマン氏の不思議な実験……稲垣　史生
情炎白肌双紙……雪俊　遥
弄（ろうじゅう）獣……杉山　清詩
青（あおせん）線……梅崎　登志
魔（まくつ）窟……松井　籟子
妬（とけい）刑……大町　三郎
脱（だつごく）獄……島本　春雄
隠密覚書・女人駕籠……竹谷　十三
耽美小説・紫夫人……境　幸彦
旅芝居見てある記……岩堀　光

（定価百円・送料八円）

32年（六月号）女隠密・スパイ特集号

○口絵・ケツ圧が高いのヨ……三宅　一郎
○〃・憲兵と女スパイ……稲垣　史生
マタハリ二世の悲劇……阿部　佐治
女形地獄……加藤　晋三
生人形の夢……夢野　蓉古
吹雪とお花……大町　三郎

観世流蜘蛛の秘曲……小山龍太郎
黒水仙の女……竹谷　十三
喰人館炎上始末記……真野　麗
赤い二十七号……花町　右門
紅毛玻璃玉地獄……加藤　晋三
逆スパイ青木菊子の最後……柳生　亘
仮面の女体……宮下　文作
真珠湾の女間諜……木村　文平
蔦色の眼をした女……宮本　潔
プロセス・5と女……陶山　密
特高秘話・赤い花々……高月　大三
悩乱破れ葛籠……岩堀　光
柔肌ごよみ……稲垣　史生
福清の蟻地獄……鳥飼　ゆき
愛怨人斬り船……川越　八郎
カザレス公爵夫人の秘密……否笠　一郎
女工哀史・春岡村事件……雪俊　遥
隠密覚書・白珊瑚地獄……島本　春雄
Fの世界……佐瀬利五郎
女装礼子行状記……藤　琴也
悦虐女体讃……高月　大三
（定価百円・送料八円）

（裏窓臨時増刊第一集）よるもひるも

第一集は売り切れましたが、**臨時増刊第二集≪よるとひる≫との合本がございます。**
（定価二百円・送料十二円）

32年（五月号）女の隠謀・お家騒動特集号

○口絵・裏窓はだか天国……稲垣　史生
○〃・内外映画緊縛場面……堺　幸雄
児小姓を犯した浅岡の局……加藤　晋三
雌雄まんじ……真野　麗
染血の百物語……戸山　一彦
大奥狸囃子……稲垣　史生
顛狂院の相馬子爵……瀬戸口寅雄
天保素走り小僧……西尾　富岳
ボルジア家罪悪史……三宅　一朗
曠野をさまよう死体……陶山　宮
ドイツ皇太子の陰謀……大町　三郎
ブレンヴィリエ家没落始末記……花町　右門
仇（あだばな）花……松井　籟子
カザレス公爵夫人の秘密……否笠　一郎
カルカッタの生地獄……ワトスン・独田　十三
聖アガートの乳房……竹谷　十三
悦虐の女にせ聖女……雪俊　遥
一家を狙う復讐鬼……柳生　亘
隠密覚書・丹州鬼の巣城……桜井　純二
祖国を売った女スペイ……戸山凡太郎
監獄十字路……島本　春雄
秘録・暴帝略譜……藤　琴也
（定価百円・送料八円）

32年（四月号）妖奇犯罪実話特集号

○口絵・泥靴にけがされる小羊……秋吉　巍
男装の淫婦モーパン嬢……花町　右門
邪恋京人形師……若尾　鋭介
嬲られる女体……瀬木　敏郎
女性憎悪者（ウーマン・ヘーター）……柳生　亘
カザレス公爵夫人の秘密……否笠　一郎
女囚を奪う怪盗団……瀬戸口寅雄
ロックン・ロールの鳴る間に……大宮敬一郎
アミアン街道女教師殺害事件……大町　三郎
夫は満足していない……宮下　潔
地獄塔の脱獄者……陶山　密
ちりめんの赤い紐と女……堺　幸雄
花嵐遊女の逢引……稲垣　史生
烹られた女達……雪俊　遥
淫草（みだらぐさ）……川越　八郎
モイ族の媚薬……柏倉　欣造
秘境女人国……稲垣　史生
死棺屋敷（隠密覚書）第一話……島本　春雄
姉妹奴隷……神谷　欣二
若妻地獄……竹谷　十三
呪われた神々の地獄……三上　綾子
（定価百円・送料八円）

32年（二、三月合併号）妖艶毒婦姦婦特集号
32年（一月号）凄艶妖奇読物特集号
31年（十二月号）名刑事特異犯罪捜査特集号
31年（十一月号）戦慄犯罪特集号

○第二巻・32年三月号までは売り切れました
○32年九月号まで定価百円・送料八円。
○32年十月号より定価百二十円・送料十二円
○新年特大号は定価百五十円・送料十二円
○臨時増刊は定価百三十円・送料八円
○三冊以上御注文の際は、送料は本社で負担いたします。
○三ヵ月以上月ぎめ購読をお申し込みの方も送料は当社で負担いたします。
○お買い洩れのないよう、月ぎめで御予約ください！
○御送金には振替御利用が、もっとも確実でございます。

東京都中野区江古田一の二三〇二
株式会社　久保書店
振替口座・東京一〇七五六番

ペルシャの秘録

女奴隷の宝石

地下の石牢

藤山田見郁
田彬弘・画

暗い、冷たい地下牢だ。

巨大な石壁、石床、石の天井。これらの各所にハネ返り、こびりついている黒い斑点は人間の血だ。苦悶と惨虐の史実が、不気味に染みついているのだった。じめじめした湿気と底冷えが、この暗黒の石牢に充満している。

石壁に打ちこまれたクサビから、幾本もの鉄鎖が、蛇のようにのびていた。

——ううむ……

その鉄鎖に、一人の老人が両手首をいましめられてうめいていた。

身にまとうものはちぎれ破れて半裸、白髪は乱れて、血に染っている。そしてこの老人の片眼は、黒山羊の毛皮で作った眼帯で覆われていた。

この囚人の名はラスバッド。

アラビヤからシュラブ河を越えてきた隊商の長老である。このメナムの町に帰ってきたとたんに、この町を占領していた蒙古軍に捕えられた。

絹、陶器、織物、装飾品など、各地での商取引の成果は、たちまち没収、町に残して

ヌメヌメとした生き蛇の縄にびっしりと巻きつかれた女奴隷！大理石の肌は青ざめた

圧制と奴隷・特集

日夜の苛酷な責めに、ラスバッドが、東方の蕃族のために荒されていることを、ラスバッドは知らなかったのである。

老人は、生死の境をさまよって……と——石段をおりる足音が聞えて、二つの人影が、この老囚のそばに近づいた。

一人は、頭に黄色いターバンを巻き、身には黒色の裾長服をまとっている——メナムの蛇使い、アブダラである。

おいた財産も、既に取りあげられていた。

長途の旅の間に、故郷の町れていることを、ラスバッドそして、この地下牢にほうりまれた。

一人は、筋骨たくましい裸身に、純白の絹布を無雑作に巻きつけた男――メナムの新しい支配者、蒙古王ハガンである。ペルシャ攻略の支軍長として、大王フラグから巡遣された、大王の第五子であった。

「死んだか？　――まだ、死なせてはならぬぞ」

蒙古王ハガンが云った。

「死には致しません。死んだマネをしているだけでございます。狡猾なおいぼれめ！」

蛇使いのアブダラは、足で囚人の顎を蹴りあげた。

「むむう……」

ラスバッドの乾いた唇から、弱々しいあえぎが洩れる。

「おい、ラスバッド。もういいかげんに白状してしまえ。〝真紅の涙〟はどこだ。どこに隠してあるんだ！」

蛇使いは、蛇を追う鞭で、ラスバッドの顔を打った。

「知らぬ」

聞きとれぬほどの小声だが、囚人はきっぱりと云った。

「くそ！」

痩せ衰えた老囚の肩に、アブダラの鞭が続けざまにふりおろされた。ラスバッドは歯を喰いしばって、その痛苦を耐える。

「なるほど、強情な男だ。まァいい。そのうちに白状するだろう。気を長くして待つことにしよう。そのほうが楽しみがあっていい。わっはっはっはっ……」

蒙古王ハガンは、豪放に笑った。そして、あたりの臭気と湿気に顔をしかめ、ペッと大きな唾を吐くと、地下牢の石段をのぼっていった。

あとに残ったのは、蛇使いアブダラと、囚人だけである。

アブダラは、がらりと鞭を捨てて、ラスバッドのそばへ膝を寄せた。

「おい、片眼のじいさん。おれにだけ、こっそり教えてくれよ。え？　〝真紅の涙〟は、どこに隠したんだい？　なに、おれだって、ペルシャの人間だ。あんな蒙古兵野郎に、メナムの宝石を渡したかァないや。だから、おれがこっそり、安全な場所へ移してやろうというんだ。このままじゃ、どうせ奴らに見つけられ強奪されるにきまってる。安全な場所へ隠しておいて、奴らがあきらめるのを待つんだ。いや、おれは、なにも、あんな宝石なんか欲しくはない。礼には、金貨の十枚もくれりゃそれでいい。どうだい、ラスバッドのじいさん？」

狡猾な細く光る眼で、ラスバッドを説き伏せようとするアブダラだ。

「フフ……その手にはのらぬ。失せろ！　くそ蛇め。お前もこの土地の人間なら、あんな人殺しの野蛮人の鼻息をうかがうのはやめろ」

囚人は、血色の失せた唇に冷笑をうかべて云った。

「うぬッ」

蛇使いの青ぐろい顔に、憤怒の赤みがのぼった。再び、鞭をとりあげると、ラスバッドの顔を、力まかせに打ちすえた。

ぴしり！　ぴしり！

老人は、うめく力もなく気を失った。顔にかかっている黒皮の眼帯が、鞭のためにハネとばされた。眼帯の下は、茶黒い眼窩が、ぽっかりと口をあけている。白く濁った死魚のような眼が、じっとアブダラを睨んだ。

「くそッ、気味の悪い白眼だ」

蛇使いは顔をしかめた。

と、その時、その死魚の眼の中に、ふと、赤くきらめく一点をみつけて、アブダラの眼が、異様な光りを帯びたのだ。

〝真紅の涙〟

アブダラは、いきなり自分の指先を、スラバッドの眼窩に突っこんだ。どろりと濁った白眼を、ぐいとえぐりとる。

と、その眼の裏側に、妖しい星のように、赤く燃える石が、ハメこまれていたのだ。

親指の頭を二つ重ねたほどの大きさをもつバラス・ルビーだ。この宝石を、家屋の四隅や、庭、ぶどう園などに触れておくと、嵐、落雷、害虫などの災害から免れるという不思議な力をもっている。

（これだ！　これが〝真紅の涙〟だ。くそ！　こんなところに隠しておきやがったのか。これじゃ、いくら探してもわからなかったのも無理じゃねえや……）

アブダラの胸は、思わぬ歓喜にふるえた。彼はあわてて、あたりを見廻した。

暗い静寂の地下牢だ。ほかに人影のある筈はない。

（この宝石を、おれのものにするのだ。蒙古王なんかに渡すものか。

だが、さて、どこへ隠したものか……）

へたなところへ隠そうものなら、たちまちあの禿鷹のような蒙古王にみつかって、身体を八ツ裂きにされてしまう。

（む、そうだ！……）

蛇使いは、眉を寄せて考えた。

一計を案じたアブダラは、両手の指で、老人の首をぎりぎりとしめつけた。

枯木のような手足が、かすかにけいれんすると、なんの抵抗もなく、ラスバッドの息は完全に絶えた。

（ウフフ……）

蛇使いの口辺に、妖しい笑みが洩れた。

満足気に、手にした蛇追い鞭を、ピュウと宙に空鳴りさせた。

――西紀一二二三年の夏。ペルシャ高原の東、プシュト山脈をのぞむ高原の町、メナムでの出来事である。

もう少しくわしく云えば、この年、アラ山脈を越えて、突風のようにメナムの町に襲来した蒙古軍が、先住の太守を惨殺し、代りに乗取ったメナム宮殿。その地下にある石牢での出来事であった。

アブダラは先王の愛顧を受けた蛇使いである。それが、東方の蛮族、蒙古王ハガンの強大な兵力をみるや、たちまちのうちに卑屈な笑みを面にあらわして追従した。

隙間から消えた。

蛇使いは、それからもう一度あたりを見廻し、気を失って倒れているラスバッドの咽喉に手をかけた。

両手の指で、老人の首をぎりぎりとしめつけた。

枯木のような手足が、かすかにけいれんすると、なんの抵抗もなく、ラスバッドの息は完全に絶えた。

（ウフフ……）

蛇使いの口辺に、妖しい笑みが洩れた。

満足気に、手にした蛇追い鞭を、ピュウと宙に空鳴りさせた。

――西紀一二二三年の夏。ペルシャ高原の東、プシュト山脈をのぞむ高原の町、メナムでの出来事である。

もう少しくわしく云えば、この年、アラ山脈を越えて、突風のようにメナムの町に襲来した蒙古軍が、先住の太守を惨殺し、代りに乗取ったメナム宮殿。その地下にある石牢での出来事であった。

アブダラは先王の愛顧を受けた蛇使いである。それが、東方の蛮族、蒙古王ハガンの強大な兵力をみるや、たちまちのうちに卑屈な笑みを面にあらわして追従した。

「おい、これをお前の腹の中にしまえ！」

蛇使いは、コブラに命令すると、この毒蛇は、アブダラの足もとにうずくまったのである。眼鏡形の紋様を全身にほどこしたインド・コブラだ。

黒褐色の胸廓を思いきりひろげ、深い口を上下に裂いて、長く細い舌を、チロチロと出没させる。

「それでいい。腹の中で溶かすなよ。フフフ……さァ、行け、消えろ！」

アブダラの鞭が、コブラを追った。宝石を呑みこんだ毒蛇は、スルスルと石壁を這い、

ハガンの命に従わぬ男女は、すべて奴隷にされて、苛酷な鞭の下にあえいでいたのである。

深夜の墓場

メナム宮殿の外庭。赤茶けた岩に囲まれて墓地がある。兵士の墓が立ち並んでいる。

夜であった。

――ギャアッ！……

一羽の禿鷹が、鋭い啼き声をあげて夜空を駆け、この墓地に舞いおりた。

墓の蔭には、二つの人影がひそかにうずくまり、うごめいている。

禿鷹は、その一つの肩にとまった。

この影は、ついこの間まで、メナム一の隊商ラスバッドの一隊に加わっていたカシム青年である。今は捕われて、この城内の水汲み奴隷となっている。

肩に舞いおりた禿鷹は、カシム青年が飼い馴らしたものであった。

「おお、ビドロか。よく来たな」

カシムは、禿鷹の名を呼んで、その赤禿げた頸を愛撫した。ビドロの咽喉が、くっくっくっと鳴って、主人の愛撫にこたえる。

もう一つの影は女――ラスバッドの一人娘ナナであった。富裕な隊商の娘が、いまは同じく奴隷となって、変転の運命にあえいでいた。

――長老ラスバッドの秘蔵するペルシャ一の宝石を手に入れようと焦った蒙古王が、つい に地下の石牢で拷問の果てに、ラスバッドを殺してしまった……噂はたちまち町中にひろがった。この若い二人は、悲しみを胸に秘め、深夜この墓地に、ラスバッドの死体を掘り探しているのである。

「あっ、あった。これだ！　長老の死体だ。くそ！　むごい殺しかたを！」

新しい墓穴を掘りおこした カシム青年は、中をのぞいて歯ぎしりした。

わずかな月光が、拷問に痛めつけられたラスバッドの死体を照らしだす。

「あっ、お父さま！」

娘のナナは、泥だらけの死体にかじりついた。耐えていた悲しみが、急激に溢れ、わっと泣き伏す。

カシム青年は、背後からナナの肩を抱きしめた。

「ナナ。君の悲しみはよくわかる。ぼくだって、この悲しみ口惜しさは同じことだ。だがいつまで泣いていては駄目だ。長老が、命を賭けて守りとおしぼく達が守るんだ。さ、どこにあるんだ。早く探しださないと、見廻りの兵隊がくる」

ナナは、涙に濡れた顔をあげて、恋人の胸にすがった。

「カシム。〝真紅の涙〟は、お父さまの眼の中よ」

「なに、眼の中？」

「黒い眼帯の下。おそるおそる、手でさぐってあるの」

「なるほど。さすがは長老だ。よし……」

カシム青年は、死体の顔にかかっている眼帯をとりはずした。

禿鷹のビドロが、カシムの肩で、バタバタと羽音をたてる。

「ビドロ、静かにしろ……ない！　ナナ、眼の中には、何もないわ。その隠し場所は、おそんなことはないわ。その隠し場所は、お父さまと私だけしか知らないの。お父さまが白状したなんて、とても信じられないわ」

ナナも、思わず身をのりだす。

「ハガンの奴が、先にとったんだ！」

「だって、町の噂では、お父さまが殺されたのは、宝石のありかを、どうしても白状しな

かったからということよ。それならば、まだこの眼の中にある筈よ！」

「だが、ないんだ！　このとおり！……ハガンか、ほかの誰かが、見つけだして盗んだに違いない！」

カシム青年は、口惜しげに唇を噛んだ。蔦色の眼が、憤りに光った。

「かわいそうなお父さま。……カシム、これから私たち、どうしたらいいの？」

再び、わあっと泣き伏すナナである。

カシムは、たくましい褐色の腕でナナを抱きしめ、ラスバッドの無念を思い、復讐を誓うのである。

禿鷹のヒドロも、カシムの肩で、その悲しみに同調するかのように、尾羽をふるわせ、鋭い声をあげて啼いた。

蛇使いの奸計

メナム宮殿の広間。

バコン山から切りだしてきた緑石を柱や壁にあしらい、贅を尽くした装飾の中に、うち続く戦勝に酔った蒙古軍兵たちが、飽くなき酒宴を繰りひろげている。

半裸の奴隷女に淫らな踊りを強いて、手を叩き、足を踏み鳴らしての乱痴気騒ぎが、日に夜に続く。

野放図な酒盛りが一段落したいま、蛇使いのアブダラが、この大広間の中央で、ハガン王のきびしい叱責をうけ、すさまじい鞭をくらっていた。

「あッ！　痛ッ、お許し、お許し下さい！」

裾長の黒衣に、みずから足をとられて、転げまわりながら、ひたすらに頭を床にすりつ

けているアブダラである。

蒙古王ハガンの鞭は、ふとく長い。

ジンギスカン四世の命を受け、二十万の大軍をひきいて、シナ北西部から、ペルシャまでの長途を駆り続けてきた皮鞭だ。血と汗と脂が、黒く染みこんでいる。

「誰が、あのおいぼれ隊商を殺せと云った。おかげで、ペルシャ一という宝石が、行方不明になってしまった。お前の罪は重いぞ！このふらち者めが！」

嵐のような皮鞭である。七十九の町を焼き払い、五万の婦女を犯し、十七万の人間を惨殺した兇暴な侵略者の激怒の鞭だ。

さすがの蛇使いも、悲鳴をあげて、芋虫のようにのたうちまわった。しかし、蛇の執念をもつアブダラである。皮鞭の下にうめきながら、王の憤怒を静める奸智の一計を案じ、血だらけの顔をふり仰いだ。

「お、お待ち下さいませ、王様。あのおいぼれめは死にましたが、まだあの宝石の隠し場を知っている者が、ほかにおりまする」

「なに？」

皮鞭の嵐がやんだ。ハガンの眼が、アブダラを見直す。

（しめた！）

蛇使いは、心の中で手をうった。

「あのおいぼれには、娘が一人おりました。その娘を捕えてきだせば、あるいは……」

反響いかにと、王の顔色をうかがう。

「なに？　娘からきだす？　うむ、それも一計だな。して、その娘は、どこに居る？」

ハガンは、疑わしい眼で、アブダラを睨みすえる。

「つい、眼と鼻の先でございます。この宮殿の中に、奴隷となって、さきほど、ほかの女奴隷たちとこの大広間で踊りをみせているのを見て、実はわたしもびっくりしたような次第で……」

「わしの奴隷の中に居るのか。それは手まわしがいい。すぐその娘を連れてこい。あんな頑固なおいぼれより、娘を責めたほうが、どれほど早かったか知れぬわ。ええい、なぜそれを早く云わぬ。愚か者めが！」

また一つ大きな鞭が、うなりをあげてアブダラの背中にとんだ。しかし、アブダラは、腹の中で、へへへ……と笑う。

（王様なんて威張っていても、やっぱり蒙古の蛮人だ。わしの口先で簡単にだませる。いくら娘を叩いて白状させたところで、あの宝石はもうおれのものだ。百万枚の金貨と交換できるあの〝真紅の涙〟蒙古人なんかに渡してなるものか……）

蛇と縄

隊商ラスバッドの娘、ナナが、宮殿内の奴隷部屋から曳きだされてきたのは、それから間もなくのことである。

「すなおに云えば、お前を奴隷の身から解き放ってもやろう」

中庭であった。熱帯の草木が、日光をさえぎる配置で植えつけられ、中央にある池の噴水からは、間断なく霧がふきあげられて涼風を誘った。この水は、捕えられた多くの奴隷たちが、城外はるかのオアシスから、熱砂を踏みしだいて汲みあげ、運んでくる血と汗の水であった。

粗暴な兵士に肩を小突かれて、ナナは庭土に這った。

「ナナというのか。美しい女だ。踊らせるだけではもったいないぞ。肌は大理石、眼はメノウ、そしてその愛らしい唇は、お前の親父

が隠しているルビーのように、紅く美しく光っている……ハッハッハ。蒙古の王でも、この位の世辞は云えるぞ。ところでどうだ。そのルビーのありかを、わしに教えろ。わしに捧げるのだ」

精カンな風貌を、ぐいと前に突きだし、威嚇をこめて、ハガン王が云った。

「知りません」

ナナは答えた。唇をきりりと噛んで横をむく。この蒙古王は父の仇である。憎悪の思いに、ナナの心はふるえた。

「嘘をつけ。お前が知らぬ筈はない」

蛇使いアブダラが、ナナの髪の毛をつかんで、その顔を王の前にねじあげた。

「私は知りません」

ナナは、決意を秘めて、眼を閉じた。氷のように冷たい表情である。

「奴隷のくせに、不敵な女だ。わしを恐れぬのか。うぬ。どうしても口を割らしてみせるぞ」

自尊心を傷つけられて、ハガンは怒った。

「アブダラ。この奴隷女を責めろ。わしは、どうしても、あの宝石を手に入れるのだ」

「かしこまりました」

卑屈な姿勢で一礼したアブダラは、ナナの細腕を、ぐいとつかんだ。

肩から腰にまとった薄衣を、ヒヤリとした蛇の肌が、びっしりと巻きつき、つめつける。

「ひえッ！」

ナナはもだえた。立ち上って逃げようとした。その足もとにも、数匹の蛇が這いのぼりらされる。

むきでた両腕が、手荒く背後にねじまげられた。

両足首を一つにくくりあげる。

どうと転倒するナナ。その上にぬるぬると襲いかかる蛇の群れ。

「アア！　助けて！　アア！」

ナナは恐怖と苦痛に七転八倒した。

ニヤリと笑ったアブダラ。その手には、いつのまにか縄――いや、縄と見えたのは、蛇であった。ニョロニョロとうごく生き蛇である。

赤糸のような蛇の舌が、ナナの鼻や唇のあたりを、チロチロとなめるのだ。

「ひいッ」

その蛇を縄のようにしごいて、この蛇使いは、背中にまわしたナナの両手首を縛りあげるのである。

冷たい汗が、全身からにじみでる。

――ビビビ……

「わっはっはっは……これはいい。これは珍奇の眺めだ。女奴隷の蛇踊りとは……わっはっはっは……」

アブダラの唇が無気味な音をたてて鳴り響くと、どこからともなく、細く長い蛇の群れが、浜辺にうち寄せる波のように現われるのだ。

恐怖と苦痛

その縄蛇を手につかみ、得意満面のアブダラが、ナナの身体をひしひしと縛りあげる。

腕から胸へ、ヒヤリとした蛇の肌が、びっしりと巻きつき、つめつける。

「ひえッ！」

ナナはもだえた。立ち上って逃げようとした。その足もとにも、数匹の蛇が這いのぼりらされる。

むきでた両腕が、手荒く背後にねじまげられた。

両足首を一つにくくりあげる。

どうと転倒するナナ。その上にぬるぬると襲いかかる蛇の群れ。

「アア！　助けて！　アア！」

ナナは恐怖と苦痛に七転八倒した。

赤糸のような蛇の舌が、ナナの鼻や唇のあたりを、チロチロとなめるのだ。

「ひいッ」

冷たい汗が、全身からにじみでる。

「わっはっはっは……これはいい。これは珍奇の眺めだ。女奴隷の蛇踊りとは……わっはっはっは……」

馬乳酒を飲み、羊肉を頬ばりながら、ハガンは大声でわめき、手を叩いた。

この残忍な責めに狂気と思われるほど、眼を輝やかせる嗜虐の王である。

「さあ云え！　王様に申しあげろ。ペルシャの宝石をどこに隠したか！」

苦悶するナナの咽喉もとへ、蛇追いの鞭先

を突きつけてアブダラが云った。
娘を責めながら、しかもアブダラの奸智は
隙間なく働く。
（――だが、もし、こいつが本当に白状した
らどうする？　ラスバッドの片眼の中に、も
うあれはない。ルビーはおれの毒蛇の腹にし
まってあるのだからな。この蛮王は、またひ
どいカンシャクをおこすだろう……）
（この蛇責めに、やがて娘は白状する。王は
墓を掘り返して、ラスバッドの片眼を探す。
宝石はない。すると、疑いのかかるのは、お
れか？　まずいな……）
（口を割りそうになったら、わからぬように
殺してしまうか？　いや、それもまずい。こ
の間、親父を殺して、あの太い皮鞭をしたた
か喰ったばかりだ……）
（いいことがある。この娘の白状は、ウソだ
と云い張るのだ。眼の中にルビーを隠したな
んて、拷問のがれの大嘘だというのだ。こい
つはいい……）
あくどい詭弁を用意して、ますます蛇追い
の鞭に、力をこめるアブダラである。
「さあ、蛇ども。そこをもっとしめつけろ。
ぐるぐると巻くのだ。舌でなぶるのだ。それ
それ、もっと！」
しかし、ナナの口は予想のほか固かった。
恐怖と苦痛に、ついに気を失うまで、おの
れの決意を守りとおした。
（気絶か。こいつはうまい。生かさず殺さず
のままにしておけば、おれの身も安心だ）
脂汗を全身にうかべてぐったりとなった娘
を見おろして、アブダラの唇に洩れるのは、
快心の笑みである。
――蒙古王のペルシャ一の宝石に対する欲
望は、悪魔のように執拗だったのである。そ
生れてからこのかた、殺戮と侵略の日を繰
り返してきたこの蛮王にとって、西方の文明
国の宝石は、まるで駄々っ子が玩具を欲しが
るようなものであった。
ナナへの苛虐は続けられた。
しかし、彼女は頑強に口をつぐんだまま、王とアブダラに、激しい憎悪の眼を光らせるだけであった。
心の中で、ひたすらカシム青年を思った。
（必ず助けにいくよ！）
青年の鳶色の眼が、どこからかナナを見つめ、語りかけるのだ。
それを無理とは知りながら、唯一の心の支えとして、歯を喰いしばって冷酷な運命を耐えるナナであった。

灼熱の刑

蒙古王ハガンも、つい堪忍袋の緒を切らして怒鳴った。
「親父が親父なら、娘も娘だ。殺すのはたやすいが、それではわしの気がすまぬ。よし！おぼえていろよ！」
みせしめのために、奴隷女ナナを、城外南西にある赤くやけた岩山の上にさらすことを命じた。
小高い岩の上に柱をたて、それにナナを縛りつけたのである。そのそばには、ナナの処刑に対する貼札が建てられた。
――この奴隷女は、蒙古王ハガンの命にそむいた罪により、ここにさらす。尚、この女に代って〝真紅の涙〟の隠し場所を知らせた

者には、金貨百枚をほうびとして与えるものである……

この貼札の横に、ナナは柱を背中に、うしろ抱きにした形で両腕を縛られた。更に胸や胴に、幾重もの太縄を巻かれ、両足も揃えてギリギリとくくりつけられた。

一日中、烈しく燃えいぶる太陽が、ジリジリと肌を灼き焦がす。地獄のような咽喉の乾きに、ナナは悶えた。

灼熱の刑であった。これは、蛇責めよりも肉体を衰弱させる。

眼の前には、カビール砂漠が広大に光る。

熱風が砂をともなって吹きつけ、ナナの眼や、鼻や、口をふさいだ。

夜になると、監視兵の眼を盗んで、町の人が、水や食物を運んでくれる。

「ナナ。元気をおだし。がんばれるんだよ。がんばるんだよ。お前はメナム一の隊商ラスバッドの娘だ」

その励ましの言葉も、既にナナの耳にうつろであった。

三日目の夜であった。

砂漠に囲まれた灼熱の地にも、夜になれば露がおりる。素肌に喰いこむ縄も、既に感覚がマヒして、苦痛を超えていた。

(ああ、私はもうじき死ぬ。お父さまのところへ行くのだ……)

生死の境をさまよっていたナナは、その時ふと人の気配を感じて顔をあげた。

もしや、カシムが……と思ったのだ。その期待は、むなしくはずれた。

「フフフ……まだ生きていたのか。しぶとい女め」

蛇使いアブダラであった。カギ鼻をひくひくと動かして、ナナの乳房の前につきだす。

好色の指が、ナナの身体をよじらす。

「蒙古王の命令で、お前を連れにきたのだ。

もいちど吟味しようというのだ。だいぶまいって、今度こそ白状するだろうから、と王が云うのだ……」

顔をあげたナナが、疲労のために、またガクリと首をおとした。それを、承知とカン違いしたアブダラが、あわてて手をふった。

「困る。白状なんかされたら困るのだ。実はな、ナナ。おれは、お前の親父の目玉から、とうに宝石を抜きだしてしまったんだ」

ハッとして、ナナは顔をあげた。

(それでは、この男が！……)

「そこで、おれはお前を殺さねばならない。蒙古王には、ナナはもう暑さにやられて死んでいたと報告する。そうすれば、ルビーは確実に、おれのものになるというわけだ」

「うっ……」

うめいてナナは、この兇悪の蛇使いを睨んだ。身悶えたが、いましめの縄は、鎖のように固い。

「最後だから、ついでにもう一つ聞かせてやろう。お前の親父を殺したのもおれだ。フフフ……悪く思うなよ」

アブダラは、キョロキョロとあたりを見廻した。監視兵には、砂金の袋をやって追い払ってある。

人影がないのを確かめると、

——ビビビ……

唇を鳴らす。と……音もなく足もとに這い寄ったのは、インド・コブラだ。アブダラ秘愛の毒蛇だ。

「さあ、お前の毒牙で、この女を噛み殺せ。この、やわらかく突きでた乳房を噛んで、おれの猛毒で血の廻りをとめるのだ」

蛇使いの口笛と鞭に追われて、コブラはナナの足もとから、身をくねらせてぬるぬると這いのぼる。

膝から腿へ。腿から腹へ——蛇腹を吸いつかせてよじのぼる毒蛇だ。

「ひイッ！」

ナナの咽喉から恐怖の叫びが、笛のように鳴る。

野獣の死闘

「おっ！」

アブダラは驚いて眼をむける。

ビドロは、鋭いくちばしで、ナナの乳房にこの、やわらかく突きでた乳房を噛んで、おれの猛毒で血の廻りをとめるのだ」

蛇使いの口笛と鞭に追われて、コブラはナナの足もとから、身をくねらせてぬるぬると這いのぼる。

膝から腿へ。腿から腹へ——蛇腹を吸いつかせてよじのぼる毒蛇だ。

「ひイッ！」

ナナの咽喉から恐怖の叫びが、笛のように鳴る。

野獣の死闘

コブラの鎌首が、ナナの乳首を狙って攻撃の構えをみせた時であった。

——ひゅう！……

風を切る鋭い音がして、夜空から舞い下りてきたものがある。

禿鷹だ。カシム青年の飼う、ビドロと呼ばれる禿鷹だ。

アブダラは驚いて眼をむける。

ビドロは、鋭いくちばしで、ナナの乳房に寄ったのは、インド・コブラだ。アブダラ秘愛の毒蛇だ。

「さあ、お前の毒牙で、この女を噛み殺せ。

そのまま、空へ舞いあがる。と、コブラもしたたかもの。首筋をつかまれたまま、柔軟な胴と尾を跳躍させて、禿鷹の羽にからみつかせる。

——ギャオ！

自由を奪われて、禿鷹はコブラと共に、一直線に地上に落下する。

「コブラ！　負けるな！」

両拳を握りしめて、アブダラが叫んだ。

どさりと音たてて地上に落ちた禿鷹と毒蛇の死闘を、息をのんで見守るアブダラ。

砂をとばし、羽片を散乱させ、バサリバサリと音すさまじい闘争である。

だが、この勝敗は、上から急襲を加えたビドロのくちばしと爪に凱歌があがった。

首をちぎられ、腹をひき裂かれたコブラはその魔力を次第に弱めて、禿鷹の羽を幾重にも締めつけた胴も、ずるずるとゆるみをみせてきた。

「くそ！　弱虫め！　よし、おれが仇をうってある。

てやる！」

怒ったアブダラは、黒衣の腰から短刀を抜いた。禿鷹にむかって身構える。だが、数刻の死闘に疲れ果てたビドロは、その緑色の眼を次の大敵に光らせても、再び起つ力をなくしていた。

その時、岩壁の間から、黒い影が躍りあがった。アブダラの背後から、狼のように襲いかかる。

「誰だ！」

一度はふりはなしたが、黒い影は強い腕力で、執拗にアブダラにいどむ。

「ビドロ！　起きろ！　飛べ！　この蛇使いの眼を突け！」

カシム青年であった。

ナナの危急を知って、必死の思いで宮殿の奴隷小屋を脱け、城壁を越えて、この岩山の処刑場へ駆けつけてきたのだ。

主人の激励に、ビドロはバタバタと羽を鳴らし、最後の力をふりしぼって、飛びあがった。

――ギャオ！

アブダラの眼をめがけて、鋭い爪をひっ掻ける。

「わあッ！」

アブダラの両眼から、鮮血が走った。あわてて眼をおさえる。その隙に、カシム青年は短刀を奪うと、アブダラの脇腹を狙い、力まかせに突いた。

「悪魔め！」

「わあッ！……」

アブダラは両手で虚空をつかんでのけぞった。足もとの岩がくずれて、一瞬反転すると深い夜の底へ落下していった。

妖智、狡猾な蛇使いの、むざんな最期であった。

ビドロの手柄

カシムは汗を拭うひまもなく、処刑柱へ馳け寄る。

「ナナ！　よく生きていてくれた！」

「ああ！　カシム！」

弱々しい声だが、喜びにふるえる。

「いますぐ縄を切るからね」

血汐のついた刃で、プツプツと切り解く。

ナナの身体は、くずれるように地上に倒れた。

――ナナ。しっかりするんだ！」

カシムは抱き起して、水に濡らした布で、ナナの肌を甦えらせるのだ。

「でも、カシム。あなたはどうしてここへ来られたの？」

「必死になって城を脱けだしたんだ。君の命が危いと知ってね。さ、これから二人で逃げるんだ。水も食物もこのとおり、用意してある。カビール砂漠を越えて、隣のバークフの町へ逃げれば、もう蒙古軍の手は届かない。馬はメナムの友人に揃えてもらおう」

「でも、でも、〝真紅の涙〟が……」

「そうだ。そのことだけが心残りだ。だが、いまは宝石よりも、ぼくらの命のほうが大事なんだ。さ、勇気をだして逃げるんだ」

カシムは力強くナナの手を握る。

「でも、あの宝石は、父が命を賭けて守り通したものなの……」

ナナの瞳が、悲しみに濡れた。

その時である。インド・コブラの死肉をつついていた禿鷹ビドロが、カシムの肩にとまって、バタバタと羽をうごかした。

そのくちばしに赤く光るものを見つけて、カシムが眼をみはった。

「ビドロ！　それはなんだ！」

手をさしのべると、掌の上にポトリとおとした紅い石。夜空に赤く燃える星のような、深い色を秘めたルビー。

「あっ、〝真紅の涙〟よ。これを、どうしてお前が……」

ナナは、声をふるわして、それをつまみあげた。

インド・コブラの死肉を喰っていた禿鷹が、その腹の中から、この宝石をくちばしにくわえあげたのである。

しかし、この大粒のルビーが、なぜ禿鷹のくちばしから出現したのか、それを考える時間は、いまの二人にはなかった。

ともあれ〝真紅の涙〟は、まさしくナナの手中にあるのだ。

二人は、抱きあって喜んだ。

そして、ただちにカビール砂漠を越えての夜旅に出発した。

その夜、青い狼が美少女を誘って天に住んだという〝狼座〟が、二人の頭上に、行く手を祝福するかのように光り輝やいていた。

史実によれば、一二二三年八月の末、メナムの町は、城の西を流れるシュラブ河の突然の氾濫によって、洪水に襲われ、濁流の底に沈んだとある。

蒙古王ハガンも、三万余の兵士も、メナムの町民たちも、すべて泥海に呑まれて姿を没した。

カシム青年とナナの二人が、無事にバークフの町へ逃れることができたかどうかは、明らかでない。

ただ、テヘランの博物館には、いまなお、〝女奴隷の宝石〟と呼称する大粒のバラス・ルビーが、伝承されて収蔵され、妖しい色を放っているという。

次号予告

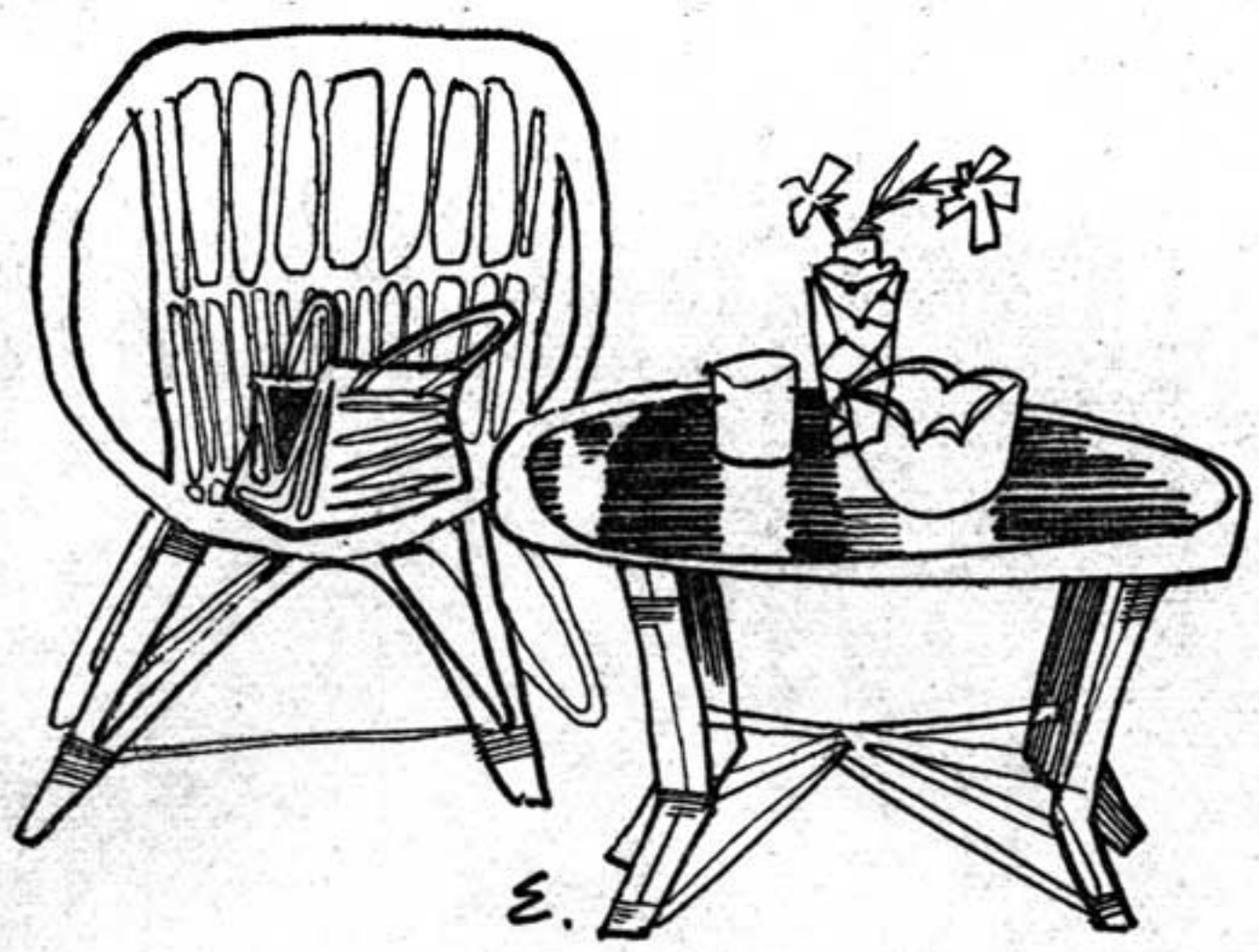
黒い唇 京極美岐

金持の女寶石商の女中になった彼女の奇妙な見聞……。

美しい若い女達を次々に連れ込む女主人のはげしい行状に、呆然とするばかりだった。逃げればいいのに彼女達は、やつれ果てしゃぶり尽されるまで女主人を慕って離れないのだ……。

どす黒い女主人の唇にどんな魔力がひそんでいるのか？

新年号を御期待ください!!



氷花幻想

耳無草（みみなぐさ）

やむことなく降り積む雪は地上のすべてをおおいかくすのだ。マントの中の二人だけの世界も……

笹本透

窓の外は雪だった。

三尺近い根雪の上に、まだ降り積むつもりらしく、昨日からやむことなく降りしきっていた。

細かい白いものがゆるやかに飛び交いながら数限りなく、止め度もなく舞い降りて来るのを、窓わくにもたれて見ていると、雪が降って来るのか自分の体が舞い上って行くのか、次第に重心を失って、ついには目まいさえ感じて来る。

雪は真っ白に美しかった。

私は、その冷たい白さに〝死〟を感じていた。

人の気配に放心した眼を向けると、たった一人心のとける相手、看護婦の和代だった。

何かいっている。

私はゆっくりとベッドに戻った。和代は不安げな顔で、何気なさそうに窓により、ブラインドを下し、窓も閉ざした。私はにやりとして見せた。

〝寒いから、日が暮れたら窓をしめなさい〟

和代はそういうが、寒いからだけではないのだ。私はバイブルを広げた。彼女を安心させたかったのである。彼女は神なんか知りはしないのに、私に持って来てくれたのだ。

（私に将来などあるものか、バイブルなど糞くらえだ！　無理やりに取り上げたものを返してもくれないで、何が神でもあるかのように、まるで、和代が神ででもあるかのように、うったえ、嘆いた。

私は幾日かを和代に慣り、

いつか、看護婦の寮にころがっていたという古ぼけた本、奥付の発行日は私の生れる前の日づけだった一冊の本を、看護婦の一人が私の枕元に置いてくれた。それをある日取り上げて、その代りに持って来てくれたのがバイブルだったのだ。取り上げられた本の名は「死の都ブリュージュ」

「雪は美しいなあ。全然音がしないで黙って積ってしまう。知らない間に……」

和代は私の肩に手をかけた。お休みなさいというように。私は横になった。和代の白い大きな手が、ふとんをすき間なく私の首までかけてくれる。あたたかい手だ。

「まだ覚えてるの？　僕が雪の中をずんずん歩いて行きたいといったのを……」

和代は首を横に振った。いちずに否定することによって私の頭から妄想を追い払いたい、ひたむきな顔だった。

〝これから当分お会いできなくなりますから元気でいて下さいね〟

「なぜなの？　和代さんどこかへ行くの？　なぜ来られないんだい」

和代は困ったような顔をした。

〝私のつごうで来られないのです。ごめんなさい〟

でも、そう書いた紙を見せる手が少しふるえた。正直な和代だった。

「そうじゃないでしょう。何かあったんだな。僕の室へあまり来ちゃいけないって、だれかにいわれたんでしょう」

しばらく、何も書く様子がない。起き上って、まともに顔を見ると、歯を食いしばっている。眼が悲しげに曇り、何かをこらえる顔だった。美しくはないが柔和な、穏やかな彼女なのに、だれが一体何を？

「僕にはそんな気がしていたんだ。片輪者になった僕のそばへ来て、めんどうがらずに慰めてくれるのは、あなたが僕を哀れんでくれるからなのに。あなたに迷惑はかけたくないんだ。これからは来ないでください。僕は僕で何とかやって行くから……」

和代は眼を私にじっと注いだ。唇を無意味に動かした。気がついたように、急いで書きなぐる。

〝そんなヤケなことをいわないで下さい。私はまた来ます。人が何といおうとかまいませんが〟

私は強がりを続けようとした。けれど続かなかった。和代の手をすがるように取り上げた。大きなあたたかい手は、母のようにやさしかった。

私が父の転任地、北陸のK市へ来たのは、冬の休暇を過すためだった。今年は雪が少いとはいえ、一面純白におおわれた雪国は美しくはあったが、よそよそしく、明るいスカッとした東京の空と打って変ったうっとうしい天候だった。

明日は帰京という時には、もう心はギッシリ充実した学生生活に飛び帰っていた。

その夜から頭が重く、かすかな耳鳴りが始まったのだ。一日帰京を延ばして寝ていたが快くならず、K大学付属病院へ行った。

思いもかけぬ診察の結果は、即日入院。手術をすることになった。自覚症状がないまま内耳の奥深く炎症があって、慢性になっていたのだ。

手術は事なく済んだ。

麻酔がきれてからの痛みも、次第に薄れ、抜糸もすむと、日々退屈に悩まされた。

二人入る二等室に私一人だったので、看護婦達が暇を作っては遊びに来た。起き上って

トランプをしたり、東京の話をしてやったり結構楽しい時間も過した。

だが、思いを東京へ走せると、いても立っても居られぬ焦燥を感ずる。今ごろ、友人達ははちきれそうな元気で勉強し、談笑しているのだ。一日の遅れは一年にも相当するほどの問題である。若い看護婦達とたわいないおしゃべりをするのも青春の一こまであろう。旺盛に、健康な時間を享受しているのだ。

しかし悪いところはえぐり出し、打つべき手は打った。この上は経過さえよければ時間は、しげしげと私に近づいた。

雪国の女らしい白い肌の女が多かったが、カヨ子の場合、透き通るように皮の薄い感じで、頬が上気したように美しい血色を見せてぽってりした顔立ちだった。

二人きりになると、よく、

「わたし、東京へ行きたいわ。東京の病院で働きたい。あんた、帰ったら探してね」

などといったものだ。

うるんだ黒い眼で見詰められると、私はうろたえた。彼女は十九だった。

私が予定どおり二週間あまりで退院してしまえば、それっきり終ってしまうだろう。それが気がかりであったらしい。

それ以上のことはなく過ぎて行った。

二人とも若かったのだ。いや、カヨ子はもうりっぱに成熟していた。坊ちゃん育ちの二十一の学生に比べて、職業を持つ十九の女、地方では十九といえば嫁入り盛りの年だった。

けれども、彼女はつつましく、「女が先にというものではない」と固く信じていたのだろう。ものいいたげな目つきや、体温を計る時に触れた手が、何気ないというには少し長い瞬間を触れ合っていたりした。

なぜ、あの時手を握らなかったろう……といつも彼女が出て行ってから思ったものだ。

そうしては長い午後を、人が入って来て中断されるまで、彼女の白い服に隠された胸のふくらみや腰の曲線や、黒髪の手ざわりを妄想し続けたのである。

やがて退院……という時の経過は、彼女から遠ざけられる宣告のようにじりじりと迫って来るようだった。

けれど、ある日の診察に、問われて、聴力の鈍さに気づいた。手術の予後のせいだろうと思えば気にならなかったのが、医師にはほかに気がかりがあったらしい。

精密な検査の間じゅう、なかなか退院を口にしない医師に私はようやく不安を覚えて来た。そうした挙句、私はもう聴力を失うかも知れないことを知らされたのだ。

「今の医学の進歩では、将来再び聴覚を回復できるようになるだろう……」

という慰めと共に、ドイツ語を混えて説明された病状。聞えなくなる、耳が聞えなくなるんだ。私は耳をなくして、どうしたらいいんだ。

私は最後の望みを賭けた手術を受けた。

だが、絶望だったのだ。

私が苦しみに明け暮れている、この同じ月日を、友人達は相変らず希望に満ちてせっせと勉強し続け、力一ぱい生き続けて、いるのだ。

私は彼らにとり残され、永久にとり残されるのだ。私には道がふさがれたのだ。

看護婦達は、きめられた時間に体温計や薬を持ってノックするだけになった。

カヨ子までで、そうなったのだ。当番に当っ

たカヨ子が、ようやく私のベッドに近づいた
だが、伏し目になって、一度も話しかけよ
うとせず（無駄なことと知ってだろうが）会
釈して出て行ったのである。
ただ一人、和代だけが違っていた。二十五
になる醜いこの女は、前に変らず私に親切に
してくれた。以前も、決してトランプの仲間
や雑談には加わらず、控えめに無口な女だっ
たが、人が寄らなくなっても決して押しつけ
がましいことはなく、内心私を哀れんでいる
には違いないのに、そんなそぶりも見せなか
った。あわれまれたくない、かたくなな私の
気持をどうして知っているのか。恐らくは母
に近い愛情からだったろう。
むっつりとベッドに腹ばいになっている私
に、彼女は紙と鉛筆を用意して筆談してくれ
た。私は次第に心をほぐされて行った。
彼女が紙に書いて、私は口で答える。
この姿は、知らない人が見れば彼女が唖で
私が健康な男に見えたかも知れなかった。
そう思いついた時、私はふと愉快になった
が、自分の声を自分で聞けない私は、時によ
ると思ったことを伝えていないかも知れない
のだ。和代は、時おり当惑した顔で私を見つ
める。私はのどをととのえてもう一度繰り返
すのだ。
私はこのころになってようやく、人の心の
深みを知ったような気がした。美しいカヨ子
の浅い心に引きかえて、和代のやさしい心根
はどうだろう。
私はいつか、だまって和代の大きな手のぬ
くみを両手で握りしめていた。
やましいことは何一つなかった。だが、日
日に代る看護婦達のそぶりで、私は何かの気
配を知ったのだ。
一日たち、二日たち、和代は姿を現さなか
った。私は気づかわしさと、私達を隔てる者
達への憤りに身悶えた。だれも、めんどうな
筆談をしてまで、私と話そうとはしない。
焦燥の時を重ねるうち、私は、ふと和代を
愛しているのではないかと思われて来た。
さきの、カヨ子に感じていた悩ましさを愛
と呼ぶなら、この感情はまるで違うのだが、
和代の側にいたい、話し合いたい念はカヨ子
の時と比べものにならない烈しい欲求になっ
ていた。
「和代さん」声に出して見たが、答えてほほ
笑む顔のない、自分にさえも聞えない呼びか
けのむなしさ。……
私はついに退院を許された。これ以上よく
はならないのだ。私は和代に会って、ゆっく
り礼をいいたいと思った。
そのくらいのことは、いくら封建的な婦長
でも許すだろう。私は午後の検温に来た娘に
和代への伝言を頼んだ。
その夜、和代はやって来た。爪先立ちで、
憚かるような足どりで忍んで来たのだ。
隔てられたことで二人の間は妙に改まった
ような気がして、私はしかつめらしくいった。
「長い間お世話になりましたね。僕、お礼が
いいたかったんです」
彼女は鉛筆を走らせた。思いがけず、
〝私も、くにへ帰ります。病院をやめること
になりました〟という文言だった。
愕然とする私に、〝あなたのせいではあり
ません〟と書き続けたが、真実とは受け取れ
なかった。
「僕のためなんだな。やっぱり……あなたに
気の毒なことをしちゃったんだなァ」
私達はしばらく黙っていた。和代は身ぶる

いした。開けておいた窓から夜気が流れ込んで来る。雪が白々と光っていた。

「寒い？　しめようか」

私が立ち上ろうとするのを止めて、彼女は書き始めた。

〝いつまでもあなたのおそばに居て、慰めたいと思っていましたが、お別れすると思うと私の生き甲斐はなくなりました〟

「それは僕だって同じだよ。この先どこに幸福があるものか」

〝あなたは、今も雪の中へ歩いて行く夢を見ますか〟

彼女が何を考えているかがわかった〝死〟という文字さえも私の眼から遠ざけた彼女が忌み嫌っていた私の白昼夢を口にしたのだ。

私達は、じっと顔を見合わせた。もう筆談などもどかしかった。私は彼女の眼から読んだものを口に出し、それに彼女はうなずいた。

二人は一つの願望に結びついて、一つのものになりきっているのだった。

彼女は素早く室を出て、また戻って来た。黒い、長いマントをすっぽりと着込んでいたが、この地方では見慣れたマント姿なのに、違って見えるのは、くるぶしまで届くほど長いことだった。くるぶしから先は、彼女はいていなかった。

二人は遺書も残さず、憑かれたように窓へ寄った。楽しいことを果しに行くように心が軽いのを不思議とも思わずに……。

白い足のうらを見せて、彼女は軽々と窓わくから降り立った。深い雪に腰まで埋れた冬の過ぎるまで。

私達は冬眠するのだ。こうして二人きりで人肌の熱さを、私は雪の中で知った。

何も見えない、何も聞えないのに、はじめて私は完全ないきものののような自然ののびやかさを呼吸したのだ。

マントの中に、すっぽり包まれて、二人は少しずつ歩いた。胸まである雪の中だから、思うように動けるはずがない。

私の病棟は西のはずれにあり、一面白くおわれた敷地の果ては森になっていたから、せめてその森かげへたどり着きたかった。

そこにこそ平和な眠りがあるような気がした。二人はころがっては起き、よろめいては助け合いして、互の肌の温みを支えにしながら歩いた。歩くというよりは雪の壁の中をかき分け崩して行くのだ。足は半ば感覚を失い頭はもうろうとして来る。

「もうこの辺でいいだろう」

崩れるように力尽きて倒れかかると、彼女はマントを広げて雪の穴に籠る二人の世界を作った。こうしてすわってしまうと外界から完全にさえぎられた安全な隠れ場所のように思えた。

私達は冬眠するのだ。こうして二人きりで冬の過ぎるまで。

人肌の熱さを、私は雪の中で知った。

何も見えない、何も聞えないのに、はじめて私は完全ないきもののような自然ののびやかさを呼吸したのだ。

「眠ったらおしまいだよ。でもそれでいいんだが、眠っちゃいけないよ」

とりとめもないことを、うわごとのように口走りながら、和代の存在を確かめ続けていた。ここにいる。ここにいる。これ以上何がこの世にあるというのだ！

彼女の体は無限にあたたかく、永遠にその体温を失わないようだった。いつか彼女は私よりはるかに大きく、豊かな手や足で私を包み保護していてくれるのだった。彼女は人間ではないのだな、とかすかに意識しながら、快い深い眠りに陥ちて行った。

読者短評

◎スリルとサスペンスにあふれる裏窓も、号を追ってその内容はいよいよ面白くなり、書店に発売される日を楽しみに待つ一愛読者です。鳴子善四郎覚書では、美しいお蘭の協力を得て、事件ごとにハラハラさせながら解決してゆくあたり、見逃すことのできぬ一篇です。

江戸暗黒秘録に見る昔の様々な拷問、目にあまる罪人への極刑等いまだ陽の目を見ずに埋もれたこれらの古文化財と云った書巻が、まだまだあるのではないでしょうか。そんなものを、どしどし掲載して下さると有難いと思います。私の希望を書いてみますと、前に述べたようなことや、それから最近影をひそめた特異読物、山窩等を特集号として発刊されることをのぞみます。また、地獄の乳房を書かれた飯田先生の再登場をお待ちします。（滋賀県大津市大伴）

◎九月号の「髪地獄」は、年来渇望していた私の心を、大いに満足させてくれました。志摩不二氏は全く得難い作家です。この一篇だけでなく、毎号「女の黒髪」に就ての作品と画をお願いしたいものです。黒髪に耽溺するものは、世の中に案外多いと思われるのに、今迄余りにも書かれていないのが残念です。

栗原伸先生、灘五郎先生等に「黒髪豊かな女の姿態」をどんどん描いて貰って下さいませんか。編集部の皆様、読者の中に私のような者が多勢いる事をお忘れなきようお願いします。

（山形県酒田市　黒柳）

◎愛読者としてはまだ日が浅く九月号からの読者です。どの頁を読んでも大変面白く、本誌を読み始めてからは他誌が味気なくなりました。今後いつまでも愛読してゆくつもりです。さて十一月号では、絵物語り「廃坑は知っていた」が大変良かったと思います。挿絵がまた見事で映画を見ているようです。秋吉氏の作品をどしどし希望します

小説では、ザルドの帝王、烏羽玉侍の二篇が、傑作揃いの中で特に挿絵とピッタリ意気が合ってよかった。挿画では、秋吉巒氏、中島喜美氏、山田彬弘氏等が大好きです。小説が面白くても、挿絵がまずいと面白味が半減するような気がしますので小説にピッタリする画風の挿絵家に描いて貰って下さい。今後ますます面白い読物をお願い致します。（岸和田市　辻井）

◎穴倉菩薩、円城寺達先生の時代ものの緊縛の場が好きです。そのような場面を書かれる人もあるのですが、挿絵が内容と違うようなところがあります。内容そのままを絵にして下さるといいと思うのですが。その他、そんな場面のある、映画名場面集を口絵にのせて下さい。

（熊本市　的野）

◎昨年の六月号の「女隠密・女スパイ特集」号を店頭で初めて見て、それからずーっと続けて愛読している者です。女隠密や女スパイが活躍するような読物が一番好きなのですが、毎号、きっとそう云ったものがあるので楽しみにして居ります。以前からの作品をいろいろ並べて申し上げれば、多くあるのですが長くなりますので、十一月号だけを取り上げてみますと、私の一番好きだったのは「泣き叫ぶ人工衛星」です。こういう作品は毎号特集に関係なく、たとえ一篇ずつでも入れて戴きたいと思います。また「穴倉菩薩」のような連載を歓迎します。残念なことは、もう少しで面白くなりそうなところで次号に続くのでまた一ヵ月裏窓が出るまで待たなければならないのが辛いと思います。（浦和市河井剣児）

◎小生は「りべらる」が出ていた当時からの、岩堀氏のファンだったが、このところ同氏はどうして居られるのか、鳴かず飛ばずの状態で心もとない限りである。いつかの号には病気だとの事が書いてあったが、十一月号を見るとその名前がのっていたので、矢張り書いて居られるのだと安心した次第。しかし、以前の「関白秀次」のときのような意欲的なものが見られないのは、どう云う訳だろうか。絢爛としたあの頃の同氏の作風を知

る者には、現在のあり方は淋しいと思う。捲土重来の意気をもって、新らしい時代の作品を発表して頂きたいと希うのは、小生ひとりではないはずである。次号には是非とも素晴らしい作品を発表して下さい。

（埼玉栗橋　T・H）

◎一筆失礼致します。毎号大変だろうと思いますがどうか頑張って、面白い雑誌にして下さい常々考えていた事ですが、あぶのーまるにミステリイを加味された編集方針の巧みさには頭が下ります。これは、今までのどの雑誌にも見られなかったもので、私は前からそんな味を盛り込んだならきっといいだろうと思っておりましたのです。それが見事に成功していますので、我が意を得たりと思いました。そんな意味で、ミステリイ作品には、もっと異常心理というものをつっこんで主題にして貰えると、他に類を見ない興味のあるものが出来ると思います

トリックや時間をもとにした推理小説はもう過去のものですし、そうなると、あとに残っているものは、人間の心理の動きだけという事になります。これをどこまでえぐり出すかということが、現代の筆を持つ人々の課題だと考えます。人間には意識するかしないかにかかわらず異常心理というものがあるもので、それは、決して机の上で考えるトリックのように作家の頭にキャッチ出来るものではありません。異常心理が本当に判る人にしか書けないというのが本当なのではないでしょうか？

つまらないことを書きならべましたが、私は、結論として、「裏窓」を土台としてこそ、前に述べた異常心理を主題としたミステリイが出来上るのだと思っているのです。言いかえれば本誌に書いている人々にこそ、それが可能なのだと申し上げたい。もうすでにそんな時代が来つつあります。尚一層の御努力と御活躍を祈る次第であります

読者の皆様方も、一緒になって支援しようではありませんか

（世田谷区　裏窓ファン）

◎毎号拝見しています……というと嘘になるので、本当のことを書きますが、はじめは昨年の貴誌に発表された「放浪の記」をふと見つけて、それから、あのようなものばかりを探して読むようになりました。だから、店頭でパラパラと見て、それがなければ買わないことにしております。最近号では、十一月号の「白い炎」九月号「アポロの少年」等がありましたのですぐ買いました。勧めが夜の仕事なので（新宿のキャバレーSのパーテンです）あまり本を読む時間がないのですが、ホモの記事だけは興味を持っています。ぜひ、毎号一篇でも二篇でも私の希望を入れて下さいますと、うれしいと思います。

（新宿区・ボール）

◎はじめて編集部に手紙を書く者ですが、よろしくお願いします。さて、毎号貴誌を愛読していますが、他誌のように読者に関係のない広告を入れないで、すっきりした編集なので読みよいと感心して居ります。最近或る雑誌を見ましたところ、頁が飛びとびで、驚いたことがありましたが、その点貴誌は気が利いているとおもいます。

希望としましては、読物の何パーセントかに、実話を入れたら如何でしょうか？　海外実話や秘境もの、それから新聞ダネになった事件等を取り上げられると、きっと読者も喜ぶと思いますがどうですか。裏窓と云う題号からして、そんなものに向いていると考えますが、御一考下さると幸です。

（福岡・O読者生）

◎私は、時代伝奇小説の、大のファンです。中でも、角田喜久雄先生が一番好きで、発表された作品は全部読んでおります。裏窓も、時代ものには私の好きな作品が掲載されるので、毎号楽しみにしています。前にあった「刺青弁天」のような連載物をまたお願いしたいと思います。

（京都市上京・上元）

◎読者短評欄に投稿される方は住所をハッキリお書き下さい。誌上匿名は御自由です。（係）

読者短評

時代落語

あなぐら宗達

一、めくら鬼

円城寺 ぽっさつ

画・中島喜美

まっ暗な穴倉の中に、不気味にひびく宗達の声が、自由の利かない軀のまま、逃げまどうお美津の耳に、地獄とやらの鬼の声とも聞えた。

「うふふふふ。逃げようたって、逃げられる訳がねえんだ……どこに出口もねえ穴倉だぜえ……ここを出るにゃあ、梯子を登らなきゃあならねえ。両手をゆわえられたまンまで、梯子が登れますかねえ……えへへ、へへへ」

宗達は、そうへらず口をたたきながら、じりじりと、お美津の居ると思われる暗闇の中へ手をさしのべてくる。

「ふふふ。とんだ暗闇だぜ。これが明かるかったら、とてつもねえ眼の保養ができるって

え訳だがなァ、へッへッ」

「……」

宗達の手さぐりで近づいてくる気配に、お美津は必死にあとずさって、冷たい穴倉の土壁に、ピッタリと裸の背を押しつけているのだった。

懸命にこらえている息づかいが、それでも宗達には判るらしく、適確に、前にさしのべた触手ような手が、お美津の軀に迫ってくる気配がするのだ。

お美津、息を殺したまま、宗達から遠ざかろうとするはずみに、暗闇の悲しさ、乱雑に積み重ねてある空樽につまずいてしまった。

ガタリ。

樽が横倒しに転がる。

宗達め、暗い中で、ニヤリと笑った。

「へへ、へ。そこに居たのか、へへ」

どこにも逃げられないと判っているから、宗達は、捕えた鼠を弄る猫のような、意地の悪い遊びをしているのだ。

今まで、片手に後生大事につかんでいたのは、つい先刻までお美津の身を包んでいた布切れである。若い女の、からだのぬくみが、まだ、その腰布にぬくぬくと残っているようで、宗達は心の中でぞくぞくしている。

お美津の軀にはもう何一まとうものが残っていないと思うと、宗達にとっては、この暗闇が憎らしかったかも知れない。

「ふふふふ。……」

いきなり、暗い空間に手を熊手のようにかき出した宗達の指先に、空樽をまたいで逃れようとして身をかがめたお美津の後手の縄尻が引っかかった。

そいつを、間髪を入れず、ぐいとつかんでしまった宗達。

「あッ！」

「ふふ。そうら、縄尻をつかんでしまったぜ！　どうでえ。さあ……」

「……あれッ……ああ！」

ぐいぐいと引かれる後手の縄尻。

冷いやりと肌を撫でる穴倉の空気さえも身に感じないほど、お美津、必死の思いで、引かれまいとあがらった。

宗達の奴は、縄尻を、しっかり自分の手首に巻きつけておいて、空いている手と足とを使って、さっき消えた蠟燭と火打ち石を探している。

脇坂源吾が死ぬほど惚れぬいた女であれば今さら、宗達がどうする事もできる訳でもな

穴倉に迫るお美津の危機！　色欲にからむ二匹の鬼！

いはずだったが……こうして、穴倉の中に閉じ込めてこうなった場合、宗達ほどの脂切った男が、ただで済ませようなどと考えるはずもない。

このまま、あの化物に渡してしまうには惜しい女だ……。いずれは金づるになる筋道なのだが、そのお膳立てはともかく、ちょっと料理のつまみ喰いも悪かあねえ……。

宗達の暗闇をまさぐる足先が、転がっていた火打ち道具を探し当てる。

左手に巻きつけたお美津の縛り縄の縄尻が逃れようとして強い力で引かれているのだったが、宗達はその縄を引く力にさえ、お美津のあの豊満な、弾力に富んだ軀が感じられてにやりと口元がだらしなく歪んでくるのだった。

カチッ。カチッ。

縄尻を巻きつけたままの左手に、火打ち石を持って、その上に手さぐりでほくちをのせそれに火打ち鉄を打ち当てている宗達の入道のような赤ら顔が、火花が散る毎に暗闇の中に浮き出した。

付け木にトロトロと燃えうつる青い火。

硫黄の匂いが鼻をついて、ぼーっとあたりが明かるくなる……。」

宗達。その灯りを暗闇の中にかざして、穴倉を、こう、さしのぞいた。

空樽の蔭に身をかくしているお美津のところまで、その灯りはとどきそうもない。

えへへ。今にみろ、いくら厭と云ったって百目蠟燭を十本もつけて、昼のようにあかるくした中で、ゆっくりたのしんでやるンだ。

宗達は、ゴクリ、と唾を呑みこむと、縄尻をぐいッと引いて、よだれの垂れそうな声で云った。

「……お美津さん、どこにいるんだッ。お美津さん、どこにいるんだ。てへへ、出て来なよう！」

二、どぶ板

「……お美津ッ。どこに居るんだッ。お美津さん、どこにいるんだ。てへへ、出て来なよう！」

空家のようにガランとした家の中を、新吉は探し廻って、お美津を呼んでいた。

探しまわると云っても、たかの知れた二間っきりのわび住いだ。人気のないのは、新吉が戻った時から判っている。

たとえ、水のようなかゆをすする貧しさの中でも、お美津の居る我が家は、時にとってほのかな明るさがあった。それが、お美津の消えた部屋の中は、寒々とした寂しさだけが残っているのだ。

新吉は、気違いのようになっている。

出来もしない借金の目当てを求めて、日中をかけ廻り、思いの外の遠くまで足を伸したために、この札の辻の貧乏長屋に戻って来たのは、日暮れもとっくに過ぎた、五ッ刻だった。

可愛いお美津を、あんな鬼のような宗達のところに預けられるものか、もし、そんなことになれば、お美津がどんな目に逢うか、云わずとも判り切ったことだ……そう新吉は吾とわが身に云い聞かせていた。

お美津を、宗達にとられてしまうようならいっそのこと、五十両の金を得るために盗みでも働いて……そうまで思いつめて、お天とう様の照らしている江戸の街を、まっ暗な気持でほっつき歩いて来たのだった。

背負っている担ぎ呉服は、全部はたき売りにしても二両とはまとまらない。どうかすると、足元を見られて、一両でさえもむずかしいかも知れなかった。

たった一つ頼りにしていた四つ谷の大木戸先に住む新吉の叔母の家も髪結いをしているその叔母が、しばらく訪ねない間に患ってい

て、かえって愚痴をこぼされるようなありさまでは、五十両と云う大金の無心など、考えられようもなかった。

がっかりして、疲れ果てた足を引きずって帰ってくると、長屋の戸がピッタリと閉っていて、いつも貧しいながらも明るい笑顔で迎えてくれるお美津の姿が見えないのだった。

買い物に行く金もないはずだったし、近所づきあいもない生活には、訪ねて行く相手さえ居る訳がない。

新吉は、ふと、不安を感じた。

「もしや……」

そう思うと、もう、居ても立ってもいられなかった。

戸閉りもせず、じめじめしたどぶ板をふみ越えて、長屋の壊れた木戸を出て行こうとする新吉の血相は、いつもの気の弱い影が消えてしていた。

いきなり、新吉は婆アに背を向けて駈け出

「えッ！　ほ、坊主頭の男！　そ、それじゃあ宗達！」

失せて、もう、やけっぱちな燃え上るようなものがあった。

ふみつけにされ、痛みつけられた者のやり場のない悲しみと憤りが、新吉をニヒルの底に追いやったのかも知れなかった。

「ああ、新さんじゃないかねえ……」

出しぬけに、そう、呼びとめたのは、長屋のとっつきに虫のように住んでいるのり屋の婆アだった。

「……お、お美津をし、知りませんか！」

新吉は、いきなり、そう訊ねた。長屋に出入りする者は、どうしても、この婆アさんの家の前を通らなければならない。もし、誰かがお美津をつれていったとすれば、この婆アさんが知っていないだろうか。気のうわずっている新吉には、人に聞いてみることすら、今まで忘れ果てていたのだった。

「ああ、お美津さんなら、日暮れ前に出て行きなすったよ」

「日暮れ前に！」

「そうさなア。町駕籠が迎えに来ていたようだったでなア。坊主頭の男が、何やら云ってのせて行ったようだったよ」

「えッ！　ほ、坊主頭の男！　そ、それじゃあ宗達！」

いきなり、新吉は婆アに背を向けて駈け出していた。

きょとんとして、その後姿を見送ったのりや屋の婆アは呆れたように腰を伸ばしてひとりごと。

「まあまあ、なンてえ人だろうねえ。とし寄りにものを訊ねておいて、礼も云わずに飛んでいっちまったよ。若いうちにゃあ痴話喧嘩もいいが、近所めいわくな話さね。だいいち履物をすっとばして、はだしで飛んでいってしまったよ、あの人は……」

どぶ板の上に裏むきに転がっている新吉のちびた履物を、気のなさそうに横目で見ながら、やれやれ……と云うように軒先に出してあるのりの樽を腰をかがめて、抱え上げ、家の中にかたづけるのだった。

三、一筋道

腰をかがめて、空樽を抱え上げ、穴倉の片隅にポーンとほうり投げた宗達。

蠟燭の灯りの中に、たった一つお美津を守

【前号のあらすじ】越後屋小町と云われたお美津は旗本の三男坊で不具の脇坂源吾に思いを寄せられるが、それを嫌って手代の新吉と駈け落ちをする。坊主上りの金貸し宗達が新吉に金を貸し、そのかわりにお美津を手に入れて脇坂源吾に売りつけ、甘い汁を吸おうとするが新吉が云うことを聞かないので、お美津をだまして自分の家の穴倉に連れ込み、源吾の云う通りになれと責めつける……

っていた櫓の影がなくなると、あとはもう一
糸まとわぬ穴倉菩薩が身をかくすところもな
かった。
ゆらゆらとゆらめく焔は、意地悪く、穴倉
の要所に、ところどころ立てられて、ほの白
い羞恥の裸形が、そのそれぞれ明滅する灯り
の中に照し出され、柔らかなハーフトーンを
浮び上がらせていた。
「へへ、へへッ。こうされるのも、お前さん
の強情からだぜ、始めっからうンと云っとき
ゃあ、こんな手荒い事はしなかったんだがな
あ。へへ」
宗達は、舌なめずりをしている。
たとえ、首をたてに振ったとしても、手荒
いことをしかねない奴だ。
色と欲との二筋道。
これから、この美しいえものを、心の中で計
すれば、一番高く売れるかを、ちょっとつまン
しながら、買手に渡す前に、ちょっとつまン
でみたい気になっている宗達だった。
とろけるばかりに、菩薩の後姿を拝んでい
る宗達、顔の紐が、思わずほどけて来るのを
どうしようもなかった。
「うーン。こりゃあ……。あの化物が、よだ
れを流して手に入れたがるのも無理ではない
て。ちっとや、そっとのお宝で、手渡せる玉
じゃねえや……」
そんなことを、ぬけぬけと口に出して云い
ながら、手にした細い棒っきれの先で、きめ
のこまかいお美津のぬめ肌の、背中のあたり
を突っつくのだ。
「ふふふ。お美津菩薩、こっちを向きなよ。
ふふふふ」
「……」
後れ毛を、きっと噛みしめて、軀一杯で必
死の怒りを現わしているお美津。ああ、神も
仏もないものか、じかに身に触れる穴倉の空
気のたまらなさ。宗達の眼のいやらしさ。
しかし、
美しいものは、どこまでも美しかった。
お美津が、どんなに悲しんでも、どんなに
口惜しがっても、そして、どんなに防禦の姿
勢をとっても、その一つ一つが宗達の心をか
き乱すのだ。
啜り泣く声は、天来の妙音と聞えたかも知
れないし、頬をつたわる真珠の涙は、宗達の
気持のどこかを擽ったかも知れなかった。
無言で、つと、立ち上った宗達が、はっと
身を固くするお美津に、今にも手をかけよう
としたとき、
「お前さん！」
そう云うお蓮の声が、穴倉の上げ板のとこ
ろで聞えて、ガタガタと穴倉の入口が開き、
お蓮のうさん臭そうな顔が上からのぞいた。
宗達、ちえっと小さな舌打ちをすると、
「な、なンでえなンでえ。来るなと云ったら
来るンじゃねえ。何の用事があってきやがっ
たんだ！」
燃え上っていた火に、いきなり水をぶっか
けられたかたちで、興をそがれた憤りが、や
みくもに、お蓮の白い顔にはね返った。
「そ、そうじゃないんだよう！」
お蓮は、そう云いながらも、ちらりと眼の
隅に、お美津の真っ裸をつかまえていたが、
そんな気持はおくびにも出さずに、重ねて云
った。
「お前さん、脇坂様が、お見えになったんだ
よ。すぐに、上って来ておくれ」
「え、えッ！　あ、あの化物、いやなに、源
吾様がかッ」
「そうなんだよう。宗達に逢わせろ、お美津
は、どこに居ると……」
「よしッ」
お蓮にみなまで云わせず、宗達は梯子に手
をかけた。

「よし、すぐに上る。おめえは、ここを覗くんじゃあねえぞ！」

穴倉から上った宗達は、梯子を穴の外へ引き上げておいて、あたふたと、源吾の待っている座敷の方に急いだ。

宗達の脳裡には、今にもどうにかなりそうだったお美津の美しい裸形がちらちらと浮んで、無理に抑えつけられた情火が、めらめらとくすぶり続け、今頃の時刻に、のこのことやって来た脇坂源吾の化物面が、いつもより数倍も憎らしくなってくるのだった。

どう、さばいてやろうか……そう思う宗達の心づもりをあざけるように、あの化物のような金壷まなこが、座敷の床柱を背にいらいらと待ちくたびれていた。

四、かけひき風呂敷

いらいらしながら、宗達の来るのを待っていた脇坂源吾は、お蓮の差し出す酒肴には眼もくれず、宗達の顔を見ると、いきなりたずねた。

「宗達。お美津はどこに居るのだ。もう待ち切れなくなってやって来たぞ」

「へえ……まあまあ殿様、そうおっしゃる前に、まず一口、口を濡らしてから……」

「酒はいらぬ。お美津がほしいのじゃ」

「へッ、これはまた、お急ぎのことで、えへへへへへ」

「宗達。お美津は、あの長屋にはおらぬようだな」

そう云われて宗達の奴、ぎょっとした。やっぱり、こっちが一足早かったンだぜ、こっちに玉を抜き取ったからよかったものの、もう一足遅れたら、元も子もなくなるところだったのだ。

「へえ、えへへへへへ。お美津さんは、手前どもの方に、ちゃんとお預りしてございますの

で、へへへへ」

「うむ、では約束じゃ。このわしに渡して貰いたい。手付けの金はやってあるはずだ」

「まあ、まあまあ、そうお急ぎにならずに、落付いて下さいまし。ちゃんと、手前どもの方で、用意を致しまして、殿様のお手許にお届け致すようにしやすから、実のところ、なかなかウンと云わないのを、新吉の方は金でカタをつけ、お美津さんの方は、いま、いろいろとくどいて居りますところなンで」

「で、どうじゃ……」

「へ、へへへへ。今夜にでも、仮祝言と云うところまでこぎつけられそうで……」

こう云った宗達。あのお美津の姿を一目だけ源吾に見せてやれば、よだれを流して、この化物はありったけの金を吐き出すだろうとふと思いついた。

「源吾さま。で、あと、頂戴できますものの方は……」

「うむ、金か。今夜は持ち合わせがないが、お美津さえ一目見れば、即刻、屋敷に帰って用意させるが、それでよかろう」

「へへ、お美津菩薩にお逢いになりますか」

「どこに居るのじゃ。お美津は？」

その源吾の問いには答えず、お蓮を呼んだ。

宗達は、耳うちをして、お蓮に大きな唐草模様の一反風呂敷を持ってこさせ、それを小脇にかかえるように持って、さあ、と云うように源吾化物を、お美津の閉じこめられている穴倉に案内するのだった。

「こんなところに、お美津が居るのか」

「へえ、ここなら、どんな声を出されても大丈夫でございますからね。えへへ。おいお蓮てめえは、あっちに行ってるがいい。俺は殿様と大切な話があるンだからな」

ついて来たお蓮を追いやっておいて、宗達は穴倉の上げ板をぐいと引き上げた。

「さあ、殿様」

そう云われて源吾が穴倉の中を覗き見て、あッ、と息を呑む。

いつかの夜、破れ格子の障子穴から覗き見をして、どきどきするような思いになった、あのお美津の素っ裸が、その穴倉の底に、蠟燭の燃え尽きそうな灯りの中で、人魚のように悶えているではないか！

「……お！」

化物源吾、もうたまらなかった。

少々頭の弱い、この旗本の三男坊、根が駄駄っ子育ちだけに、好きなものを見せられると何をおいても、それが即座にほしくなるたちだ。まして、二年の間、夢に思いうつつに追った、越後屋小町のお美津が眼の前に、それも、事もあろうに一糸まとわぬ素っぱだかでいるのだ。

無言のまま、するすると、それこそ、猿（ましら）のように、宗達が降した梯子を伝って穴倉の中に降りてゆく源吾だ。

「……お、お美津。ひ、ひひひひ」

化物奴、ヒョコリヒョコリとお美津に近うくといきなり、変な声を出して、肌を撫でようとする。

自分の惚れ抜いた女を、このような眼に逢わせた宗達を叱る前に、もう、その女体のかもし出すえも云われぬ雰囲気に気もそぞろになっているのかも知れない。

「殿様。そ、そりゃあいけません！」

いきなり、源吾の手を止めたのは、いつの間に降りて来たのか宗達入道だ。

「そ、宗達。か、仮祝言じゃ！」

「えへへッ。それは、よろしうございますがね戴かせて下さいますものを、はっきりと戴きましてから、料理は差し上げると申しましたはずで、へへへへ」

「あ、あとで、よかろう！」

「そ、そいつあ、いけやせん。あとで、宗達

そんな約束はしなかった、などとおっしゃられますと、こちらと致しましては、元も子もなくなりますンで、へえ」

そう云いながら、宗達は、慣れた手さばきで盆恥に身をもむお美津の唇に、豆しぼりの手拭で猿ぐつわをかませ、いま持って来た唐草模様の大風呂敷をその場に拡げると、その中にお美津を坐らせ、四隅をくるくると包んでしまった。

「宗達。ど、どうするのだ！」

「へへへ、こうして包みましたまま、お屋敷まで駕籠で運ばせます。殿様は、先にお屋敷にお帰り遊ばして、私めに下さるものの用意を……」

「そ、そうはいかぬぞ宗達。この拙者が屋敷に帰っている間に、お美津に何をしようと云うのだ。一刻たりとも眼が離せると思うか！そんな事ではないかと、こうして今夜はやって来たのだ。一緒に屋敷に連れて帰るぞ！」

源吾は、そう脅かすように宗達に云ってはいるが、たった今見たお美津の姿が瞼の中に焼きついて、気もそぞろだ。

痛々しく後手に縛り上げられた、お美津の裸身が、このうごめく唐草模様の一反風呂敷の中に入っているかと思うと、辛抱のできない血が身体中をかけ巡っていた。

五、二人酒

辛抱のできないほど、身体中に熱い血がかけめぐるのを抑えながら、源吾は旨くもない盃をなめている。

その前で、宗達も、苦虫を噛みつぶしたような顔をして肴をつついているのだ。

どちらもが、相手を、どうしても、あの唐草やろうか、と思っているのであった。

宗達の家のほんの近所にある料理屋の二階だ。

そこで、二人は酒を呑んでいる。

お美津を、今すぐ連れて帰ると云う源吾に宗達はあくまで喰い下って、約束の金が欲しいと云い張ってゆずらなかった。

宗達の本当の気持は、そう云って源吾を追い帰したあとで、ゆっくりとお美津をつまみ喰いして、たんのうしてやろうと思っているのである。金は、あとでいくらでもゆする手はあった。しかし、いま、お美津を連れ去られたら、せっかくの天女菩薩を、あたら鳶にさらわれてしまうことになるのだ。それではの中に入っているかと思うと、辛抱のできない宗達の脂切った情念がおさまらなかった。

しかし、一方、源吾にしてみれば、札の辻の貧乏長屋を、そっとまた覗きに行ってみれば、お美津は宗達らしい男に連れ去られたと云う子守女の話に、さてはと思ってかけつけて見ると、やっぱり案の定、あのありさまなのだ。

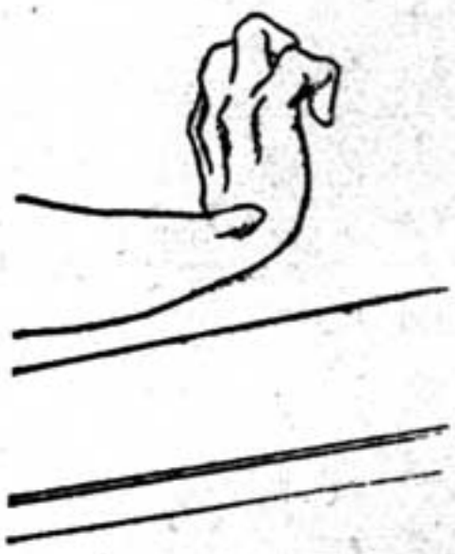
もし、このまま、屋敷に引き返したら、宗達奴、裸のお美津に何をするか知れたものではない……。

宗達になだめ、すかされて、しぶしぶ穴倉を出た源吾だったが、どうしても、あの唐草風呂敷を、自分の手に入れたい気持で一杯だった。いっそのこと、宗達を斬り捨てて、と思わぬでもなかったが、それよりも、金で済むことなら、と思い直して、使いを出して屋敷から金を持って来させることを考えついたのだ。

そうすれば、宗達に勝手な真似をさせないように監視できる訳だった。

宗達の本当の気持は、そう云って源吾を追い帰したあとで、ゆっくりとお美津をつまみ喰いして、たんのうしてやろうと思っているのである。金は、あとでいくらでもゆする手はあった。しかし、いま、お美津を連れ去られたら、せっかくの天女菩薩を、あたら鳶にさらわれてしまうことになるのだ。それではの中に入っているかと思うと、辛抱のできない宗達の脂切った情念がおさまらなかった。

っているのである。
宗達も、いらいらしていたのだが
料理屋の若い衆が使いに行っているのだが
それが帰って来たら、お美津は連れてゆかれる……。
ちえッ……もう少しのところだったのに、
惜しい魚を、こんなことでみすみす、こいつの化物面にさらわれてしまうのか！
「……殿様。おそうございますねえ。いっそ今夜は、このまま、お屋敷にお帰りになりましたら、へへへへへ」
宗達は、厭な野郎の顔を見ながら、おついしよう笑いをする辛さを、しみじみと感じている。
「な、なにを馬鹿な。このまま指を加えて帰れるものか！」
「いえ、また明日と云う日がございますが……、明日はきっと私の方から駕籠にのせて出向きますが、如何なもので……」
「申すな！　くどいぞ、宗達」
こりゃあ、いよいよ菩薩の味が見られねえや！　宗達はがっかりして、やけに酒をあおった。
そのとき、トントンと誰かが二階へ上がって来る足音がした。



「うむ。戻って来たな！」
源吾の顔に、ニヤニヤと笑いが浮んだ。

六、出刃包丁

トン、トントン。
表戸を叩く音に、お蓮は立ち上った。
「戻って来たのかしら？」
ひとりごとを云いながら、表戸の心張棒に手をかける。
お蓮の気持は、おだやかではなかった。
宗達が、昼間連れ込んだ新吉の女房を、あの穴倉の中に投げ込んで、真っ裸にしたのを見てからと云うものは、どうにもならない嫉妬を感じているのだ。
脇坂源吾が折よく訪ねて来なかったら、今頃は、どんな絵巻がくり拡げられていたか、知れたものではなかったとこころだ。
それが、どう云う話合いになったのか、二人とも出かけて行って、まだ、戻ってこないのである。
「旦那が帰って来たら、何と云ってやろうかしら？」
先刻から、そう思って、いらいらしているのであった。
穴倉も、そっと覗きに行ったのだが、どうやらお美津は、あの唐草風呂敷に包まれたまま、じっとしているらしい。
そんなとき、表戸を叩く音がしたのだ。
金貸しの妾なら、もう少し要心が必要だったかも知れない。いや、いつものお蓮なら、こんな夜更けに誰とも判らぬ相手に、いきなり心張り棒を外すようなヘマもしなかったであろうが、今夜だけは、お美津のことでモヤモヤしていた矢先きだっただけに、宗達が帰って来たものとばかり早合点して、戸を開けてしまったのだ。
「おッし、新吉ッ！」

驚くお蓮の声の下から、飛び込んで来た新吉は、いきなりお蓮をその場に突きとばしてずるずると部屋の中に引きずり込んだ。

「し、新さん、お、お前、どうして今頃…」

「や、やかましいッ。お、お美津を、ど、どこにかくしたンだ！」

「あ、あたしや、知らないよッ！　知るもんかね！」

お蓮は引きずり仆されながら、必死になって叫んだ。

いま、こんな若僧に、あの穴倉の中のお美津の事をしゃべって、お美津を連れて行かれたら、宗達にどんな目に逢うか、それが怖ろしいのだ。

いつだったかの大晦日前に、金の抵当に宗達が連れて来た職人の娘を、ちょっとの油断から逃がしてしまったとき、宗達から受けたあの耐え難い責め折檻……。場所もやっぱりあの穴倉の中だった。

それを思うと、お蓮は、こんな若僧に負けていられなかった。

「宗、宗達の奴が、お、お美津を連れて来たンだ！　お美津は、どこに居る！」

新吉は、細腕をふりまわして、お蓮をなぐりつけ、引っかき廻した。

「し、知るもンか！」

お蓮は転げ廻りながら、声をふりしぼって叫びつづけた。

「ち、ちくしょう。どうしても、云わないなら、こ、ころしてやる！」

やにわに新吉は懐に手を入れると、手拭いにぐるぐる巻きにした出刃庖丁を取り出したそしてお蓮を押し倒し、馬乗りになったまま、右手の出刃庖丁を、クルクルとふり廻すと、巻きつけてあった手拭いがはらはらと解けて、ギラリと、あの魂を凍らせるような青白い光りが、お蓮の恐怖に見開かれた眼を射た。

「あッ！」

「さあ、どうだ。こ、これでも云わないか」

「あ、あッ！　ま、まって！」

「お美津が居るところを、云うか！」

新吉の眼は血走っている。これは、本当に

七、結び目

突く気なのだと、お蓮はとっさに感じた。
「あ、あなぐら！　お美津さんは、穴倉！」
「なにッ。穴倉だと！」
「……」
「一緒に、来るンだ！　さあッ！」

「一緒に行こう、なあ、宗達」
「……」
源吾は、気のない返事をしている宗達に、使いが持って出た約束の金を渡すと、化物面をほころばせて、ニタリと笑った。
これで、もう、お美津は自分のものだ。そう思う満足感が、急に今まで飲んだ酒を全身に廻らせ始めているのだった。
お美津を乗せて帰る町駕籠を呼びにやらせておいて、宗達をうながす脇坂源吾だ。
宗達は、やりきれない思いでいる。
「ふふふふ。宗達、お美津を屋敷に連れて戻って、ふふふ、思うさま、可愛がってやるぞそのあとで、越後屋のおいぼれにかけ合うのだ。そうして、この拙者は、越後屋の入り婿に居坐る。ふふふふ」
源吾の、先刻までとはうって変った気持の変化は、あの風呂敷包の中味が、宗達の手に触れずに自分の手に入る喜びが、そうさせるのだと判っているから、宗達は気が滅入るばかりだった。本来ならば、金がまた手に入ったのだから有頂天になってお世辞を並べるはずの宗達だったが、お美津の悩乱の姿をすっかり見てからは、それればかりが気になって仕方がないのだった。
やがて、駕籠屋を連れて、遠くもない宗達の家へ戻って来た二人は、家の中にお蓮のいないのに気がついた。
「どうしたのだ宗達、不要心ではないか」
「いえ、へえ。こんな夜更けに、出かけて行く訳もねえんですがねえ……おい、お蓮ッ、どこへ行きやがったンだろう？」
「……穴倉は大丈夫かな……」
「へえ、あすこは、大丈夫でございやす」
駕籠屋の提灯を借りると、宗達が先に立って裏の物置小屋の中へ入って行き、穴倉の入口の上げ板を、ギイッーと持ち上げた。
「ふふふふ。宗達、お美津はあのままで待っていたらしいな」
「……へえ」
提灯のあかりに照し出された穴倉の底に、唐草模様の大風呂敷が、裸の女のぬくみを包み込んだまま、置かれている。
「うふふふ。動いておる、お美津が動いてるわい……」
そう云う源吾化物の酒に酔った厚い唇の端から、ツツーツと、ねばっこいよだれが糸を引いたように流れ出たのを、宗達は見た。
「ちえッ」
「何を云っているのだ。宗達、お美津をかつぎ上げろ、早くせい！」
「へえ……」
梯子を伝って降りた宗達が、唐草風呂敷で包まれたままのお美津を抱き上げ、肩にかつぐと、一汗かきながら、穴倉の外へ運び上げる。
布片一枚をへだてて、なまあたたかいお美津の素肌が、宗達の肩や手に感じられて、おまけに菩薩が縄目の痛さにくねくねと悶える度に、たまらない素肌の弾力が、手に触れるのである。もう少しのところで、自由にできた女だ、宗達は涙の出るほど惜しい思いがした。
「駕籠には、このまま乗せた方がいいぞ。夜も更けていることだ。着物を着せたり、縛ったりでは刻がうつる、このままがいい……」
源吾はそう云って、しきりに駕籠に早くの

せたがるのだ。それはそうかも知れない。こいつも、先刻見たお美津の姿にうつつを抜かした男だった。このまま連れて帰って、何をどうしようとしているかは、宗達には判りすぎるほど判っている。

「殿様、座敷に運び上げまして、風呂敷の結び目を……」

「解くと云うのか……」

「いえ。しっかりと結び直さねえことには」

「うむ、早くしろ」

畜生、勝手にしやがれッ、そう宗達は思った。せめて、もう一度だけ、お美津菩薩のお姿を、すっかり拝んでからでないと、今夜は気が昂ぶって寝られるもんじゃねえ。とてもこのことにこの化物が、ものの小半刻も、どこかに消えてくれたらなァ……。

座敷にそっと風呂敷包を降ろして、宗達はふるえる手で唐草模様の結び目をといた。

「うへへへへ」

源吾の異様な笑い声。

はらり、と拡がる唐草模様の中から、まっ白い肌が転がり出るように現れた。

「む、むむッ！」

猿ぐつわの下から、呻き声が洩れる。

「あッ！　ち、ちがうッ！」

「おおッ！」

源吾と宗達は一度に驚きの声をあげた。

お美津ではない！

風呂敷の中から転がり出た裸女は、悩乱の生き菩薩ではなくて、宗達の妾のお蓮だったのだ。

「そ、宗達ッ！」

「と、殿さまッ！」

「これはッ、これは何としたことだッ」

「し、知らねえ。しりません！　知らねえことだッ」

「云うな。脇坂源吾を、たばかったなッ！」

「しッ、知らねえ何が何だかわからねえ！」

宗達は、そう叫びながらも身をかばうようにあとずさった。源吾の酔った顔に、不気味な殺気が流れたからである。

「宗達ッ。お美津をどこへやった！」

「ち、ちがうッ。ま、まってくれ、わか、わからねえンだッ！」

意味の判らぬことを叫びながら宗達は、源吾の殺気に押されて、身を退いた。

二人が、風のたよりに、脇坂源吾を殺したと聞いたのは、それから半年もたたぬ間だった。（完）

×

いきなり源吾が一刀をあびせかける。

風を切って走った刀が、宗達の肩をザクリと割った！　と思われたが、その一瞬、あまりにも気が立っていたためか、足元に転がっているお蓮に気がつかず、足の悪い源吾がつまずいて刀をふり下すまでに倒れてしまったのだ。

「ぎえッ！」

斬られたと思った宗達。もうやぶれかぶれで、盲滅法に倒れた源吾の手元にとび込むと抜身を源吾の手からもぎとってしまった。よろよろと立ち上った源吾化物が、素手で宗達につかみかかろうとして、そのまま、宗達の突き出した抜身のきっ尖を腹に受けたのはこのときだった。

「うわあァ！」

まともに、背に通るほどに腹を刺されて、源吾は宗達のからだに倒れかかった。

その頃。新吉とお美津は、もう二度と江戸に戻らぬつもりで夜の街を走っていた。

二人が、風のたよりに、脇坂源吾を殺した罪で金貸し宗達が斬首されたと聞いたのは、それから半年もたたぬ間だった。（完）

×

化身歓喜女仏

盲目の美少年の指先にふれた女仏はあたたかく血が通っていた！

梅田楠雄

柴谷宰二郎・画

木彫の恋人

私がまだ十八の時でした。そのころ私は、群馬県の赤城山麓、渡良瀬川に添った大間々という、人口八千ばかりの小さな田舎町でした。

ところで、この私ですが——今でこそ、こんな汚ない親爺ですが、そのころはなかなかどうして、女にはかなりモテた方でして、美貌の少年按摩というわけで、町中の後家さんやら娘達から大騒ぎされ、あっちこっちから引っ張りダコだったのです。

つまり、これからお話ししようとする怪談も〝女に惚れられた話なんですがその相手の女というのが、今もって仏様だったのか本物の人間だったのか、判断がつかないといったような奇怪な訳でして、つまり、私自身としては、どう

してもその時の自分の相手が、女仏だったとしか思えないのです。

ちょうど小雨のシトシトと降る秋の夜でした。

町の中ほどにある旅館の女将で、おもよという名の後家の身体を、ヘンなところまで探まされてすっかり興奮しきっていた私は、わが家への途中から道を折れて、町外れの大和が丘……そこは昔、小さな大名のお城のあった跡ですが……その大和が丘へ一人で登りはじめたのです。

これには目的があったのでして、もちろん雨よけのつもりも多少はあったのですが、他に私には、誰にも話せぬ秘密の楽しみ、私一人の快楽が坂の中途に待っていたのです。

私は、いましがた触れてきたばかりの、後家の火のように熱い肌の触感から、三十女のむせ返るような体臭をよみがえらせながら、せっせと足を早めました。

十一の年に柿の木から落ちて、柿の木の根元に立てかけてあったいけす（生簀）のとがった竹骨で両眼をやられ、にわかメクラになった私ですから、それまでにたびたび女の肉体は見て知っております。

さて、ところで……今も申し上げました私の秘密の楽しみですが、それは、この坂道の途中にある一つのほこら（祠）だったのです。

坂を三分の二ほど登りつめたところ——そこがちょうど城跡の石垣の根元の一番端っこになっていて、そこからさらにその石垣添いの急坂が右手に折れる、そのふたまたのとこ ろに一本の年経た大ケヤキが天を衝き、問題のほこらはその太い三抱えもあるような幹を背にして建っていたのです。

もうかなり古く、今にもこわれかけており ました。

私は、胸をはずませながら、その急坂を登りました。

メクラですから暗いのは何ともありませんが、雨も降っていることではあるし、何だか恐ろしいような気もします。

このまま家の方へ引っ返してしまおうかとも思いましたが、女仏様のところへ召されて、あのよろこびにひたるのだ、ということを思うと、もう恐いもおそろしいもありません。

祠に近づくに従って、胸の動悸がドキドキ高鳴ります。私の祠参りはたびたびのことだったのですが、なぜこの私が、そんなに興奮したかといいますと、その祠の中に私の恋人が待っていたからなのでした。

なーんだ、そんなことかア……と片づけないで下さい。恋人といっても、それは人間ではなかったのですから……。

ええ、ですから、これからその、私の恋人のことを説明しておかなくてはなりません。

その祠の中で、私を待っている私の恋人は世にも珍らしい女仏だったのです。

仏像といえば、大抵が男体と相場がきまっているのですが、これは女体です。それも弁財天とでもいうのでしたら、別に奇も珍もないのですが、何と言いましょうか、子供の時分にものの本の絵で見た、昔の官女なのです。もし、私が学者でしたら、その女仏の故事来歴の研究に夢中になったことでしょう。

しかし私は、名もないあわれな一介の少年按摩です。私にとって、その女仏は、ただ私の恋の対象としてだけがその全部だったのです。

女仏は、等身大の木彫りでした。すばらしく豊頬な若い美しい官女で、それが、ヒナ段の台の上に、あられもなく片膝立ててアグラをかいているという変った姿勢でした。

私はもう、今までに何度もその祠に通いつめ、何度となくその女仏の正体に触れていたのでした。

のですから、どこに何があり、どこがどうなっているか、胸の厚さも、胴まわりも、腰のくぐあいも、何から何まで、どこからどこまで知っていたのです。ほんとうに、ふるいつきたいくらいの、熱い血の通っている女体だったのです。いえ、決してホラでも誇張でもありません。まったくの話が、生きた女体そのものでした。

女仏柔肌

ところで、この私が、一体何の目的で雨の降る夜半、人里離れた城跡のこの女仏をこれほど熱心に訪問しようとするのか？　ヘッヘッ……もうたいがいお察しがおつきでしょう。

その夜は土曜日の夜で、今も申し上げたように、私は宿屋の離れ座敷で、さんざん後家の年増ざかりの熟れきった女体を揉んできているんです。私はようやく女が恋しくなりかけている十八才の少年。しかも、今思えば相当ワセな方だったのですからね。

雨は小やみになりました。

ちょうど十月もなかばのことで、昼間なら周囲は燃えるような紅葉が太陽の光りに照りかがやいて、すぐ眼の下を渡良瀬の急流がチカチカとプラチナのように光って流れている

という絶景の場所なのですが、小雨の降る夜半では、あたりは黒一色……。もともと、盲目のことですから黒一色は当り前なのですが……通行人など一人もありません。

人間は自分一人きり。待っていたのは口をきかない女仏さま一人きり——。

私はたまらなくなって正面の開扉を開け、勝手知った祠の中に吸いこまれるようにこみました。

相変らず、ムーンとホコリ臭いと、そう感じて私はヒナ段の座のすぐそばに、ピッタリとかがみ込んだのですが、このとき私は異様な事態の変化に感づいたのです。

いつもはヒンヤリと、快よい冷たさに包まれる場所でした。それが、その夜に限ってムーンと生あたたかいのです。しかも、いつもかぎなれたカビくさいホコリの匂いとは全然違う、そうです、人間の体臭と化粧品の薫りのまじった、あの女性特有の匂いが、プーンと私の鼻をついて来たのです。

——はてな？

私は、思わずギョッとなりました。

——あいびきの男女かな？

私は咄嗟にこう思いました。だが、私はすぐと、

——ふン、そんな馬鹿なことがあってたまるか！

と、激しく打ち消しました。なぜッて、この祠の内部は、ちょっと大きな犬小屋の中ぐらいの広さしかないのですから——。

まん中に等身大の女仏。その前方に四十五センチ（一尺五寸）角位の供物の台。蓮の花の飾り物。それらの物と四周の板囲いとの間には、私一人が身をかがめるようにして、ごそごそと入り込むのが精一杯。とても血気さかりの田舎の青年男女が一組も陣取る余地のないことは、わかり過ぎるほどわかっていたのですから……。

私は、やがてソッと女仏の胸のあたりへ触った瞬間、ギョッとして一時は失神してしまったようでした。

そのうちに、何と奇怪にも、女仏が動き出し、無言で私のそばへ寄り添いました。それはあたたかい女仏の身体でした。

私はもう夢中になりました。この奇怪な現象を疑うことも、怖いと思うことも、どこかへすッ飛んでしまっていたのです。

女仏さまが生きている。玉体に本当の血が通った！　もうこうなると、前後の見さかいも何もあったものではありません。私の心臓

は嬉しさでドキドキと高鳴るばかりです。なぜって、女仏はこの私を罰しようとしているのではなく、人間の姿をかりて、つまり、若い娘の生きた女体となって、この私に恵みを下されようとしていることがわかったのですから、私が魂を天外にとばして夢中になってしまったのも無理ではないでしょう。

「ありがとうございます」

すぐに起き直っていた私は、女仏の方に向いてペコリと頭を下げました。そして、思わず女仏の身体へ抱きつこうとしたのです。すると、女仏は無言のまま私の身体を静かに押し離しました。

——もしや、お叱りでも？

だが、そうではなかったのです。サラサラときぬずれの音がします。帯を解いているのです。どうやら、かすかながら熱っぽい吐息が、ハアハアと吐かれたように感じられました。私はもうすっかりのぼせ上っていました。我を忘れて玉体ににじり寄って行ったのです。

で、それから先、狂気したようなこの私が何をしたか？　それは皆さんの御想像におまかせしましょう。ただ、その女仏の玉体が、ちょうど十七、八才ぐらいの、人間の娘と同じ大きさであったこと。その娘、いや、女仏の肉体には熱い血が通い、心臓が激しく鼓動して私の胸に伝わっていたこと——。

いや実に、何とも不思議奇怪なできごとでしたが、私が決して夢を見ていたのでもなければ、幻想していたのでもないことは、この年になった今でも、ハッキリ記憶しています。

口をきいた女仏

ところで、この私というものは、もうまるで別人のようにしまいましたな。

その晩は、雨宿りをしていてつい遅くなったとか何とか言って親父をごまかしました。

だが、夜が明けて翌日。私はもう憑かれた人間みたいなものでした。昼飯をすますと、いつもの通り、柳町というゴミゴミした一角にある自分の家を出たのですが、足はひとり

でに城跡へ向いています。

その日は、カラッと晴れ上った絶好の秋日和で、城跡の紅葉をめでる老人や子供連れ、それから町の小学生などで、城跡はかなりの大にぎわいでした。

だが、私はもうそんなものには眼もくれません。え？　メクラだから眼のくれようがないじゃないか。ですッて。……ヘッヘッヘ、まぜっ返しちゃいけませんや。

私は坂道を一気に駈け上ると、いえ、本当でした。無我夢中でふたまたの祠のそばまでやって来ました。

さて、私は、その祠の前でさもさも一休みするといった格好をして見せなければなりませんでした。何しろ通行人が多いのですからうかつな真似はできません。

うららかな十月の陽の光りが、木の間を洩れて私の肩や膝にあたっていました。私は、何気ない風を装いながら、通行人の足の途絶える瞬間を、はやる心をおさえてジッと待っていたのです。

ちょうど午後の二時頃でしたろうか、機会が来て、私は祠の中へサッともぐり込み、シッカリと扉を閉めました。

「昨夜はありがとうございました」

玉体の前にうずくまって、ひとまずこうごあいさつをし、私はジッと耳を澄まして女仏のお言葉を待ちました。だが、これはしたり、いつまで待っていてもお言葉がないのです。

——おや？

私の心にまたもや疑問が湧いてきたのです。さては昨夜の女体は女仏のではなく、キツネかタヌキか、あるいは本当の人間の娘であったのかな？

とうとうたまらなくなって、私は女仏の方へ両手をのばしました。なくなっているのではないかと思ったからなのです。ところが、あるのです。あのいつもの木彫りの女仏の玉体が——。ザラザラッとした肌ざわりです。思わずゾーッとしましたね。これが、あの昨夜の女体か……？　血の一滴だって通っている様子はないのです。指先ではじいてみるとコチンと固い音がします。どこからどこまでが全部木彫りなんです。

三月ほど前、自分が偶然の機会から知ってそれ以来、土曜日の晩ごとに会ってきた木彫りの玉体となんの変りもありません。そこで私は考えました。

——そうだ、昼間はただの木仏なんだ。だが、夜になれば……。

こう気がつくと、私は外の気配をうかがってからパッと祠をとび出し、何食わぬ顔で町へ下り、この赤城山麓の小さな町が夜の闇にすっかり包まれるのを待ちました。ピーッ、ピーッ——。小さな竹笛を吹きならし、私は町々を流しながら、早く夜が来てくれるようにと心で祈りました。

——明日の夜また会おうぞよ。

昨夜別れぎわに、女仏がハッキリと私の耳に囁いたお言葉が、私の心を絶えず揺り立てます。

そして、待ちに待った夜が訪れて来ると、その夜もまた、私は人間と化した女仏との、激しい燃えるような一夜の観喜にひたることができたのです。私の前後を忘れた陶酔は、前夜よりも、もっともっと激しく深いものでした。

それから——それからは毎夜のように、私は人体に化身した女仏との甘美な恋の悦楽に陶酔したのでした。

もうこうなると、双方とも夫婦気取りです。口のきき方などもも双方が次第に粗末となりました。まるで少年按摩と町の淫奔娘との密会私は考えました。

です。だが、心の中では、私はあくまでも自分の相手を、女仏の化身と信じて疑わなかったのでした。昼間の木彫りが、夜になると娘の姿にかえるのだ、仏様というものは、不思議な力があるのだと固く信じていたのです。

なにしろ、小学校も四年きりで家へ引っ込んでしまい、それ以来、この大間々の町以外へは一歩も出ず、しかも、来る日も来る日も、真暗な世界で生きてきた人間なんですからね、それ以上の判断はつかなかった訳です。

ところが、そんな楽しい夜が、約四カ月も続いたでしょうか、この山間の小さな平和な町に、とんでもない事件が持ち上ってしまったのです。

処女姙娠す

この大間々の町を中心に、七里四方一番といわれる大きな酒問屋……いえ、造り酒屋です……その山崎屋の一人娘のお加代という美しい評判娘……いえ、こんなところに出てくるのはきまって評判の美人だろう……なんて半畳を入れちゃいけません。ほんとうに素晴らしい美人で、今ならさしずめ、ミスコンテストに群馬県代表で出て、優勝うたがいなしという程の娘だったんでしょうな。

その処女が、病いの床に臥したのですが、なんと出入りの医者が正直に山崎屋の大旦那に報告したところによると、娘は妊娠すでに三カ月。とんだ処女もあったもので、ビックリ仰天、カンカンに怒った大旦那が、ひそかに娘を責めただすと、

「柳町に住む、今評判の若衆按摩と添わせてくれなければ、首をくくって死んでしまう」というたいへんな返事。

とんでもないことだ、といって叱りつけても、娘はただ泣くばかりで、本当に今にも自殺しかねまじき有様。

こうなるともう手がつけられません。そこで勢い、今度は憎しみが少年按摩の方へ鉾先を向けられました。

烈火のように怒った大旦那が、少年按摩の

親父を呼びつけたことは言うまでもありません。

「やい、手前んとこの餓鬼はとんでもねえ太い野郎だぞ！」

「なんですい、だしぬけに？　一体伜がどうしたというんです？」

「どうしたもこうしたもあるか！　しらばっくれるのもいい加減にしろ！」

「しらばっくれる？　何をあっしがしらばくれるんで？」

「それが白ばっくれるというんだ！　知って知らぬふりをするところを見ると、親爺、手前も餓鬼とグルだな」

ところで、この少年按摩の親爺というのが稼業はケチな桶屋でしたが、これがまた町でも評判の頑固オヤジで、曲ったことといったら、曲った釘を見るのもきらいという堅物ですから、さア、大変なことになってしまいました。

山崎屋の大旦那という人も、ふだんはなかなか物わかりのいい人でしたが、婿取前の娘がキズ物にされたというので、その時は逆上気味だったとみえて、桶屋の親爺を、餓鬼とグルになって倅の家の財産に眼をつけたんだろうとやったのですから、たまりません。

桶屋の親爺、すっかり真蒼になっちまい、よろしゅうございます。家へ帰って伜をとっちめ、それが本当だったら、あっしが即座に成敗致しやしょう。そのかわり、もし、伜の返事が違ってた場合には、その時こそ、お前さんの白髪首を頂戴いたしやすぜ！」

「うン、よかろう、いいとも！」

という訳で、いやはや大変な約束が取り交されてしまいました。

何しろ、国定忠治の昔から、上州人は義理固くて気が荒いときていますから、おおごとです。

桶屋の親爺が横ッ飛びに家へ戻って伜をとっちめます。

「こ、この親不孝の罰当り野郎めッ！　さあ真ッ正直に白状しやがれ！」

ところが、桶屋の伜――つまりこの私にしてみれば、あの世の仏様と契り合ったおぼえはないんですから、大変なことになってしまいました。

造り酒屋の小町娘などを相手に、よろしくやったような覚えはサラサラありません。

もちろん、その山崎屋の一人娘とは、自分が両眼をつぶして小学校を退くまでは、同年生だった記憶はある。だが、身分が月とスッポンほどに違う、向うは大家の箱入娘、こっちはしがない按摩稼業。その後はただの一回だって会った覚えさえないのです。何がどんな風に持ってまわってきたのか知らないが、とんでもない濡衣です。冗談ごとじゃない。

「じゃ、てめえは本当に知らねえんだな。よッ、そんならこれから山崎屋に乗り込んで……」

と、手斧を持って今にも飛び出しそうにする親父を、

「お父っつあん、ちょっと待ってくれ！」と私は呼び止めました。

というのは、このとき私の心にこんな考えがうかんできたからなんです。

――そうだ。これは女仏様がこの私の行いを、遂報告したあげく、最後にこう言ったのです。

「お父っつあん、私が重々悪うございました。これはたしかに、あの城跡の女仏様の御罰でございます。私は死んであの女仏様にお詫びを致します」

「馬鹿野郎、この期になって死んだって何になる！」

波多寺屋

肌絵図悲願

中林節三

「でも、私は女仏様のことを思うと、生きてはおれません」

「そうか、てめえは死ぬといい、山崎屋の娘も死ぬという。ちょうどいいだろう。いい世間の物笑いだ。シッカリしゃがれこのボケナス野郎め！」

親父からおドシャをかけられて、私はシュンとなりました。

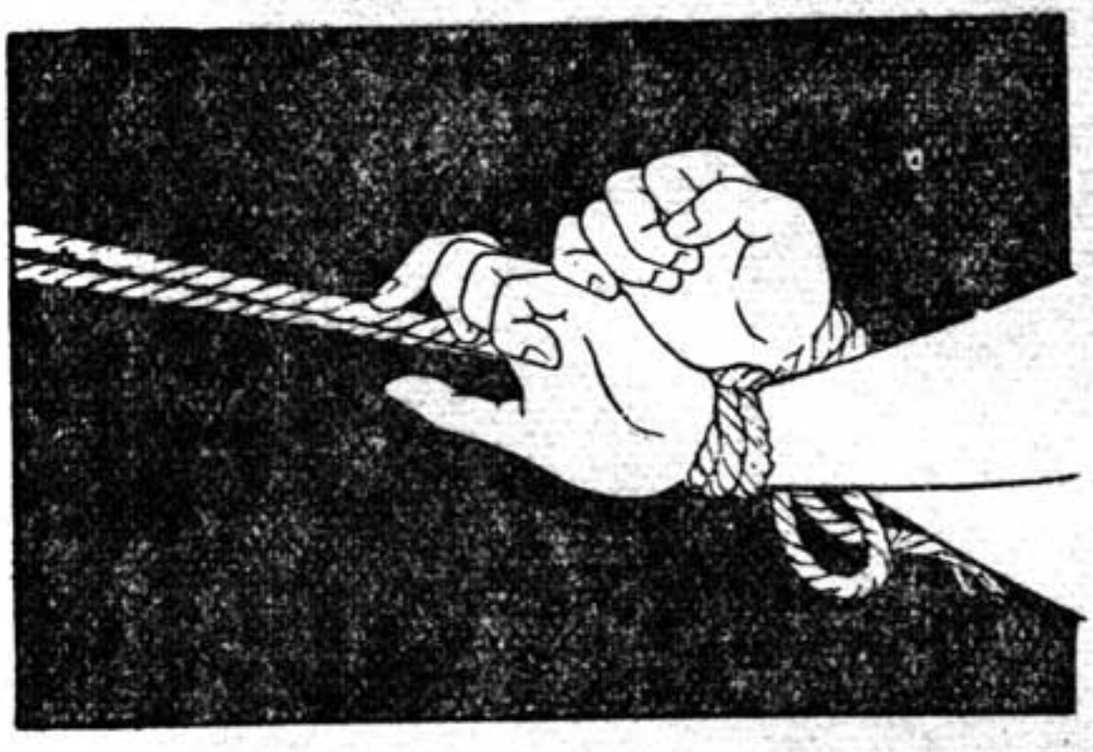
その後、うちの親父と山崎屋の大旦那との間に、どんな交渉が行われたのかは、私には一切わかりません。

娘は何でも、玉のような男の子を生み落したとか、そしてその子の両眼が生れながらの盲目であったとか、町の噂で知っただけです。

ええ？　女仏様ですか？　変な評判が立ったので、間もなく町外れの久遠寺という大寺の庫裡の奥深くに移されて夜な夜な厳重な監規つき、檻禁同様なお身の上となったそうです。噂が噂を生んで、物好きな近郷近在の若者たちが、その後、その女仏像を盗み出そうと、ひっきりなしに押しかけるので、とうとう久遠寺の境内に竹矢来が張りめぐらされたとかいう話でした。いやはや、とんだお粗末なお話で、我が若き日のエピソードとでも言いましょうか、はッはッは。

謎の男は冷笑を浮べたまま、むき出された女の白い背の感触をたのしむように、なぶるように、鋭い刃先で切りさいなんでいった……おしんは背中が火ぶくれたようにあつかった。

鬼気迫る妖筆に御期待ください！



隠密覚書
第二十一話
蜀火灯

島本春雄
画・石塚芳幸

一　逢魔の灯

闇の中を音もなく歩いて来て急にぴたりと足をとめた男がある。

「はて……」

と、つぶやいた声は、鳴子善四郎の声であった。

じっと前方を見つめている。

その視線を直線にたどればおよそ半丁の向うに一点の灯があった

墨一色の江戸……天も地も屋並も、地

女部屋に狼籍をふるう一味は何者？

髑髏紋に襲われた屋敷は凶運に揺れる！

極当然のことであったろう。

——が、半丁の先に、宙に浮いたような一点の灯がある。

その灯は動かなかった。

善四郎が、これを不審……と見たのは、八百八丁、そのすみずみまで、まるで絵図を見るようにくわしいこの男の記憶にはないことだったからである。

このあたりに常夜灯はなかった。

しまい忘れた軒行灯にしては、刻限がおそすぎる。軒行灯の蠟燭は、命のあるものではなかったのだ。

善四郎は、しばらく動かなかった。

その灯を半丁の先から凝視して、さて、これを、兇——と感じたからである。

（何かある……）

獄の色に溶けている。

——音もなかった。

しかし、この暗黒と静寂は、刻限からみても、花街から遠い環境からみても、至

と思う。しかも、そのなにかには、かなり強烈な危険がひそんでいる……これが、この男の直感であった。

甲賀の家に生れ……育ち……そして、闇から闇へ、影のように生きてきた男の直感は、当るも八卦、当らぬも八卦――などとうそぶく大道易者の卦よりは、はるかに正確であったし、この直感なくしては、いくつあってもたりぬ命であったろう。

過去の実績が証明している。

「逢魔の灯」

つぶやいて、意を決したように歩きはじめた。

夜気が死んでいる。どろりとよどんで、肌にねばりつくような感じがするのは、湿気が多く、そよとも動かぬせいであろう。

ぴたり。

灯の先、四間の手前で足をとめた。

逢魔の灯――の正体は、大店の軒先にぶちさげられた提灯の灯であった。

幽霊の正体見たり枯尾花……

いや、そんなに簡単な解決ですむ性質のものでなかった。

提灯にも色々ある。

箱提灯、蔵提灯、馬提灯、ぶら提灯、高張提灯、小田原提灯、弓張提灯、酸漿提灯……

善四郎が、いま、大店の軒先に見たものは白張の箱提灯である。

これに定紋があれば、興入用の提灯であり、白張のままなら葬式用の提灯だろう。

紋はあった。

しかも、それは、どす黒い妖気を投げかける髑髏紋だったのである。

どくろ提灯……

見つめて、鳴子善四郎は、身動きもせずにいる。

右手が、懐の甲賀縄を握っていた。

「ふふふ……見たな」

背後の闇から、陰気な声が聞えてきたのはこのときである。――声に憎悪の響きがあった。

「髑髏提灯……犬め、この謎がわかるか？」

善四郎はふりむかなかった。

へたに動けば危ない……と思ったのである。

相手は闇にひそんで、善四郎ほどの者をやりすごしているし、そのうえ、この男の正体まで見抜いているらしい。

「縄か……」

と、相手はさらに憎悪をました声で言った。

「甲賀の黒縄術……ふっ、その手はくわねえぜ」

ふふふ――含み笑って、一瞬、二瞬……突然すさまじい殺気を感じて、鳴子善四郎はがばと地に伏せた。

同時に、たあっ――呪声を発して、懐の縄が、まるで刃のある一本の鋼線のように、背後の闇を襲っていた。

――が、手ごたえはまるでなかった。

必撃の甲賀縄は、むなしく夜気を切ったのみだったのである。

「ううむ」

唸って身を起した善四郎の横鬢に、きらりと光るものがあった。

抜きとった。

それは、光るのも道理、鋭くて小さな地獄針……含み針――であった。

「ふん。大の男が含み針か……」

つぶやいて、しかし、善四郎の腋の下からつるりと冷汗が流れたのである。

声のぬしの姿は、もう反撃を許さぬ距離に消えていた。

二　提灯党

見あげると、屋根看板に、——呉服太物伊勢屋喜十郎……とある。

大戸がおりている。

軒先の髑髏提灯さえなかったら、寝静まった表通りの大店で、なんのへんてつもなかったろう。

——が、いまは、このまま見過すわけにはいかなかった。

何かある。

いや、もうすでに、その何かがあった後ではなかろうか……

善四郎は軒下に歩を運んで、大戸に耳をつけた。

凡人の駄耳ではない。この男の異常な聴覚は、厚い大戸を透して、寝静まった商家にはない奇妙な物音を感取したのである。

何かが軽くぶつかる音……

うめくような陰にこもった声と、這いずり廻るような重々しい音——

がそれであった。

（——もう遠慮することはないだろう……）

潜戸に手をやった。

「うむ」

大戸は厳重におりていても、潜戸の桟ははずれていて、軽々と開いた。

異変は、もうあきらかであった。

（成程……）

土間に足を入れると、帳場の片隅に手荒く縛りあげられた男が転がっていた。

猿轡の奥でうめいているのは、この男であり、伊勢屋の番頭の一人と思われる。

善四郎の眼が、きらりと光った。

「この男一人ではないだろう」

つぶやいて、ひとわたり屋内を見てまわった。

みんなやられている。

奉公人部屋では、番頭をはじめ、手代、小僧にいたるまで、一人残らずがんじがらめのていたらくである。

女中部屋は、さらにひどかった。

ここは、まさに落花狼藉で、素っ裸にひんむかれているもの、湯文字一枚にされているもの、そうして、縛りかた一つにしても、男どものような味もそっけもない縄さばきと違って、蝦縛りや括り猿、袈裟縛り……好色な男の手を、ありありと感じさせる現場の模様であった。

主人夫婦も背中合せに縛られていて、この二人は、必死にもがいていた。

土蔵が開いている。

蔵提灯に灯が入っていて、千両箱で五箱は被害を受けているとわかった。

（さて……）

情況をひとわたり頭に入れて、それからおもむろに主人夫婦の猿轡

を解いたのは、混乱と騒動をきらったからである。
見るべきものは、そのままの形で先に見ておく。——これが鳴子善四郎の非凡なところでもあった。
「む、娘が！」
猿轡が解けると、同時に、伊勢屋喜十郎が発した言葉はこれであった。
「成程、して曲者の人数は？」
善四郎の声は冷たかった。
「さア……二十人以上で……」
「首魁とおぼしき者を見たか？」
「いえ」
「やはり……」
うなずいて、くるりと背を見せた。
「あっ、縄を……お願いでございます。縄を……」
喜十郎がわめきだした。——無理もない。善四郎は猿轡を解いたのみで、縄のほうには手もかけなかったのである。
「番頭に解いてもらえ」
吐きすてるように言って、店の間にくると帳場横で唸っている奴の縄を切った。
それも、両手を自由にしてやっただけである。
ほいと外に出た。
闇髏提灯の灯が明滅している。まるで、断末魔の苦痛を表現するように……
（——しかし、斬られた者は一人もいなかった……）
闇夜に明滅する不気味な闇髏提灯を見つめながら、鳴子善四郎はしばらくそこに立っていた。
伊勢屋の娘お縫がさらわれている。
裏土蔵の千両箱が強奪された。——五箱、五千両の大金であり、行きがけの駄賃でもあるまいが、女中の一人は、あきらかに凌辱されていた。
被害はそんなところであり、そして、これは久しく耳にしなかった大がかりな凶党である。
闇髏提灯の灯が、ふっと消えた。
同時に、伊勢屋のうちが騒がしくなり、善四郎の足が闇のむこうに動きはじめた。

三　甲賀の血

「善さん」
縁側から、ひょいと顔を出すと、とたんに何やらきらりと光るものが飛んで来て、眼の前の縁板にぷちっと突っ立った。
含み針である。
「まあッ」
お蘭の切れ長な眼が、きりりと吊りあがったのは言うまでもないだろう。
「あたしの眼を潰す気かえ？」
「そしたら、ほかの男に眼移りしなくなるだろう」
腹ばいのまま、頬づえついて、これは鳴子善四郎である。
「ふん」
鼻を鳴らしてお蘭は、この男の眼の前に荒っぽく坐った。

「ぺっぺっ……埃がたつぞ」
「何さっ。埃ぐらい……」
「おやおや、お蘭姐さんも、豹変するか」
「え？」
「ほかの男に色眼をつかうときは、ばかに柔かいが、わしの顔を見ると、とたんに荒っぽくなる」
「憎いっ」
お蘭の手が、善四郎の右腕に爪を立てた。
「痛いっ」
「いやらしい。あたしが、いつ男に色眼をつかったんだい！」
「違った。考えてみると、あれは色眼ではなかったな。男に不自由するお蘭さんではなかったはずだ」
「男は、善さん一人で沢山だよ」
口ではいつも負けている。今日は思いきって切りこんだつもりのお蘭だ。
「ほう。わしはお蘭さんの男か……。つまり情夫てえ奴だな」
「ふふふふ」
（――本当にそうなってくれたら……）
と思う。蔭に生きる男と

しては抜群であり、そして、かなり女には手癖の悪い男でもある。
——が、不思議と、お蘭にだけは一指も染めぬ鳴子善四郎であった。
「情夫は、こういうふうにするもんだ」
眼の前にお蘭の膝がある。
善四郎の頬づえの右手が、いきなり、ぬっと膝間にのびた。
「あっ」
あわてて飛びのくと、同時に善四郎も、むっくり起き直っている。
「さて、用向きを聞こう。まさか抱寝の催促に来たのではあるまい」
坐ると、もう、くそまじめな顔の善四郎だった。
眼だけが、にやにや笑っている。
「堕侍」
と言って、しかし、お蘭の顔は桜色に上気していた。
善四郎の手の動きは神速といってよく、飛びのいたときには、すでに手遅れだったのである。
荒っぽく坐って、お蘭の膝は乱れていたのだ。そこを……
「堕侍」
と、もう一度言って、やっとお蘭は、胸のどきどきを静めたようである。
が、善四郎の右手は、つとめて見ないようにしている。
「ふふ」
と、善四郎が苦笑した。
(——こういう可愛いところもある女だ。……だから、むやみに抱けねえ。おれがお蘭を抱くときは、甲賀の絆を断ちきるとき……そんなときが来るだろうか……)
宿命のままに、ただ生き抜いて来た鳴子善四郎も、ちかごろは、ふっとそんなことを考えるときがあった。
隠居という手もある。
甲賀の絆を断とうと思えば、いますぐにも断てるだけの働きを残している善四郎であり、しかし、それを許さぬ何かが、この男自身の体内にあった。
それは、甲賀の血……といってよいのであろう。
「髑髏提灯だよ」
と、お蘭がふいに言った。——この女もまた、甲賀の血に縛られて妻……の座には坐り得ない宿命を負っている。
抜群の二人であり、思えばまた哀れな二人でもあった。
「髑髏提灯め、今度は何をやった?」
「尾張屋甚左衛門」
「ほう」
「小町娘のお琴を奪って、盗んだ金子は三千両……女中の一人が…」
「いたずらされたか?」
「ええ」
「どうも気にくわねえ。これは町方の仕事だが、さて、わしの甲賀縄を見抜いたあの声……お蘭、相手は強敵だぜ。町方の手におえる奴じゃなさそうだ」
甲賀の血が、ふっふっとたぎりはじめている。

四 血変化

(——はて?)
門番侍の若杉藤三郎が、小首をかしげて立ち上ったのは、この男、

よくよく運のないように出来ていたのだろう。

いつもなら気づかずに過ぎたほどの、ごく軽い物音である。

否。

それは、物音ともいえぬような、言ってみれば、夜気の動き……気配——みたいなものであった——と、形容したほうが、より正確かもしれない。

そんな物音……気配を、今夜に限って、敏感にかんじたわけである。

理由があった。

この屋敷は、御作事奉行、大沢豊後守の上屋敷であり、息女藤絵の帰邸が、亥の下刻ということになっている。

老中の別邸へ、将軍家のお成りがあり、その美貌と舞の上手が上聞に達していて、特別の招きを受けたわけだ。

そして、もう亥の下刻であった。

刻限を読んでいて、だから藤三郎の全神経が、表門に注がれていたのであったろう。

帰邸と同時に表門を開く役目である。

(風か……)

耳をすまして、さて、いったん上げた腰をおろしかけたが、あとで考えてみると、このとき、すでにもう死神がとりついていたのであった。

ふだんは、それほど忠実な男でない。

そのくせ、この夜に限って、一応、物音のあった辺りを調べる気になってしまった。

脇門を開いた。

「うっ!?」

とたんに、眼に入ったものがある。

提灯だ!

しかも、毒々しい闇髏紋の提灯で、ふわりと宙に浮いたような形になっている。

「なに奴?」

思わず大刀の柄に手をやった。——が、眼にうつる物は、不気味な闇髏提灯のみであり、あとは暗々たる夜気があるばかりだった。

ぶるっと身ぶるいした。

そして、よせばよいのに、その闇髏提灯に手をのばしたのである。

「触れるなっ!」

闇の中から声が飛んだのは、このときであった。

「げっ」

姿を見せぬ不意の声であり、これには驚いたろう。思わず声のほうに身構えて、ぎらりと一刀を鞘走らせてしまった。

これだけなら、まだよかったのである。

いけないのは、青眼に構えて、さて、いきなり、

「曲者っ!」

と、叫んだことだった。

これが、この門番侍——若杉藤三郎を、死生瞬転……地獄の渕に追いやる結果となってしまったのだ。

「死ねっ!」

声と同時に、夜気をついて、鋭い、まがまがしい死の針が飛んだ。

「うっ!」

たとえ、これを予期していたとしても、避けるに難い邪法の針であったし、まして、道場剣法すら満足に修めていない若杉藤三郎であっ

てみれば、これァかっこうの餌食であったろう。

ふっ！

ふっ！

と続いて二本の含み針が飛び、

その第一の針で右の眼を、間髪を入れぬ第二の針で左の眼を、もののみごとに刺針されてしまったのである。

「ううう……」

うめいて、よろけて、思わず片膝ついたがこの一瞬は、救いを求める声すら発するよゆうがなかった。

ズキン……と脳髄に迫る激痛である。

「く、くそっ」

右眼に刺入した針を抜こうとして、しかしぬるっと指が滑った。

血だ！

「うわーっ！」

肺腑を絞るような悲鳴が、じぶんでも意識せずに飛びだしたのは、この時であった。

「ちっ」

近くで、同時に舌打ちの音がしたようである。

そして、ツツツ——と、地を滑るような動きがあって、つぎの瞬間にわかめくらの若杉藤三郎は、首筋に深々と致命的な一刀を浴びせられていた。

おぞましい闇髏提灯は、ここではじめて血を求めたのだ。

五　眼隠し駕籠

暗い門前に、ぽつりと一つ、闇髏提灯があかるかった。

その下に、若杉藤三郎の死体があった。

「……や、灯が？」

と言ったのは、先供の工藤新八郎であった。

将軍家の首尾は上々であり、日をあらためて側妾に……そんな内意のあった藤絵駕籠が、今屋敷近く戻って来ていた。

（——なんだろう……あれは？）

灯の下の死骸までは、まだ眼に入っていない。

二十間……十間……

「うっ!?」

十間の距離に来て、新八郎の眼は、はっきりと髑髏の紋を見た。

（髑髏提灯！）

この男は、屋敷出入りの門鑑商人から、伊勢屋——尾張屋の一件を聞かされていたのである。

（——お屋敷が襲われたか？　しかし、ばかなっ！　素町人のねぐらとはわけが違う）

八間……七間……五間。

「あれは？」

先供の新八郎一人ではない。門前五間の距離までくれば、だれの眼にも映るはずである。

そうだ。

藤絵駕籠を守る三人の屋敷侍、四人の侍女が、一人残らず、髑髏提灯とその下で悶死した若杉藤三郎の不気味な死体を見てしまったのだ。

「異変！」

と、まず新八郎が叫んで走りよった。

四人の侍女が動揺し、懐剣の柄に手をやって、ぐるりと駕籠を守る形になったのは、これはさすがといってよいのだろう。

しかし——

この場合は、相手が悪すぎたようである。

「うっ！」
「げっ！」
音もなく飛んだ含み針が、まず二人の屋敷侍の眉間と咽笛を襲って進退の自由を奪い、
「それっ」
合図の声と同時に、二十人近くの闇侍が一度にどっと殺到して来たのである。
抵抗するよゆうがなかった。
藤三郎の死体の上にかがみこんでいた工藤新八郎は、振りかえったところを、袈裟懸けに斬り下げられたし、眉間とのどを含み針で襲われた二人は、抜刀する前に胸を突かれていたのである。
一切が無言であり、そして襲撃は迅速であった。
統制がとれている。
心得のある者が見れば、これは、夜盗や浮浪浪人の寄せ集めでないことが分ったはずである。
侍女たちは、恐怖のために声も出なかった。
「女は斬らぬ」
闇の向うから声が来た。
「――しかし、騒げば斬るぞ」
と、その声は続けた。
「あ！」
一人が右手を、もう一人が左手を押さえると、別の一人が背後に廻って、きりきりと眼隙しの布を巻いた。
四人同時である。
駕籠の中の藤絵は、三千五百石の旗本の娘であり、
「無礼っ！」
と一言、反抗の声を発したが、胸先に突きつけられた白刃を見ては これも言うなりに従うほかはないのだった。
藤絵は、眼隠しのかわりに猿轡である。
「行けっ！」
また声が来て、この奇妙な眼隠し駕籠は、大沢豊後守の屋敷前を離れていった。
見ていると、二十人近くいた闇侍が、歩むほどに、行くほどに、一人減り、二人減り、まるでそれは櫛の歯が欠けるごとく、音もなく駕籠脇から姿を消してゆくのであった。
眼隠しの侍女や舁夫たちは、この事実に気づかなかった。
「右へ……左へ……坂になるぞ……」
先導の闇侍が命じるまま、おぼつかない足どりで、無明の闇を歩いているのだ。
――これは、地獄へ向う道ではないのだろうか？
ながい道である。
いや、視覚を奪われると、不思議に、時間――距離感が混乱するのであろう。
事実は、そんなに長い道のりではなかったかもしれないのである。

六　髑髏符牒

橋の向う袂が黒山の人だかりであった。
その人垣を掻きわけるようにして、滅法様子のいい女が、すたすた出て来たのである。

左手に雨傘を持っている。
こんなのを、小股の切れあがった粋な女……というのであろう。
（細面で、受け口で、しかし、なかなかの美貌だが、一つ欠点がある。
——あの眼だ）
と、胸のうちでつぶやいたのは、鳴子善四郎であった。
金を、女を、そして血を求める髑髏提灯がついに三千五百石の旗本にまで、その毒々しい触手をのばして、このところ忙しくなりそうな善四郎である。
——潰し島田の女が、眼前に来た。と……
「おい！」
声と同時に、善四郎の右手がのびて、ツと女の左手首を握ったものである。
ぺたり——と肌に吸いつくような、そんな感じの女の手首であった。
「何をするんだい。助平！」
気の強い女である。
着流しではあっても、腰に人斬り庖丁を二本差していれば立派な侍で、しかし、その侍善四郎を屁とも思わぬ声であった。
「ほう、人相も見るか」
と、善四郎は、れいによって妙なことを言う。
「え!?」
と、女を眉をしわめた。
「当ったよ」
ニヤリと笑ってみせる善四郎だ。
「何がさ？」
「いま、わしを助平と言ったろう」
「へん。そうじゃないか！　いつまであたしの手を握っているんだい」
「わしは助平侍だ。ことに、お前のような女を見ると、つい手を握りたくなってしまう」
人の往来は、かなり激しい橋上であり、これが普段なら、たちまち人垣をつくっただろう。
ところが、人垣はすでに出来ている。
だれもかれも、みんな人垣の方に気をとられて、黒山の層をふやすばかりであり、善四郎と女には眼もくれなかった。
「いい加減にしないと声をだすよっ」
「ふっ。面白い……一つ、派手に叫んで見るか」
善四郎は平然として、まだ女の手を握っている。
「お前さん……？」
急に、女の顔がくずれた。
「隠密廻りの旦那かえ……？」
「ちがった」
「そんなら……」
「安心するがいい。懐に縄を呑んではいても、奉行所の隠密廻り同心が、後生だいじに抱いてるような野暮ったい捕縄とは、ちっと趣きを異にする黒染の縄だ」
「へえ……」
女は怪訝な顔である。
「——が、眼は利くぜ。八丁堀のへなへな十手よりは数段上等の眼だ」

「すると、ご同業かい？」
「馬鹿言え。侍スリなんざ聞いたこともないだろう。さ、おとなしくその雨傘の中に落し込んだ物を出すがよい」
「負けたよ」
舌打ちして、女は雨傘に隠した紙入れを、しぶしぶ善四郎に手渡した。
こいつは、女スリだったのである。
しかし、それにしても、現場を見たわけでなく、ただ、人垣を掻き分ける、その身のこなしと、眼くばり——これだけで、すでに仕事を終った女スリだと見抜いてしまった善四郎の眼力は、いつもながら、あざやかと言うより、何かしら不気味なものを感じさせる。
女もそう感じたろう。
「何がほしいのさ。ことわっておくけど、あたしの肌は、こう見えてもまだ男知らずなんだよ」
と、伝法に言っても、つい、その声がふるえてしまっていたのである。
「成程……いずれそのうちに、ぴちぴちしたおぬしのその肌を楽しみに行くかもしれん。——が、今日のところは、まず見逃しておこう。ただし、この紙入れは、スリとった相手に、それとなく返してやるのだ」
ずしり、と手ごたえのある紙入れだった。
「ふむ」
こういうときに、薩男の習性が出るのであろう。
鳴子善四郎は、なにげなく中を覗いてしまった。
小判と小粒で十両近くある。——これは問題ないとして、善四郎を思わず唸らせたのは小さく畳んだ一枚の紙片であった。
関、葉、亥、集
見ると、薄い墨の字が四つ並んでいて、その下に、これは一きわド ス黒く、あの髴髴紋が、ぺたりと貼りついていたのである。

七　水死美女

「——女、ちっと妙なことになってきたぜ」
「え？」
「まず名を聞こう」
「お蝶」
「ほう……燕返しのお蝶さんか。うわさは聞いている」
善四郎は顎をしゃくって、小町スリのお蝶を欄干近くにいざなった。
橋袂の人垣は、ますますふえるばかりである、野次馬の関心はその方に注がれているものの、しかし、髴髴符牒を眼にした以上、これからの行動は慎重を要することになってきたわけである。
並んで欄干にもたれた。
川面には舟が集っている。雨あがりで水かさを増してはいるが、これは舟喧嘩ではないのだろう。
中心の小舟に、巻羽織の同心が乗っていた。
その足もとに荒むしろがあり、白い、全裸の女体が横たわっている。
土左衛門だ。
いや、ただの水死人でなく、身体のどこかに致命的な傷でもあったのにちがいない。
黒山の人垣は、この、まだ若々しい全裸の水死美女が原因であった。

小舟の上で検死がはじまった。——遠く、これを望見しながら、

「さて、聞こう」

と、善四郎が言った。

「え？」

と、お蝶がこの男の顔を見る。

（——一体、この男はなんだろう？　ただの浪人者にしちゃ垢抜けがしすぎているし、隠密廻りの旦那でもないようだし……でもさ、ふん、いい男じゃないか）

無返し——という綽名を貰っている。それほど俊敏で、眼が利いてまだ一度もヘマをやらかしたことのないお蝶だが、さて、この男の正体だけは謎であった。

無理もない。

善四郎は、お蝶の想像の外にある男……彼女の身辺には、まるで縁のない甲賀侍だったのである。

「——この紙入れ、スラれた奴は、どんな男だ？」

「どんなって、二本差しだよ」

「成程……して、おぬしはどう見た。浪人か？　江戸者か……それとも……」

「さあね。浪人でなし、江戸侍でなし、どこかの山国から、江戸詰になったばかりの山猿侍じゃないかしら」

「ほう」

善四郎の眼がキラリと光った。

小舟の上では、どうやら検死が終ったようである。黒山の人垣が、外側から崩れはじめたのだ。

「おどろいたね」

「まったくだ。なにしろ、あんないい女が、二つのおっぱい一面に、しゃれこうべの入墨と来てやがる」

「へっ。男よけの呪禁にしちゃ、ちいと度が過ぎるてえもんだ」

「なあに、あれだけの女だ。結構、髑髏乳房を楽しんだ奴がいるかもしれねえ」

「おいらならごめんだな。裸にするたんびによ、おっぱいの髑髏に睨みつけられたんじゃァ、色気も何も素っ飛んじまうぜ」

声高にしゃべりながら、善四郎とお蝶の背後を通りすぎたのは、人垣の野次馬であったろう。

（——髑髏乳房！）

唸って、善四郎はお蘭を想像した。が——

（ばかなっ）

と、そくざに打ち消したのは、その蘭と今しがた別れたばかりだったからである。

「お蝶」

「あいよ」

「紙入れの山猿侍は、まだ人垣の中でぐずついているかもしれぬ。引っ返して、もしそいつの顔を見たら、眼顔で知らせてくれ」

「合点」

お蝶は、にっと笑って、崩れかけた人垣の中に戻りはじめた。

（——どうしたってんだろう？）

善四郎の態度の急変が、さっぱり呑みこめぬお蝶であり、しかし、さて、言うなりに働く以外に、どうするすべもない現在の立場でもあ

八逃げ侍

（――とにかく、いそがしくなりそうだ）

つぶやいて、お蝶のあとを追う。

髑髏提灯は、商家ばかりでなく、旗本のうちでも大身の列に入る三千五百石御作事奉行大沢豊後守の息女を襲っている。

しかも、この藤絵は、将軍家お声がかりの美女であった。

――もう、町方の仕事ではなくなったのだ。

そして、いま、髑髏乳房の水死人が現われたし、髑髏紋の牒書を持つ侍が、眼前十尺の距離にいるのかもしれなかった。

右手を懐に入れる。

懐中の黒縄を握って善四郎は一歩一歩、橋袂の人垣に近づいて行った。

その人垣も、一人……二人……三人思い思いに散りかけている。

検死がすんで、白い裸身は荒むしろの下になってしまったのだ。

（――むっ！）

人垣の外に立って、お蝶が眼合図を送っている。

見ると、野暮ったい綿服の侍が、人垣を離れるところであった。

（よし……）

善四郎も、解放を意味する眼合図をお蝶に送って、さて、なにげなく尾行にとりかかった。

いや、その心構えになったといったほうが、より正確であろう。

つまり、破綻があまりにも早かったのである。

綿服を着て、野暮ったい武骨な風貌ではあっても、さて、それだけで人間の中味までわかるものではなく、この男、想像以上に敏感な神経の持主であった。

人垣を離れるとき、すでに懐中物の紛失に気づいていたのであったろう。しかし、そんな素振りは露ほども見せず、のほほんとした顔でその癖、極度に警戒していたに違いないのである。

お蝶を見た。

それも、ちらと見ただけで、

その眼合図をさとったし、善四郎の存在も、したがって勘定に入れたことだろう。

ぱっ……と、いきなり走りだしたのである。

こうなっては、尾行の、へちまのと言ってるよゆうもなく、善四郎は懐の甲賀縄を投げてしまった。

八丁堀十手の投縄とは、その目的も効能もまるで違う。

甲賀の黒縄は、必撃の忍具であり、善四郎の腕をもってすれば、肉を裂き、骨を砕く、おそろしい兇器と化すのだ。

その事実が、いま眼前に現れた。

ピシッ

異様な叩音と同時に、逃げ侍は一回転して激しくたたきつけられたような形になった。

縄が、右の脚を叩いたのである。

「ううむ」

うめいて起きあがろうとしたが、そのままがくりと突っ伏してしまったのは、右足の自由がまるできかなかったからである。

骨は砕けるほどでなく、しかし、筋肉がまるで用をなさないほど痺れてしまったのであろう。

善四郎は地を滑るようにして走り寄った。——そして、倒れている男の上にかがみこんだときである。

ぐきっ！

そいつは、いきなり舌を噛んでしまった。

「ちっ」

舌打ちして、さて、善四郎は、世の中の不快を一手に引き受けたような表情になっている。

こんなことは珍らしい事であった。

甲賀急符を受けて蔭を歩けば、ときに人を斬ることもあるし、女をたぶらかして情の露に濡れることもある。——が、つねに無表情……喜怒哀楽の表情を持たぬ男と言ってよかったのである。

野次馬が騒ぎはじめた。

橋下の水死人にかかりきっていた小役人たちも、この騒ぎに気づいたようである。

（——ええい面倒！）

今度は善四郎が逃げ侍に早変りした。

あっけにとられて見送ったのは、燕返しのお蝶である。——いよいよもって、善四郎の正体がわからなくなってしまった。

「へん、ばかに逃げ足が速いじゃないか。韋駄天顔負けだよ」

つぶやいて歩きだしている。

「あ！」

五六間来て、左の手に、れいの紙入れを握りしめているのに気づいた。

無意識の仕事であったろう。

あるいは、名人スリの執念が、とっさに指先の働きとなったのかもしれず、とにかくこれは、逃げだした善四郎の懐から抜きとったものに違いなかった。

（——変な日だよ……）

「うふん」

思わず含み笑って、しかしお蝶は、遠慮なくこの紙入れを頂戴することにしたのである。

九三人牢

「善さんもヤキが廻ったね。そろそろ隠居願いを出したほうが無事だろうよ」

言ってから、首をすくめ、あかい舌をペロリと出したのは、甲賀のお蘭である。

「ううむ」

と唸ったのは鳴子善四郎だ。

「——みごとにやられたな。指先の働きも、ここまで来れば、まさに名人芸だろう」

(気に入った。お蝶め、一度は抱いてくれるぞ……)

不思議な男である。こんなことで、久しぶりに情念を……女体に対する情焔を感じたのであった。

「——しかし、髑髏符牒は覚えている。おぬしの方は、どうであった」

急に口調を変えてしまった。早いとこ今度の一件を片づけて、小癪な燕返しのお蝶に、男の味というものを、いやほど味わわせてくれようと言うのであろう。

「殺しさね」

と、お蘭が答える。

この女は、髑髏乳房の水死人の一件を探って来たのであった。

「斬った張本は、大変なまくらだよ。でもさ、手にした刀が凄いような業物だったんだね」

「うむ」

と、善四郎が腕を組む。

「素っ裸で身もとは分らず、髪も乱れて手がかりはまるでないけれどあたしは屋敷者と睨んだのさ」

「ほう、屋敷女中が、双の乳房に髑髏の入墨か……それも、豊満な乳房のふくらみを、一つの髑髏に見立てた入墨とあっては、いささか狂気じみている」

(——狂気じみている……)

胸のうちで繰りかえして、何か、心の琴線に、ピインと来るものがあったのだろう。

「謎はここにある」

ぽつんと呟やくように言って、机上の巻紙を引きよせた。

筆をとる。

関、葉、亥、集

すらすらと書いたのは、あの髑髏符牒である。

善四郎は、書き流したこの四文字を睨んで微動もしなくなった。

「考えてみると、髑髏党だか提灯党だか知らないけど、ずいぶん助平な集りじゃないか。伊勢屋のお縫さんは、今年の小町見立てで、東の大関だし、尾張屋のお琴は、西の大関なんだよ。それに大沢豊後守の娘は、上様のお耳にまで入っていたほどの旗本小町だったし……」

お蘭がひとりで喋っている。——と、いきなり、善四郎がその豊かな胸乳を、ぐいと掴んで、うめくように言った。

「わかった！」

「え!?　い、痛いじゃないか」

「耳をかせっ」

引き寄せて、何やら短かくささやいたのである。

その眼……顔——が事件の終局を思わせるに充分な何かをたたえて

いた。

終局……

それは、髑髏提灯の正体があばかれることを意味するし、その時を一刻千秋の思いで待っている女人が、ここに少なくとも三人はいた。お縫、お琴、藤絵の三人である。

かなり広い屋敷であり、その奥まった一室であろう。格子を組んだ座敷牢……燭台が格子の外にあり、薄暗いその灯をたよりに中を見れば、一組の夜具を敷いて、半裸の美女が仰臥している。

その盛り上った乳肌の上に、不気味な髑髏の筋彫りが、未完成の姿で浮きあがっていた。

そして赤く腫れてもいる。

腫脹は、発熱をうながしたのか、もう一人の女が、濡れた手拭で介抱しており、これが、尾張屋のお琴であった。

乳房髑髏の女は、髪の形からすれば伊勢屋のお縫であろう。

藤絵の姿はここにない。いや、

板廊下に乱れた足音があり、突き立てられるようにして姿を現したくきりと浮きあがっていた。

髑髏――の絵柄である。

半裸の女が、その藤絵小町だったのである。

「入れっ」

この女の右乳房の上にも、おそましい入墨針の痕が、痛々しく、くドンと後腰を蹴って、座敷牢に突っ転がした男が、吐きすてるような毒舌を発した。

「乳房髑髏が完成したら、七万石の大名が可愛がってくれる。楽しみに待つんだな……」

七万石の大名？　そいつが、髑髏提灯の張本人であろうか……

十　狂気大名

亥の下刻であった。

軒下の灯提に、ぱっと灯が入ると、あたりは漆黒の闇であり、そこだけ一点、あかあかと浮きあがったが、これは、あの毒々しい髑髏紋提灯だったのである。

これまで、闇の中にひそんでいたのであろう。提灯の灯を見て、黒い影が動きはじめた。

音もなく動いて、しかし、二十人近くの影と知れる。

バサッ……

影の一つが、板壁に縄梯子をかけた。

一人……二人……三人……つぎつぎと塀内に消えてゆく。

しばらくして、髑髏提灯が不気味に照らしている大戸の横の潜戸が開いた。

と――まだ、闇の中に残っていたのであろう。黒い影と白い影が、ひめやかな足音を残して、潜戸の中に消えていった。

呉服問屋近江屋久右衛門の店である。番頭が縛りあげられている。

そして、小僧が、手代が、久右衛門夫婦が……小町娘のお葉が……二十人の兇党に襲われては、ひとたまりもなかったろう。

「ふっふふふ」

女中部屋に立って、汚ならしく笑ったのは潜戸から入った白絣子着流しの男である。

「今夜は、どのような趣向じゃ。一人一人、面白う縛ってみせい」

「今夜の趣向は、地獄縛り、女猿縛り、車縛り、独楽縛り……ちょうど人数も四人でございます」答えたのは、背後に従う闇侍だった。

「うむ、面白い。縛り方が予の心をそそれば、その女に七万石の情をくれてやろうぞ」

四人の女中は、恐怖のために、なかば失神状態である。

悶える女体——きりきりと手荒く縛りあげられてゆく女たちの姿を見て、白綸子侍が、狂ったように笑いはじめた。この時である。

「狂うたな……水野忠恒！」

頭上から、刺すような声が飛んだ。

「天井裏！」闇侍の一人が、はね返すように叫んだ。

「ふっ。その声は記憶があるぞ。伊勢屋表の針侍……どうだ、信州吹上党の含み針も、天井板が邪魔になっては何の役にも立つまいが」

「くそっ、あの時の甲賀犬か」

「いかにも、その甲賀犬が、揃って百人、ぐるりと包囲して、蚊一匹逃さぬ網を張ってしまったとしたらどんなものだ」

「成程、鉄砲百人衆か……ふっ、これで、信州松本七万石の水野家もぺしゃんと来る段取りだな」

「ほう!?　その声に喜悦の響があるな……？」

頭上の声がフッと途切れた。

表のほうで、布陣を終えた甲賀合図の笛がさえざえと鳴ったのである。その笛の響きにも独特の癖がある。これはお蘭の笛であった。

隠密覚書埋れ草の一節として、善四郎は次のように書き残している。

符牒あり、すなわち次の如し。

関、葉、亥、集——これを解くに、関は、小町見立ての関脇にて、葉は近江屋お葉、亥は亥の刻、集は集合……はなはだ簡にして明なり。伊勢屋お縫、尾張屋お琴は、ともに小町見立て番付東西の大関なるにより類推して解くを得たり。

髑髏提灯、張本は信州松本七万石の大名、水野信濃守忠恒にして、すでになかば狂者たり。女色極度に走り、加うるに嗜虐の悪癖を露呈す。指嗾する者あり、すなわち近習矢羽源之丞これなり。この者信州先住の豪族にして吹上党の血を継ぐ者なるが、忠恒入封するや秘してその近習にとりたてらる。しかるに、水野忠恒、吹上党の存在を忌みて、苛酷に殺戮せり。逃れたる者二十余名、合して復仇を誓う。されど、七万石に抗する力なし。源之丞一計を案じたり。忠恒の嗜虐と女色を利として、髑髏乳房の女体淫虐をひそかに進言す。忠恒、屋敷女中のみにてはあきたらず、眼を町娘に転じたれば、すなわち吹上党を集めて、髑髏党となし、忠恒の毒血に油を注ぎしなり。真意は、幕府の触手を誘い、水野家を滅すことにあり、目的を果して源之丞逐一白状に及ぶ。すなわち、水野家は、忠恒狂疾の断にて、改易の沙汰下り、ここに断絶す。髑髏乳房の水死人、名を露路という。忠恒の侍女にして、一夜逆鱗にふれ、手討、川流しの犠牲者となる。哀れなり。諸大名心すべし。その惨なる、兇なる、すべて我が剔抉の手をのべん。

吹上党滅びたり、すなわち吹上の含み針永遠に消ゆ。

（隠密覚書第二十一話終）

〔編集部より〕永く御愛読下さいました隠密覚書は三十二年四月号に掲載の第一話より本号まで二十一話を数えるに至りましたが、一応本号を以て稿を止めることに致します。作者島本春雄氏には、三十四年新年号より、旧作に倍する傑作を戴く事になって居りますので、何卒御期待の上、御愛読下さいますようお願い申し上げます。

◇他誌に見られぬ特異な題材で頁を飾る本誌は、毎号異常な反響を呼び、店頭で売切れの盛況を示して居りますが、来月号もお買い洩れのないように必ず本号お買い上げの書店に御予約下さい。

◇バックナンバーは新規の愛読者の為に小部数取り揃えてあります。（二三二頁―二三七頁を御覧下さい）既刊号三冊以上お申込みの読者には送料は当社で負担致します

◇御送金は、現金書留、小為替、振替等が最も安全で確実です。

◇小社は本誌の他にも単行本・新書判等の書籍を多数出版しております。出版目録をおのぞみの方はハガキにハッキリと御住所御芳名をお書きになって〝裏窓で見た、目録送れ〟とだけ書いて、東京都中野区江古田一の二三〇二久保書店営業部宛御申込になれば無料ですぐ送ります。

◇直接購読を御希望の方は、三ケ月分・三百六十円、又は六ケ月分・七百二十円を本社営業部宛にお払込み下さいますと店頭発売前に直接お送りします。（送料小社負担）

◇その場合は、御送金と同時に何月号よりの御来社はお断り申し上げます。

◇直接の御来社はお断り申し上げます。

募集 稿 原

◉小説・読物＝三十枚～四十枚程度
他誌に見られないような特異性のあるもので、本誌ならピッタリすると思われる作品をお待ちします。
（小説は現代・時代、どちらでも結構です）

◉アブチック・スリラア＝三十枚～四十枚程度

◉あぶちっく・みすてりい＝三十枚～四十枚程度
他に本誌に適すると思われるものならば何でも結構です。
として、原稿は返却しないことになって居りますが、特別の場合にはお返し致しますから、もし不採用原稿返送御希望の向きは、送料を同封されますようお願い致します。
掲載の分には相応の原稿料を、掲載誌発行後約一ヵ月以内にお送りします。

★お買い上げの本誌に落丁乱丁等がありました節は書店にておとり替え下さるか、または本社宛にお送り下されば、スグおとり替えします。

★本誌の記事を無断で転載、上演、上映、放送することはお断りします。

―原稿送り先―
東京都中野区江古田1の2302
久保書店内 裏窓編集部

裏窓 十二月号
第三巻・第十五号
毎月一回一日発行
定価 百二十円・送料十二円
（地方売価百二十三円）
印刷 昭和三三年十一月二五日
発行 昭和三三年十二月一日
編集人 須磨利之
発行人 山田忠雄
印刷所 向上印刷株式会社
発行所 株式会社 久保書店
東京都中野区江古田一ノ二三〇二
電話中野（38）六九八〇・一三八八
振替口座・東京 一〇七五六番